

分身主義の森を抜けて
世界に奇跡を起こすために
今僕たちにできること
今僕たちがやらなければいけないこと

表紙絵 & 文章
徳永真亜基 分身

もくじ

確認	3
まえがき	4
予備 1・分身主義へのアプローチ	5
予備 2・精神科医が持っていない「ある必要なもの」	7
予備 3・科学の必要性	9
予備 4・科学に対する誤解	11
予備 5・霊は存在するか？(1)	13
予備 6・霊は存在するか？(2)	14
予備 7・霊は存在するか？(3)	16
予備 8・精神病とは何か？	17
予備 9・真の科学とは？	20
予備 10・科学者が使ってはいけない言葉	22
予備 11・科学の限界と可能性	26
予備 12・科学と非科学	28
1日・分身主義の森..最初の一步	30
2日・分身主義の森は仮想空間か？	32
3日・人間には実感できないけれど	35
4日・みんな錯覚の中を生きている	38
5日・私たちはひたすら環境を耕します	43
6日・記憶という反応の道	46
7日・若・貴兄弟が仲良くなるには？	50
8日・「自我」とは何か？	51
9日・本当の自分探しとは？	54
10日・免疫系とは？	57
11日・トゲは身を守るためにあるのか？	60
12日・人間に自由意志はあるか？	62
13日・平和とは何か？	66
14日・平和は家庭の平和からか？	69
15日・誰が精神病患者を作ったのか？	69
16日・郵政民営化・総選挙を考える	71
17日・本当の「清き一票」とは？	75
18日・科学は輪廻転生を認めているか？	79
19日・物語の出現	84
20日・引き返しますか？	88
21日・この時代の新しい物語	93
22日・世界はどう変わるか？	97
あとがき	102
付録 1 (3Dステレオグラム)	103
付録 2 (分身主義的ホームページ=BHPの作り方)	106

確認

今、この前人未踏の分身主義の森に踏み入るのも、ここから引き返すのもあなたの自由です。でも、一つだけ確認していただきたいことがあります。

あなたは今、幸福ですか？

この質問に、あなたなら何と答えますか？

この愚問に、丁寧に、「今の私は幸福です」とか、あるいは「今の私は不幸です」と答えてくださったあなたは、幸福とは、あなた自身の問題だと感じているわけですよね。でも本当に、幸福ってあなた自身の問題なんですか？

現代を生きるほとんどの人が、幸福とは個人の価値観によるものだとか、個人的な状況によるものだと考えています。他の人から見れば不幸そうでも、その人にとってはそうでもなかったり、幸福とか不幸などということはあんまり考えないで生きている人たちもいます。また、他の人が羨むような生活ができるようになることが幸福になることだと固く信じて、それを目標にしている人たちがいます。そういう人たちの幸福とは優越感に浸ることであり、他人から注目や羨望を浴びなければ満ち足りた気持ちになれません。このように幸福にはいろいろな形があり、個人の価値観の問題だから、他人がとやかく言う筋合いのものではない、と現代を生きるほとんどの人が答えます。

もし、あなたがそのようにあっさりとして割り切る脳を持った方ならば、ここから先に、踏み入るのはやめておいた方が無難でしょう。あなたの脳は、個人主義的と言ってもいい現代の環境から、抜け出すのが難しいかもしれません。もしかしたら、あなたにとっては、この前人未踏の分身主義の森は歩きづらだけで得る物があまりないかもしれないし、森の途中で迷子になってしまうかもしれません。（と言っても、分身主義は決してあなたを突き放しているわけでも、切り捨てたわけでもありませんよ）

「愚かな質問はしないでください！ 今も世界のどこかで冷たい戦争があり、今も世界のどこかで人と人が憎み合い、殺し合っているというのに、私の気持ちが幸福でいられるわけがないじゃないですかっ!？」

そのように答えることができるあなただけに、この森への一步を踏み出して欲しいのです。

そうです。

あなたがおっしゃるように、世界中の情報がすぐに伝わってくる、こういう時代を生きている僕たちの心は、世界中のみんなが幸福にならなければ、決して幸福にはなれません。僕たちはみんなどこかでつながっているからです。そのことに気づいているあなたは、この森を通り抜けたその先の、まだ誰も行ったことのないユートピアへ、人類を導く開拓者になれるでしょう。

でも、あなたは言うかもしれません。

「気休めはやめてください。私は子どもの時から、ずっと、ずーっと考えてきたんですよ。世界中の人が幸せになるにはどうしたらいいのか？って。でも結局、その答えは出ませんでした。そして、今はっきりしていることは、その答えは千年たっても出ないだろうということです」

それなら、僕と一緒に、この森の中に入ってみてください。

お願いします。分身主義の森を、僕と一緒に歩いてみてください。結論づけるのは、それからでも遅くはありません。

今、僕はこの世界に奇跡を起こせる人を、急いで探しています。初めは数人で構いません。

あなたこそ、この世界に奇跡を起こせる人かもしれません。

あなたの分身より

まえがき

初めに、分身主義（ブンシンニズム Bunshinism）という名前の由来を書いておこうと思います。

個人主義という言葉は聞いたことがあると思いますが、分身主義という名前は初めてだと思います。分身主義という名前は、個人主義という言葉に倣って付けられた名前なので、主義などと命名されましたが、これは、何らかの主義・主張のようなものとは全く違います。だから勘違いして欲しくないのですが、分身主義者なる集団がいるわけでもないし、またそのような集団を作ろうとしているわけでもありません。主義などと聞くと、普通は、どこかに特別なある思想を頑なに固持している集団がいるらしい、などと他人事のような反応をして済ましてしまうと思いますが、そういうものとは根本的に違うんです。分身主義（ブンシンニズム Bunshinism）とは、科学時代を生きる世界中の全ての人々が持たなければならない、新しい「視点」です。これからの時代のみんなが、どうしても受け入れなければならない義務のようなものなんです。

現代を生きる僕たちを取り巻いている個人主義という環境は、自我に目覚めてしまった人類が、歩まざるを得なかった道であり、当然、至るべき場所でした。そして、その個人主義的環境のおかげで、僕たち人類はここまでめざましく発展（？）してきたのです。だけど今、個人主義が行き着くところまで行き着いて、ついにはその断崖から落ちてしまう人まで出てきています。自我に目覚めてしまった人類は、もう自我を捨てることはできないし、後戻りはできないので個人主義をやめることもできません。自我を捨てることなんて、どんなに修行を積んだ坊さんでもできません。でも、一つだけいい方法があります。

分身主義は、個人主義を否定するものではなく、むしろそれを拡大し、その欠点を乗り越えたものです。つまり、自我を滅却させるのではなく、自我を拡大させるわけです。だけど、自我をもっともっと拡大させると、今までの自我を滅却させることができるというパラドックスが起こります。どんなに修行を積んだ坊さんにもできなかったことが、容易にできてしまうのです。

自我を拡大するにはどうしたらいいのでしょうか？ それは簡単です。
本当の自分の姿を知ることです。

これまでの僕たちの自我（これが自分であると信じていたもの）は、本当の自分の姿ではありませんでした。本当の自分の姿を知るためには、真の科学の視点を持って自然界から学ぶ気持ちが必要です。その真の科学に導かれて辿り着いたものが分身主義です。だから分身主義とは、主義などと言うけれども、主義・主張やイデオロギーのようなものではなく、物事を見る視点のことなんです。そして、本当は、分身主義の森を抜けたその向こうにこそ、僕たちの幸せはあるんです。

そう、分身主義（ブンシンニズム Bunshinism）とは単なる通過点です！ 人類がその向こうにあるものを手にするために、僕たちはこの分身主義の森を通り抜ける必要があるんです。

今、若者たちの間で自分探しが流行っているそうです。だけどそれらは自分探しと呼ぶよりも、「自分らしさ探し」と言った方が適当なものかもしれません。彼らの自分探しは、ほんの少しか海面に姿を見せている「氷山の一角としての自分」だけを対象にしているからです。要するに、自分の性格や適性を知って恋人探しや進路決定や職業選択などの拠り所にするための自分探しであり、多分に個人主義的な自分探しです。本当の自分探しとは、その下に広大に広がる氷の真の姿を探ることです。そして、その氷と海水との関係を研究したり、海水と空気との関係を究明したり、その氷がどこで生まれ、どのように運ばれてきたかを調査したり、科学的方法論によって、いろいろな原因をどこまでも遡って探っていくことです。

僕たちが今、この鬱蒼とした迷路のような分身主義の森の中で探そうとしているものは、自分の本当の姿です。そして、僕たちが分身主義の森を抜けたその時、そこに見るものは。

そこに見るものは、人類がまだ一度も経験したことのない風景です。

あなたの力で、その光景を僕にも見せて欲しいんです。僕はまだその場所を予感しているだけで、まだ見たことがないからです。あなたの力が必要なんです。
あなたの力で、人類を幸福へと導いてください。

予備知識 1 分身主義へのアプローチ

自然界を中心に考えると、病気などというものは存在しません。生も死も、病気と言われているものも、その状態こそが自然界に適応している姿です。

分身主義の森に踏み入る前に、今日から10数回に渡って予備知識としていくつか頭に入れておいていただきたいことをお話しします。

僕たちが日々の不安や恐怖や悲しみから解放されて、いつも何かに守られているような安心感の中で生き、仲良く助け合い、幸福に死んでいくためには、世界中の人に分身主義を知ってもらわなければなりません。と言っても、初めは(ちゃんと理解した)数人の人がいければ十分です。その理由は、分身主義の森の中に落ちている言葉を拾い集めながら突き進んでくだされば、いずれわかっていたいただけるはずで

す。せっかく何かの縁で出会えた僕たちですから、その数人の人の中にあなたが入ってくだされば嬉しいです。あなたに分身主義を知っていただくためには、どうしても真の科学の視点を持つようになっていただく必要がありますが、真の科学とはどのようなものだと考えますか？ 実は、科学者と**言われている人たちが真の科学の視点を持っている**かと言ったら、そうでもない部分もたくさんあります。

例えば生物学関係に携わる**科学者の方たちは、動・植物の生態を解釈する時に、気づかずに人間的な感情移入を行なってしまう**ことが多々あります。それは自分たち人間を中心とした解釈です。真の科学とは、自然界を中心に全てを考えるものでなければいけません。

何よりも科学的な視点から遠いところにいる**科学者たちは、医学に携わる方たちです。彼らの視点は、さらに人間中心です。医学は、人間を、ことさら人間の命を何よりも中心にすえて、優先的に扱います。そして、死を遠ざけることばかり考えます。彼らの視点は、自然界中心というよりも人間界中心の視点です。つまり現代の医学は、人間中心(=自分中心=個人主義)が作り上げている学問と言えます。**

人間中心の大元をたどれば自分中心に辿り着きますし、個人主義とは、その自分中心的な感覚を、社会という大きな枠組みの中でも埋没させられることのないように、よく考え込まれた**方便に過ぎません。自分中心**という、わがまま、自分勝手というニュアンスがあり、それは個人主義の理念(個々人を尊重する)とは根本的に違う、と主張する**自称個人主義者**たちがいますが、根っこは全く同じです。個人主義の理念ともいえる、「個々人を尊重しよう!」という言葉は、自分の権利や主張が**侵害されないための予防線**のようなものだからです。

自然界を中心に考えると、この自然界には、病気などというものは存在していないことがわかります。あるのは、全てが自然界に適応している状態だけですから。生も死も、病気と呼ばれているものも、その状態こそが自然界に適応している姿です。人間を中心として考えた時に、病気という疎ましく思うべき観念が生まれるわけです。分身主義を知っていただくためには、何よりもまず、真の科学の視点を持っていただくことが必要です。その真の科学の視点で、人間の心(=脳)のメカニズムや習性を理解していただくことが必要です。

僕は、**精神病**と呼ばれる通常とは異なる反応をする脳のことを考えることが、その両方を同時に満たすことになるのではないだろうか、という直感をずっと抱き続けていて、いつかはこの課題に取り組もうと思っていました。精神病と呼ばれているものが起こる原因を調べることで、人間の心(=脳)の解明にも役立つし、また、それは実は、**病気なんかではない**ということの説明できれば分身主義をわかっていた**近道になるから**です。

そのように考えていた**矢先**、新聞に、**萩原玄明**という分身さんが書かれた『**精神病は病気ではない**』(ハート出版)という本が紹介されていて興味を引かれました。その本のタイトルを見た時、自然界に病気など存在しないと考える分身主義と一脈通じる部分があると感じて、早速インターネットで調べてみたところ、次のような内容紹介文が見つかりました。

「**精神科医が見放した患者を次々と独特の**霊視**と**供養**で完治させた感動のドキュメント。精神病の真相と死霊憑依の実態が明らかにされる**」

この文章を読んで、一連の超能力まがいの俗悪な本かな、と感じたのですが、図書館で借りて読んでみると、それがなかなかの良書でした。何しろ著者の**萩原玄明**分身さん自身、次のように書いています。

「最近のテレビなどでも随分といかがわしいものが多く見られます。事故があった場所などに出かけていって、『そこに霊がいます。あそこにもここにも。こちらの霊は座っています』などと、誰にも見えないものが自分には見えているように振舞ったり、また、千里眼のように遠くにある建物の中の様子を述べたりして大勢の人々をビックリさせています。手品のようにタネがあると、嘘を本当のように演じることがあっても、テレビはフィクション、つまり嘘を面白く見せるショーなのですから、ビックリする人ほどテレビのいいお客様というわけで、特に非難することはありません。私がここで問題にしたいのは、本当に幽霊が見えたり遠くの事物がわかったりする**霊能力**を持った人たちが、その力を大衆に示すことの意味をどれほど自覚しておいでかという自律についての見識です。(中略)人々をビックリさせて得意になったり自己宣伝の道具にしたりするのが**霊能力**を持った意義なのでしょうか」(P178)

他にも、次のように書いています。

「**霊能者**とは不思議な力を持っている人だから見えて当然と思っているのが一般の人々です。実にナイーブに信用してくれます。こんな状況の中で、もし、この**霊能者**が口から出まかせに『教え』らしきものを説いたとしたらどうということになるでしょう。人々を間違った方向へ走らせてしまうのです。困ったというよりは、おそろしいことです」(P180)

まず初めに**明言**しておきます。

彼(萩原玄明分身さん)は、**商業ベースに乗せた金儲け主義の霊能者**たちとは根本的に違うようです。**精神病**は、**成仏**できない死者の意識が、生者の肉体を借りて具現している**憑依現象**だという信念に基づき、取り憑いている死者の霊を**供養**することで多くの**精神病者**を救っている方です。その信念は、**仏教の教えに端を発し、そして彼を衝き動かしているものは、自分のエネルギーをすり減らしてでも、ひたすら苦しんでいる人を救ってあげたいという善意**だけのようです。

萩原玄明分身さんは、八王子市の宗教法人・長江寺福浄院の住職さんです。昭和10年11月8日、東京都八王子市の菅谷不動尊教会の次男として生まれました。他にも次のような著書があります。

- 『心を盗まれた子供たち』
- 『あなたも自殺しますか?』
- 『死者は生きている』
- 『精神病が消えて行く!』
- 『死者からの教え』
- 『あなたは死を自覚できない』
- 『これが霊視、予知、メッセージだ』

ちなみに、彼（萩原分身さん）の言う「精神病（*1）」という言葉ですが、精神病は、精神医学では、精神障害の中でもより重度の、幻覚や妄想などの奇妙?な症状を伴うものを指すようです。また、精神障害の中には治療しなくとも、それなりに生活可能なものも多いのですが、精神病となると、早期に治療をしないと生活が破綻する恐れがあったり、生命に関わることもあると分類されています。

テレビや誌面で、視聴率を取るために、ミステリアスに面白おかしく脚色された多重人格（解離性同一性障害）というのは、精神病ではなく、ヒステリーなどと同じ神経症に分類されています。

萩原玄明分身さんが用いる「精神病」という言葉は、このような精神医学で分類される「精神病」のようにカッチリと区分されたものではなく、かなり感覚的で曖昧なものです。場合によっては、狐狗狸さん（*2）などの遊びによる暗示で狐が悪いとしたり、酒乱（酒に酔って人が変わったような言動を取る人）なんかと一緒にしてしまっています。

「幸か不幸か私は学問とは無縁でしたので、体験第一主義と申しましょうか、ひどい目にあったり後悔したり、そのつど夢中で様々な体験をして、あとになってから御仏（かみ）のなさることの広さに気づいてびっくりするという、そんなことばかりでした」（P122）

たぶんそれが幸いだったのでしょう。細分化することは、そのような現象が起こる原因を究明するためには役立ちますが、現代の精神医学が、あまりにも細部にこだわり過ぎて、「こころ」の全体像が見えなくなっているという悪因にもなっています。精神医学が求めているものは何でしょうか？人間の心を明るく健康にすることではないのでしょうか!? 年々希望者が増える精神科医やカウンセラーたちの生活を保証するためとか、ますます細分化して病気を増やし、それらを全て覚えて説明できる専門家が賞賛され、頼りにされ、優越感に浸るためとかではないはず。人間の心の健康には、全人類が寄りかかっても倒れない太い一本の柱が必要です。大げさではありません。グローバルな現代を生きる僕たちの心の健康には、「全人類」が頼れるたった一本の柱が必要なんです。しかし、精神医学の世界でやっていることは、その逆に、肩間にしわを寄せて、個々の悪いところをほじくり返し、隔離しておいて突っいたり、傷口をぐちゃぐちゃといじくり、ますます悪化させているような感じです。洞窟の中の迷路に迷い込んで、それでも奥へ奥へと意地になって突き進んでいるかのように見えます。科学は洞窟の奥へ奥へと突き進んでも、必ずもと来た道を引き返し、初めの気持ち、“人類の幸福のため”に立ち返って、科学全体を俯瞰し、整理する必要があります。

ある若い精神科医が、萩原分身さんに次のように話したそうです。
「薬や電気などを使って、患者の症状を抑制することは確かにできます。が、その症状を根本から治して完全にもとの正常な状態にすることは残念ながらできません」（P37）

科学が、薬や電気という細部で留まってしまっているという証拠です。それでは根本から治すとはどのようなことなのでしょう？

萩原玄明分身さんの著書『精神病は病気ではない』は、人間の心の健康には、精神科医が持っていない、あるものが必要であることを教えてくれています。それは、根本から治すということに限りなく近づいています。でも、現代を生きる僕たちが根本から救われるためには、まだ乗り越えなければならない課題もあります。

- 1、精神科医が持っていない、人間の心の健康に必要なあるもの。
- 2、現代を生きる僕たちが、根本から救われるために乗り越えなければならない、いくつかの課題。

それらのことを、『精神病は病気ではない』という本を取っ掛かりにして考えていくことで、分身主義の真髄に迫っていこうと思います。僕（徳永分身）がかつて迷路のような分身主義の森を歩いていた時に発見した、ユートピアへの入り口の前に、もう一度、今あなたをお導きするには、この道が最短距離だからです。僕たちには、あまり多くの時間が残されていません。

(*1) 精神病は、大きく分けて、外因性のもとの内因性ものに分けられます。

- ・外因性精神病 薬物中毒や、脳障害などの、身体的原因が明確であるもの。（器質性精神病、症状性精神病、中毒性精神病など）
- ・内因性精神病 身体的原因が不明で、遺伝や素質が関係していると思われるもの。元々の病気になるやすさ（素因）を持っている人が、環境からの刺激（ストレス）から脳の機能障害を発症するという「ストレス-脆弱性」モデルが現在最も有力である。（精神分裂病、躁うつ病など）

ちなみに、精神分裂病という病名は、2002年8月に日本精神神経学会総会で「統合失調症」という名称に変更されました。

精神障害というのは、これらの精神病と呼ばれるものも含めて、精神の“異常”や“偏り”を総称する広い意味で用いられています。精神障害には、精神病と呼ばれるものの他にも次のようなものがあります。

- ・神経症 ヒステリー、恐怖症（対人恐怖、異性恐怖、赤面恐怖、視線恐怖など）、パニック障害、強迫症など
- ・人格障害 境界性人格障害など
- ・生理的障害 不眠症、摂食障害など
- ・情緒障害 注意欠陥多動性障害など
- ・発達障害 学習障害など

(*2) 狐狗狸（こっくり）さん
民間で行われる占いの一つ。三本の竹を三つ又（また）に組んだ上に盆を乗せ、三人が各自の右手の指で盆を押さえ、その一人が祈りごとを言うと、自然に盆が動きだし、その動き方で吉凶を占う。最近は、紙の上に数字や文字を書いておき、硬貨を一つ用意して、その上に3人の人差し指を乗せて行なったりする。

ちょっと一言

先日、モンゴルをある作家が旅する番組がありました。遊牧民はある土地に行き着くと、お茶を沸かし飲むそうですが、最初の一杯はその土地？の神様に差し上げなければいけないという風習があるということでした。もしそれを怠ると、年寄りから激しく叱られるということです。そのような、理屈ではない風習は、神様に守られている気持ちを生み育て、仲間との絆を生み育てます。それが人間の心の健康には必要です。

「人間の心の健康には、全人類が寄りかかって倒れない太い一本の柱が必要なんです」

そうのように言いましたが、あなたは健康というものを、どのようにイメージしていますか？ その対極には、暗い形相をした「病氣」がのそと立っていきそう。でも、僕（徳永分身）の言う健康とは、病氣の対極にあるものではなく病氣をひっくるめてあるものです。本当の健康とは、自分の病弱さを知りつつもそれを明るく笑い飛ばせること、だからです。人間の身体は弱いものです。どんな人も病氣（と僕たちが呼んでいるもの）と無縁ではられません。その弱さを笑い飛ばせること、病氣と仲良く生きられるようになることこそが、本当の健康だと考えます。この言葉を常識的に解釈して、理解したつもりにならないでください。これは分身主義の真髄にも触れる言葉です。

今、勇気を持ってこの分身主義の森に踏み入ろうと思ったださっているあなたには、分身主義の真髄を体感していただきたいと思います。僕たち人類は、今まで、力と健康と富を目指して頑張ってきました。しかし、それは本当の力、本当の健康、本当の富ではなかったことに、誰もがようやく気づき始めています。

- ・本当の強さとは 自分の弱さを見つめる勇気を持つこと。
- ・本当の健康とは 自分の病弱さを知りつつもそれを明るく笑い飛ばせること。
- ・本当の富とは 自分の貧しさを知り、助け合える多くの友人を持つこと。

分身主義の森で、本当の幸せを見つけるためにも、この言葉を覚えておいてください。あなたはそこで、この言葉の向こう側にある真実を知ることでしょ。その時、この言葉に、あなたは二度抱きしめられることでしょ。

予備知識2 精神科医が持っていない「ある必要なもの」

人間には、自分の今いる場所を教えてくれる物語（地図）と、その物語を頼りに自由に移動するためのコンパス（指針）が必要である。

前回の最後の言葉、覚えていますか？

- > 萩原玄明分身さんの著書『精神病は病気ではない』は、人間の心の健康には、精神科医が持っていない、あるものが必要であることを
- > 教えてくれています。それは、根本から治すということに限りなく近づいています。でも、現代を生きる僕たちが根本から救われるた
- > めには、まだ乗り越えなければならない課題もあります。

初めに断っておきますが、僕（徳永分身）は、霊の存在を信じてはいません。彼（萩原玄明分身さん）の言動には否定的です。ただ、精神病は病気ではないと考える点は一致しています。それと、彼の著書からは学ぶべき点がある、と考えていることも事実です。彼の言動を批判するよりも前に、まず、精神科医が持っていない「ある必要なもの」について話そうと思います。

それは物語です。

彼（萩原分身さん）は、人間の魂・意識体がどのようなものかということ、僕たちに、心を揺さぶる物語にして、きちんと話して聞かせてくれることができる人です。そして、僕たち人間の生きるべき指針を示してくれます。精神科医にも科学が作り上げた「物語」はありますが、それはまだ未完成で、彼の物語と比べるとあまりにも視野が狭く貧弱です。だから、精神科医にも根本的に治すことができない精神病なのに、彼には、根本から治すということに限りなく近づけるわけです。

大昔、子どもは父親に次のように聞いたかもしれません。

「ねえ、あの山をこえてどこまでもいけば、どこにいくの？」

「それは、海の神様が支配するところに行くんだよ」

「うみ？ うみってなあに？」

「水だらけのところだ」

「じゃあ、うみもこえてどこまでもいくとどこへいくの？」

「海はね、息子よ、人間が越えちゃいけないものなんだ。だけど、昔々、それを越えようとしてどこまでも行った人がいて、その人は海の果てにだどりついた瞬間、滝のように真逆さまに落ちて行ったそう。海の神様は、人間の思い上がりを決して許してはくれない。だから、息子よ、もうそんな恐いことを考えてはいけないよ」

あるいは、大昔、子どもは次のように聞いたかもしれません。

「ねえ、おじいさま、かみなりさまはどうしてときどききげんを悪くするの？」

「雷様は空の神様の護衛をしているんだ。だから、人間が空の神様をほんの一瞬でも疑ったら、雷様が空の神様の代わりに怒るんだよ」

「じゃあ、おじいさま、じしんさまはどうしてきげんを悪くするの？」

「いいかい、地震様は土地の神様の護衛をしているのは知ってるね。人間が土地の神様をほんの一瞬でも疑ったら怒り出すんだ。ちょっとでも誰かが神様を疑ったら、空の神様も土地の神様も機嫌を悪くする。だから、可愛い孫よ、神様を疑ってはいけないうよ」

大昔、誰もがこういう物語を信じていたからこそ、彼らは神様や家族に守られている安心感の中で、秩序を保って生きていられたのです。その物語が描かれた地図を広げて、先人たちに与えられたコンパスを頼りに、この人生の荒波を乗り越えていけたのです。この「物語」が虚構か実話かということは、あまり問題ではありません。どれだけ信じることができるか、そのことに意味があります。

ちょっと想像してみてください。あなたは今、ふと気がついたら、見知らぬ土地にぼつんと一人で立っていたとします。いつもとは違う、のどかな田園風景が広がっています。途中の記憶が全て抜け落ちてしまったか、あるいは寝ている間に誰かに連れてこられてしまったという設定でもいいです。あなたならどうしますか？ 僕（徳永分身）なら、まず、道行く人に「ここはどこですか？」と聞きます。日に焼けて土地の人らしいおばちゃんは、強い訛りで、どうやら青森県のどこどこだと教えてくれているようです。その言葉を聞いて、とっさに「ひえーっ、どうして僕は、青森なんかにいるんだよう??？」と混乱すると思います。

次にやることは、コンビニか本屋の場所を聞き、そこで地図を購入します。おばちゃんの教えてくれた聞きなれない地名を探し当て、自分の今いる場所を確認できて、ほんの少しホッとします。でもまだ釈然としません。どんな理由で、どのような経緯で、今自分はここにいるか、ということが全く理解できないからです。抜け落ちた過去を取り戻さない限りは、とても安心できません。その抜け落ちた過去を説明してくれているのが、萩原玄明分身さんなんです。彼は、知らないうちに精神病という見知らぬ土地に連れて来られて、毎日が不安でいっぱいの人（あるいは不安でいっぱいのその家族）に、次のような物語を聞かせてくれます。

- 1、精神病とは、死者の意識が生者の肉体を借りる（憑依する）ために起きる生者の意識の異常現象である。
- 2、生者に入り込む目的は、死者が己の意識の苦しみに耐えかねて、その解決を縁ある子孫に依頼しようとしてである。
- 3、問題解決のキーは、生者と死者との唯一の接点である魂の交流である。
- 4、その死者が誰であるかということは、彼（萩原玄明分身さん）の朝方見る夢（霊視）によって予言される。
- 5、予言された特徴によって、家族が自分の先祖の誰々であるとわかれば、その人にきちんと向き合っ、そして優しく彼らの主張に耳を傾けてあげて、今まで何一つ聞いてあげようとしなかったことを心からお詫びする。
- 6、つまり（亡き人の心を思いやる優しさのこもった）きちんとした供養をすることで、死者の魂は癒され、それによって生者に取り憑いていた死者の意識が離れ（成仏され）精神病と言われている現象も消失する。

これは、彼の体験と想像力が作り上げた物語ですが、これが虚構であっても少しも構いません。それを信じさせることができさえすれば、それだけで十分な力を発揮します。霊視によって登場する死者（先祖や縁のあった人）は、「酒の中に毒を盛られて殺されてしまった人」とか、「血だらけになった洋服を、泣きながら洗濯している男の人」などといった形で登場します。あるいは死者にちなんだ場所とか、道具とか、風景などが現われる場合もあります。霊視された内容を聞いた家族が、自分たちの先祖の誰々であるかを特定させます（あまり古い話だと、特定不能なこともあるでしょうけれど、不思議とピッタリと的中することもあるようです）。

次に萩原玄明分身さんが、生者へ乗り移っている死者の話を書いてあげて説得をし、最後に供養をすることで、死者は成仏していくということです。何しろ、相手が死者ですから、常にこのような筋書き通りにいくわけではありませんが、こんなのが彼の基本的な解決方法だと思ってください。

次に実例の一つ挙げますが、これも筋書きとはちょっと違います。先祖ではない死者の意識らしきものが、ある子どもに取り憑いたもので、しかも複数の死者（らしきもの）です。

テレビで紹介された萩原玄明分身さんを頼って、ある日、17歳になる娘さん（Y子分身さん）が、パジャマ姿のまま、叔母と父親に抱えられてきました。母親は自殺で既に他界していたのだそうです。ほとんど放心状態のY子分身さんに萩原玄明分身さんが話し掛けると、次々と死者と思われる者の声が彼女の身体を使って答えてきました。

初めの人はお爺さんのような声で乱暴な話し振りで、「うるさい！ わしは大正15年に死んだだ」萩原玄明分身さんが、その人を説得して、供養のための念仏をあげると、「わかった、わかったよ」と言って、彼女の身体から出て行きました。すると今度は、がらりと女の人の声になって「私は昭和30年になくなったです」と話し出します。その人の話を聞いてあげて、心を鎮めてあげてから供養をすると、次に現われたのは、昭和51年に神奈川県相模原で恋人に殺され、井戸の中に投げ込まれたという女性。お腹の中に子どもを宿したまま殺されてしまったそうです。見ると、Y子分身さんのお腹もみるみる大きくなりました。その人にも慰めの言葉をかけて、供養の念仏をあげると、お腹のふくらみも完全に消えてなくなりました。

この少女の場合は、この日はこのようにして合計9人の死者が次々と現れたそうですが、全て供養をすることでおとなしくなり、長いこと食事もできなくて衰弱していた彼女だったのに、出してあげた食事をたくさん食べて帰ったそうです。

こうした体験を通して、彼は自分が作り上げた物語を、ますます確信を持って語るようになりました。

死者たちが、縁ある子孫の肉体を借りて、怒ったり 罵ったり 暴れたり 嘘をついたり人を欺いたりする理由は、その死者が生きていた時に、物質的視野で生きていて肉体が消滅したら意識も消滅すると信じていたからだと言います。そして、死んでしまっているのに意識がある、という事実を受け入れることができずに、自分はまだ生きてると錯覚をするからだと言います。また、よくお墓参りに行った時に憑依される例があるそうですが、それは、その死者が死んだら暗い墓の中に入るとばかり思っていて、死後も、その想いが墓に来て留まっています、死んだ後、自分の魂に自由な働きがあることに気づかないからだと言います。これらの説明にかなり疑わしいところがあることはすぐにわかります。

また、酒乱（普段おとなしい人が酒が入ると別人のように暴れたりする）という症状も、酒を飲んだ生者に、悪い死者が乗り移っているからだと言います。また、病死や自殺などの不幸（彼はこれを不幸と書いています）は、死んでも魂・意識体は存在するのに、それを信じて大切に供養しない子孫に、死者が、その想いを伝えるために、人間を肉体の無い状態に変えてしまう、つまり死なせてしまうのだと言います。彼に言わせると、死者には、人間の肉体を無い状態にすることぐらい造作もないことだそうです。

想像力という縦糸と横糸を使って物語はどんどんと編み上げられ、妄想はどこまでも巨大化していきます。想像上で作り上げた物語には、そのような成長過程をたどる特徴があります。ちょっとした想像力さえあれば、様々な不幸の要因を、どれもこれも死者のせい（= 霊障）で説明することはいとも簡単です。ただし、彼は、霊障というものは、本当はこの世の縁者に運んで来てくれた大切な「教え」であると言います。その教えを素直に受け止め、今の苦しみの本当の原因は、自分自身の毎日の暮らし（先祖を大切にしない不信心）の中にあると反省すべきだと言っています。ここまで来ると、妄想も、単なるつじつま合わせの屁理屈ではなく、「仏様の教え」のような域に達しているのかもしれない。

ところで、このY子分身さんの話には重要な後日談があります。次回はそれをお話します。

ちょっと一言

父親や祖父に疑問をぶつけた大昔の子どもが、もし、時空を超えて現代に紛れ込んでしまったならどうでしょう。役に立たない地図やコンパスを持って、山の中で迷子になってしまったようなもので、それは即、遭難を意味します。孤独と混乱の中で死んでいくしかありません。物語は実話でなく虚構であっても、信じることができる間は大きな力を与えてくれます。しかし、逆に言えば、信じることができなくなった途端、それは役に立たないどころか、大きな混乱を招く大元になることも忘れないでください。

予備知識3 科学の必要性

科学には霊の非在を証明することはできないかもしれないが、霊を持ち出さなくても、その不思議な現象を説明することはできる。

何かを検証もせず信じて込みやすい人は、同時に何かを検証もせず否定する人でもあり、世界平和と逆行するという意味で、それ自体犯罪行為を犯している。

「予備知識2」では、17歳のY子分身さんの肉体を借りて次々に現われた9人の死者（らしきもの）を、供養によって成仏させた話を聞いていただきましたが、その話には後日談があります。そのことから聞いていただきたいと思えます。

その後、しばらくたってから彼女（Y子分身さん）の父親から電話があり、次のように言われます。

「あなたに供養なんかされたので、少しも治らなかつた」

話を聞いてみると、その後も症状が回復しないので、今度は、京都のおはらいをする有名な先生のところへ連れて行ったそうです。すると、「供養なんかしたら治るものも治らなくなる」というようなことを言われたというのです。有名な先生の名前は萩原分身さんも知っていて、「悪霊はみな祈祷で追い払えばよい」と、さかんに書いたり言ったりしている人だそうです。

萩原分身さんの解決法の本質は、決して供養という行為それ自体の中にあるものではありません。おざなりな供養などをしても効果がないどころか、かえって悪化するばかりです。彼の物語を感動を持って受け入れ、そこから生まれる本当の供養の心によって、自らに命をつないでくださったご先祖様たちに感謝の気持ちで接する心、現在の自分を取り巻き生かして下さっている周囲のものに、穏やかな愛情を注げる心が育つことに本質はあります。Y子分身さん自身も、彼の家族も、そのような供養ができる心が育って、それが暗示効果となって、少しずつ彼女の心を支配していた迷いや不安や混乱が取り除かれていくとしても、少しも不思議ではありません。

しかし、この父親は、萩原分身さんの物語（教え）を信じて、思いやりを込めて供養を行なったとはとても思えません。自分の不信心を懺悔するどころか、原因は自分にはないと思えるような精神構造を引きずっています。萩原分身さんの物語が効力を発揮できなかった最大の理由は、Y子分身さんもその家族も、彼の物語を信じきれなかったことにあると思えます。ところで彼（萩原分身さん）は、「おはらい」について次のように批判します。

「追い払うというのはあくまでも一時的なことで、根本的な解決には絶対になりません。第一、故あってこの世に想いを送ってくる死者に向かって、その理由も聞かずにいきなり『立ち去れ』と激しく払ってしまう行為に、人間としての“心”があるでしょうか」（P54）

「おはらい」と「供養」のどちらが優れているかという問題です。

「おはらい」という行為には、人間に害を及ぼす霊を敵とみなし、理由も聞かずに毅然とした態度で一切寄せ付けない感じがあり、それがY子分身さん自身の心に暗示的に働けば、悪霊をはね飛ばす強い精神力が作れそうです。わりと、自己中心的な解決方法と言えます。一方、「供養」には、人間に害を及ぼす霊を必ずしも敵という見方はせず、話し合いによって解決しようとする感じがあり、それがY子分身さん

の心に暗示的に働けば、目に見えるもの、目に見えないもの、全てに対して深い思いやりと愛情を注ぐ生き方ができそうです。こちらは、自己中心的と言うより、平和共存的と言えそうです。あなたはどちらが優れていると思いますか？

ところで、「おほらい」をする先生も、「供養」をする先生も、どちらにも共通しているものがありますよね。それは、お二人とも、人間の肉体は消滅しても(死んでも)魂・意識体というものには消滅せずに生者に移り移ったりする、という現象は疑う余地のないことであるという前提の元で話しているわけです。もし、死者の魂・意識体というものなど存在しないとなれば、どちらが優れているかなどと考えること自体、馬鹿げていることになります。

さて、ここまでは、「おほらい」や「供養」をする先生たちが考えるように死者の魂・意識体というものが存在していて、それが生者に乗り移ると言うことが本当の話であるなら、という前提の上で話してきましたが、ここまでで、あなたはどのような感想を抱きましたか？

A、やっぱり人間は死んでも、魂・意識体は存在しているんだなあ。

B、非科学的なでっちあげにもほどがある。

C、本当なのかなあ？(半信半疑)

あなたは、Aですか？ だけど、死者の霊が存在することは、科学的に証明されてはいません。体験を元にした想像で作上げたこれらの物語が、しっかりした裏づけを取りながら進まない限りは、完全に危険性を排除させることはできません。前回も見てきたように、想像が作り上げた物語は、その人の独り善がりの思い込みによってますます確信を深めながら、どこまでも野放図に巨大に妄想化していく特徴があります。

「予備知識1」に、萩原分身さんの言葉を紹介しました。「霊能者とは不思議な力を持っている人だから見えて当然と思っているのが一般の人々です。実にナイーブに信用してくれます。こんな状況の中で、もし、この霊能者が口から出まかせに『教え』らしきものを説いたとしたらどういうことになるでしょう。人々を間違った方向へ走らせてしまうのです。困ったというよりは、おそろしいことです」(P180)

今、心を鬼にして言わせていただきます。もし、「霊が存在する」という大前提さえも真実でなかったとしたら、たとえ善意のみから説かれた「教え」であっても、それは、その人の想像力が作る思い込みを元に、口から出まかせを言っていることに変わりありません。

彼(萩原分身さん)の教えには、人々を正しい方向に向かわせるものもありますが、そうとばかりも言えません。それは彼の教えも、科学的な証明がなされていない限り、単なる想像とか妄想と呼ばれる域を出ていないからです。想像や妄想というものは、いくらでも肥大してしまう性質を持っています。例えば酉乱や病死や自殺というものも、死者が乗り移ったり死なせたりしていると彼は説明します。全ての悪運を霊障で説明することは可能ですし、物語はどこまでも加加速度的に拡大します。それらが確信に変わってしまう前に、しっかりした裏づけを取りながら歩まなければいけません。非科学的な妄想をしてしまう人間の脳の性質が、いわれない偏見や差別を生み出していることは明白です、やがては無自覚の犯罪やひいては戦争の動機にもつながっていきます。

また、その物語が受け継がれ受け継がれていくうちに、いろいろな人の想像が織り込まれ、その中には欲が強く影響力を持った人も必ずいて、どんなに素晴らしい「教え」でも、その人の都合のいい解釈をされていくというのが、大体の傾向です。それが裏づけを取りながら進んで来なかったものの宿命だし、また、裏づけを取りながら進むことに慣れていない人は、どこまでが本当で、どこからが嘘か、検証する癖がないので、全部、信じてしまいます。安易に信じてしまう行為が、たとえ善意に基づく行為であったとしても、実は、それ自体が犯罪行為であるということに気づいているでしょうか？

僕はもちろん[B、非科学的なでっちあげにもほどがある]です。ただ、初めから、「そんなものあるわけないだろう!」と否定してかかるのは科学的な態度ではありません。だから、自分と違う考え方をする人の言葉にもちゃんと耳を傾けるべきだと思い、萩原分身さんの本も丁寧に読ませていただいたわけです。

先程、「死者の霊が存在することは、科学的に証明されてはいません」と書きましたが、その反対に、科学で霊の非在を証明することも難しいことも事実です。ただし、これだけは言えます。よく聞いてください。確かに、科学には、萩原分身さんの体験と想像力によって体系化された「霊の存在」を否定することはできません。でも、科学で、彼の不思議な体験(霊視)を説明することはできる。そして、次のようにも言えます。科学では、「精神病」と言われている不思議な現象を、霊の存在を持ち出さなくても説明することはできる。

ちょっと一言

僕(徳永分身)の伝えたいものが、少しずつみなさんに伝わっているのでしょうか？ 世界を平和にするためには、物事を科学的に考える力(合理的思考力)がどうしても必要です。僕たち人間は、自らの想像力によって物語を編み上げていくという能力を持っています。それは確かに人間にしかない素晴らしい能力ですが、同時に、その物語の根拠となる確実な証拠がないにもかかわらず、それを検証しようともせず鵜呑みにしてしまう素晴らしい能力?も持ち合わせています。その素晴らしい能力?は、もしも、自分の都合に合わせた解釈をしてしまったとしても、それを客観的に評価する目を曇らせてしまいます。

物事を科学的に考える力(合理的思考力)が育っていない人間は、自らの善意に導かれながらも、結局は間違った方向(世界平和とは逆の方向)に進んでいます。だから厳しいようですが、それ自体が犯罪行為だと書いたのです。僕たち人類が、世界を平和にできないのは、一つにはこの能力?のせいだったんです。

安齋育郎という分身さんの書いた『占いてなんだろう』(岩崎書店)という本を是非読んでみてください。この本は、「おとなになること」というシリーズの一つで、子どものために書かれた本ですが、大人の人か読んででも十分勉強になることばかり書かれています。ノストラダムスの大予言、占い、こっくりさん、超能力、心霊現象、ひとだま、ミステリーサークル(畑や田に一夜にして円環の模様ができ

る現象。UFOの着陸跡ではないかなどと言われている)や、UFO、金縛り、などを科学的に解明していくお話です。

この分身さんは科学者でありながら、自ら、奇術でスプーン曲げや超能力現象を実践して見せたりする愉快な方でもあります。

彼はこの本で、子どもたちに物事を科学的・合理的に考える癖をつけさせることで、世界を平和にしようと考えています。心霊現象や超能力などと言われるものを、初めから否定してかかるのが科学的・合理的態度ではありません。そのように簡単に否定したり、その逆にちょっと不可解なことが起こると心霊現象だとか超能力のせいにしたらずに、根気強く調べて検証していこうとすることが科学的・合理的態度というものです。

予備知識4 科学に対する誤解

科学が人間を傲慢にするのではない。傲慢な人間が科学を扱うことで、科学が傲慢になるだけである。

本当の科学というものは、自然界に忠実で、人間を中心にすえる宗教などよりも、よほど謙虚なものである。

「予備知識3」の最後の言葉、覚えていますか？

> 確かに、科学には、萩原分身さんの体験と想像力によって体系化された「霊の存在」を否定することはできません。

> でも、科学で、彼の不思議な体験を説明することはできる。そして、次のようにも言えます。

> 科学には、「精神病」と言われている不思議な現象を、霊の存在を持ち出さなくても説明することはできる。

そのことは、次回、ちゃんとお話することをお約束します。今回は、この、霊の存在を持ち出さなくても説明することができる“科学”とは何か、ということをちょっと聞いていただきたいと思います。そのためには、宗教と科学の違いというものを考えるのがわかりやすいと思います。

よく、「世界平和には、科学と宗教の融合が必要だ」などと主張する人がいますが、科学と既存の宗教とは相反するもので、決して融合などできません。本質的に、対立せざるを得ない関係にあるからです。無理に融合させようとすると、宗教の側に、こじつけや屁理屈が必要になってきます。もし、科学の方にこじつけや屁理屈を施したら、それはもうその時点で科学ではなく「非科学」になってしまうからです。そうなってしまっただけで、科学と宗教の融合ではなく非科学と宗教の融合です。だから、科学と宗教の融合を目指すなら、宗教はいつでも科学に歩調を合わせられる用意をしなければいけません。

科学とは、自然界に伺いを立てながら進む学問なので、もし自然界に伺いを立てた時に以前の説が間違っていたと気づけば、素直に訂正するものです。将来も、ころころと学説が変化することは十分考えられます。宗教の教えは千年経っても二千年経っても同じでなければ困ってしまうものなので、現在の科学と融合できないどころか、将来の変化にも対応できません。ころころと教理が変わってしまう宗教なんて、誰も信じてくれません。と言うことは、宗教と科学とが融合することはあり得ないということになります。

世界平和には、科学(知)と、宗教(心)を融合させる必要があると主張すること自体は間違いではありません。とても正しいことを言っています。ただ、既存の宗教とは融合は不可能だということです。何故かと言うと、既存の宗教は全て、科学的方法論が不十分な時に、その多くを人間の想像力に委ねて作られたものだからです。いずれ、科学(知)と、それが生んだ分身主義(新しい信仰心のようなもの)が、「世界平和には、科学(知)と宗教(心)の融合が必要だ」と主張する人の言葉の正しさを証明してくれることになるでしょう。分身主義は、いつでも科学に歩調を合わせることができるからです。何故なら、分身主義は科学の導き出した結論に左右されることなく、科学の方法論だけを頼みにしているからです。科学とは、導き出された答えではなく、まさに、この「方法論」のことなんです。これは追々ご説明したいと思います。

分身主義の森への第一歩は、「幻想」と「実体」の理解から始まりますが、その説明はその時にしますので、ここでは取り敢えず、科学は実体を扱い、宗教や日常生活などは主に幻想を扱っていると覚えておいてください。科学は実体を扱うから、この自然界で機能するモノを作り出すことが得意です。例えば、電気炊飯器、テレビ、携帯電話、パソコン、自動車、高層ビル、人工衛星 etc. だけど、よく考えてみれば、幻想を扱う宗教には何も作り出すことができないかということ、そうでもありません。神様を祭る祭壇を作ったり、科学にはできない心の問題を、その宗教を「信じる」ことで解決させ、その人の行動を変化させ、その人の手から作られるモノ(=実体)を変化させることができます。宗教は、ほんの少しの曇りもなく「丸ごと信じる」ということができるなら、それこそ他の何ものにも負けない効力を発揮してくれます。問題は、世界中に五万?とある宗教が、一つに統一できないことなんです。

昔々、周囲を高い山々に囲まれた地域に小さな村が生まれ、一生その村から出ることもなく、他の人たちと出会うこともなく、そこで経験することだけが自分たちの世界の全てという環境の中で、一つの宗教が生まれ、それを全員が信じていられた頃、彼らは病や死の恐怖さえも乗り越えて、幸せに平和に生きていたに違いありません。でも、他の土地で生きる人たちと出会い、その人たちが自分たちの絶対と信じていた宗教と違う宗教を信奉していると、もう幸せではなくなります。もし絶対と信じていた宗教に、ほんの少しの翳りでもあろうものなら、それは宗教を無力にし、幸せも揺らいでしまうからです。

そこで自分の宗教の優位さを証明する必要が起きて、論争が起こり、戦争が起こります。科学も、宗教にとっては目の上のたんこぶです。だから宗教は、科学に牙を向けます。僕たちがこの世界で平和に幸福に生きれるとすれば、みんながたった一つの宗教を信じていられる場合だけです。そんなことは、情報網や交通網によって世界が狭くなった現代を生きる僕たちには不可能ですよ! 僕たちは、周囲を高い山々に囲まれた昔々に生きていたわけではありません。この情報化時代の現代を生きる僕たちは、嫌でもたくさんの宗教と出合ってしまう

し、しかも、既に科学とも出会ってしまったからです。宗教は人々の心を一にできるどころか、宗教こそが人々をバラバラにし、もめごとの原因を作ったりしています。その現実気づかない人は、情報不足か、あるいはどんな情報も、自己中心的に都合よく解釈してしまえる人なのでしょう。

想像力から生まれた宗教では、それを信じない者はその宗教の恩恵に浴することができません。しかし、自然界で機能するモノを作る「科学」は、科学を信じようと信じまいと、科学を知ろうと知るまいと、誰もがその恩恵に浴することができます。その仕組みは知らなくても、電気炊飯器、テレビ、携帯電話、パソコン、自動車の恩恵を受け、高層ビルに住んだり、人工衛星から送られてくる情報の恩恵を受けます。物質的なことだけではありません。科学は、それを信じようと信じまいと、人間の「心」を変化させることもできます。例えば薬物です。それを服用すれば、宗教のように「信じる」ことなしに、誰でも心を変化させられてしまうのです。

だけど、「予備知識1」に書きましたが、「薬物が人間の心を変化させることができても、それが人間の心を根本から救ってくれるわけではない」という意見では、萩原分身さんも精神科医も一致しています。

と言うことは科学にも、人間の心を根本から救うことは無理なのでしょうか？

そうではありません！

科学者は、真理を求めるために硬い岩盤をそれぞれの信じる方向に放射状に掘り進み、どこまでも、その先を切り開くために必死です。だから、もと来た道を引き返し、「人類の幸福」という科学の最初の願いを思い出して、科学全部を俯瞰して整理する余裕がないんです。だから、精神医学界は薬物で止まってしまっている状況にあります。今の方向をどこまでも掘り進めば進むほど、ますます暗い迷宮に迷い込むだけです。精神医学界に従事されている科学者が、唯一自然界を師と仰ぐ謙虚な気持ちの真の科学者なら、僕たちの心を救ってくれるのは科学が導いてくれた分身主義しかないことを、いつの日か理解してくださる日が来るでしょう。

それはさておき、萩原分身さんには、この僕（徳永分身）のような理屈っぽい人間が、もしも、「靈魂不滅説は理屈に合わない！」と批判をしたとしたら、その場合にちゃんと用意している言葉があります。

「理屈とはなんでしょう。そんなに大変なものなのですか。いつからそんなに大切なものと思こんでしまっているのですか」(P30)そして、次のように説明します。

「大宇宙の動きを、コンピューターですべて数式化できると思っている人があるとしたら“神秘”の前にたちまち立ち往生するでしょう。大自然が生み出した人間の、特に意識体・魂の動きというものは、科学という名の理論の組み立てなどで解明できるはずがないのだと、少なくともその程度の謙虚さぐらいは常に持っていたいものです」(P128)

どうでしょうか!? あなたも、本当にこれが謙虚な姿勢だと思いますか？ これは科学というものを誤解していることから起こる、科学に対する偏見を伴った憎悪です。「食わず嫌い」に近い感情です。彼の言葉をわかりやすく言い換えると、「人間の意識体・魂は、科学という名の理論の組み立てなどで解明できないほど複雑で高度で崇高である」と言っているのと同じではないでしょうか？ それは謙虚というよりも、むしろ人間を尊大に扱っていると感じるのですが、あなたはいかがですか？

もう一つ、彼が決定的な誤解をしている点は、「科学」とは、コンピューターで数式化したり、理論の組み立てをしたりすることが全てだと信じている点です。ちょっと古い時代にはこのような偏見が優勢でした。でも、現代を生きるあなたは気づいているでしょうが、それが科学の全てではありません。自然界から、謙虚な気持ちでたくさんの方の事を学ぶことこそ、真の科学です。真の科学とは、どんなことでも人間を中心に考えるのではなく、自然界を中心に考えることを言います。

彼は次のようにも書いています。「(精神病はもちろん、あらゆる悪い波動をなくすためには)ちっぽけな人間が、多少の学問をしたというようなことぐらいでは、何一つ御仏・宇宙の真理を知ることができないのだと、まず自分の非力さをわきまえるのが第一です」(P216)

この言葉は、人間はもっと謙虚になるべきだと戒めてくださっているのだとはわかります。謙虚になることはもちろん大切です。でも、科学が人間を傲慢にするものではありません！ 傲慢な人間が科学を扱うことで、科学が傲慢になるだけです。彼のように、「人間にはわからない、人間にはわからない」といつまでも言っていては、その先に進めません。現に科学は、かつて人間にはわからないと思われていたようなことを、いくつもいくつも解明してきています。これからも、人間にはわからないと思われていることを解明していくことでしょう。だから、古い時代の偏見で、科学に蓋をしてしまうのはもうやめましょう！

もう一度言います。本当の科学というものは、人間中心ではなくて、自然界中心です。人間中心の似非科学者が、科学を傲慢にしてみただけの話です。本当の科学というものは、自然界に忠実で、実は人間を中心にすえる宗教などよりも、よほど謙虚なものなんです。

今日は、そのことを是非、覚えておいてください。それでは次回はお約束通り、萩原分身さんの不思議な体験と、「精神病」と言われているもの(つまり霊障と彼が信じているもの)を、科学ではどのように説明しているかということをお話します。楽しみにしててください。

ちょっと一言

萩原分身さんは仏教徒だから、靈魂不滅説のような発想をする基礎が脳の中に刻まれていると、一般的には思われるかもしれませんが、ちなみに、釈迦分身様は靈魂のことをどのように説いたと思いますか？

「肉体と魂は別のもので、肉体は滅んでも靈魂は不滅である」と説いたのでしょうか？

調べてみたら、なんと釈迦分身様は、このことには「敷衍しなかった」そうなんです。つまり、一言も語ってない、あるいは語るのを避けたようなのです。これは意外な事実でした。

釈迦分身様の教えが広まる過程で、各地各国の土着の信仰と結びついて「インド仏教」「中国仏教」「日本仏教」と変遷していくわけですが

が、日本では祖先崇拜と結びついて祖先の霊に対する“祭り”を仏教で執り行うようになったというのが本当のようです。

予備知識5 霊は存在するか？(1)

「こうなって欲しい」とか、「こうなって欲しくない」というような“思い”の中で生きているのが人間である。

さて、今回ははいよいよ、考えなければならない二つの課題に取り掛かります。二つの課題とは、「予備知識3・科学の必要性」の最後に書いた二つです。

(1) 科学で、萩原分身さんの不思議な体験(霊視)を説明する。

(2) 科学で、「精神病」と言われている不思議な現象を、霊の存在を持ち出さずに説明する。

ここでは、このうちの(1)について考えていきます。そして、霊は存在するかどうかということにまで言及したいと思いますが、今回はその前半です。

「後づけバイアス」という言葉、聞いたことがありますか？

人間は、「こうなって欲しい」とか「こうなるはずだ」という思い(自己成就予言)や、あるいは「こうなって欲しくない」とか「こうなっては困る」という思い(危険回避予言)などを持つと、その思いに合う事実だけを取り入れ、不都合な事実には関心を振り向けないという心理的なバイアス(偏り)の中で生きています。「虫の知らせ」とか「予知夢」などと言われるものも、これに当たります。

例えば、何年か会っていない友人がふと遊びにきて、楽しかった昔の話などをして帰った夢を見たら、数日後にその友人が死んでしまったとします。こんな時、ほとんどの人間は「あれが虫の知らせだったんだ」と解釈します。でも、何年か会っていない友人の夢を見て、その友人が亡くならない場合や、夢を見なかったのに亡くなってしまった場合も、僕たちは、この人生の中で何百倍も経験しているはずです。でもそういうものは印象に残らず、思いに合う事実だけが心に印象づけられ、「あれこそが虫の知らせだったんだ」となるわけです。

これを「回顧性の予言」とか、「後づけバイアス」と呼んでいます。

人の記憶というのは、かなりいい加減なものです。例えば道ですれ違った人の洋服が何色だったか、などと後で聞かれて「確か派手な赤色のトレーナーだったと思う」などと答えても、実際に確かめると、派手な青色のセーターだったりします。これは、派手な色という印象だけが強く残っていて、それで「青色」が、自分の記憶の中では派手なイメージの「赤色」に置き換わってしまっているんです。

また、それほど親しくもない人の話を聞いて、「ああ、あのひげを生やした人のことだよな?」とか、「眼鏡をかけた人の話でしょう?」と聞かれると、「いや、ひげは生やしてないよ。あれっ、生やしてたかなあ」とか、「眼鏡はかけてないよ。あれっ、かけてたかなあ」と、記憶が曖昧(あいまい)なこともあります。

このように人の記憶や意識というものは、かなりいい加減だという経験をしたことはあるはず。そこへ来て、人間は、「こうなって欲しい」とか、「こうなって欲しくない」という“思い”の中で生きていますから、いろいろな思い違いがあっても当たり前のことなんです。もし霊というものが本当は存在していないとしても、人が安易に霊の存在を信じてしまうメカニズムも、容易に理解できます。

後づけバイアスというのは、夢の中でも起こり得ます。僕(徳永分身)は子供の頃、ある年配の女性芸人の方が、テレビで次のような話をされているのを聞いて、「霊」は本当に存在するのかもしれないと思ってしまったことがあります。

「ある晩、仕事でホテルのベッドで寝ていた時のことです。昔々お付き合いさせていただいていた方が、突然、枕もとに立って私を見ていたので、びっくりして『ちゃん、どうしたの?』って聞いたら、何も言わずに消えてしまったんです。その時の彼の顔がどうにも淋しそうなお顔だったんですよ。そうしたら次の日、その人が亡くなったという連絡を受けてびっくりしました。それで、あの時、彼は亡くなる寸前に、私に会いに来てくれたんだなと思ったんです。不思議ですが、私にはよくこういうことがあるんですよ」

夢というのは、現実の事件の前後関係を入れ替えてしまうこともあります。昨日は青森と名古屋、今日は北海道と京都と忙しく日本中を飛び回り、分刻みで多忙な生活を強いられる売れっ子芸人がいたとします。彼女は、移動中では寝ていたりして現実なのか夢なのか頭の中はほとんど朦朧としたような状態で過ごしていました。そんな彼女が、まだ売れなかった頃つき合っていた彼氏のことを時々思い出して、今どうしているのかなあ、などとぼんやりと懐かしく思ったり、時々夢に見たりして暮らしていました。

ある日、元彼の死の連絡を受けた彼女は、疲弊(ひへい)ききって、マネージャーが予約していたホテルに着くと、ベッドに倒れ込むようにして眠りにつきました。そこで、昔の彼が枕もとに立っている夢を見ます。その時、彼女の頭の中では「彼の死」というものは、「こうなって欲しくない」という「思い」によって忘れ去られていたかもしれませんが、びっくりして「あっ、ちゃん、一体どうしたの?」と聞きます。そして、もし、枕もとに立った夢を見た後に、その同じ夢の中で彼が亡くなったという電話の報告を受けた夢を見たとします。そうすると、彼女は朦朧とした頭の中で、これらの強烈な印象の方を現実と勘違いしてしまい、この入れ替わってしまった前後関係を信じてしまう、ということになりかねません。

これは、実際に確かめるわけにはいかないもので、あくまでも今の僕(徳永分身)の推量です。このようなことも起こり得る、あるいは、このように考えればつじつまが合うという程度のことです。

でも、最近、自分自身でこれとよく似た体験をしました。ちょっとその話を聞いてください。

僕（徳永分身）には変わった特技があって、夢の中でもこれは夢だと気づいていて、自分に都合よく脚色したり、これは書いておこうなどと思って意識的に夢から目を覚ますことができます。最近、メルマガや分身主義の作品を書くために、寝ていても何かいい言葉が思い浮かぶと目を覚まし、枕もとに用意している電気をつけて書き留めるといような不健康な生活をしています。それは、もちろん起きて何かの行動をしている時でも同じで、いつもポケットにメモ用紙と鉛筆を忍ばせていて、時々、いい言葉が思い浮かべば書き留めます。

ということで、寝ても覚めても、ほとんど頭の中は回転しっぱなしで疲れきっています。そんな朦朧とした生活の中で「U型便座カバー事件」というものが起こりました。

U型便座カバーとは、あのパイル地でできた便座カバーのことで、あれは結構付けるのが難しいんです。初めて付けた時は、どうしてこの口径のモノが装着できるんだろうと、まるで知恵の輪でもやっているようでした。それが面白いので、それを取り替えるのは僕（徳永分身）の仕事にさせてもらっています。

取り付けて数日すると、腰かけた時に後ろ側になる部分（U字で言えばUの下の部分）がズレてきて、覆っていた便座が露出してしまうということを何度か経験しているうちに、自分が購入するU型便座カバーには上下があるということを発見しました。腰かけた時に後ろ側になる部分は、上の方が下よりもほんの少し幅が広く作られていたのです。それなのに幅が狭い方を上にして装着してしまったから、数日したら便座が露出してしまったのでした。その原因を発見した喜びは強烈でした。それで、朦朧とした頭の中で、時々その印象が思い出され、「あれは、久々の大発見だったなあ！」などと幸せな気分でも過ごしていました。（結構単純）

ところが、ある日、上下を間違えずに装着したはずのU型便座カバーが、やっぱり、ズレてしまって便座が露出してしまったのです。僕の心は、（そんなはずはない。それは夢に違いない）と激しく否定しました。でも、それはかなり強烈なりアリティがあり、（夢ではないかもしれない）などと弱気になることもありました。確認すれば「目瞭然だ」ということはわかりますし、トイレにはもちろん何度も行きますが、今はさっきも書いたように、いろいろな考え事をしながら生活をしているから、トイレに入っている時はそのことを忘れている時の方が多いので、いつも確認することもなく出ていました。

何かをしている折に、また（上下を間違えずに装着したはずのU型便座カバーがズレてしまったのは現実だったんだろうか？ それとも夢か？）というハムレットのようなクエスチョンが頭の中に浮かんで消えたりしながら、それでも確認することもなく数日が過ぎました。

そんなある日、偶然、トイレで「大」をしている最中に、（上下を間違えずに装着したはずのU型便座カバーがズレてしまったのは現実だったんだろうか？ それとも夢か？）という疑問が頭の中に浮かんだのです。それで、（そうだ、今、見てみれば夢だったのか、現実だったのかははっきりする）と思い、ドキドキしながら、ちょっと腰を浮かせてU型便座カバーを覗いて見ました。

その時感じた喜びは、ここ数ヶ月の中で、一番のヒットでした。宝くじで1万円くらいが当たったほどの喜びでした。なんと、U型便座カバーは、装着した状態をきちんと保っていたのです。つまり、あの忌まわしい事態は、夢であってくれたんです。人の脳は、多忙な中で朦朧とした状態で過ごしていると、現実だったのか夢だったのかわからなくなったり、その前後関係もいまいち加減になるということでした。もし、あの年配の女性の売れっ子芸人が、ドキドキしながら確認できる物証があったとすれば、実は、こんなに簡単な脳のトリックだったのかもしれない。

予備知識6 霊は存在するか？（2）

さて、今は、分身主義の森に踏み入る前に予備知識として頭に入れておいていただきたいことをお話しています。そのお話のために、萩原玄明という分身さんが書いた『精神病は病気ではない』という本を参考書にさせていただいているわけです。萩原分身さんが「精神病は病気ではない」と主張する意味は、彼は、精神病と言われているものは全て霊の憑依だと考えているからです。それでは、どこの国でも昔からある「憑依現象」について、学者さんたちはどのように捉えているのでしょうか？

吉田禎吾という分身さんは文化人類学的な立場から、『日本の憑きもの 社会人類学的考察』（中央公論社・1972年）という著書に、憑依を次の二種類に分けています。

- 1、神仏や祖霊・人間霊による憑依。
 - (a) 社会的に受容される有効な形態。
 - (b) 社会的に受容されない病的な形態。
- 2、動物霊による憑依（いわゆる憑きもの）

彼は、「社会的に受容される有効な形態」として、新興宗教の教祖、各種の祈禱師、東北のイタコが行なうような、お告げ、予言、占い、病気治療などを挙げています。しかし、「受容される有効な形態」と「受容されない病的な形態」という場合、社会の文化状況にもよるのではないのでしょうか。憑依に対して受容的な社会か、それとも非受容的な社会かによっても評価は違ってきます。

シャーマニズム社会（*3）は「憑依に対して受容的」社会で、現代社会は「非受容的」な社会であると考えられます。さしずめ、萩原分身さんを取り巻く社会は、「憑依に対して受容的」な社会というところでしょうか。

(*3) シャーマニズム社会とは、シャーマンが宗教的権威を独占し、しばしば世俗の権威を有しているか、有していない場合でも大きな影響力を発揮している社会。シャーマンとは、脱魂・憑依のような特異な心理状態で、神霊・祖霊などと直接に接触・交渉し、占い・予言・治病などを行う呪術師。

諏訪望という分身さんは、1978年に既に、精神医学的な立場から『最新精神医学』（南江堂）という著書の中で、憑依を次のように定義しています。

「もともと被暗示性の強い性格者が、何かの不安、恐怖感を抱いている時に、特定の迷信に結びついたり、または祈祷や呪いなどの暗示によって、特別の魔力をもっているもの（狐、蛇、神、悪魔など）がついたという妄想を抱き、狐に操られるとか、あるいは自己暗示によって自分が狐になって（人格変換）喋ったり、踊ったりするというような状態を示す。激しい精神運動興奮や幻覚なども現われる。このような状態を総括的に憑依状態と言う」

『憑依と精神病』（北海道大学図書刊行会）という本では、52人の自験例を取り上げてそれぞれを比較検討しています。そんな中で、憑依と言われている現象を次の5つに分類しています。

- 1、心因反応的に見られる憑依 精神発育遅滞者や被暗示性の強い人に見られる現象。狐狗狸さんなどの集団催眠や、占い師や祈祷師に感化されたりしても起こり得る。この憑依は、男性よりも女性がかかるに多いのが特徴。
- 2、靈感者に見られる憑依 いわゆるシャーマンや霊能者と言われる人たちが、本人もその周囲にいる人たちにも彼らの存在を認められていて、時には必要とされていて、本人は通常の社会生活を営んでおり、世間からは病者の対象として見られていない。
- 3、境界性人格障害者（*4）に見られる憑依 境界性人格障害者の特徴は、心の不安定さや急激に変化する感情、脆弱な神経、強い見捨てられ感に支配されている、などが挙げられる。
- 4、精神分裂病者に見られる憑依 言動が支離滅裂的で、幻覚や幻聴を伴う。
- 5、意識障害時に見られる擬憑依 慢性アルコール中毒・老年痴呆・代謝障害など、何らかの譫妄（せんもう）（外界からの刺激に対する反応が鈍り、錯覚・妄想・麻痺（まひ）などを起こす意識障害）時に見られる。

(*4)境界性人格障害
日本では250万人いるといわれる人格障害。
「統合失調症（精神分裂病）と神経症の境界」と以前の精神医学では定義されていたが、現在はその意味ではなく、一つの臨床単位となっている。
境界型人格障害、境界性パーソナリティ障害、ボーダーライン、ボーダーともいう。

萩原分身さんは、「精神病は病気ではない」と主張しましたが、彼は、精神病は霊が憑くという憑依現象だと信じているので「病気ではない」と主張したわけです。でも今見てきたように、科学では、憑依とは精神病（精神分裂病）と言われているものの中にも見られるもの という程度の見方しかしていないようです。憑依は病気ではなく、身近な生活の中で、遊びや、生理現象や、文化的必要性の中で、生まれている現象でもあったわけです。つまり、科学では、精神病（精神分裂病）は病気であると断言しているわけですが、ただ、憑依現象イコール精神病、とは捉えていないわけです。

しかし、僕（徳永分身）も、萩原分身さんとはまったく違う意味において「精神病は病気ではない」と主張します。それどころか、僕たちが憎悪を込めて呼ぶ「病気」というものすら存在しないと主張します。僕たちの心の中に強く根づいている、「病気」に対して忌まわしく思う感情は、明らかに人間中心に育って来てしまった僕たちの偏見ですが、それが消えない限り、世界は決して平和にはならないし、僕たちはこれからも本当の幸福を知ることはいえないと言えます。

ところで、前回は、「(1)科学で、萩原分身さんの不思議な体験（霊視）を説明する」の前半をお話しました。人間は、「こうなって欲しい」とか、「こうなって欲しくない」という“思い”の中で生きているから、いろいろな思い違いがあっても当たり前のごとで、そう考えると、（あるかどうかわからない）霊の存在を「ある」と信じてしまうメカニズムも、容易に理解できる、というようなことを話しました。

今回は、まず、萩原分身さんが見た夢（彼は霊視と呼んで夢と区別していますが）の中で現われた人が、家族の先祖の一人とピッタリと一致する場合について考えてみます。

「血だらけになった洋服を、泣きながら洗濯している男の人が見えます」という霊視があった場合、それを聞かされた家族の一人が、「そう言えば、私の祖母は病弱でよく寝込んでいました。血を吐いたこともあり、祖父が血で染まった彼女の服を洗っていたのを子ども心に悲しく眺めていた記憶があります。間違いありません。それは、たぶん祖父だと思えます」と符合させます。

僕たちの脳が何かを想起（再生）させられるメカニズムを考えてみます。五感から入ってきた情報はいったん海馬に記憶され、それが必要な記憶ならば、大脳新皮質のそれぞれ違う部位に記憶されますが、それが想起させられる場合には、それぞれが再び統合されて想起させられるわけです。例えば、今、りんごを思い浮かべてみてください。あなたの脳の中のりんごは、色や形や味や香りなど、それぞれ違う部位に分けられて記憶されているわけですが、思い浮かべる時は、それらがバラバラではありません。また同時に、自分の暮らした信州の風景も浮かんでくるかもしれません。それが脳のメカニズムです。

脳にはこのように、異なる部位のものを関連づけるという習性があります。どうしてかと言うと、脳の神経細胞は網の目のようにネットワークを形成しているし、同じ神経細胞がいくつもの記憶に使い回されているからです。連想や想像といったものも、このネットワークや使い回しが作り出すトリックです。連想や想像が脳の習性である以上、僕たちには、違うもの同士を符合させてしまうことなんて朝飯前なのです。

例えば、あなたは、ご自分の娘さんに何かの霊が取り憑いてしまったと信じ込んでいるとします。それで、娘さんを連れて萩原分身さんのところに行くことにしました。面会した翌朝、彼は次のような霊視をしました。

「たくさん黒いものを取り囲んでいるのが見えました。何か心当たりありませんか？」

そう言われたら、あなたの先祖の誰かと結びつきませんか？ 必死で娘の異変の原因を探ろうとするあなたの脳の中では、検索機能がフル回転し、ちょっとでも疑わしきものを10も20も引っ掛けてきます。そのような状態の時、想像力や連想力がたくましい詩人でなくても、ネズミや黒いものを、他の何かに関連づけることはいくらでもできます。

萩原分身さんの霊視（と信じているもの）が、99人の人が先祖の誰ともうまく符合できなかったとしても、1人でもうまく符合できた場合、思いに合う事実だけを取り入れ不都合な事実には関心を振り向けないという心理的なバイアス（偏り）によって、彼は「ほら、やっ

ぱり霊視だ」と結論づけるわけです。

そうなれば、先祖の誰かと符合させることができない99人の人たちも、それは自分の知らないもっと以前の先祖の誰かかもしれないということで、納得することもできるし、いくらでもつじつま合わせはできます。それが非合理性を旨とする、想像力とか連想力とかの特徴です。こういったことが重なり、ついには多くの人が「霊は存在する」と思い込んでしまうことになるわけです。しかし、いったん霊は存在すると思いついてしまった脳を修正することはかなり困難です。何故なら、科学は霊の非在を証明することはできないからです。存在(ある)ものを証明することは簡単ですが、非在(ない)ものを証明することはとても難しい、と言うより不可能に近いからです。(つづく)

ちょっと一言

「存在(ある)ものを証明することは簡単ですが、非在(ない)ものを証明することはとても難しい、と言うより不可能に近い」と書きましたが、その弱みを逆手に取ったおもしろいエピソードをいくつかご紹介しておきます。

オウム真理教の教祖が超能力で空中に浮いたという話を、「ただの“あぐらジャンプ”だ」と、ある科学者が指摘したら、信者は激怒して「それなら、空中浮遊が超能力ではできないことを科学的に証明せよ」と聞き直ったそうです。

ニューヨークの街を砂をまきながら歩いている男がいて、通りがかりの人が、「何をやってるんですか？」と訪ねたら、彼は「いやあ、ワニを追っ払っているんですよ」と答えます。「ニューヨークの街にワニなんかいるわけないでしょう」と言うと、自分が砂をまいているから出てこないだけだと主張した、という小噺こばなしもあります。

「湾岸戦争が早く終結することができたのは、我々信者が手をかざしたからだ」とか、「我々信者が祈ったからだ」などと主張する宗教もあります。

どれもこれも、その虚実を証明することは確かに不可能 なのですが、屁理屈に聞こえてしまいますね。何故なら、自分の脳に浮かんだ、自分の思いに合う連想や想像を語っているだけで、どれも客観的な裏づけがないものだからです。自分の「思い」を、ただ口にしてしまっているだけなんです。

連想や想像というのは、脳のすばらしい性質には違いありませんが、自分の主張する内容をそれに頼ってしまっは危険です。それに頼ってしまえば、極端に言えば、正しいことの基準は人間の数だけ存在してしまうし、どんなものでも白を黒に変えることなんて、人間にとっては朝飯前だからです。

予備知識7 霊は存在するか？(3)

霊の非在を証明することは不可能であるからと言って、それをもって、霊は存在するという理由としてはならない。

霊視とは、科学がまだ今のように十分でなかった頃、人間の知恵では理解不能な現象に対して、連想や想像で補って素手で格闘してきた過去の人々の涙ぐましき努力の結晶が作り上げた“おとぎ話”である。

前回、次のような言葉で締めくくらせていただきました。

> いったん霊は存在すると思いついてしまった脳を修正することはかなり困難です。何故なら、科学は霊の非在を証明することはできないからです。存在(ある)ものを証明することは簡単ですが、非在(ない)ものを証明することはとても難しい、
> と言うより不可能に近いからです。

そして、非在を証明することの不可能さを逆手にとった面白いエピソードをいくつかご紹介しましたね。いくら霊の非在を科学的に証明することは不可能であるからと言って、それをもって、霊は存在するという理由としてはいけないうことをわかっていただけましたか!? それこそ、まさに非科学的です。そんなことを大目に見ていたら、世の中、なんでもありのとんでもない事態になってしまいます。

実は、人間の脳が非合理的な考え方をできるようにできているので、戦争や争いが起こってしまうのだ、と言ってもいいくらいです。差別に基づく愛や憎しみも、腹の底から煮えたぎるように湧いてくる嫉妬や怒りも、全て非合理的な考え方を旨とする人間の脳が作り出している「感情」です。感情というものは、僕たちの行為を支配してしまうほど強烈です。

でも、全ての人類が、徹底的に冷静沈着に合理的な思考ができるようにならなければ、決して平和は訪れはしない、などと無理難題を言っているのではありません。偉そうなことを言う僕(徳永分身)ですら、感情に支配されて非合理的な思考をしてしまい、反省の毎日です。

人間の脳というものは、いかに非合理的な考え方をしてしまうものか、ということを知ることが第一段階なんです。それを知ることとは、自分たちの姿をちょっと上から見下ろす視点を持つということです。ちょうど、臨死体験をしたという人が、病院のベッドに寝ている自分とそれを囲んで泣いている家族の姿を上の方から眺めているような視点です。この比喻は誤解を招きかねないので、また最後にちゃんと書こうと思っています。

とにかく、この客観的な視点こそ科学の視点なのですが、その位置でジッと目を凝らしていると、まるで3Dステレオグラムのように、今まで見えなかったある光景が感動を持って迫ってきます(3Dステレオグラム：巻末に付録として添付)。それが科学が導いてくれた分身主義の視点でもあります。

安齋育郎という分身さんは、『霊はあるか』という著書の中で、科学者の立場から次のように語っています。科学者のおっしゃることなの

でちょっと難しいですが、実に面白いのでご紹介します。

「(霊能者は、自分には霊が見えると言うけれど) 霊が目に見える実体ならば、霊は物質でなければならない。「見える」ということは、光を反射または吸収または自ら発光することによって、周囲とは相対的に区別される光の陰影を作り出すことができることを意味している。

また、「霊が崇る」とすれば、霊は“崇るべき人間がどうかを判別する対象識別機能”、そのために必要とされる“崇るべき人間に関する情報記憶機能”、“崇るべき相手の脳神経系などに作用して行動に影響を及ぼす能動的機能”などを持たなければならない。そして、そのような機能を発揮するためには、霊自身がエネルギーを消費しなければならない。いったん生を受けたすべての人間(あるいは生物)が死後に霊となってこれらの活動を営んでいるとすれば、それに必要とされるエネルギーを定量的に評価し、その供給源が何なのかについても明らかにされなければならない」(P100)

でも、「霊の存在」を信じて「靈魂不滅説」を受け入れている人たちが、積極的にそのような検証を試みたわけではないことは明白です。彼は「そのような検証を試みれば、“霊”は実体を持った存在ではなく、人間の脳の動きの一環として生み出した観念にすぎないと考えるのが妥当である」と語っています。

脳科学者の茂木健一郎という分身さんが書かれた『心を生み出す脳のシステム』という本がありますが、これは僕(徳永分身)が読んだ本の中で、心を科学的に解明しようとする試みに最も成功している本だと思います。彼(茂木分身さん)は先日、NHKの「小柴昌俊博士の楽しむ最先端科学」の中で、「脳科学」を担当してくださった方でもあります。大概の本は、脳の神経細胞の動きなどをこと細かく説明して、「それらが心を生み出しているというのは神秘としか言いようがない」などとお茶を濁して終わるのが普通ですが、この本は、そのように逃げずに真正面から取り組み、たくさんの実験例を取り上げ、哲学的(合理的)考察を加えて、僕(徳永分身)の期待に十二分に応えてくださった力作です。

彼はこの著書の中で、「私たちの意識を生み出すものが、脳のニューロンの関係性以外にあり得ないことは、おそらく誰もが認めることだろう」と言い切っています。次のようにも言っています。「一つだけ確実なのは、私たちの意識が、脳のニューロンのネットワーク全体のシステム論的性質から生み出されているということだ」彼はこの信念に基づいて『心を生み出す脳のシステム』を書き上げたわけでは

現代の最先端脳科学に携わる科学者は、誰もがそのように考えています。霊が存在すると考える科学者は、合理的・科学的な思考ができない似非科学者と言えます。なぜなら、存在も非存在も証明することが不可能である霊を、「存在する」と言い切る姿は、とても合理的・科学的な態度とは言えないからです。それよりも、現代の科学では、様々な臨床結果から、意識が脳のメカニズムによって生み出されているものであるという事実が解明されているわけですから、それに基づいて、人間が「霊が存在している」と考えてしまう脳のメカニズムを解明した方がよほどつじつまが合いそうです。そうして、そのように「思い込んでしまう」人間の脳の習性というものを研究することが、実は、人間社会から争いや戦争をなくすために必要なんです。

安斎育郎分身さんは、「霊は実体を持った存在ではなく、人間の脳の動きの一環として生み出した観念にすぎないと考えるのが妥当である」と言いました。それにならって、茂木健一郎分身さんの言葉を、次のように言い換えてみます。霊とは、脳のニューロンのネットワーク全体のシステム論的性質から生み出されている観念にすぎない。そのように言い換えると、今までいろいろな人に小突かれて、あっちを向いたりこっちを向いたりして座りの悪かったダルマが、スッと起き上がって安定しているような安心感があります。これが現代科学の説得力です。そこで、今回の課題「(1) 科学で、萩原分身さんの不思議な体験(霊視)を説明する」の結論を次のように言い切ってみます。

霊視を霊視として成立させる根拠となるものは、「こうであって欲しい」とか「こうあって欲しくない」という「思い」が行なう後づけバイアスである。霊視とは、科学がまだ今のように十分でなかった頃、人間の知恵では理解不能な現象に対して、連想や想像で補って素手で格闘してきた過去の人々の涙ぐましき努力の結晶が作り上げた「おとぎ話」である。

でも、今の科学がその「おとぎ話」を乗り越えた「真実の話」を語り得ているかということ、まだ十分とは言えません。現代科学は、「真実の話」を語る一歩手前まで来ていますが、どうしてもそこから先に踏み出すことができません。僕たちの脳に長年に渡って埋め込まれている、ある種の「感覚」が邪魔しているんです。それこそ、僕たちが「自我」と呼んでいた、脳が作る錯覚のことです。脳が作ってしまった、僕たちの限界です。

ちょっと一言

僕たちは今まさに、初めて月面着陸に成功して最初の一步を踏み出す時のように、人類の歴史的な第一歩を踏み出す瞬間に立ち会おうとしています。でも分身主義の森に踏み入る前に、現代の科学では、「精神病」と言われている不思議な現象をどのように説明しているか見てください。

今回は、二番目の課題、「科学で、“精神病”と言われている不思議な現象を、霊の存在を持ち出さずに説明する」に取り組みます。

予備知識8 精神病とは何か？

我々の日常生活とは、脳のフィードバック機能を動かせながら、微調整を繰り返し、常に手探りで生きているようなものである。

- (1) 科学で、萩原分身さんの不思議な体験(霊視)を説明する。
- (2) 科学で、「精神病」と言われている不思議な現象を、霊の存在を持ち出さずに説明する。

これまで、この二つの課題のうちの(1)について考えてきました。今日は、このうちの、(2)について考えます。

今回の参考書は、計見一雄という分身さんの書かれた、『脳と人間（大人のための精神病理学）』という本です。彼は、長いこと、精神病の患者と言われる人と自ら向かい合ってきた本当のお医者様です。この本の主題は、精神分裂病を考察することで脳の機能に迫ろうとするもので、10年近くかけて書き上げられた力作です。

もし、あなたが極度の面倒くさがり屋か、あるいは極度の負けず嫌いか、それとも極度に知識欲が旺盛な方なら、彼が10年近く（本当は60歳にして書き上げたので60年）要して到達した境地を、この本を読んで、一夜にして体験してみようとするのもいいのではないのでしょうか？ 以下は、徳永分身流に彼の文章を解釈し、難しい専門用語や馴染みのない言葉は全て排除して、とても簡単に要約してみました。ただし、今回の課題「2、科学で、精神病と言われている不思議な現象を説明する」に正確に答えるためには、彼（計見分身さん）の本に出てくる脳の解剖学的構造の説明に始まって、その一つ一つの役割やメカニズムを答える必要があるため、それについては、彼の本を参照してください。以下の要約では、最も骨の折れるその大切な作業を割愛させていただきました。

僕たちが何かを認識したり、何かを表現（行為）したりすることは、脳が担っているということを現代人ならほとんどの人が知っています。精神病と言われている不思議な現象は、どうやらその認識や表現やに不具合が生じているもののようです。僕たちの脳が何かを認識するという事は、言い方を換えれば、そのモノと自分との関係や、距離（物理的な距離に限りません）などを知ることです。そのモノと自分との関係や距離を正確に測るためには、フィードバックという作業が必要になります。（フィードバック：行動や反応の結果を原因に反映させてより適切なものに調節していくこと）

コウモリが暗い中で障害物や獲物を探し出すのは、超音波を発して跳ね返って来る音でそのモノの形や大きさや、そのモノとの距離などを測っていることは知っていますよね。そのモノの形や大きさを知る意味は、自分にとっての関係、つまり障害物なのか、それとも餌となるものなのかを知ることでもあります。

僕たちはテーブルの上に置かれたコーヒーを飲むために手を伸ばし、コーヒーカップの取っ手を適切な握力で掴むという行動一つにしても、実は、コウモリと同じようなことを常に行なっているのです。視覚情報や脳内記憶にお伺（うかが）いを立てながら、そこから返ってくる反応を頼りに、つまりフィードバックを行ないながらやっているんです。そんな大げさな！ などと言う人は、赤ちゃんにとってマグカップでミルクを飲み過ぎることがいかに難しいか考えればわかります。たくさんの失敗を重ねるうちに、人間はそのモノと自分の関係や距離などを正確に測れるようになっていくわけです。

例えば脳内記憶は、「ここは喫茶店という場所だから、みんながコーヒーなどを飲んで静かに憩（い）こう場所で、女の人が運んでくるコーヒーは頭からぶっ掛けられたり、毒を入れられたりしていない」などということを知っているため、いきなりトランペットを取り出して演奏をするのはいけないと判断したり、コーヒーをトレイに乗せてこちらに向かってくる女性を目にしても、慌てて逃げ出す必要はないと判断します。そのようにして、自分と喫茶店、自分とトランペット、自分とウェイトレス、自分とコーヒー などとの関係や距離を正確に測りながら生きることで、誰にも違和感を与えない表現（行動）を行なっているわけです。

そうして、目の前のテーブルの上に運ばれてきたコーヒーに手を伸ばし、こぼさずに口に運ぶ行動にしても、常に視覚情報や身体情報や記憶にお伺いを立てながら（フィードバックを頼りにしながら）成功させているわけです。そのフィードバックがうまくいかなければ、正確に距離を測ることもできずに、手に大やけどを負ってしまいます。僕たちは、そんな難しいことを、日常でいとも簡単にやっちゃっているわけです。

もしあなたが、ある日突然、言葉の通じない異国に放りこまれたと想像してみてください。あなたは、自分がどこにいてどのような状態で、どのような行為をすればいいのかわからず、と言って誰かに聞いてもチンパンカンパンで途方にくれてしまうと思います。言葉というものは、コウモリにおける超音波のように、自分とモノとの距離や関係をはっきりさせるために必要なものだからです。

もし、目の前にグロテスクな形をしたものを差し出されても、「これは日本でいうパンです。おいしいですよ」と説明されれば、そのグロテスクな形のものと自分との関係ははっきりし、次に空腹を満たすための行為を行なえます。

今、あまり考えずに「空腹」と書いてしまいましたが、それだって「空腹」とか「お腹がすいた」という言葉を知らなければ、何だかわからない気持ち悪い感触となって、突如、自分の身体を襲ってくるものでしかありません。言葉を持たない赤ちゃんにとっては、空腹も排泄も痛みも区別がつかず、どれも気持ち悪い感触で、それに対して「泣く」という表現しかできません。

さて、精神分裂病と診断される人たちは、ある日、このフィードバックがどうにもうまく作用しなくなってしまう人たちのようです。心の中に、気がかりや不安や恐怖や強い焦りがあり、それらの感覚は、今までの経験を持ってしても言葉にできなかつたり、言葉にしても誰にも理解してもらえなかつたりして、何とか自分だけでそれを解消させようとするのですが、そうすればするほど空回りしてしまうような「なんか今までと違うなあ」という感覚が初めに起こります。そこで試しに、トランペットを取り出して吹いてみると、「ここで吹くな！」と怒鳴られるし、トレイにコーヒーを乗せてこちらに突進してくる女の人には、強い恐怖を感じたりしてしまいます。

テレビで殴り合いの喧嘩をしている場面を見て、その時に自分の身体を襲う気持ち悪い感触が「空腹」であると理解しようとして、冷蔵庫から手当たり次第に食べものを取り出して口に入れたら、お腹が痛くなりました。今度は、その失敗した経験から、同じような感触が自分の身体を襲った時、笑い出してみることにしましたが、周囲の人は、そんな自分の表現を何か不思議なものでも見るような目で見つめ返します。

やることなすこと何だかチグハグな感じで、うまくいなくなってしまう。今まで普通にできていたことが、空回りして、とてもエネルギーを消費し疲弊（ひげん）してしまいます。現実（現在）を理解する手がかりをなくし、頼れる過去（記憶）だけにしがみつくなくなります。ついには、自分が夢の中にいるような、現実が壊れてしまったような感覚に陥り、言葉では表現できない世界に閉じこもって生きることになります。

そうすると、この変化させられた脳の機能が形態を変化（前頭葉や側頭葉の容積減少など）させ、変化させられた形態は機能をますます変化させ、ますます現実とかみ合わない回路に作り替えられていきます。それは、人間の情動を作り出す脳内化学物質の放出量の変化をも

たらずことも当然考えられます。

このように、現実とのフィードバックが正確にできない状態に陥った人が、精神分裂病と言われる人ですが、彼らが支離滅裂なことを口走ったり、幻聴や幻視に悩まされるのもわかるような気がしませんか。

長いこと、精神病の患者と言われる人と自ら向き合ってきた本当のお医者様である計見一雄分身さんは、そんな時の一番の治療法は「眠る」ことだと言います。混乱してしまった脳を、元の脳に取り戻すためには、“質の良い眠り”が必要だということです。現実と関わり合うことにとでもエネルギーを使ってしまう彼らは、現実と接触することを避けるようになりますが、計見一雄分身さんとの関わり（＝治療）の最中に、もし彼らがアクビでもしようものなら、彼（計見一雄分身さん）はチャンスと見ます。彼らが、一瞬でも現実と接触をしてくれて、それでエネルギーを消費して疲れてアクビをした、と解釈するからです。たとえ一瞬でも、現在が共有されない限りは、治療は一步も進まないからです。それが、計見一雄分身さんが自らの体験を通して掴み取ったものです。

計見一雄分身さんの書かれた『脳と人間』の最後の方には、萩原分身さんの信じている憑依のことも書かれています。もし精神科医に、「狐が憑いた」とか「自縛霊がついた」などと言おうものなら、「ア、解離性障害ネ」と軽く片付けられてしまうそうです。

ちなみに、解離性障害とは、何らかの心因を契機に精神・身体的機能が意識から解離して随意的なコントロールが失われた状態であり、旧来、ヒステリーと呼ばれていたものに相当します。解離性に生じる症状には、次のようなものがあります。

- 1、解離性健忘 最近の外傷的出来事あるいは心理的出来事に関する部分的もしくは完全な健忘が起こる。多くは部分的、選択的な健忘だが、まれに長期にわたる全生活史健忘の形をとることがある。
- 2、解離性遁走 苦痛を伴う不快な情動体験があった時に、それから逃れるために、患者が明らかに意図的に、家庭や職場から離れる旅に出て行方不明になり、後で発見された時その期間のことを覚えていない。その期間中の言動は概ね異常性を認めたいものである。
- 3、解離性昏迷 ストレスの多い出来事、対人関係上の問題や社会的な問題などが心因となって起こった昏迷状態をいう。昏迷状態は運動の著しい減少、または欠如をいれ、患者は長い時間ほとんど動かないで横たわったままでいる。発語もなく食事もとらない。
- 4、運動及び感覚性解離性障害 運動性解離性障害というのは四肢の一部あるいは全部ないし身体の一部を動かす能力の喪失した状態をさす。四肢の不全麻痺、完全麻痺、協調運動失調のため奇妙な歩行であったり、失失歩、心因性失声、痙攣などの症状を言う。感覚性解離性障害は身体の知覚障害をいれ、多くは知覚喪失を訴えることが多い。咽頭粘膜の知覚低下により咽頭反射が消失することもある。この際知覚喪失と共に知覚異常を訴えることもある。視覚の完全な喪失はまれだが、鋭敏さの消失や視野全体のぼやけを訴えたり、独特の視野狭窄（筒状視野、管状野）が見られたりする。
- 5、トランス及び憑依障害 自分が自分であるという認識と感覚を喪失している状態を言う。もっと具体的にいうと霊魂、神あるいはその他の力に取り付かれているように振舞う。
- 6、その他の解離性障害 ガンザー症候群（ヒステリー性もうろう状態の一つで、仮性痴呆、偽痴呆とも呼ばれ、的外れな応答などで痴呆のまねをしているように見える状態）や多重人格障害などがここに入る。

「予備知識2」でご紹介した、パジャマ姿のまま叔母と父親に抱えられて萩原分身さんのところにやってきた17歳になる娘さん（Y子分身さん）は、概ね、5の「トランス及び憑依障害」に該当するのかもしれない。

最後の多重人格障害というのは、現在は解離性同一性障害と呼ばれています。この症状を見せる人は、幼児期に、長期に渡って性的暴力や虐待を受けている可能性が高いと考えられています。

元子どもは、成人に比べて催眠感受性（解離能力）が高いのですが、幼児期の外傷体験はこの解離能力をさらに高めます。慢性的に心的外傷にさらされている子供は、「これは自分に起こっている出来事ではない」「何も起こらなかった」「痛くない」と自己催眠をかけ、身体的に避けられない苦痛から精神的避難をすることによって事態を乗り切ろうとします。それによって、数十、あるいは百以上の断片化した人格状態を持つに至ります。子どもは、どんなに苦痛な仕打ちを受けても、家族や周囲の成人への愛着を断ち切っては生きられないという構造が、解離を促進すると考えられます。

このように見てくると、精神分裂病も解離性障害も共通するものが見えてきます。それは、危険と苦しみとストレスに晒されたこの厳しすぎる日常の中で、その人の脳がその人の脳なりに、自分を取り巻く現実を解釈し説明をしようとしている状態です。あるいは、厳しすぎる日常を生き延びるために、脳が選択している一種の戦術です。つまり、それこそが、その状況に置かれたその人の脳の適応の仕方だったんです。

ちょっと一言

これまで、精神病と呼ばれているものの解釈をめぐって、二つの立場をご紹介してきました。萩原玄明分身さんの信じている霊の世界。彼は、精神病というのは先祖霊の憑依であると信じきっています。それに反して、精神病は明らかに脳の異常であり病気であるとする現代科学を基礎とした精神医学界の立場。あなたは、どちらの考え方を採用したいと思いますか？

僕（徳永分身）は、もちろん脳を科学的に理解したいと考えます。でも、科学とは何でしょうか？ 本当の科学を突き詰めると、現代の医学の立場は少し違うなあ、と考えます。そのところをしっかりと理解してからでなければ、せっかく分身主義の森に入っても迷子になってしまいます。それで、本当の科学とは何かということをもう一度はっきりさせておきたいので、もう少しそのことを聞いていただきたいと思います。

予備知識9 真の科学とは？

科学的かどうかという意味は、証明できるかどうかを問うのではなく、証明させようという「方法論」が妥当であるかどうか、ということである。「方法論」こそ科学であり、それは長い年月をかけて人類のつかみ取った、この宇宙の永久不変の真理である。

今回は、科学者を自任する方たちにも聞いていただきたい話です。真の科学とは何かということ、初心に戻って一緒に考えていただきたいんです。

近代科学は、宗教に支配された長い中世が、ルネッサンスという反中世的文化革新運動によって崩壊させられていく潮流の中で始まったと言えます。一般的には、そのような歴史のうねりの中に生まれたデカルト分身さんが、幾何学を基礎として打ち立てた方法論によって近代科学の理論的枠組みは確立されたと考えられています。

ただし、デカルト分身さんがそのような方法論を打ち立てることができたのは、彼が、父親の遺産の利子だけで生活ができたという環境だったということも大きく影響しています。より正確に言うなら、デカルト分身さんが偉かったというより、彼を取り巻く環境や歴史的な流れが、デカルト分身さん(たち)を媒体として近代科学の基礎を築いたということです。つまり近代科学への重い扉をこじ開けた張本人は、その頃の人々を取り巻く環境だったんです。その環境にはもちろん、否定される側の教会の権威も含まれています。否定されるものの存在がなければ、近代科学は生まれなかったという意味において、全てのものが荷担して歴史は作られていくと言えます。

今、ちょっと分身主義的な話をしたんですがお気づきですか？ いい機会なので、もう少し聞いていただこうと思います。

ヒトラー分身さんは、ユダヤ人大虐殺などを行なったせいで、20世紀最大の犯罪者などと言われたりしますが、それは間違いで、彼は、彼を取り巻く環境や歴史的な流れの媒体でしかなかったんです。彼を取り巻く環境には、他の多くの黨員や、国民や、それに世界中の人たち、世界中の社会情勢など、全てのものが含まれます。当然、虐殺されたユダヤ人も含まれます。と言うことは、ユダヤ人は、ユダヤ人大虐殺の被害者であると共に加害者でもあったと言えるんです。それは、ヒトラー分身さんにしても同じです。彼はユダヤ人大虐殺の加害者であると共に、その渦中に置かれた被害者でもあったと言えます。

こんなことを言うと、正義感の強い方や平和愛好家の方たちから罵々たる非難を浴びそうですが、本当はその方たちの感情や思考も、その方たちを取り巻く現在の環境(一言で言えば個人主義的な環境と言えます)に、浮かび上がらせられているだけのものですし、実は、その方たちの意識が変わらない限り、つまり、その方たちが「ユダヤ人も加害者だった。そしてヒトラーも被害者だった」ということに気づかない限り、世界は決して平和にはならないんです。そのことに気づくためには、分身主義の森の中で自分の本当の姿に出会わなければなりません。

そして、その方たちがヒトラー分身さんたちに向ける怒りの矛先を、自分に向けられるようにならなければ、いつまでたっても人類は同じ過ちを繰り返します。これは本当のことです。あなたが今はそれを理解されなくても、これは厳然たる事実なんです。取り敢えず、この話は分身主義の森の中でたっぷりしますので、先に進めます。

1000年にも渡って続いた中世というのは、「教会が絶対的権威を握っていた暗黒の時代」と形容されることがよくあります。人間を暗愚なままにしておいた時代とか、人間を未成年状態に留めておいた時代と説明している書物もあります。しかし、好意的に解釈すれば、神様の救済を無邪気に確信していた時代であったと言えるかもしれません。それに対して、近代とは、中世の間から精霊を追放し、世界を理性の光によって明晰に照らし出した時代であると言えます。

デカルト分身さんは、「物体とは、タテ、ヨコ、高さという空間的な拡がりを持って、その空間を排他的に占有しているただのモノに過ぎない」と定義しました。ニュートン分身さんを初めとする近代の物理学は、このように、物体を単純なモノとして考えるところから出発しています。物体がそういう属性を持ったものなら、そういう属性を持たない全くの別個のものはカテゴリーを別にしなければならない。それが、精神でした。

こうして、精神と物体が画然と分けられることになり、それでデカルト分身さんは、この世界を物体と精神とに分ける二元論で説明しました。彼は幾何学を模範とした演繹的方法(わかっている一般的法則や前提事項から出発して、特殊ないちいちの事実について推論する仕方)によってこの世界を認識しようとしたのです。

ちなみに、数学は純粋な演繹法で、近代科学は、法則が演繹法、実験や観測が帰納法に当たります。帰納法とは、演繹法の反対の方法論で、一つ一つの具体的な事柄から一般的な法則や原理を引き出すことです。

・演繹法 わかっている一般的法則や前提事項から出発して、特殊ないちいちの事実について推論する仕方。数学、近代科学の法則など。

・帰納法 一つ一つの具体的な事柄から一般的な法則や原理を引き出す方法。近代科学の観測や実験など。

このように、科学とは、因習や迷信や偏見や感情にとらわれず、演繹法(合理的手法)や帰納法(経験的手法)を用いて論理的に考えていく「方法論」のことです。真偽を確認しながら進めていく方法論のことなので、科学的かどうかという意味は、証明できるかどうかを問うのではなく、証明させようという「方法論」が妥当であるかどうか、ということです。この点を間違えないでください。

例えば「霊」は存在するかどうか？ これは証明できないことかもしれません。でも、それを証明しようと論理的に考えたり実験や観測をするのは科学です。霊を証明しようとせず「霊は実在する」で終わってしまうのが宗教です。

また、電気炊飯器や携帯電話やパソコンやロケットは科学の方法論によって生まれたものですが、電気炊飯器や携帯電話やパソコンやロケット自体が科学なのではありません。だから、次のように言うことができます。

「霊」は、脳の神経細胞の動きが生み出す幻想であり実体を伴った物質ではない、と現代科学では考えられているが、実際に「ほ～ら、私が霊だよ～」と出現してしまって、しかもそれが「確かに人間とは違う属性を持ったモノである」と証明されてしまった時には、新たな科学の体系を組み立て直せばいいだけの話である。と。また、今までの物理の理論で作られたロケットがうまく作動しない宇宙空間が発見

されれば、新たにそれに見合う宇宙理論の組み換えをすればいいだけの話である。と。科学は今までもそのように歩んできました。

科学とは、幸福を求める飽くなき欲求をモチベーションとして、自然界を師と仰ぎ、常に自然界に間違いを修正してもらいながら、焦らずに忍耐強く歩む「方法論」のことです。逆に言えば、そのように間違いを修正できる柔軟性と謙虚さを持つものが科学なので、科学（＝方法論）そのものにはどこにも間違いがなく、たとえ世界や人の心が将来どのように変化しようとも十分その変化に対応できるものです。科学こそ、僕たちが心から信頼している唯一の永久不変の真理と言えます。

ところで、先日、NHK人間講座の『だます心、だまされる心』が終わりました。講師は、今までもたびたびご紹介させていただいている、我らが分身さん、安齋育郎さんです。見てくださった方いらっしゃいますか？

「オレオレ詐欺や悪徳商法、超常現象、世論を誘導する情報操作など、身近にせまる“だまし”のテクニックを暴き、思い込みや欲得などを入口に深みにはまってゆく心理を解明し、科学的・合理的思考法のできる“だまされない”人間を養成したい」という願いを込めて開設された講座ということでした。科学的方法論だけに信頼を置いて、じっくりと真理を究明していこうとする安齋分身さんの態度はとても共感でき、とても好感を持てます。

それに彼は、大学で「平和学」というのを教えている教授でもあります。同じような願いを持っているという意味からも、僕（徳永分身）は、彼にとっても興味がありますし、彼（安齋分身さん）をとっても誇りに思っています。

今回の彼の講義からは、たくさんのことを学ばせていただきました。でも彼から学ばせていただいたという意味は、彼の言葉が絶対だと感じたという意味ではありません。「これはちょっと違うと思うな」と感じる部分もありました。ただ、「これはちょっと違うと思うな」と感じさせてくれる彼の言葉と出合えたからこそ、そこから何かを学ばせていただいたわけです。

「これはちょっと違うと思うな」と感じた部分は、NHK人間講座『だます心、だまされる心』の「第6回・自然界の“だまし”名人」の中で、科学者である彼が口にしてはいけない言葉をたくさん口にしてしまっている部分です。そのことをこれから聞いていただこう思うのです。

真の科学とは何か？ ということを考えるためには、どうしても知っておいていただきたいことなんです。それが、「科学とは何か」ということをちゃんと考えることにもつながります。

ちょっと一言

「コギト・エルゴ・スム」

中世の悪魔払いの呪文のような不気味な言葉ですが、ちょっと教養がある方ならこれを聞いて何のことかすぐにわかるはずです。デカルト分身さんの「われ思う、ゆえにわれ在(あり)」のラテン語訳（原語はフランス語）です。

コギト＝（私は）思う

エルゴ＝故に

スム＝（私は）在り

だけど、それを知っているからって自慢気なあなた、ちょっと待ってください。この言葉は論理的に矛盾があるんです。これを簡単に説明すると次のようになります。「私は食べる、ゆえに私は存在する」だと、夢で食べていて実際には食べていないかもしれないと疑うことはできるけど、「私は食べていると考えている私」までも疑うことはできない、という意味です。

彼（デカルト分身さん）は、疑い得るものをどこまでも疑っていった先に、決して疑い得ない「考えている私」というものがあることを発見し、それを全ての出発点にしました。

ところで、彼は、世界には精神と物体しかなく、それはまったく別個のものだと言いましたよね。彼は、それらは互いに独立した「実体」であるとしました。彼は、「実体」とは、説明するのに他の何物も要しないものである、と定義していました。つまり、物体を説明する時に、精神を持ち出す必要はないし、関連性がないので持ち出しはしなないということです。

いいですか？ 「われ思う」時に存在するのは、「考えている自分という物体」ではなく「考えていること（内容）」です。つまり、存在するのはそれを行なっている「精神」のほうです。彼の立場からすると、「精神」が確実に存在しているという証明を持って、「私という物体」が存在しているという証明にはならないはず。精神と物体は別個のものだとしているから。彼は、精神の存在を通して、物体としての「わたし」の存在までも直観推論してしまったのです。過去の哲学には、現代から考えればこのような論理的な矛盾がたくさんあります。

デカルト分身さんは、精神と物体とは別個のものとしていながら、精神が悲しむと身体という物体に影響を与えたりする現象を説明するために、解剖の経験から、脳の松果腺において精神と身体が関わり合っているに違いない、などという科学的根拠のない仮説まで立ててしまいました。それに、「動物精気」なるものを創作して、身体の中をきわめて微妙な気流が流れているに違いないなどと考えていました。仕方ないことです。そのころは、現代ほど科学が十分ではなかったからです。今の科学では、精神が悲しむと身体が病気になる理由なども、中枢神経や自律神経のメカニズムなどを通してちゃんと説明ができます。

さて、二元論を主張するデカルト分身さんの何が間違っていたのでしょうか？ 元々分けられないものを、画然と分けてしまった点が間違いの元でした。

現代科学を整理したところから生まれた分身主義では、この宇宙のあらゆるものは「実体」と「幻想」に分けられると考えます。それはデカルト分身さんの言う「物体」と「精神」とに、それぞれ重なる部分もあるように思われるかもしれませんが、出発点においてそれとは全く違います。分身主義は二元論ではありません。どちらかという一元論です。

このことをちょっと頭の隅にでも入れておいてください。

予備知識 10 科学者が使ってはいけない言葉

科学は事実を脚色せずに見つめなければならないので、進化という言葉は科学用語としては相応しくない。この自然界にあるのは“変化”のみである。

科学が真に科学的であろうとするならば、この自然界の客観的事実のみに目を向けるべきである。真に客観的事実のみに目を向けようとするならば、科学用語から進化、発達、成長などという言葉は消滅し、唯一“変化”という言葉だけに淘汰されるであろう。

前回、最後に次のように言いました。

> NHK人間講座『だます心、だまされる心』の「第6回・自然界の“だまし”名人」の中で、科学者である彼が口にしては
> いけない言葉をたくさん口にしてしまっています。

彼（安齋分身さん）は、その講義の冒頭で、「だまし」と言うどうしても悪いイメージが付きまとうけれど、生物は進化の過程で『生きるためのだましのテクニック』を豊かに獲得してきました」と言っています。擬態と呼ばれるテクニックのことです。擬態とは、彼の言葉を借りれば、「外敵に見つからないように景色になりすまして身を守ること」であります。

「木の葉」に擬態するコノハチョウ。
「幹の模様」に擬態するキノカワガ。
「木の枝」に擬態するシャクトリムシやナナフシ。
「海底の砂」に擬態するハゼやヒラメ。
「枯葉」そっくりに擬態するカレハカマキリ。

あなたも、生物の擬態の不思議さを、かつて、テレビや本などで驚きと感動を持って見つめたことがあるはず。けれど、彼（安齋分身さん）の説明をサラッと聞き流さずに、ちょっとこだわってみましょう。彼の言葉をそのまま素直に受け取ると、ある種の動物たちは、敵の捕食から逃れるために、まるで忍者のように、自分の形態やふるまいを周囲の色や形や動きに似せて身を守る術を、長い年月をかけて獲得してきたということになります。

人間は毎日鏡を眺めて化粧をしたり、服装や声色を変えたりして、相手に受け取られる印象を操作しようとします。これこそ、人間だけにある「だまし」のテクニックですが、まるで彼ら（動・植物）も、長い年月をかけてそのようなテクニックを獲得してしまったかのようない方です。鏡も持たず、自分の姿を客観的に眺めることもできない彼らが、どうしてそのような術を体得できるのでしょうか!?

もっとも、彼（安齋分身さん）だけでなく、動物を扱ったテレビ番組や本などでも、嫌になる程そういう説明であふれています。それも、嘆かわしいことに科学者と言われる著名な学者先生連中が、そのような発想をしてしまうのです。現在、生物学界を覆っている、幼稚な（無邪気な）風潮なのかもしれません。事実を脚色せずに見つめたり、自分の頭で考えたりすることに十分な経験を積んでいるはずの科学者たちでさえ、ちょっと油断をしてしまうと、この結果です。

擬態をしている動物たちは「外敵に見つからないように景色になりすまして身を守っている」のでもなければ、そのような形態や行動様式を努力をして「獲得した」のでもなく、たまたま彼らの形態と行動様式が、「外敵に見つかりにくい」だけであり、そのことによって敵の捕食から免れて、その種の遺伝子を持ったものが繁栄しているだけの話なんです。極端に言えば、人間以外の動物は、他の動物に捕食されることを嫌がっているわけでも恐怖しているわけでもありません。動物が動物を捕食することは、少しも残酷なことでも惨たらしいことでもありません。人間が感じる「嫌悪」や「恐怖」や「残酷さ」とは、明らかに違う性質のもので、彼らはただ、刺激に対して反応をしているだけです。

人間以外の動物たちの形態や行動が、我々人間の目から見れば、捕食者から逃れる方向に働いているように見えるのは、そのような形態を持ち、そのような反応をする遺伝子情報を持ったものが、極力、捕食されずにいたので、結果として繁栄しているだけです。

人間の感情も何らかの刺激に対する反応に過ぎないのですが、人間が「言葉」を用いることになった時点で、人間の脳内に自分の脳の中を見る「第二の脳」のようなものが生まれ、彼らとは全く性質の異なった反応の仕方が形成され、それによって感情と呼ばれるものを経験することになったわけです。この、人間だけが持つ感情や、人間だけが持つ敵や味方という概念を、言葉を持たない彼らに投影してしまうのは明らかに間違いです。言葉を持つ動物もいるじゃないか、と反論される方もいらっしゃるかもしれませんが、それは人間の用いる言葉と同じような意味で用いられる言葉ではありません。

まず初めに、真の科学を知るために、三つのことを覚えておいてください。

- 1、進化という言葉は不適切である。
- 2、生物の多様性に満ちた形態や、特有のふるまいの原因は、遺伝子の突然変異と環境とが作り出す偶然性である。
- 3、人間以外の生物に、人間のふるまいをなぞった擬人法を用いてはいけない。

まず、[1、進化という言葉は不適切である] についてです。

なぜ「進化」という言葉が不適切かということ、進化という言葉の中には「より良く変化した」という意味合いが感じられます。例えば、人間は胎児の時に「進化」の過程をなぞると言われています。僕たちが魚であった時代や、両生類や猿であった時代の身体の作りが遺伝子に記憶されていて、エラとか指の間の水かきとか尻尾なんか胎児の時に現われては消えていきます。これを「個体発生（人の命が生まれてくる過程）は系統発生（人類が発生してくる進化の変化過程）をくり返す」と表現します。あるいは、再演性変態とも言います。

その事実からも、人間は次のように考えます。魚よりも両生類、両生類よりも爬虫類、爬虫類よりも哺乳類、そしてその哺乳類の中でも人間こそ最も進化した生き物である。この「進化」という言葉の中に、「より上等なもの」という意味合いが含まれていることは否定できま

せん。もちろん、科学者の方々は、科学的概念である「進化」は、社会的概念である「進歩」とは全く別物である、と主張すると思います。「生物進化は環境に応じたランダムな変化であって、価値が高まっていくとか、目標に向かうというような意味は一切含まない」と。そうだとしたら、なおさらそのような誤解を生みやすい言葉は使用するべきではないんです。一々、そのような弁解をして回らなくても、「生物変化」で十分言い尽くせていますし、むしろ適切に表現しています。

だから、「サルの進化をたどる」という本のタイトルや番組などがあるとすれば、それが科学雑誌か科学番組なら「サルの生物変化をたどる」と訂正すべきだし、「ダーウィンの進化論」は「ダーウィンの生物変化論」と言うべきなんです。

えっ、それでは何だか格好悪いし、明るい希望的な感じが損なわれる、ですって？ ほらね！ やっぱ、そのような特殊な感情を混入しようとしているじゃないですか。下等動物、高等動物という言葉も同じです。少し考えれば、下等、高等は、人間の価値観に根差した偏見を持った非科学的な言葉だということがわかります。この宇宙には、上とか下とか、良いとか悪いとかいう判断基準はありません。その基準を作っているのは、人間の側に片寄った感情的な観念です。

また、年を取ると老眼になったり骨がもろくなったりしますが、その現象を身体の衰えと捉えるのも、実は非科学的な根強い偏見であって、自然界の客観的事実のみに着目すれば、それは単なる変化の過程に過ぎないんです。だから、人間中心主義である医療というものは、その多くの部分を科学的ではない部分が占めています。

科学が人間の感情に支配されてしまえば、客観的事実は見えなくなります。しかし、科学者と言えども人間です。感情から全く無縁では生きられません。客観的事実のみに目を向ける真の科学者たろうとするならば、その落とし穴にはまらないためにも、「進化」という麻薬のような言葉の使用を、あらかじめ避けておくべきなんです。

次に、[2、生物の多様性に満ちた形態や、特有のふるまいの原因は、遺伝子の突然変異と環境とが作り出す偶然性である] について書きます。

現代科学では、生物の進化（変化）の起こる原因を「遺伝子が時たま作り出す突然変異が、その時の環境に適応して種を変化させている」と考えています。遺伝子は何万分の1かどうかは知りませんが、時々突然変異を起こします。突然変異は、異常でも失敗作でもありません。この宇宙には異常という判断基準もありません。養老孟司分身さんも、「確率的に生じうる事象を異常ということは、本来できないはずである。地震も台風もべつに異常な現象ではない」とおっしゃっています。

僕たちは、安易に異常という言葉を使ってしましますが、自然界で起こる全ての現象は、全てが自然法則に則った正常な反応の結果です。そのようにして起こった突然変異が、その時の環境に適応しやすいものであったなら、当然、より多くの子孫を残すことになり、結果として、その種の遺伝子を持ったものが繁栄するわけです。それが生物の形態や特有のふるまいをなどを変化させている、というわけです。

ちなみに、血液病理学、生命倫理などを専門とされている難波紘二分身さんは、「医学や生物学における正常と異常の用語は、統計学における正規分布（ノーマル分布）の概念から来ていて、ある集団の中で、多数を占めるものが正常であり、少数を占めるものが異常であると定義されているだけだ」とおっしゃっています。つまり、「正常と異常という概念それ自体には、良いとか悪いという価値判断は含まれていなくて、その基準は、医学や生物学の中にあるのではなく、社会にあるのである」ということです。

だったら、そのような誤解を生みやすい言葉を使用してしまって、そのつど弁解して回るよりも、科学では、初めから「正常・異常」という言葉を使用せずに、「多数・少数」という言葉だけにしておかなければいけません。人間は感情で目が曇りやすいものなので、そのようにしておかないと、間違った判断をしてしまいやすいものだからです。

最後に、[3、人間以外の生物に、人間のふるまいをなぞった擬人法を用いてはいけません] についてです。

人間は、自分の肉体を自分の望むものに改造させることができる動物である、と一般的に考えられています。例えば、貧弱な身体をトレーニングと食生活の改善により筋骨隆々な身体に変身させたり、肥満した身体をダイエットして見栄えをすっきりさせたり。人間には何かを成し遂げようという「意志」があり、それを可能にすることができる、と考えられているからです。

それを他の生物にも当てはめると、童話などで用いる擬人法というテクニックと似たような、子供だましの非科学的な感情移入が起こります。それを分身主義では「意志（意思）的解釈」と命名して批判します。例えばキリンの首が長くなったのは、高い所の食物を食べられるように努力したから、とか、願いつけたからなどという解釈のことで。

キリンの首が長くなったのは、彼らがそれを望んだのでも努力したのでもなく、突然変異が、長い首の種を作り、以後、その種のキリンが環境に適応したため、その遺伝子を持ったものが繁栄しているだけの話です。彼らの首が長くなった変化を、より良く変化した（＝進化）と見て取るのは人間の身勝手な想像に過ぎません。

カメレオンが身体の色を変えて、周りの色にまぎれて獲物を捕獲したり、敵に見つかりにくくしているのは、彼らが意識的に（頭で考えて）やっているわけではありません。彼らの身体の表面には、メラノサイトという色素細胞（白、赤、黄、黒などの色の粒を持ったもの）があり、その色の粒の大きさの組み合わせがいろいろ変わると、色が変わります。色の粒の大きさを変化させる引き金となるものは、彼らの感じる意思の強さなどではなく、外からの光の波長や熱などの刺激です。光や熱の刺激（情報）が中枢神経系に伝えられ、それによって交感神経やホルモンが動き、細胞の粒の大きさを変化させられるのではないかと考えられています。そしてまさに、偶然、環境の変化に伴って体表にそのような化学変化を起こす種が、獲物の捕獲に有利だったし、敵からの捕獲を逃れることに成功し、長く生き延びて、その遺伝子を持ったものが今も繁栄しているというだけの話です。

それは決して、彼らが命を守る工夫として獲得したものではありません。自然の中に生きる彼らに、自らの命を守る気持ちなどありません。彼らは生きるも死ぬも自然に任せているだけです。人間だけが「命」を特別扱いし、それを彼らにも投影してしまうのです。

動物が敵から逃げる行動は、そのような行動を取る遺伝子を持った種がたまたま敵の捕獲から逃れて繁栄しているからに過ぎません。彼らの行動は自分の命を守ろうとしているものではなく、結果的にその行動が自分の命を守っているのである。これが科学的な視点ですが、人間中心の視点（＝命を特別視する視点）で見れば、彼らが自分の命を守ろうとしていると解釈してしまうのですね。

科学的な視点で観察をするような訓練を積んでいる生物学者の方たちでも、なかなかこの人間中心の視点から自由になれないようです。

それでは、この三つの立場をしっかりと踏まえて、先に進みましょう。

安齋分身さんの紹介して下さった擬態は、先程、冒頭に挙げた動物（昆虫も動物に含めます）だけでなく、まだまだあります。シマキンチャクフグとノコギリハギはそっくりですが、シマキンチャクフグには毒があり、ノコギリハギには毒がありません。彼はこれを、「ノコギリハギがシマキンチャクフグに擬態して、つまり、敵の嫌がる他の生物になりすまして身を守っている」と説明しています。でも、ノコギリハギが、そのような知恵を持っていて、特別な努力家であったとも思えません。たまたま、シマキンチャクフグとそっくりな形態を作る遺伝子を持っていたノコギリハギが、他の生物から捕食されずにすんだので、その種の遺伝子が引き継がれているだけの話です。

また、「目玉模様」をつけた体で、敵を威嚇するアケビコノハの幼虫やヤマネコなどの擬態も紹介して下さっています。例えば目を閉じてアクビをしているヤマネコですが、目玉模様があることで、鋭い眼つきで敵を見すえ大きく口を開けて敵を威嚇しているように見えます。彼（安齋分身さん）は「目を閉じている時でも、常に身を守れるような工夫をしている」と語っています。これも、科学的な考え方としては、「そのような模様をつける遺伝子を持ったものが、たまたま他の生物からの捕食を逃れて、以後も、繁栄している」というのが正しい言い方でしょう。別に彼らは、毎日毎日、鏡を覗いて、威嚇する顔を工夫して身につけたわけではありません。

他にもたくさん紹介して下さっていますが、最後に一つだけ植物の擬態の例を取り上げて終わりにします。

オーストラリアのハンマー・オーキッド（ランの一種）の話です。これは、「雌バチ」そっくりに擬態した唇弁を持ち、それに飛びつく雄バチによって受粉を成功させます。彼（安齋分身さん）は、このことを、種子植物が確実に受粉し安定して子孫を残せるように工夫をした結果である、と考えていますが、他の生物学者たちも、どうしてハンマー・オーキッドがこんなに手の込んだ「だましのテクニック」を身につけたのかと考え抜いたすえ、いくつかの仮説を考え出しています。

- 1、低密度仮説
- 2、花粉塊仮説
- 3、花粉塊喪失仮説
- 4、遠縁交配仮説
- 5、資源制約仮説

ここではそのうちの一つ、「低密度仮説」をご紹介します。この仮説は、「ランは、通常、受粉係りのハチのために報酬として蜜を用意しておくが、ランの分布がまばらで、蜜を用意するくらいではハチが確実に訪れてくれないような状況のもとで、こうした進化が促進されたのではないか」と考えるものです。しかし、この仮説には疑問点が残ります。それならハチなどの手を借りずにセルフサービスで受粉する方式（自家受粉方式）が発達してもよかつたはずだ、ということです。

他にもいくつか仮説が提出されていますが、そのどれも素晴らしい想像力を働かせて考え出しているものの、それぞれにいくつかの疑問点も残り、現在のところ、これといった特定はできていないようです。

当たり前のことです！ 自然界の現象に、何らかの意味づけや理由づけをしようとする、元々の発想自体が間違っていたんです。

どうやら、科学者と言えども、自然界の作り出す多彩な偶然性の中に、何らかの意味や理由を見つけ出さなければいけないようです。これでは、萩原玄明分身さんが、精神病という不思議な現象に対して何らかの意味や理由を見つけ出そうとして、ついには、精神病は先祖の浮遊霊の乗り移りだというこじつけをしたのと、動機の面からは大した変わりがないようです。

いいですか!? ハンマー・オーキッドがあんなに手の込んだ「だましのテクニック」を身につけた答えは、いたって簡単です!! その答えは「そんなものに意味も理由もありません」です。科学は、ハンマー・オーキッドがどうしてハチを引きつけるのか、という原因は限りなく突き止めることができます。でも、科学には、ハンマー・オーキッドがハチを引きつける意味や目的は永遠に探り当ててはできません。自然界には、意味も理由も目的もありません。自然界における生物の多彩な形態やふるまいは、単なる遺伝子の突然変異と環境との作り出す偶然性の結果に過ぎません。そこに意味や理由や目的はありません！ そこに意味や理由や目的をこじつけるのは、人間の側の都合です！

これが現代科学の到達した結論です。本当は、現代科学はこんなに素晴らしい結論に到達しているのに、似非科学者たちが未だにおとぎ話を作ろうと必死になっているんです。自然界は、意味も目的もなく、一定の決まりの範囲内で適合する隙さえあれば何でも試す、実にバラエティーに富んだ世界です。僕たちが知らないだけで、この地球という惑星の、その高々数十億年の間だけでも、膨大な試みを、自然界は繰り返しています。もしそこに何らかの意味や目的があったのなら、手当たり次第に試みを繰り返すようなことをするでしょうか？

インターネットの「学研キッズネット」には、現在、地球上の生物は500万種以上と書かれていました。その中身は、まずは、鳥類が9000種、魚類は2万3000種、哺乳類が、5000種、両生類が2000種、爬虫類が5000種で、今あげた動物は全て脊椎動物で、これらを全部合わせると4万4000種です。

この他にも、節足動物80万種、軟体動物11万種、原生動物3万種、腔腸動物1万種。それに、ウイルス、細菌、菌類まで含めた、地球上のすべての生物は、植物の30万種を含むと合計500万種以上になると考えられています。（「学研キッズネット」より）

だけど、これらの数字はまったく控えめだと思います。まだ見つからない種も含めればもっともっと膨大な数になるはずですが、深海の生物などはほとんど知られていませんし、また昆虫は、この解説によると節足動物の80万種の中に含まれるはずですが、毎年何千もの種類が世界中から新種として発表されていて、未発表・未発見の種を加えるとその実数は、2000万種とも1億種とも考えている学者もいるようです。

また、イギリスの生物学者ノーマン・マイヤース分身さんは、『沈みゆく箱舟』という著書の中で、この地球上では、現在、たった13分に1種が絶滅していると推定しています（これは恐竜時代の約千年に一種の絶滅という速度からみると、驚異的なスピードだと彼は言って

いるそうです。つまり、僕たち人類が気づかないうちに、たくさんの種類の動植物がこの地球上に現れたり消えたりしているのです。

自然界はこれ程までに、生まれたり絶滅したりを繰り返す、パラエティックに富んだ世界であったという客観的事実をあなたはどのように受け止めますか？ 僕たちは、宇宙的な時間で見たら、ほんの一瞬の、ほんの一部の生物の姿を見て理解しているに過ぎなかったんです。

例えば、僕たちはオタマジャクシは必ずカエルになると信じています。だけどそれは、宇宙のほんの片隅のこの地球という惑星の、宇宙年齢から見ればほんの一瞬の間に起こっている、遺伝子と環境との作り出す偶然性の結果に過ぎません。もしオタマジャクシを地球以外の惑星に連れて行ったり、あるいは100億年前に連れて行ったり、100億年後に連れて行けば、それは全く違う変化を遂げる生き物となるでしょう。

えっ、地球以外の惑星で生存できる確率は極めて低く、恐らく死滅するだろうって？ ですから、「全く違う変化を遂げる」と言ったのです。死滅も変化の一つですよ。その形が、そのオタマジャクシが環境に適応して変化をしている一つの現象です。オタマジャクシは必ずカエルになるなんて信じていることは、僕たちの生きるこの地球という惑星の、その高々数千年の間の体験に基づいて、僕たちが推測しているだけだったということなんです。

首が長かったり、ひれがあったり、胸が長かったり、目がたくさんあったり、指が五本だったり三本だったり、羽が生えていたり、体表の様子がまだらだったり、赤かったり、青かったり、毛で覆われていたり、つるつるだったり、水の中で窒息しなかったり、大気中で窒息しなかったり、高温の場所でも生きていたり、綺麗な花を咲かせたり、奇妙な花をつけたり、手当たり次第なんでも試してみるのが自然界なんです。

刺激に対する反応の仕方でも、それこそ何万種類と試した中で、たまたま今の環境に適切な反応をするものだけが生き残って、その遺伝子を持った種が繁栄しているに過ぎないんです。と言うか、今も変化の途上で、これから先もどんどん変化することでしょう。

もし自然界に、意味や理由や目的があるならば、このような偶発的とも言える多様性は考えられないはず。生物は、最適な意味や理由や目的をもったものに向かって収斂していき、ついには一種類になってもおかしくないはず。でも、自然界の実際は、昆虫だけを取ってみても2000万種とも1億種とも言われるほど多種多様ではないですか。それ故に、生物の形態や行動様式の進化（変化）は、単なる遺伝子の突然変異と環境との作り出す偶然性の結果である、と考える現代科学の仮説は有力であるわけです。

人間にはあるとされる「意思」を、動植物に当てはめる方法を擬人法と言いますが、これは、童話などによく使われる子供だまし？のテクニックです。これがどんどん発展して、擬人法を宇宙にまで拡大させてしまった愚かな（無邪気な）科学者の言葉を、最後にご紹介しておきます。

彼（宇宙学専門のある分身さん）は、宇宙の生成過程や生命の誕生過程を丹念に科学的な目で研究を続けた結果、ある結論に辿り着きます。「宇宙は、生命を誕生させるように設定されていたとしか考えられない！」

その理由は、「そのように考えなければ、あまりの確率の低さをくぐり抜けて生命が誕生したことの説明がつかない」からだと言うのです。我々はどうしても、自分や人間を中心に物事を見てしまいます。そのような視点が、この宇宙に起こる様々な現象に対して、自分たちの生命誕生を希少で素晴らしいことだと特別視してしまうから、このような妄言を吐いてしまうのでしょう。

この宇宙で起こることは、どんなに小さなことでも、その人の思い入れが込められれば、「あまりの確率の低さをくぐり抜け」たものばかりです。偶然とはそういうものでしょう。彼もまた、自然界よりも人間を中心に物事を考えてしまう疑似科学者なのです。あげくの果て、彼は、「宇宙は人間を必要とした」などと言い出します。その理由は驚くべきものです。

「人間が宇宙に望遠鏡を向け、宇宙の法則を解明しようとしなければ、宇宙は誰にも認知されることなく一生を終えてしまう。それでは宇宙の存在意義がない。だから、宇宙は自分の存在意義を見出すためにも人間が必要だったのだ」

これは、れっきとした科学者の言葉です。ここまできたら何も言えません (^_^;

さて、今回のお話を読んでいただいた方の中で、科学に対して、寒々しい荒涼としたイメージを抱いてしまった方はいらっしゃいますか？

「何でもかんでも暴かないで、少しは嘘も信じさせてよ！」

「そうよ、ロマンがあってもいいじゃないの」

「あ～あ、だから科学って好きになれないのよ」

「徳永分身さんって、冷たい人なのね。キライ！」

そんな感想も聞こえてきそうです。僕が嫌われるのは、その方の感情なので仕方ないことですが、せめて科学には感情を持ち込まないようをお願いしたいのです。それらは、詩や童話の世界などでいくらでもできるじゃないですか。科学に関しては、事実を脚色せずにとことん客観的に見つめる気持ちを持ってください。世界を平和にするためには、どうしても必要なことだからです。

でも、心配しないでください。その人たちのイメージは、真の科学というものをまだ良くわかっていないことから来る単なる誤解です。次回、そのことをはっきりさせます。

ちょっと一言

人間にはあるとされる「意思」と下線を入れたことにお気づきでしょうか。どうして「人間にはある」とははっきり断言しなかったのかと言うと、これこそ分身主義の視点だからなんです。人間には確かに「意思」のようなものがあります。例えば、ダイエットをして、もう少しボディラインをスリキリさせたいとか、大通りを渡るのに困っているおばあさんの手を引いて渡してあげようとか、一流校を卒業して将来は政治家になるぞ、とか。

その「意思」、あるいは「意志」と呼んでいるものは、今までは、他の何もの助けも借りずに自発的に生まれてくるものだと信じていました。人間にはそういうものがあると信じられてきたのです。しかし、科学は、今まで言われていたような自発的に生まれてくるという意味での「意思」など、どこにもないことを解明しています。僕たち人間は、その取り巻く環境に、意思を浮かび上がらせられて、それによって行動を取らせられていただけの、いわば環境の媒体に過ぎなかったんです。

分身主義を体感するという事は、まさにそのことを理解し、自分の意思と呼んでいたものが宇宙との関係性の中から生まれていくことを感じる事なんです。その時こそ、僕たちが宇宙と一体となる瞬間なんです。今までの僕たちには馴染みのない感覚ですが、順序を踏んで勉強していけば、この感覚を自分のものにする事は、そんなに難しいことでもありません。分身主義の森を、ゆっくりと確実に一つ一つをクリアしながら歩いていけば、必ず身につくはずですよ。

ところで、人間の心が、胎児期・幼児期・青年期などの発達段階によってどのように変化していくのかを研究する学問に「発達心理学」というものがあります。発達という言葉は聞くと、誰もが「成長する」というプラスのイメージが浮かぶはずですよ。それで、比較的最近までは「発達心理学」においても、発達とは胎児から成人に至る前までの過程を指していました。人間は成人で「完成」し、その後は成長が止まり、停滞・衰退するだけという理解がありました。

しかし、近年の著しい平均寿命の伸びは、「発達」の捉え方を大きく変えなければならなくなります。「発達心理学」は一生に渡り「成長」と捉え、中年期や老年期までにも研究対象を拡大せざるを得なくなります。当然と言えば、当然のことなんです。元々、「発達」という概念自体が、人間寄りの偏見で、科学用語としては間違っていたからですよ。人間はその一生に渡って「変化」し続ける存在でしかありません。もっと長期的に言えば、僕たち個々の肉体は、この宇宙の中の素粒子の変化過程の一時期に見せる仮の姿に過ぎません。

高齢化社会は、発達心理学を少しばかり科学的な学問にしてくれることに役立ったようですよ。だけど、「母親の胎内に命を宿した瞬間から、この世を旅立つ最後の瞬間まで、人間は成長し続ける存在である」と考え直そうとしている発達心理学も、まだ真に科学的な学問になったとは言えません。あるのは、発達でも成長でもなく、「変化」のみですよ。

「発達」という言葉も、「成長」という言葉も、自然界の客観的事実のみに目を向ける謙虚な気持ちを持った場合、科学用語としては素直に捨て去るべき言葉なんです。

今、科学は、真に科学的であるとはどういうことなのかを、問われる必要があると感じています。もし、あらゆる学問が真に科学的であろうとするならば、進化、発達、成長、あるいは退化、衰退、このような人間の価値観に根差した偏見を持った言葉を廃して、全ての段階を自然界の中で「変化」している過程と捉え直す時期に差し掛かっています。

「どうして、そんなことをしなくちゃいけないの？」ですって!? そこから見えてくる世界があるからですよ。そこからしか見えてこない世界があるからですよ。一緒に、目を凝らして、その素晴らしい世界を発見しませんか!! 僕たちは、今、それを発見する旅に出ようとしています。

予備知識 1 1 科学の限界と可能性

表情のない冷たい顔はしていても、その体内には熱き血が流れ、自然界を常に師として仰ぎ見るその目は、まるで純粋無垢な少年の目の輝き。それが科学です。

前回、科学者、特に生物学者と言われる人たちが迷路に迷い込んでしまう原因を見てきました。僕が言いたかったことは、どの程度伝わったでしょうか?

自然界にある全ての現象には、「意味」も「目的」もありません。例えば、目は物を見るために進化(変化)したものではありません。常に変化し続けている宇宙の中で、僕たちの目という部分も変化の過程を辿っている一時的な姿に過ぎないのですが、それがたまたま、モノに反射する光の粒子に対して特定の反応をして、それがフィードバックを得意とする脳によって解釈された方法に対して、人間だけが「モノを見ている」と意味づけているだけです。

科学は、目がどうしてモノを見ることができるのか、という原因は限りなく突き止めることができます。でも、科学には、目がモノを見る意味や目的は永遠に探り当てることはできません。それは、詩やおとぎ話などの文学や、宗教などの分野です。最初から意味も目的もないものに、意味や目的を見出そうとするから、どんどん迷路にはまり込んで、何も理解できなくなってしまうんです。意味や目的を見出したいとするのは、人間の側の都合に過ぎません。

自分の「生」を、何らかの意味や目的で飾り立てて、いい気持ちになりたがるのが人間の特徴ですが、でも、それを人間以外の動物や植物、あるいは宇宙に投影しては科学的真理は永遠に見えてきません。科学的真理が見えないということは、科学が導いてくれた分身主義の真髄も永遠に理解できないということになります。それで、分身主義の森に踏み入る前に、真の科学とは何かを考えていただく必要があったのです。

安齋分身さんは、何かを判断しようとする時、それは「科学的命題(合理的命題)」なのか、「価値的命題(非合理的命題)」なのか、はっきりさせておく必要があると言っています。「科学的命題」とは、その命題が正しいか正しくないかを客観的に決めることができるものことです。つまり、命題の真偽が価値観に依存しないような命題のことです。例を挙げると、「昨日、栃木県の北部では雪が降っていた」という命題があるとします。それは、実際に調べれば正しいか正しくないかすぐにわかります。「気象庁に問い合わせたらカンカンに晴れていた」と言うけど、僕は雪が降っていたと信じたいなどと言っても駄目ですよ。このように、誰が見ても客観的に真偽を決定できる命題を「科学的命題」と言います。

それに対して、「価値的命題」とは、命題の真偽が価値観に依存するため、客観的に決定できない種類の命題のことです。つまり、好き嫌いとか、賛否の数とか、主張者の声の大きさなどに決定されてしまう命題のことです。「ピカソの絵は素晴らしい」とか、「女の幸せは結婚である」などという命題がこれに当たります。これは、それを主張する人の好き嫌いや価値観に根差しているため、客観的にどちらが正しいという決定ができません。

では、あなたに質問します。

「霊は存在する」これは、科学的命題でしょうか？ それとも、価値的命題でしょうか？

実は、「科学的命題」なんです。霊が存在するかどうかという命題は、「自分は存在すると思いたい」という好き嫌いや、「存在するとしたら人生が楽しくなるから、その方がいい」などという価値観で決められることではないからです。そのようにして決めてしまえばいけない種類のものなんです。

安齋分身さんは、次のように言います。「科学的命題に対しては、徹底的に合理的精神を貫き通すべきだ」

つまり、「霊は存在するか」という命題があった場合、それが本当かどうか徹底的に調べて、確証がつかめた段階で「確かに存在した」と言うべき種類のものである、ということなのです。科学は、今すぐに結論を急ぐような短気なマネはしません。その真偽を確かめるまで、何年でも、場合によっては自分の代で結論が出なくても地道に研究を続けるものです。「霊は存在するか」という命題は、その時まで真偽を保留すべき命題であって、決して結論を焦ってはいけない命題なのです。この「科学的命題に対しては合理的精神を貫く」という態度は、とても大切なことです。

「霊」や「死後の世界」や「占い」などを確証もないのに安易に信じてしまうということは、実は、無邪気だなどと笑っていられないとても危険なことなんです。紹介者の肩書きを安易に信じて、高価な健康食品を買わされてしまったり、金取り主義の宗教を信じてしまうのも、この「合理的精神の欠如」です。「合理的精神の欠如」は、被害者になる危険性だけでなく、自分では気づかずに加害者になってしまうこともあります。根拠もない民族間の差別意識に多くの人が踊らされてしまった、あのヒトラーに象徴される悲惨な時代の例を挙げるまでもなく、今も日常茶飯事に、この大人気の無い行為は、そこそこで行なわれています。差別や偏見というものは、みんなこの「合理的精神の欠如」から来るものです。

被害者や加害者にならないためには、科学的命題に対しては、個人的な感情である好き嫌いや、多数の人に引きずられた価値観を、一端、白紙に戻して、科学的・合理的に決定していく態度を訓練する必要があります。そして、その時に一番大切な心構えは、人間を中心に考えずに、自然界を中心に考えるということです。つまり、科学的命題の真偽を議論する際には、前回書いたように、進化、発達、成長、退化、衰退などという、人間の価値観に根差した偏見を持った言葉を使ってはいけないということです。もっと言うなら、「愛」などという言葉も人間の価値観に根差した偏見を持ちやすい言葉なので、科学的命題には使ってはいけません。

哺乳類の行動を観察している動物学者が、「母哺乳類」が「子哺乳類」を抱くスキンシップを、「愛情」などという言葉を使ってしまふことがよくありますが、こういう言葉を安易に使ってはいけないということです。そのような言葉を使ってしまふは、客観的事実を見る目が曇ってしまうからです。

比較社会学の教授、真木悠介分身さんは、その名著『自我の起源』の中で、次のように書かれています。

「人はばくぜんと、動物が他の個体を個体として愛したり憎んだりするものと考えたりする。けれども動物は一般にその子供でさえ、個体として“愛して”いるのではない。“親子愛”の伝説に包まれている鳥類でさえ一般にはそうである。カッコウのように託卵鳥が自分の子を他の鳥たちに育てさせるのに成功するのは、もともと他の鳥が、自分の子を“その子として”愛するのではなく、例えば巣の中で大声を発し赤い口を開いているものに一般に給餌するという性向を組み込まれているからである」

科学には、主観的好き嫌いや、主観的な夢や希望のようなものを盛り込んではいけません。科学は、自然界の現象に対して、人間の都合である「意味」や「目的」で粉飾してはいけません。科学は、僕たちが慣れ親しんでいるぬくもりのある言葉を使ってはいけません。科学は、血の通わない無機質の言葉を使わなければいけません。そのように言われると、寒々しい荒涼とした世界を感じて馴染めない人がいるかもしれません。だけど、それは本当の科学というものを、よくわかっていないことから来る誤解です。

確かに、科学は主観的好みや人間の価値観に根差した言葉を使ってはいませんが、だけど、科学がどのようにして生まれたかということを考えてみてください。

科学者とは、彼らが子供の頃、きっと「この空をどこまでも行くとどこへ行くの？」「人間は死んだらどうなるの？」「世界の始まりの始まりはどんなだったの？」「お兄ちゃんにはおちんちんがあるのに、どうしてわたしにはないの？」と、たくさんの「？」の中で生きていたと思います。そして、科学者とは、それをおじいさんの話を信じ込むことなく、自分自身で解決させないことには安心して生きていけないタイプの人たちなんです。彼らは、全ての謎を解いて、安心して生きるためにこそ科学を必要としたのです。それが唯一、彼らが「幸せ」に生きる道だからです。言い換えれば、科学では締め出さなければいけないはずの感情である「幸せを希求するところ」が大元になって、科学は生まれたのです。

科学は、もし人々の心の中に「幸せを希求するところ」がないなら、存在する意味もありません！ 存在する意味もないどころか、その感情がなかったなら、決して生まれ得なかったものなんです！ このことを忘れないでくださいね。

科学は、血の通った人間の「ところ」から生まれたものであるけれども、あくまでも自然界を師と仰ぎ、人間の感情を介入してはいけないというものが科学の扱い方です。そのことで、科学を冷血で無機質なものと結論づけてはいけません。むしろ、人間の感情を介入しないという約束事を暗黙のうちに了解し合っている科学だからこそ、世界平和と人類の幸福に貢献できるんです。

科学は、この自然界を支配している法則の下では、万物は平等であるということを、何よりも強く教えてくれています。差別や不平等を生むのは、人間の感情です。真の科学は、人間の感情から生まれる社会の歪みを整えてくれます。

いいですか？ 科学が「冷血」なだけでも、「無機質」なだけでもありません。科学には一切罪はありません！ 冷血な人が科学を冷血にするだけです。無機質な人(?)が科学を無機質にするだけです。そして

傲慢な人間が科学を扱うことで、科学が傲慢になるだけです。物欲の強い人間が科学を扱うことで、自然界にゴミを撒き散らすだけです。

金銭欲の強い人間が科学を扱うことで、科学が金にまみれるだけです。恐怖心が強い人間が科学を扱うことで、科学が殺戮兵器を作るだけです。人類の平和と幸福を願う人が科学を扱うなら、これほど素晴らしいものはありません！ 科学という方法論において、感情を廃し、無機質な言葉を使っている、僕たち人間は、決して感情から無縁では生きられません。この僕（徳永分身）に最初にあったのは、世界平和を願う気持ちや、人類の幸福を願う気持ちで、それが科学を必要としたのです。科学は人間の幸福のために必要とされたものであって、科学のための科学になってしまっはけません。だけど、科学者とされる人ほど科学のための科学、例えば名声や栄誉のために研究を続ける というような本末転倒な事態に陥りやすいのです。そして、本来の目的や約束事を忘れて、迷路に迷い込んでしまうんです。

科学が必要とされた最初の理由さえ忘れなければ、僕たちはどんなに科学に身を捧げても、決して寒々しい荒涼とした世界で迷子になるようなことはありません。いつきの辛抱です。その先へ進めば、人類が今まで味わったこともないような「何者かに強く守られてあるような感覚」「しっかり支えられてあるような安心感」が待っています。感覚だけ取り上げれば、それは宗教に身を委ねた信者の感覚に近いものかもしれませんが、科学が導く点においてそれは全く違うものです。絵に描いた餅と実際の餅の違いで、誰の目の前にもその餅はそこにあるんです。たとえその人には見ることも感じることもできなくても、それはそこにあるんです。科学が対象にするのは、実際に「そこにある」ものだけだからです。

だけど、人類が今まで味わったこともないような、その場所に行き着くためには、人類は真の科学を体験して、敗北と挫折を味わう必要があります。最後にもう一度言います。

科学には罪はありません！ 表情のない冷たい顔はしていても、その体内には熱き血が流れ、自然界を常に師として仰ぎ見るその目は、まるで純粋無垢な少年の目の輝き それが科学です。

どうか、あなたも科学を好きになってください。今日から、「科学的命題に対しては、徹底的に合理的精神を貫き通すぞ！」と決意してください。そして、科学が導いてくださった分身主義のしている光景を“体感”しに、これから僕と同行してください。

それではそろそろ、分身主義の深い森に入っていきますよ。足元に注意して着いてきてくださいね。僕（徳永分身）が、何故「精神病は病気ではない」と主張するのか、わかっていただけだと思います。もちろん、萩原分身さんの主張されるように「精神病は霊の祟りだから」という理由ではありません。

深い森を体験した後、あなたに何かが起こります。それは世界に何かが起こったことを意味しています。でも、しつこいようですが、その前に、次回はもう一度、真の科学の視点を確認しておきたいと思います。分身主義の森の中は、真の科学の視点を持って歩かなければ、間違いなく迷子になってしまうからです。

ちょっと一言

「**だけど、その場所に行き着くためには、人類は真の科学を体験して、敗北と挫折を味わう必要があります**」と言いました。もしあなたが真の科学を経験するなら、どうしても敗北と挫折を味わうことになります。その一つが、これまで見てきたことです。

「**科学は、その現象が起こった原因を必ず突き止めることはできるが、**だけど科学には、その現象の意味や目的を突き止めることは永遠にできない****」つまり、人間は、この宇宙のあらゆる物事には意味も目的もないということを、ここに来て（科学によって）気づかされてしまったということです。

いいですか!? それは、あなたがこの世に生まれてきたことに対して、意味も目的もなかったということです!!（生きることに意味がないと言っているのではありませんよ）

科学によって気づかされた敗北と挫折のもう一つは、これから話していきますが、「**僕たちは自分の意志で行動をしていたのではない!**」ということです。あなたが、これらのことを敗北と挫折を持って体験できる人であることを願っています。

人類が今まで願っても決して得られなかった世界平和や幸福を手にすることができるかどうかは、最終的には、人類が、この敗北と挫折を体験することができるかどうかにかかっています。僕の言っていることを、表面的に捉えないでくださいね。簡単に聞き流さないでくださいね。これは、あなたが、目指す大学に入れなかったり、目指していた歌手や俳優や弁護士になれなかったり、あるいは余命半年だと宣告されたり、事故で右足を失ったり、視力を奪われてしまったり、大好きな歌を歌うための声を奪われてしまったり、自分の子供を殺されてしまったりした時などに味わう敗北や挫折よりも、ずっとずっと深く大きな敗北と挫折なんですよ。言い換えれば、世界平和や人類の幸福は、人類がこの敗北と挫折を、それ程の大きな敗北と挫折として体験できるかどうかにかかっているんです。

でも、より大きなものを手に入れるために、どうして僕たちはその大きな敗北と挫折を味わうことをためらう必要があるのでしょうか？ そのことから目をそむけることを、これ以上続ける必要があるのでしょうか？ たとえどんなに弱虫でも、顔を上げたそのはるか彼方に、希望の灯りが確実に灯っているなら、いつきの苦痛など恐れるに足りません。どんな敗北でも、どんな挫折でも、受けて立とうではありませんか!?

予備知識 1 2 科学と非科学

科学がたくさんの謎を解明したこの時代に生きる僕たちなら、**永年の加害者から卒業できるに違いない!**

個人的成功や個人的幸福は、結局は個人的不成功、個人的不幸に帰着する。

宇宙に散らばっている分身さーん、いかがお過ごしですか!? 地球から、33億光年（光の速度で旅して33億年かかる）も離れているうみへび座さーん、元気に宇宙を泳いでいますか!? こんにちは徳永真亜基分身です。

あなたたちは、今この瞬間にも、なんと秒速60,600 kmの猛スピードで僕たちから遠ざかっているんですってね。そんなに僕たちを

嫌わないでください。分身同士仲良くしましょうよー！

す、すいません。決して頭がおかしくなったわけではありません。ちょっと、僕たちの仲間に挨拶をしたんですが、この意味は後でわかっていたかと思えます。

前回、安齋分身さんの、「科学的命題」と「価値的命題」の話を見せていただきました。「科学的命題に対しては、徹底的に合理的精神を貫き通すべきだ」とおっしゃる彼の言葉は、科学時代を生きている僕たちが肝に銘じなければいけない言葉です。僕たちだって、時代の変化に対応して良い方向（＝世界平和の方向）に変化しなければ（^_^）

非科学とは、言い換えると「嘘」で塗り固められた世界の事です。しかし、「嘘」も信じる人がたくさんいれば真実になります。神様を作り上げて、神様の下で平等を誓い合えば、平和な世界ができあがるかもしれません。だけど、それが人間の想像力から生まれた「嘘」である以上、想像力豊かな人の数だけいくらかでも作り出せるし、いくらかでも都合のよい解釈や言い訳も考えつきます。それは平和よりもむしろ、こじれにこじれる対立を生みます。また、それを信じていない人たちと接触することのない時代であればともかく、現代は他の価値観の人たちとも接触せざるを得ない情報化時代です。この時代に、僕たちが一つの真実の下、心を一にしてくれるものには、科学しかありません。科学的命題の答えは一つだからです。

ところが、科学的命題に対して、合理的思考を貫くことに慣れていない僕たちはどうでしょう？ 無批判に、霊の存在や占いを信じてしまったり、超能力、心霊現象、UFO、予言といった「超常現象」を受け入れてしまうような社会では、いつまでたっても対立をなくすことはできません。いろいろな噂に翻弄されて、いつまでたっても心一つにすることができません。テレビなどでも、視聴率アップのためにそのようなこと（霊や占いや超能力やUFOや予言など）を、あたかも本当のように見せる番組がたくさんあります。でも番組というものは、各自の得意の技術を持ち寄ったプロ集団が、総力を結集して、「見せる」ものを用意周到に作るものであることを忘れないでください。むしろ、超一流のマジックと同じ、「やらせ」や、「仕掛け」や、「仕込み」などがなければ、番組の体をなさないものになってしまいます。前後を逆さまに切り張りしたり、都合の悪い部分をカットしたり、関連性のないものを意図的につなげたりする編集作業は不可欠です。いたるところに嘘を本当らしく見せる工夫が施され、音響効果で感動を盛り上げ、余計に嘘に気づきにくくさせられます。

番組制作者の意図は一切なく、事実だけを忠実に撮影しただけのドキュメントです、などと言われても、撮影という行為自体が既に作為的（さくせい）です。何かを撮影するという事は、多かれ少なかれ、必ず、カメラマンの意図が含まれてしまいます。しかし、そういう番組の制作スタッフは、「自分たちは視聴者に良い生き方を示唆するための番組作りをしている」というような自負心に裏打ちされて、意地と誇りを持って仕事を楽しんでいるはず。むしろ彼らを衝き動かしているものは、そのような善意がもしかたありません。企業的な価値観のための善意、いわゆる視聴率アップという善意の場合もあるかもしれませんが、

集団意識というものは、赤信号をみんなで渡るようなことをしていても、ほんの少しの罪の意識もなく、むしろ良心的な意識の中でそれを成し遂げてしまうという恐れとあります。だけど、僕たちは騙されてはいけませんよ！！

と言っても、彼らプロ集団の作り上げた番組の「嘘」を見抜ける目を持って、などと無理なことを言っているわけではありません。そんなことは不可能です。タレントも含めて、彼ら制作に携わる人たちの信じている「良い生き方」というものが、本物ではないと言いたいんです。

僕たちに感動を与えてくれるような番組は、生きる勇気や生き甲斐を与えてくれて、場合によっては愛や命の大切さを再確認させてくれます。しかし、そのような番組を作る方たちの脳は個人主義的な環境にどっぷりと浸かっているため、彼らの考える良い生き方とは、個人的成功や個人的幸福でしかない場合が多く、個人的成功や個人的幸福は、結局は個人的不成功、個人的不幸に帰着します。個人主義的な環境から、僕たちの脳に浮かび上がってくる「良い生き方」というのは、決して本物ではありません。その嘘だけは見抜ける目を持って欲しいんです。

いいですか!? 声を大にして言っておきます。これからの時代を生きる僕たちを、平和と幸福に導くことができるものは、科学だけです!! どんないいから生まれた愛すべき物語も、それが嘘から生まれているものである以上、世界を平和と幸福に導けない時代を僕たちは生きています!!

今まで人間はみんな、非科学を信じてしまう傾向の脳を持っていました。非科学を信じてしまう傾向の脳とは、幼稚な脳のことです。幼稚な脳は、独断や偏見や差別を抱きやすい脳であることは容易に理解できます。それによって仲間意識が生まれ、社会を安定させることもできましたが、いいことばかりではなく、それがイジメや戦争や犯罪につながっていることも理解できます。僕たちの幼稚な脳が独断や偏見や差別を生み、それがイジメや戦争や犯罪を導くべくして導いてしまっていたんです。イジメや戦争や犯罪は生まれるべくして生まれていったんです。その意味から言えば、僕たちはみんな加害者だったんです。知らず知らずのうちに加害者にさせられてしまっていたわけだから、哀れな被害者だったとも言えますけどね。

大人である僕たちは、サンタクロースを本気で信じている子どもたちを可愛いなあと思いますが、大人たちがやっていることもそれと少しも変わりません。サンタクロースが、他のものに置き換わっただけの話です。僕たち大人は、子ども達を「あんなもの信じて可愛いなあ」と笑うように、自分たち大人を「あの頃は、あんなもの信じてたんだなあ」と笑えるような、**大人の大人**という段階に入らなければいけません。

大人とは、子供の頃の自分を客観的に眺める目を持った人のことであるように、「大人の大人」とは、客観的に大人の自分を眺める目を持った人たちです。そして、独断や偏見や差別を持ってしまう脳の習性を理解し、加害者になってしまっていた自分たちの姿に気づくことができる人たちです。

ところで、科学的命題に対しては合理的思考を徹底させることが必要だと言っても、それさえできるようになれば、戦争も犯罪もなくなると言っているのではなく、それが出発点だということです。また、非科学的な占いや、詩やおとぎ話などの文学や、宗教などを廃止すべきだなどと言っているのでもありません。非科学の世界とは、言い換えれば「嘘」の世界という意味です。でも、それらは、科学とはまた違う意味での豊かな世界でもあります。科学時代を生きる僕たちは、今までのように盲目的にそれらを受け入れるのではなく、それらの嘘は嘘と知った上で、その豊かさを存分に享受すべきだということです。その点に誤解がないように、もう一度書いておくことにしました。

33億光年離れたうみへび座を発見したのは科学ですが、それを文学に取り入れて、例えば今回の冒頭のような使い方をしてみたり、宗教に比喩として取り入れてみたりすることまでも排除しようとしているわけではありません。ただ、文学と科学、宗教と科学をくっつけて出来上がったものは、あくまでも科学ではなく非科学であることを承知していなければいけないということです。非科学を科学であると思いつい込んだり、非科学を丸々信じてしまう行為に問題があるわけです。

その逆に、科学には、文学も宗教も取り入れてはいけません。科学的命題に対して科学的な結論を導き出そうとするなら、擬人法を用いたり、自分の感情や願望を投影させてはいけません。つまり、決して自分たち人間を中心にして、自然界を眺めてはいけないということです。そんなことをすると、科学的真実が見えなくなるからです。擬人法を用いたり、自分の感情や願望を投影させて導かれたものは、たとえどのような結論であっても、科学ではなく非科学です。それは文学や宗教などの「豊かなる嘘の世界」の分野です。

それなのに、僕たちは、「霊は存在するか」とか、「スプーンは超能力で曲がるか」とか、「宇宙人はいるか」とかという科学的命題に対しても、科学的に検証しようともせず安易に誰かの言葉を信じ込んでしまったり、好き嫌いの価値観などで決めてしまうところがあります。そのような習慣から卒業しなければ、僕たちはいつまでたっても加害者のままです。そして、そのような習慣から卒業できなければ、現代科学が導いてくれた分身主義の真髄さえも理解できないことになります。この10数回に渡る予備知識では、そんなことを言いたかったのです。

安齋分身さんは次のように言っています。「現代の自然認識が、科学者たちのどんなに涙ぐましい努力と闘いによって蓄積されてきたかを知ってほしい。目の前のスプーンに、これまでの科学の蓄積をポイ捨てるようなことはしたくない」。

彼の言う「目の前のスプーン」とは、1974年を皮切りに何度か来日して、当時のテレビの人気番組などに出演し、日本中に超能力ブームを巻き起こした自称超能力者ユリ・ゲラーの「スプーン曲げ」というパフォーマンスのことを指しています。僕たちは、科学者たちが蓄積してきた人類の財産を、そんな安易なことでポイ捨てるような愚かなまねをしてはいけません。

それでは、これまでの予備知識を携えて、いよいよ分身主義の森への第一歩です。さあ、大きく深呼吸をしてください。迷子にならないように、しっかり目を見開いて着いてください。それっ！

ちょっと一言

大人の大人になる出発点として、まずやらなければいけないことは、「人間とは何か?」「自分とは何か?」を考えることです。いわゆる、昨今はやりの「自分探し」です。

でも、ほとんどの「自分探し」は、自分の個性を見つけようとする、いわゆる「自分らしさ探し」です。自分の個性を見つけたら、今度はそれを伸ばそうとします。あるいは、自分の性格や欲望や弱点を知って、そんな自分でいいんだよ、と自分で自分に言ってあげたり、自分の殻を打ち破って、個人的成功や個人的幸福を手にするにはどうしたらいいか、ということを見出すための自分探しです。

だけど、本当の自分探しとは、そんな表面的・個人的なものではありません。自分の性格や欲望の源泉を科学的に探究し、その源泉は宇宙のどこにつながっているかを解明させることです。もしその終着点が、自分を誉めてあげることは何の関わりがなくても、僕たちは本当の自分探しをやらなければ、大人の大人になれません。そうしなければ、永遠にイジメや戦争や犯罪の加害者から卒業できません。

科学的視点で、「人間とは何か?」「自分とは何か?」と探っていくと、誰もが、分身主義に行き着きます。行き着くしかありません。この宇宙に漂う分身の一人であることに気づいた僕は、はっきりとそう断言できます。それでは、僕がかつて彷徨ってきた分身主義の森の中へ、あなたをご招待するために再び突入します。

1日目 分身主義の森 最初の一步

人間は、実体をありのままに認識することは決してできない。その観点から言うと、見たり聞いたり触ったりして、何かを感じたり考えたりしている状態は、錯覚している状態である。

いよいよ、今回から分身主義の森に踏み入って行きます。その前に、僕たちの分身仲間さんたちに挨拶しておきましょう。

宇宙に散らばっている分身さん、いかがお過ごしですか!? こんにちは、こちらは地球に住むあなた方の分身仲間です。生きとし生けるものと深い関係の太陽分身さん、元気そうですね! でも僕たちは決してあなたに触れることができません。それに、僕たちが見るあなたはいつも8分19秒前のあなたの姿です。僕たちがあなたのことを話していても、決してあなたそのものの話をすることはできません。僕たちは、お互いの記憶の中の太陽のイメージの話をしているだけです。だけど、あなたも分身として確かに存在していることには間違いありません。これからもよろしくお祈りしますね。

さて、予備知識9の「ちょっと一言」の中の、デカルト分身さんの話を覚えていますか? 彼は、この世界に存在するものを「物体」と「精神」に分けたのでしたね。分身主義もこの宇宙の全てのものを「実体」と「幻想」に分けます。まず、分身主義の森の入り口に落ちていくこの二つの言葉を手に取ってください。

でも、分身主義は彼(デカルト分身さん)の二元論とは、考え方においても、その出発点においても全く違います。今から、分身主義を理解していただくために、分身主義の言う「実体」と「幻想」とは何かということをお話します。そして、それはデカルト分身さんの考える二元論と、出発点においてどのように違うのかということを説明します。

物質（あるいは物体）同士が何らかの作用をし合うことで引き起こされる、一時的に現われては消えていくもののことを「現象」と呼びます。現代科学は、「この宇宙に存在する現象は全て物質に還元できる」と考えます。つまり、「現象」さえも、物質で説明できると考えるわけです。それは、唯物論という一元論の世界です。この「全ての現象は物質に還元できる」という信念に基づいて自然界の諸現象に人間が当てはめてきた法則や解釈が、正しいか正しくないかということを判定する基準は、その法則や解釈に基づいて人間の作り出したモノが、自然界で正しく機能するかどうかでわかります。

例えば、冬、セーターを脱いだ時、パチパチッと音がして髪の毛がセーターに引っ張られたりする現象があります。それは、セーターに乗り移っていた電気が離れがたく思って、後ろ髪を引っ張っているわけです。と言うのは、真っ赤な嘘です。これは、セーターがこすられた摩擦によって、セーターから電子という物質が飛び出し、それによって一方にプラスの電気の性質が現われ、一方にマイナスの電気の性質が現われることによって、お互いに引き合おうとする現象です。

それは静電気と呼ばれますが、もちろん僕たちが家庭のコンセントから取り出して利用している電気と同じものです。この電気というものの発見や解釈が正しくなかったとしたら、僕たちが作り出して日常使っている電化製品は正常に働かないこととなります。電化製品が世界中の市場にあふれているということは、その発見や解釈が正しかったことを証明しているわけです。

また科学は、古来、最も恐ろしい病気とされていた天然痘の原因まで調べつくし、ついには1980年にそれを根絶させました。その原因は悪魔の仕業でも神の祟りでもなく、目にも見えないウイルスという物質でした。根絶させることができたということは、その発見が正しかったということを証明しています。もし、「全ての現象は物質に還元できる」という信念を諦（あきら）め、相変らず悪魔の仕業か神の祟りと考えていけば、未だに根絶させることはできなかったでしょう。

電は想像上の生き物ですが、素粒子はもはや想像上の物質ではありません。僕たちには、万物の最小の単位とされている素粒子を単独に取り出したり、それらを光の速さギリギリまでに加速させる技術まであります。

また、人類は失敗を繰り返して、2004年1月3日、火星探査ロボットの着陸を成功させました。この、「東京から打ってパリでホールインワンしたような快挙（オッキーフ長官の言葉）」を成し遂げるためには、自然界に向けて、どれ程たくさんの問い合わせを繰り返し、そこから返ってくる答えに合わせて何度も何度も修正を加えながら（フィードバック作業をしながら）どこまでも謙虚に根気強く学び続けなければならなかったかと考えると、目の前のスプーンごときに、これまでの科学の蓄積をポイ捨てしてしまうことなんて、とてもできないと思います。

このように、この宇宙界で機能するモノを作れるということは、科学が発見したモノや、科学が到達した解釈が間違いではなかったことを証明しています。

両手を力強く打てば「パーン」と音がしますが、その「音」という現象は目に見えないので物質以外のものだと感じます。ただ、科学的に言えば、空気という物質の振動が人間の耳に伝わり、それが電気信号に変換されて脳で音として認知されているのです。だから、音という現象の本体は「空気」やら「電気」などという物質です。音という現象は、耳の聞こえない人には起こりませんし、目には見えませんが、確かに物質としてそこに存在しているということです。

色だって物質です。

光源から発せられる光の粒子（＝物質）が物体にぶつかり、その物体表面の性質により、一部は吸収され一部は反射されて、その反射された粒子が我々の目の中に飛び込み、電気に変換されて脳の中でその物体の色として認識されるわけです。

ちなみに、僕たちが匂いとして感じているものも、それは全て空気中を漂う物質です。遺伝という現象や、脳の働きという現象も、また、雷や地震や竜巻や台風といった自然現象も、科学は、全て物質で説明しようとし、またそれを可能にしてきました。

科学とはこのように、「この宇宙に存在する現象は全て物質に還元できる」と考えるものです。ここまではいいでしょうか？

この物質（あるいは物体）のことを、分身主義では「実体」と呼ぶことにしています。何故かと言うと、分身主義は物質同士が作り出す現象のうち、人間の脳の作用が作り出すものだけを特別扱いして「幻想」と呼ぶことにしたからです。それだけを違う名称で呼ぶからには、科学で用いる物質（あるいは物体）という言葉で当てるのは不自然なので、「実体」と呼ぶことにしたのです。

- ・幻想 人間の脳の記憶と外部からの刺激との相互作用によって作り出される全ての現象。認識、連想、想像、思考、感情、意思 など。
- ・実体 人間が意識しなくても存在する全ての物質、あるいは物体。

「幻想」もまた、脳の神経細胞という物質が他の物質と作用し合って見せる現象の一つに過ぎないわけです。それは、身体内・外からの刺激により、脳内に発生した電気が、脳内の特定の回路（記憶のネットワーク）上を走ることによって生み出される現象です。その際に使われる物質は、脳内の神経細胞と、その中を移動して電気を発生させるカリウムイオンやナトリウムイオンや、そして情動や筋肉の動きにも影響を与えるたくさんの神経伝達物質 などです。

科学的に考えれば、物質同士が作り出す現象という意味では、手を叩けば響く音という現象も、脳内で起こる感情や意思という現象も同価値なのに、分身主義が脳の場合だけ特別扱いして、それでそれだけを「幻想」と名づけるには、それなりの理由があるからです。

宇宙は約140億年前のビッグバンによって生まれ、その時に散らばっていた素材を使って地球ができたのは約45億年前で、それからホモサピエンスが出現するのはずっとずっと後の、約20万年前です。宇宙の140億年を一年のカレンダーにすると、地球ができたのは約4ヶ月前だけど、ホモサピエンスが出現するのは、12月31日の日付が変わる7～8分前です。

彼らは言葉を話したそうですが、現代の僕たちの脳と比べるとその情報量の違いから言っても、今よりずっと単純な反応しかなくて、複雑な思考をしたり、複雑な感情表現をしたりしたとは到底想像できません。人類の歴史を記録したり、複雑な反応をしたりする脳ができたのは、年々変わろうとするほんの数秒前ではないでしょうか？

このように、宇宙の長い歴史から見れば、新参者に過ぎない人間の脳の現象ですが、今ではそれだけがあまりにも力を持ってしまいました。分をわかまえずに、まるで釈迦如来分身さんに出会う前の、己を知らなかった頃の孫悟空分身さんのように、我が物顔に暴れまわっている状態です。自分たち人間に似せて神を作ってみたり、なんだかんだと自画自賛したり、自分で自分をおだてたり、まんまとうまい存

在理由を考え出したりして、一生懸命いゝ気持ちになろうとしています。まるで中世の暗愚^{あんぐ}で無邪気な人々(予備知識9参照)のようです。

その状態から抜け出して、人類が今まで願っても決して得られなかった世界平和や本当の幸福をつかみ取るためにも、人間の脳の現象に対してだけ名前をつけて、まずはその正体を科学的にはっきりさせる必要がありました。だから、人間の脳という「実体」が、他の実体との相互作用をした時に生じる現象に対してだけ、「幻想」と名づけたということです。

これでデカルト分身さんの二元論とは、出発点からして根本的に違うという意味をわかっていただけましたか？ 本当は分身主義は科学にならって一元論だけど、仕方なく人間の脳の現象だけを特別に扱ったという経緯を理解していただけたでしょうか？

ところで、人間の脳の現象をはっきりさせるために、それだけを特別扱いして、**幻想**と名づけてみたら、早速、はっきりしたことがありました。それは、次の点です。

「**実体とは、人間が意識しなくても存在する全ての物質、あるいは物体**」のことだと説明しましたが、実はこの「**人間が意識しなくても**」という部分が大事だったんです。何故なら、その物質やら物体は、人間が意識した途端、もはや**実体**の範疇^{はんちゆう}から**幻想**の範疇に移行させられてしまいます。

目の前にりんごが置かれているとして、そのりんごは実体ですが、あなたが、「りんごがある」と認識した場合、その認識されたりんごは実体ではなく幻想の領域になります。ちょっと難しいですね。

あなたが「ここに、りんごがある」と言う場合、あなたは、りんごを認識したということです。何物も、その物を認識せずには、そこにあるとは言えませんからね。ということは、人間はどんなことをしても物の存在を認識する場合、実体として認識することはできない存在であるということです。認識とは、人間の脳的作用によって作り出される現象のことだからです。

もう一つ、たとえを挙げます。

僕たちは空に燦々^{さんざん}と輝く太陽を認識しますが、その認識したものは、決して太陽そのものではないですよ。僕たちが見る太陽は、いつも8分19秒前の姿だし、僕たちが太陽の話をしていても、それは、お互いの記憶の中の太陽のイメージの話をしているだけです。太陽という実体そのものを扱おうとしたなら、僕たちは瞬時にその灼熱^{しゃくねつ}に融けています。

もう一つははっきりしてきたことがありました。

人間の脳的作用によって作り出される現象には、錯覚と言われる面白い現象もありますが、この錯覚というもの、今までのイメージで考えてもらっては困ります。今までは、「そんな錯覚だよ。気にすんなよ」などと使われて、軽んじられてきましたが、実はそんなことでは済ますことができないものだったんです。何故かと言うと、それは現象である以上、今まで見てきたように必ず実体を伴い、そして他の実体に十分影響を与え得る力を持ったものだったからです。

例えば、天井の節目模様が無気味な顔のようなものに見えてきて、それを見るたびに嫌な気持ちになり、引越しという行動を余儀なくされたりします。嫌な気持ちという感情が発生する限り、その人の脳の中に、ある種の模様を見たらそのような感情を起こす物質を発生させる回路が作られてしまっていると言うことだし、そのことにより、実体であるあなたの体に荷造りをさせる影響力さえ持っています。

・幻想 人間の脳の記憶と外部からの刺激との相互作用によって作り出される全ての現象。認識、連想、想像、思考、感情、意思 など。

と、定義をしましたよね。だけど、人間は決して実体をありのままに認識することができないという点から言うと、脳という実体はその記憶という働きを通して、脳の外部の実体からの刺激との相互作用をすることによって作り出されるあらゆる現象、つまり、認識、連想、想像、思考、感情、意思 などといったものは、全て「錯覚」である、とも言えるんです。

「なにーっ!? 貴様^{きさま}は、この俺様が、確かに見たり聞いたり触ったりして、何かを感じたり考えたりしていることが、ぜーんぶ錯覚だっ一言で片付けるつもりかよーっ!？」

なんて怒らないでください。これは哲学でも宗教でも禅問答でもなく、科学が発見した事実です。そのことを、この分身主義の森の中で、必ずはっきりさせます。

ちょっと一言

僕たちは今、こういう時代に生きているんです。

こんな科学時代に生きて、パソコンや携帯電話などを上手に使いこなしているくせに、科学の粋^{すい}を結集して作り上げたパソコンや携帯電話のインターネット情報で、人類は月に着陸したというのは嘘だったとか、霊は存在するなどという非科学的な情報がたくさん流されているのは、とても不思議なことだと思うのですが、あなたはどう思いますか。

科学が産み落としたものを使って、「科学は信じられない」と言っているような矛盾を感じます。

利用するだけ利用して、それってちょっとズレイ気がするの、この僕(徳永分身)だけでしょうか？

2日目 分身主義の森は仮想空間か？

一つの事故の背景には、140億年間に起こった全ての現象が、その原因として関わり合っている。

僕たちは、みんなが加害者となって一つの事故を引き起こし、みんながその事故の被害者である。

さて、やっと分身主義の森の中に入ったというのに、この間にも世間では大きな事件や事故などが起こっています。

テレビ等で報道される暗い事件や、ニュースの報道のされ方や、視聴率重視の劣悪な非科学番組などを見る度に、分身主義の必要性を強

く感じます。分身主義を知っていただくためには、理解力と想像力と感受性が必要ですが、その能力の優れた人が数人いければこの環境は変化し、環境が変われば環境の媒体である僕たちの言動は自ずと変化します。だから、世界中が分身主義的な環境になるのは、それほど遠い将来のことでもないと感じています。

テレビを見ていると、分身主義的なコメントをしたいと思うことはたくさんあります。

最近の話題で言えば、北朝鮮に関する問題、ライブドアとフジサンケイグループの対立、中国の反日デモなどは、どうして分身主義が必要なのかを知っていただくためには、取り上げたい話題でした。分身主義は決して非日常的な絵空事の世界の話をしているわけではありません。それどころか、現実よりももっと現実の、そのまた現実の、僕たちが生きるために無意識で踏んでいる「地面」に当たるものにならなければいけないものです。

ここ分身主義の森は、現実から切り離された異次元の仮想空間なんかではなく、現実としっかりつながっている空間だということを覚えておいてください。そのためにも、今日は、先日(4月25日) 尼崎市で起きたJR福知山線の脱線事故(*5)について考えていただくことで、分身主義の概観を眺めていただきたいと思います。取り敢えず、外観だけ先に眺めていただくことは、後の理解の助けにもつながると考えたからです。

あの列車脱線事故については、連日、様々なメディアで報道されていたので、みなさんも詳細をよくご存知のことと思います。ここで考えてみたいのは、以下の3点です。

- 1、どうしてあのような事故が起こったのか？
- 2、あの事故は未然に防ぐことができたのか？ できたとしたらその方法は？
- 3、あの事故によって、心や身体に傷を負ったまま生きていかなければならない方や、遺族となった方々の心をどのようにしたら癒すことができるか？

[1. どうしてあのような事故が起こったのか？]

分身主義は、現代科学に導かれて生まれてきたものですが、現代科学が僕たちにもたらしてくれた最も大きな功績は、「全ての物事には必ず原因がある」ということをわからせてくれたことです。現代科学は、実験や観察という行為によって、今もその言葉の正しさを示し続けてくれています。

あのような事故が起こったということは、必ずその原因が存在します。そして、その原因には原因があり、その原因にはまた原因があるというように、途切れることなくどこまでも遡って行けます。

今、「その原因には原因があり、その原因にはまた原因があるというように、途切れることなくどこまでも遡って行けます」と言いましたが、それをどこまでも遡ると、ビッグバンに行き着くと現代科学では考えています。

僕たちのいるこの宇宙は、今もものすごい勢いで膨張を続けていますが、それを超高速で巻き戻して、約140億年前に時間を止めると、小さな火の玉状態だったということが証明されています。それがビッグバンの初期状態です(ちなみに、ビッグバン以前の宇宙の状態についてはまだ証拠不十分のため仮説の段階です)。その小さな火の玉状態の時に、ギュウッと圧縮されていた素粒子が、宇宙がものすごい勢いで膨張する過程でくっついたり相手を替えたりしながら、この宇宙に存在する全てのものは作られているんです。遠くで瞬く星々も、月も太陽も地球も、そして地球の上に生まれた僕たち生き物も。これが、全ての物事の原因を追究する現代科学が到達した自然観です。

今、あの事故が起こった原因をどこまでも遡りましたが、今度はそれをまた現代に戻って来ると、この宇宙の歴史140億年間に起こった全ての現象が、その原因として関わり合っていた、ということに気づかされます。この宇宙で起こることは、全てがビッグバンからつながって起こっていて、関わりのないものは一つとして存在しないからです。(それで、分身主義では、全ての現象はビッグバンの風に吹かれて起こっているなどと表現したりします。この言葉は便利なので覚えておいてください)

宇宙的時間から言えば、ごく最近の出来事でもある銀河系ができたことも原因だし、地球の上に生物が生まれたことも原因だし、もっともっと最近の出来事と言えば、JRの方針やそれを利用する人たちも原因だし、運転士の高見隆二郎分身さんや車掌の松下正俊分身さんはもちろんのこと、僕やあなたも原因だったんです。もちろん地球の裏側に住む人も、アリもキリギリスも芋焼酎もです。

この宇宙に存在するものは、みんなつながっているからです。僕たちに「その関わり」が実感できないというだけです。でも、僕たちにはそれを理解する想像力というものがあります。

また、「全ての物事には必ず原因がある」を言い換えると、「全ての物事は結果から見れば必然である」ということと同じ意味です。あの列車事故は起こってしまった以上、約140億年前にビッグバンが起こったことによって必然的に起こったと言えるわけです。

だけど、ここで一つ注意していただきたいことがあります。これは運命論(この世の現象はあらかじめ決められていると考えるもの)とは、全く違います。

決められていたと言っているわけではありません! 全ての物事は偶然性の結果から生まれているわけですが、現在(結果)から、過去(原因)を見ると、原因が特定できることから、必然的に起こったと言えるので、決められていたように見えるというだけです。

「決められていた」と断言するには、それを決める主体の存在が必要ですが、もし運命のサイコロを振る神様がいても、そのサイコロの出目は神様にもわかりません。ただ、ある目が出てしまった瞬間、それ以外の目が出るかもしれない可能性はゼロになると言うだけのことで、

(*5) JR福知山線の脱線事故
平成17年4月25日(月)9時18分頃、西日本旅客鉄道株式会社のJR西日本、福知山線の尼崎駅~塚口駅間において、死亡者107名、負傷者549名を出した列車脱線事故。
7両編成のうち、前5両が脱線。前2両が列車進行方向左側のマンション1階部分に激突する。現地は、右カーブ(曲線半径300m)で時速70キロ以下の制限箇所。
運転士は23歳、経験11ヶ月。車掌は42歳、経験15年9ヶ月。
当該列車は、事故直前の停車駅の伊丹駅において、停止位置を約2両(40m)行き過ぎて停止し、その修正のため、伊丹駅を約1分30秒遅れで出発し、塚口駅の通過は約1分の遅れで運転していた模様。

[2.あの事故は未然に防ぐことができたのか？ できたとしたらその方法は？]

今見てきたように、あの事故は必然的に起こってしまった以上、未然に防ぐことはできなかったからこそ起きたのですが、今後このような事故が起きないようにすることは可能です。それは、JRの責任を追及することや、事故の直接の原因を究明することだと多くの人は考えると思いますが、それはほとんど役に立ちません。事故の直接の原因が科学的に究明されることは、もちろん意義があることですが、それは単なる間に合わせの応急処置で、対症療法に過ぎません。だから人間は同じ轍を何度も踏んでしまうのです。今見てきたように、原因はそれだけではなかったからです。

「この140億年分の全てが原因で、たった一つの事故は起きた」と言いましたが、その「140億年分の全て」という言葉を違う言葉で言い換えると、それは「その事故を取り巻く環境の全て」と言うことができます。つまり、運転士の高見隆二郎分身さんにオーバーラン(停止位置を走り越すこと)をさせたのも、その後、スピードを出させたのも、彼を取り巻く環境の全てが、彼にやらせたことだ、ということが理解できます。

つまり、僕たち一人一人の行動は、自分の意思などでやっていたと思うのは大間違いで、自分を取り巻く環境に「浮かび上がらせられていた意思」によって、行動は取ら・されていたわけです。

これらのことを簡単な一語で言うとするれば、僕たちを取り巻く環境が、高見分身さんを媒体として事故を起こした、と言えます。事故を起こした張本人は、僕たちを取り巻く環境で、高見分身さんは可哀相な媒体であり、むしろ渦中に置かれた被害者なんです。

そして、あの事故に対してテレビで偉そうにコメントするたくさんの人たちも、現在の環境がその人たちを媒体として語っているだけである、と言えます。語っているのは、その人を取り巻く環境で、その人たちは単なる媒体です。僕たちはみんなみんな、この取り巻く環境の媒体なんです！

大きく見れば宇宙という環境の媒体です。小さく見れば、個人主義的な意識の作る環境の媒体です。星も太陽も地球も、海も山も、草木も虫も動物も、あなたも僕も。ねえ、そうでしょう!!

あの事故が、今の環境が起こしたというなら、今の環境が変化しない限り、形を変えていつまでも同じような事故は繰り返されます。あのような事故を二度と起こさない方法は、たった一つしかありません。それは、僕たちはこの環境の媒体に過ぎなかったということ、まずは理解することです。そして僕たちはこの環境の媒体であると共に、環境を作っている一部でもあったということ、これを理解することです。

僕たちは、この環境の媒体に過ぎなかったと理解した瞬間、今まで環境の内側にいて環境の媒体に過ぎなかった僕たちは、この環境を外側から眺めることになり、その時ほんの少し今までの環境の外に飛び出すことになります。すると、環境を作っていた一部でもあった僕たちは、僕たちの環境を変化させることになります。今の環境が変化するということは、あのような事故を起こした張本人が変化するわけですから、あのような事故も起こらなくなるということです。

では、今の僕たちの環境とは、どんな姿なのでしょう？ 外側に立って見てみましょう。

僕たち人類の歴史は、自我が芽生えて以来、個人主義的な道を目指してひた走ってきた歴史である、とも言えます。全ての基準が「自分」を中心にして作られ、あらゆるものが、中心である自分に必要なものかそうでないものかで差別化され、愛が生まれ、憎しみが生まれ、恋人ができて、夫婦ができて、家族ができて、村ができて、国ができて、対立が生まれ、競争が生まれ、奪い合いが生まれ、戦争が生まれ、てきました。

つまり、僕たち人類の環境は、**個人主義的な環境**と言うことができます。

高見分身さんにあのような行動を取らせた環境(原因)には、個人主義的な環境にどっぷりと浸かっている僕たちも含まれています。つまり、僕たちが、彼にあのような行動を取らせたということも言えます。

JRの利益や効率重視の方針も、また、30秒でも到着が遅ければ抗議してしまうような乗客たちの行為も、みんな個人主義的な環境が僕たちに取らせている行動です。彼(高見分身さん)にあのような慌てた行動を取らせたものは、そういうものと無関係だと考える人はいないでしょう。今の僕たちは、みんなみんな、個人主義的な環境の媒体なんです。そのことに気づいた時、初めて僕たちは、この環境の外に立つことができます。

この環境の外に立つ体験をするには、理解力と想像力と感受性が必要ですが、それができる人が数人いれば、このインターネットを通して僕たちの環境はあっという間に変化します。僕たちの言動の一部始終を操っている環境は、個人主義的な環境から分身主義的な環境に変化します。組織や団体の力や、権力や法的強制力などを持ってしても変えられなかったことが、インターネットによって可能になります。その方法は後日話しますが、僕には今、そのような未来のビジョンがはっきりと見えています。分身主義とは、僕たちの生きる環境を二度とあのような事故を起こさない環境に整備してくれるものです。何故なら、分身主義的な環境に置かれた僕たちは、必然的に、今の自分中心の意識や価値観とは違う意識や価値観に支配されることになるからです。すると、自分の利益ばかりを追求する今の貨幣経済とは違う形態の経済や政治のシステムが生まれ、著作権や工業所有権などの考え方が変わり、医療や年金や福祉の考え方や、障害者とか健常者とかいう考え方やあらゆる常識が変わり、家族や民族や国家や宗教の意識や、そしてあらゆる芸術作品や創作物にも変化が起こります。

その時、世界は自然に平和にさせられていきます。その時、僕たちは、死の恐怖さえ乗り越えて生きることになります。その時、不安や恐怖とは無縁の、穏やかな笑顔があふれる世界がやってきます。

[3.あの事故によって、心や身体に傷を負ったまま生きていかなければならない方や、遺族となった方々の心をどのようにしたら癒すことができるか？]

あの事件によって、傷を負った方は、もちろんJRの方々も含まれます。もちろん、あなたも含まれます。

さて、この最後の課題に答えることこそ、僕たちが前人未踏の分身主義の森に踏み入らなければならなかった理由でもあります。彼らの心や身体の傷を癒すには、世界中の人の心が一つになるしかありません。事故を起こした本人や団体の責任を追及して賠償金を払わせただけで、決して根本から癒されるわけではありません。分身主義は、世界中の人が分身主義者になった時に、初めて効果が現われるんです。(と言っても、別に分身主義者になったことを宣言して回る必要はありませんよ)

僕(徳永分身)はいつも自分のことを、「完全無欠の分身主義者を目指す人間です」と自己紹介して、決して「僕は分身主義者です」とは言いません。その意味は、自分が完全な分身主義者になれば、世界中の人が分身主義者(主義といっても、別に何らかの立場を主張するわけではなく、科学から真実を学んだ人が、この宇宙の万物に対して、自分のことのように大切に思う気持ちを持てる心の状態ができた人のこと)になった時だからです。

自分のことを「私は個人主義者です」と言える個人主義者はいますが、「私は分身主義者です」などと言える分身主義者はいません。その人は、分身の意味をわかっていない人です。世界中の人が声をそろえて、「私たちは分身主義者です!」と言える状態があるだけです。

分身主義者とはこの宇宙にたった一人(一つ)なんです。

僕とあなたが仲良しなのは、僕があなたと仲良しで、あなたも僕と仲良しになって始めて、僕とあなたが仲良しだと言えるものです。一方だけが仲良しだと思っている、そんな仲良しは存在しないのと同じ理由です。世界中の人の心をついでできるものは、もはや宗教でも、政治力でも、組織力でも、法律でもなく、科学が導いてくださった分身主義しかありません。それが、これから証明しようとしているものであり、それこそが分身主義の真髄なんです。

ちょっと一言

「分身主義を生んだのはあなたです!!」この意味がおわかりいただけますか!? 分身主義の森を最後まで歩いてくださったなら、この意味をわかっていたかと思う。この言葉を語っている僕(徳永分身)は、僕を取り巻く140億年分全ての原因によって動かされている媒体に過ぎません。あなたやあなたやあなたによって、語られている媒体に過ぎません。

僕は、あなた方によって、この分身主義をより多くの方にわかっていたくために努力させられ続けるでしょう。死ぬまでずっと。やれやれ、とんだ媒体を引き受け・させられてしまったものです。あなたのせいです。

い、いえ、あなたのお陰です。

3日目 人間には実感できないけれど

自己中心的とは、自分に関わりのあるものや、自分にとって被害や利益などの形で「実感」できるものだけしか、「理解」しようとしないうとである。

たった今、地球のどこかで不安と恐怖に脅えている分身さん。地球のどこかで絶望や悲嘆に暮れている分身さん。あるいは、お金を儲けることに成功してニヤリとしている分身さん。いつか世界中のみんなが「分身」の意味を理解する日が来ます。その時、彼は彼だけの彼ではなく、あなたはあなただけのあなたではなく、僕は僕だけの僕ではありません。

彼は、あなたは、そして僕は、一つになります。僕たちは部分であると同時に全体だったからです。

僕たちの脳はまだ、自己中心的なので、それが「理解」も「想像」もできないでいるんです。世界中のみんながそれを「理解」した日、この世界に奇跡は起こります!!

* * * * *

大変な事故が起こりましたね。昨日は、この分身主義の森の中で、尼崎脱線事故についていろいろ考えてみました。当事者ではない僕たちだからといって、他人事のように済ますのではなく、僕たちは、そこから学ばなければいけないことがたくさんあります。

5月9日のニュースには次のようにありました。「国土交通省で開催された第5回福知山線事故対策本部では、急曲線に進入する際の速度超過を防止するためのATSシステムの義務づけや、鉄道の運転士の資格要件等のあり方についての対策が決定され、6月末までに各鉄道事業者に具体的な整備計画を提出するよう指示した」

対策本部で話し合っている分身さんたちは、あのような事故を二度と起こさないように一生懸命に話し合っているのだと思いますが、ある意味、自分以外のどこかに責任の原因を見つけ出すことで早くこの事故にケリをつけて、早く解放されたいのかもしれない。

だけど、根本的には何一つ終わっていません!!

本当にあのような事故を二度と起こさないためなら、彼らもまた、「自分たちがあの事故を引き起こしました」と、真っ先に反省すべきなのです。彼らは、責任の原因を探し出し、自分以外の人たちにたくさんの要求をしていますが、自分には何一つ要求していません。

あなたはどうでしょう!? あの事故を教訓にして、自分自身を見つめ、自分に何かを要求しましたか?

僕たちはみんな、今の僕たちを取り巻く個人主義的(=自己中心的)環境、媒体です。対策本部の人たちもまた、例外ではありません。個人主義的環境が、対策本部の人たちを媒体にしてあのような決定を下したとも言えるわけです。個人主義的環境に置かれた僕たち媒体が取られる行動の特徴は、自分は常に正しい側であるというスタンスに立つことです。自分中心に全ての判定は下されるわけですから。

だから、誰もが自分を柵の上に上げて、あたかも自分はいつも被害者のような顔をして物を言います。

5月10日のニュースでは、次のようにありました。

「JR福知山線脱線事故以来、JR西日本の運転士などに対する暴行や暴言が相次ぎ、安全確保に支障を来(きた)しかねないとして、同社の3労組が10日、利用者らに協力を求める声明(せいめい)を出した。西日本旅客鉄道労働組合などのまとめによると、7日までに社員へ

の暴行が6件、暴言が160件あり、線路内への自転車放置、レール上の置き石も計18件に。4月28日には大阪駅で運転士が後ろから足をけられ、同月30日には三宮駅で車掌が、2人組の男に「人殺し」となじられ足をけられた」

これも同じです。利用者もまた、自分たちは常に正しい側で、被害者側であるというスタンスに立っています。

先日、中国国内の反日デモで暴動を起こして、日本人経営者の建物を破壊した人たちも、自分は悪いことをしているなんて意識はありません。彼らはむしろ、自分たちは正しい側だし被害者側であるというスタンスに立って行動して(させられて)います。個人主義的環境が、僕たちの脳内にそのような思考回路を作っているわけです。

事故が起きた約3時間後に、その事故を知りつつも懇親目的のボーリングをしていたJR西日本大阪支社天王寺車掌区の区長分身さんや職員分身さんたちも、そして、それを知ってここぞとばかりにJR西日本を叩き、視聴率稼ぎの報道をするマスコミの分身さんたちも、みんなみんな個人主義的環境にその行動を取ら・されている媒体たちなんです。そのような個人主義的環境が作る様々な偶然(結果から見れば必然でしたね)が、複合的に重なり合って、あの脱線事故は引き起こされたと言っても過言ではありません。

職員分身さんたちが非常時にボーリングをしてしまう行動も、マスコミの分身さんたちがそれを叩く行動も、そしてあなたや僕の日常の物の考え方や行動も、僕たちを取り巻く環境に彼らやあなたや僕が取ら・されているものですが、その彼らやあなたや僕という媒体を操っている環境こそが、あの尼崎の事故を起こした張本人なんです!!

僕たちは、自分たちを取り巻く環境に目をやって、自分たちがどのようにして行動というものを取らされているのかということを経験的に理解しない限り、永遠に自分を柵に上げて相手を責め合うだけです。

「たった一つの事故は、みんなが加害者となって引き起こし、みんながその事故の被害者である」

昨日のこの言葉を、噛み締めてみてください!!!

個人主義的環境が分身主義的環境に変わらない限り、どんなに立派なことを話し合おうと、どんなに鉄道事業者たちに厳しい要求を突きつけようと、僕たち媒体は、同じような失敗を何度でも繰り返してしまいます。それはある時には違う形の事故となって現れ、ある時にはモラルの欠如した行為や傍若無人な振る舞いとなって現れ、ある時には不正行為や犯罪や戦争となって現れます。

先日、僕(徳永分身)が歩道を歩いていたら、向こうから自転車に乗ってやってきた20代後半くらいの分身さん(男性)が、コンビニの袋に入ったゴミを、ポーンと植え込みの中に投げていきました。僕には、理性的規制が働いて、紙切れ一枚でも道に投げ捨てることはできないのに、どうして彼にはそんなことが、いとも簡単にできるのでしょうか? それは、僕を取り巻く環境と、彼を取り巻く環境がほんの少し違うからです。僕の脳内には、高校の山岳部の時に、ゴミは紙切れ一枚でも捨ててはいけないことを厳しく埋め込まれています。そして、それを実践すると(=規制が働く)脳内に幸福感の神経伝達物質が流れるような回路が出来上がっているからです。

彼の行為も、僕たちを取り巻く環境が分身主義的になれば、次第になくなることです。と言うより、僕たちを取り巻く環境が分身主義的にならなければ、永久になくならないものです。いくら彼一人を追及しても、彼のような人を何人注意しようとも、あるいは町中に立派なスローガンのポスターをベタベタと貼っても無駄なんです。何故かと言えば、彼を注意する人の行動も、町中にスローガンを貼る人の行動も、みんな自分だけは正しいというスタンスに立つ個人主義的環境に、取らされている行動に過ぎないからです。

自分の行動が環境にやらされているということに気づかない限り、いつまでもやらされているだけの状態であり、そこから飛び出せないからです。同じ穴の貉に過ぎません。

昨日歩いていただいた分身主義の森では、目には見えない環境とのそのような関係性を発見していただきたかったわけです。

今日は、早速、分身主義の森を突き進もうと思ったのですが、だけど、もしかしたら、森に突入したばかりでつまづいてしまった方もいるのではないかと心配しています。

「一つの事故の背景には、140億年間の全ての現象が、その原因として関わり合っている」というようなことを言いましたが、それは決して大雑把なことを言っているのではありませんよ。むしろ緻密に(緻密過ぎるくらいに)事故の原因を辿って行った先に到達した結論なんです。その誤解を解いておくために、いくつかの例を挙げて説明しておきます。

水の入ったコップの中にあなたの人差し指を入れたとしたら、人差し指の体積分、間違いなく水位は上昇しますよね。それははっきりと目で確認できます。もし、その時、水が表面張力で盛り上がっているくらいに満たされていたら、指を入れた途端に水はあふれ、場合によってはズボンやビショビショに濡らしてしまうような「被害」に遭ってしまうかもしれません。あなたは「被害」という形で、その変化を実感できます。

では、お風呂の浴槽に張った湯で同じことをやってみたらどうでしょう。あなたの可愛い人差し指くらいでは、水位の上昇は実感できません。それでは、海に人差し指を入れたらどうなるか想像してみてください! 世界中の海面は、あなたの人差し指の体積分、確実に上昇するはずなんです。何故なら、世界中の海は全部つながっているからです。だけど、うーみーはあ広いなあ大きいなあだし、常に波でうねっているんで、世界中の誰一人として、あなたが人差し指を入れたことなど気づきません。

でも、人間が、その事実を実感できないからといって、その変化を理解しないのは、明らかに間違っていますよね! ものすごく精度の高い計測機器があったなら、その変化を計測できるはずなんです。自分が実感できないからといって、また、自分に「被害」あるいは「利益」がないからといって、その影響を理解しようとしたくないのは、あまりにも自己中心的な想像力だと言わざるを得ません。

実は、それこそ大雑把な感覚なんです。

もう一つ、例を挙げます。

僕(徳永分身)は、将棋は駒の動かし方くらいしか知らないのであまり好きではないんですが、囲碁は大好きです。囲碁というのは簡単に言えば陣地取りで、より多くの陣地を取った方が勝ちとなります。効率性を考えて、だいたい四隅から打っていくものなんですが、初心者の頃は、今自分が打っている場所の石を取られないようにすることや、相手の石を取ることで精一杯で、とても盤面全体を眺める余裕な

どありません。

子供の頃、父親に教わりながら囲碁を打っていると、耳にタコができるくらい、「大局を見る！」と言われました。あまり何度も言うので、「うるさいなあ、そんなことわかってるよー。わかってるけど、今ここを何とかしなくちゃ、この石が取られちゃうんだよー。くやしいなー」と思っていました。実は少しもわかっていなかったんです。今打とうとしている一手を最大限に活かすためにも、大局を見る必要があったんです。でも、無理もありません。その意味を理解し実践するためには、経験が足りな過ぎました。プロの棋士なんかは、「千手先を読む」などと形容されますが、それはまんざら嘘ではなく、定石（昔から研究されてきて最善とされる、決まった石の打ち方）を覚え、経験を積むことで実際にできるようになります。

大局を見るときは、盤面の右下隅の一手を打つ時、まだやりかけになっている左上隅や、将来的に埋められていく真ん中に与える影響についてや、それこそ盤面全ての影響を考えて一手を決定するということです。どんな一手も、その後の模様には必ず影響が出てくるからです。何故なら、一つの盤上では全部つながっているからです。

盤面全体を先程の海にたとえると、右下隅の一手を打った時が、人差し指を海に入れた状態と考えてもいいと思います。人差し指を入れたことで世界中の海には間違いなく何らかの変化（影響）が起きるのですが、それが自分（あるいは自分たち人間）に関係することとして実感できないので、それを理解しようとしなないのは、あまりにも自己中心的だと思いませんか？

それは、「私は、あんな系の人たちなんか、ゼーンぜん興味ないの。悪いけどお」などと、自分と関係のない人を簡単に切り捨てることのできる人たちや、自分の恋愛や家族のことに夢中で周りが見えなくなっている人たちと同じ状態です。

また、子供の頃、「うるさいなあ、そんなことわかってるよー。わかってるけど、今ここを何とかしなくちゃ、この石が取られちゃうんだよ」と思っていた自分は、「世界平和なんてわかってるけど、自分の身の周りのことで精一杯だよ」とか、「自分の頭の上のハエも追えないで、何が世界平和だよ」などと考えている人たちと少しも変わりません。四隅の死活にこだわる（＝自己中心的な狭い視野で見ている）せいで、今打つ一手が、その後の模様に影響を及ぼすことが理解できないし、想像することができない状態と同じです。本当は、今の一手（自分の幸福）にこだわるためにこそ、大局（世界平和）を見る必要があったのにです。

みんなみんな自己中心的な環境から、浮かび上がっている思考形態ですよ。

福知山線事故対策本部の分身さんたちや、利用客の分身さんたちが、四隅の死活にばかりに目が行って、この宇宙全体を見渡せないのも同じです。僕たちは、ビッグバン宇宙という一つにつながった碁盤上で、その一手を打つわけです。最適な一手を打つためには、地球どころか、宇宙全体を見渡せなくてははいけません。そのためには、自己中心の檻の中に囚われの身になっている自分に気づくことが第一です。そして、僕たちをそこから救い出してくれる科学に注目することです。自然界中心の科学こそ、僕たちを自己中心の檻から解放してくれませう。そしてそして、その科学が導いてくれた分身主義こそ、人類に、ユートピアへと通じる入り口を指し示してくれているんです！

もう一度、ここまでのことを復習してみましょう。世界中の海は全部つながっているから、たとえあなたがそれを実感し理解できなくても、あなたの人差し指で確実に海面は変化します。これはいいですか？

では、次の言葉はどうですか？ 碁盤は一つの盤上で行われるゲームだから、配置される石一つ一つは全部関係し合っていて、あなたの一手は確実にその後の局面に影響を与える。これもいいですよ。キーワードはどちらも「一つにつながったステージ」です。

では、ステージをこのビッグバン宇宙に移してみたらどうでしょう。

あなたがこの宇宙の片隅に存在するという事は、あなたの体積分、確実に空気を押し広げています。つまり、今のこの宇宙は、あなたの体積分押し広げられた形の宇宙です。そうですね!? もしあなたが消えたとしたら、今の形をした宇宙ではなくなります。だから、あなたは今のこの宇宙の部分であり、全体なんです。そしてまた、100年前に100万年離れた所で起きたことは、確実にその後の局面に影響を与え、それが原因の一つとなって、その100年後にあなたは生まれた。これも理解できるし、想像もできますよね。何故なら、今考えたように、この宇宙というたった一つのステージ上では、全部関係し合っているからです。

「一つの事故の背景には、140億年間の全ての現象が、その原因として関わり合っている」

この言葉が、決していい切減でアバウトで大雑把なことではないことがわかっていただけましたか？ 僕たち人間は、自己中心の檻の中に囚われているせいで、自分や、自分たち人間に関係することや、実感できることしか理解できません。でも、僕たちに実感できることなんて宇宙のごくわずかのことなんです。

例えば僕たちはこの140億歳の宇宙に住んでいながら、時間の感覚はと言えば、せいぜい一時間、一日、一週間、一年といった単位から、あるいは長くても人生設計に必要な70年や80年くらいしか実感できないで日常を暮らしています。例えば犬の嗅覚は、人間の嗅覚の1000倍から1万倍も優れていて、残されたニオイを嗅いだだけで、そのニオイの主が「いつ頃、どちらの方角から来て、どちらの方角に去って行ったか」といった情報を得ることができますが、人間にはニオイの主の存在すら実感できません。だけど、実感ができないからといって、ニオイもそのニオイの主も存在しないわけではありませんよね。僕たち人間に実感できることなんて、宇宙のごくわずかのことです。でも人間は、それを理解力と想像力と感受性でカバーすることができます！

> 分身主義を知っていただくためには、理解力と想像力と感受性が必要ですが、その能力の優れた人が数人いれば

> この環境は変化し、環境が変われば環境の媒体である僕たちの言動は自ずと変化します。

昨日の森の中で拾っていただいたこの言葉の意味は、自分中心に物事を「理解」したり、「想像」したり、「感受」したりすることを指しているのでは決してありません!! まったく、その正反対です。そのような人が何万人、何億人いようと、環境は今まで通りです。

ここで言う理解とは、人差し指を海に入れたら、世界中の海の水位が人差し指の体積分だけ上昇することを理解するというような意味の理解です。これは、自分中心に物事を捉えようとする僕たち人間には実感できないものですから、論理的に考えて「理解」するしかありま

せん。それができる人のことを「理解力がある人」と書いたわけです。

ここで言う想像力とは、自分を取り巻く日常の利害関係などを想像する力ではありません。大っ嫌いなAさんとの関係をそのまま維持していた方が、自分の将来にとっては得になるかどうか、などというちっぽけなことに動かせる想像力ではなく、140億年の旅をしてきた宇宙と自分との関係を想像できる力です。

感受性の意味も、自己中心的な感受性のことを言っているわけではありません。自己中心的に感受性が強い人はたくさんいます。ちょっとした悪口を言われて傷つく人は、確かに感受性が強い人に違いありませんが、ここではそんな自己中心的な感受性のことを言っているのではありません。傷ついてしまった他人の心を、自分のことのように感じることができる感受性を持った人のことです。その感受性は、人によってかなり違いがあるようです。他人の傷も自分の傷のように感じる人は、先程の「実感できない水位の上昇」を想像し、論理的に考えて理解し、「体験」することができる感受性の持ち主です。

そのことを、昨日は「分身主義を知っていただくためには、理解力と想像力と感受性が必要」と言ったわけです。

その後続く「数人の人がいればこの環境は変化する」という言葉の意味は、今、具体的に言ってしまうと、その人たちがホームページを作ってくださいを指しています。

世界を平和にするためには、何らかの組織を作って抗議行動をしたり、法律を改正したり、政治を改革 することなんかでは絶対に無理です。そんなことで世界を平和にできるなどと思いがっている人がいる限り、絶対に無理です。彼らは相変わらず自己中心的な檻(=環境)の中で、その檻(=環境)にも気づかずに、そのような考え方を浮かび上がらせ・られ、行動を取らせ・られているだけだからです。

世界が平和になりあなたが幸福になるための近道は、「理解力と想像力と感受性の優れた」数人の人が、インターネットを通して、自分自身が、分身主義者を目指すことを公言することだけです。そのような方法しかありません!!

僕(徳永分身)が分身主義を叫んでいる間は、決して分身主義は広まりません。僕が分身主義を叫ぶ声は、自己中心的な檻に囚われの身の人々には、決して届きません。分身主義は、その檻に気づき、その檻の中から解放されたいと願うあなたの口から語られた時、初めて説得力を持ち、人は素直に耳を傾けてくれるでしょう。

あなたこそ、人類の本当の英雄になる方です。

あなたこそ、僕たち分身みんなの誇りです。

あなたこそ、僕たち分身みんなの自画自賛です!

ちょっと一言

あなたがこの宇宙の片隅に存在するということは、あなたの体積分、確実に空気を押し広げています。それがこの広大な宇宙に対して、どのように影響を与えているのかを、僕たち人間が、その「利益」や「被害」という形で実感できないからといって、それを理解しないのはあまりにも大雑把で、あまりにも自己中心的過ぎるという意味をわかっていただけでしたか。

その影響を想像し理解する力と、それを感じる力を持ったあなたであれば、分身主義はあなたの中に、それ程、抵抗なく入り込むことができるはずですよ。

地球の裏側にいるA分身さんが死んだ時、彼の家族や友達は悲しむことでしょう。あなたはどうですか? 今のあなたは、自分に影響がなくても、自分が実感できなくても、A分身さんの存在を理解できるし、彼の死を悲しむ想像力を持っていますよね。広大な宇宙に散らばっている、まだ見ぬあなたの分身さんたちの存在を、常に理解し、想像できますよね。

それができたら、次は「死」について一緒に考えていきましょう。

あなたは、彼(A分身さん)の家族や友達と同じように、泣くことでしか悲しみを乗り越えられないのでしょうか? みんなで悲しみ合うことでしか、死の恐怖を乗り越えられないのでしょうか? そもそも、死とは、悲しんだり恐怖したりしなければならぬものなのでしょうか?

安齋育郎分身さんが、人間が死んだらどうなるかということを経験的・数量的に記述するという画期的な試みをしてみせました。それによってわかった驚くべき事実を、あなたに知っていただきたいと思っています。

でも、その前に、あなたの理解を助けるためにも、まだまだこの鬱蒼とした分身主義の森で経験してもらわなければならないことがあります。だから、その話は最後のお楽しみにとっておきます。

4日目 みんな錯覚の中を生きている

我々の現実とは、脳が記憶に基づいて見ている幻覚のことである。(脳神経学者、ラマチャンドラン分身さん)

僕たちはみんな、その人の記憶によって歪められた現実を見ている。

しばらく、「尼崎脱線事故」を考えることで、分身主義の概観を眺めていただきました。僕たち人類が経験したこの悲しみから立ち上がるためにも、また、憎しみや怒りや不公平感のない世界を作るためにも、もたもたしてはいられません。早速、分身主義の森を進みます。

えっ、今、こんな声が聞こえました。

「泣いたり、憎み合ったり、怒ったり、たまには喧嘩したり、それが人間じゃないの。それを排除して、いつも仲良く微笑み合ったり笑い合っているだけの人間なんて逆に気持ち悪いよー」

では、その人に質問します。「あなたが(現時点でのあなたが)今おっしゃった言葉は、『人と人が殺し合う戦争や殺人事件がたまにはあるのが人生だもの。それがまた人間らしくていいんじゃないの?』という言葉と同じだということを理解しているのですか?」

あなただって、戦争や犯罪となると否定すると思いますが、それなのに「戦争や犯罪は否定するけど、戦争や犯罪の芽は大切に育てましょう」などという矛盾したことを言っているんですよ。

でも、その気持ちもわかります。喜怒哀楽があるのが人間だから、人間からある種の感情を排除するという事は、人間の脳に感情を制御するようなチップなどを埋め込んでロボット化するしかありません。だから、その人には、僕の言葉が「人間を非人間化しよう!」などという言葉に聞こえてしまうのかもしれない。

もちろん、僕はそんなことは一切言っていないので安心して下さい。僕は、「人類が今まで経験してきたような憎しみや怒りや不公平感のない世界を作るため」と言うべきでした。つまり、憎しみや怒りや不公平感は温存していても、分身主義的な環境の中では、それは今までと同じ憎しみや怒りや不公平感ではないということです。この言葉の意味は今わからなくても、分身主義の森を突き進み、出口付近にまで到達した頃にはきっとわかっていただけるので、覚えておいてくださいね。

戦争や犯罪を肯定している人は、この世には一人もいないと信じています。たとえ武器を製造している人たちも、戦争や凶悪犯罪の映画が大好きな人たちも、それに、実際に犯罪を犯してしまった人たちも、現在、戦争に参加している人たちも、やっぱり戦争や犯罪は否定していると思います。だから考えて欲しいと思います。どうしたら、戦争や犯罪をなくせるかを。

自分たちは戦争や犯罪を否定していながら、実際は「戦争や犯罪の芽を大切に育て」てしまっているわけだから、どうしたら自分をロボット化せずに戦争や犯罪をなくせるかを。あなたも、分身主義の森を抜けるまで、この答えを考えて考えて考え抜いておいてください。

それでは、出発しましょう。でもその前に、今日もちょっとこの場をお借りして、僕たちの分身仲間さんたちに挨拶だけしておきます。

宇宙に散らばっている分身さん、いかがお過ごしですかー!? こちらは、平均時速10万7280kmという猛スピードで太陽の周りを公転している地球に、落ちこまないように必死でへばりついている分身仲間の徳永分身です。この宇宙に存在している僕たちは、みんなみんな、約140億年前に突如生まれたビッグバンという小さな火の玉が、ものすごい勢いで膨張し、それによって温度が下がると共に、内部の素粒子が様々な反応し合う過程で作り出されてきた分身同士ですよー。この科学的真実を確実に記憶した僕たちは、この先も、美しく歪められた現実を見ていけそうです。分身主義という現実ですよー。

さて、この分身主義の森に入った1日目に、分身主義がこの宇宙の全てのものを「実体」と「幻想」に分ける理由を聞いていただきました。覚えてますか?

科学は、この宇宙の全てのものを、例えば病気や遺伝と呼ばれている現象も、また、雨や雪や地震や竜巻や台風といった自然現象も、物質に還元して理解しようとするものでした。つまり、科学とは唯物論という一元論なのです。科学は、人間の脳の現象もまた物質に還元して理解しようとする。しかし、分身主義はその人間の脳内の物質が作り出す現象に対してだけ「幻想」という名前をつけたということです。それは、名前をつけることで、その正体を科学的にはっきり解明させる必要があったからです。

・幻想 人間の脳の記憶と外部からの刺激との相互作用によって作り出される全ての現象。認識、連想、想像、思考、感情、意思 など。

ここまでいいですね。また、「幻想」は「錯覚」と言い換えても差し支えない、とも書きました。つまり、僕たちの脳は、実体をありのままに認識することはできない、という観点から、認識、連想、想像、思考、感情、意思、といった脳の作用によって作り出されるあらゆる現象は、全てその人の「錯覚」(事実とは異なるが、そうであるかのように思うこと)である、と言っているわけです。

1日目に検討したように、僕たちは、実体をありのままに認識することは決してできません。たとえて言うならば、僕たちは、いろいろな角度から実体と思しき物に五感という名の波長を飛ばしてみ、跳ね返ってくる波長の変化によってその実体の存在や特徴を「推測」しているだけなのです。(このように書くと、自分の意思で五感の波長を飛ばしているような感じになってしまいますが、実際は、これらのことは全部、自分の意思でやっているわけではありません)

誰一人として素粒子を見た人はいませんが、どうしてそれが存在しているとわかるかと言うと、実験上の数値として検出されるから、存在しているに違いないと推測できるだけの事です。太陽を認識する場合でも同じです。僕たちは、「確かに太陽は空に存在している」と信じていますが、正しくは、「いろいろな経験から総合的に見て、太陽は空に存在していると推測できる」と言うべきなのです。

僕たちは、目に見えているからその形のものはその形のまま存在している、などと安易に考えますが、ではスクリーンに映った映像などはどうでしょうか? スクリーンのどこを探しても高倉健分身さんはいません。映画という娯楽は、人間の目の錯覚を利用しているわけです。

その反対に、僕たちは目をつぶっても太陽の存在を感じます。それはどのような方法で認識しているのでしょうか? まさに、五感から得られる情報(目をつぶっても強い光や暖かさは感じる)を総合的に分析した結果、今日は太陽が顔を出しているに違いないと推測できるわけですよ。もちろん、総合的な分析は瞬時に「無意思」に行なわれているわけですが。

いいですか!? 重要なことなのでもう一度繰り返します。

僕たちは実体をありのままに認識することは決してできず、僕たちにできるのは実体の存在や特徴を、経験によって推測することだけなんです!! では、この「経験」とは何でしょうか?

経験とは記憶を積み重ねることですよ。だとすれば、実体を見たり触れたりした時に脳内に浮かび上がるあらゆる現象(認識、連想、想像、思考、感情、意思 など)は、つまりこれらのあらゆる錯覚は、脳がその人の「記憶」に基づいて(=経験を通して)見

ている錯覚である、としか言いようがないというわけです。

だからと言って、素粒子や太陽は、僕たちの単なる錯覚で、本当は存在していないなどと言っているわけではありません。僕たちが認識している素粒子や太陽は、決して素粒子や太陽そのものではない、と言っているだけです。

身近な例でもう一度説明します。例えば、僕たちは目の前にりんごが置かれたら、それをりんごと認識します。それは誰が見てもりんごだし、確かにそこに存在していて、手を伸ばせば掴むことさえできるので、それは決して錯覚なんかではない、と僕たちは考えます。また、そのりんごを齧って甘いとかすっぱいとか認識するのは、錯覚なんかではなく、誰が齧っても甘いとかすっぱいとか認識する確実なものだ、と思います。でも、味覚というものは、本当に誰でも同じでしょうか？ 違いますよね!? りんごは認識された時点で、その人の錯覚(幻想)の領域の物になります。

では、口の中に入れられたりんごは実体でしょうか？それとも幻想(錯覚)でしょうか？

りんごは口の中に入ると無意識で咀嚼され、消化され、化学変化によって栄養として取り込まれ、やがて余分なものは排泄されます。その一連のふるまいは、実体の領域で起こった出来事ですが、もし、りんごを脳が認識しようとして、「ああ、おいしい!」と感じたり、あるいは、今のように咀嚼・消化・栄養・排泄などの用語を用いて、その出来事を「理解」しようとした場合、幻想(錯覚)の領域に入ります。

この僕(徳永分身)とあなたが同一のりんごを見て認識したりんごは、それぞれお互いの記憶によって歪められた「りんご」を認識しているわけで、その時点で、決して同じ物ではなくなっています。

りんごが嫌いな人と、りんごが大好きな人と、りんごによって初恋を思い出す人が同一の「りんご」を見た場合、みんな違う記憶によって歪められたそれぞれの「りんご」を見ているわけです。

僕があなたに、「昨日おいしいりんごを食べたよ」と言った時、「そう言えば、私はここ十年くらいおいしいりんごにめぐり合っていないわ」などと話が通じるのは、それは「りんご」という言葉に対して描くお互いのイメージが、近似しているからです。人はそれぞれ、言葉に対するお互いのイメージが近似しているので会話を可能にしている、と言えます。

今、「認識」が錯覚であることを説明してきましたが、「認識」以外のもの、想像、連想、感情、思考、意思などについても、それが錯覚かどうか、一つ一つ検証してみましょう。

例えば、フランスの旅行記などを読んでいて、あたかも自分がフランスを歩いているように想像することがあります。「想像」が錯覚(事実とは異なるが、そうであるかのように思うこと)であることは、容易に理解できます。

また、その際に表記されていたフランス料理の名前から、似たような名前のフランスの文豪を連想して、そこから今度は彼の小説内に出てきた船旅の様子などを連想したりすることもあります。どこにも表記されていない船旅のことを考えてしまう「連想」も、また錯覚であることはわかります。

その旅行記に書かれていたベルサイユ宮殿の歴史の部分を読んでいて、悲しい気持ちになったり、華やかな気持ちになるのは感情ですが、どこにも悲しいとか華やかなどとは書いていないのに、その人固有の反応をしてしまう「感情」というものが錯覚であることもわかります。

「思考」はどうでしょうか？ それも錯覚だと言うのなら、分身主義の思想もまた錯覚の産物であり、それ自体も単なる錯覚であるということになります。分身主義はそんな程度のものでしたんですか？ ということになります。

そうです。分身主義なんてその程度のものでしたんです。分身主義に限らず、仏教だってキリスト教だってイスラム教だって、錯覚の産物です。錯覚だから、僕(徳永分身)がアルツハイマーにでもなれば、僕には分身主義は理解できないものになりますし、分身主義はまだ誰にも受け継がれていませんので、分身主義という錯覚は、この宇宙から消滅します。でも、錯覚には実体を変えるほどの力が潜んでいたことは、既(すで)に述べましたよね。それこそが、宗教の力の源でもあります。

「意思」だって、僕たちは自分の行動は確実に自分の意思で行なっていると信じていて、それは決して錯覚なんかではない、と思っています。だけど、実は、人間の意思というのは、自分で作り出しているものなんて何一つないことは考えればわかります。

例えばあなたが「よし、明日からダイエットをするぞー!」とか、「被災者に義捐金を送ろう!」などという意思を持ったとします。それは、何にも頼らず、つまり何の因果関係もなく自発的にあなたの頭に浮かんだことでしょうか？ あなたの脳を取り巻くたくさんの情報(=刺激)によって、あなたは、あなたの脳内に、それらの「意思」を浮かび上がらせられてしまったただけだということは容易に理解できます。ダイエットという言葉や義捐金という言葉さえも、あなたが作り出したものではないし、あなたが考える時に使用する言語(日本語)でさえ、あなたが作ったものではなく、植え付けられたものです。あなたの脳に植え付けられた日本語は、あなたの脳を日本語によって何かを考えてしまうような脳にしているんです!! その証拠に、あなたはドイツ語で何かを考えることはしません。(ドイツ語が堪能でしたらゴメンナサイ)

言葉がインプットされたことによって、あなたの脳は、何かを考える脳になってしまったとも言えます。

それによって、あなたがご飯を一膳に減らしたり、テレビ局に義捐金を送ったりしたら、それはやはり、あなたの脳を取り巻く環境に、あなたは行動をさせられたということになるわけです(だから、僕が書いているこの文章は、僕を取り巻く環境に僕が書かされているわけです) 意思もまた脳に浮かび上がる錯覚であり、行動はその意思という錯覚によって作られていたんです。

ということで、僕たち人間の脳に浮かび上がる幻想(認識、連想、想像、思考、感情、意思 など)は、全て錯覚であるということはい理解していただけましたでしょうか?!

でも、僕たち人間の脳に浮かび上がる幻想(=錯覚)は、1日目に見たように、火星探査ロボットを作ったり、その着陸を成功させたり、また、目に見えない素粒子の存在を推測したりすることができます。これはどう理解したらいいのでしょうか？ その答えは、「予備知識8・精神病とは何か」に書いています。

> 僕たちの脳が何かを認識するということは、言い方を換えれば、そのモノと自分との関係や、距離（物理的な距離に限りません）
> などを知ることです。そのモノと自分との関係や距離を正確に測るためには、**フィードバック**という作業が必要になります。
>（フィードバック：行動や反応の結果を原因に反映させてより適切なものに調節していくこと）

僕たちはテーブルの上に置かれたコーヒーを飲むために手を伸ばし、コーヒーカップの取っ手を適切な握力で掴むという行動一つにしても、とても難しいことを成功させていたんですね。忘れての方は、もう一度、「予備知識8・精神病とは何か」を参照してみてください。僕たちは一瞬たりとも休まずに、フィードバック作業をしながら生きているのです。

何故フィードバック作業をしてしまうのかと言えば、それは、脳内に記憶という「反応の道」ができていからなんです。記憶については、いずれお話しすることになるので、この話はこれ以上踏み込みません。僕たち人間が、記憶という「反応の道」によって、何度もフィードバックという「錯覚と実体とのやり取り」を繰り返させられているうちに、この自然界で正確に機能するモノ（実体）が、自ずと生み出されてきたというわけです。

ちなみに、科学とは、人間の脳が、自然界とのフィードバックを成功させながら学んでいく学問のことです。（正確に言えば、人間の脳が自然界とのフィードバックをさせ・られながら、学ばさせ・られるものに対して、「科学」と命名しているわけです）

科学が一つの法則を発見するまでは、普通、フィードバック作業（＝実験）を何百、何千回、あるいは何万回と繰り返します。

ちなみに、迷信や占いなどを信じてしまうような人たちの現実把握も、彼らなりのフィードバック作業によって行なわれます。例えばをしたら が起きたので、今度はその を にしたら、その現象がなくなった、といったようなものです。しかしこれは、偶然の一致や、「こうであって欲しい」という「思い」が行なう「後づけバイアス」がほとんどです。（「予備知識5・霊は存在するか（1）」参照）そしてまた、真偽を確かめるために、何百、何千回と実験を繰り返すわけではなく、それに合致しない場合は数に入れられない、というとても自分の都合に合わせたフィードバック作業です。それらは、科学的に見たらかなり不正確なフィードバック（現実把握）なので、つじつまの合わない現象もたくさん起こるはずですが、そのような不都合な現象は、もちろん、その人なりの「バイアス（偏り、重みづけ）」によって取り消されます。

ここで少し不思議なことに気づきませんか？

精神病と言われる人たちは、正常と言われる僕たちから見れば、現実から掛け離れた「錯覚」の中で生きていると思われていますが、僕たちだって「錯覚」の中で生きている限り、精神病と言われて人たちと、全く変わりなかったということです。

長年、神経症などの治療に携わってきた黒川昭登という分身さんが書かれた（科学的に正確に言うと、彼を取り巻く環境の媒体となって彼が書かされた、となりますが）『うつと神経症の心理治療』という本に、名言を見つけました。ここでは、その中の二つをご紹介します。

「我々は現実を認識して生きているが、はっきり正確に認識しているのか、と改めて問われると、一般人の現実認識も、そんなに正確ではないということがわかる。（中略） にもかかわらず、自分の認識能力に疑問を持つ人は、きわめて稀だというのも事実である」

「人は、自分は正確に環境に反応していると信じている。だが、そうではない。人は、環境そのものに反応しているのではなく、環境についての『自分の知覚』に反応している。そして知覚は自己の主条件的条件に左右される。だから、人によって感じ方も違ってくる」

精神病と言われる人たちは、現実とのフィードバックが正確にできなくなった人のことだと言えますが、ここで言う「正確」とは、単に、その社会における大多数の人に共通する認識という意味に過ぎません。ここまで一緒に歩んでくださった方には、そのことは理解していただけたと思います。大多数の人と同じ現実認識のフィードバックが正確にできなくな原因は、二つのことが考えられます。

一つは器質的な原因。つまり、薬物中毒や、脳障害などの身体的原因が明確な場合。もう一つは、心因的な原因で、心に強いストレスや、強い不安や恐怖などを抱えてしまった場合です。

同じ環境に置かれても、その時受けるストレスや不安の度合いは、人によって違います。感受性が強い人、肉体的・精神的に弱っている人、そういう人にはちょっとしたことで強いストレスになってしまうのは当然のことです。

僕たちは日常生活においても、心に何かこだわりがある場合、現実とのフィードバックが正確にできなくなり、通常の行動が破綻してしまう場合をいくつも経験しています。例えば、車の運転をしていて助手席の人に「大丈夫？」などと言われると、普段は慎重に走っている狭い道でも何故かスピードを出してしまい、壁にぶつけてしまったりします。これは、過小評価という一種のストレスを受けて、大きな自分を見せようとして、距離感をつかさどる視覚情報を無視する（壁を見ない）ような大雑把な行動をとってしまう例です。

つまり、ストレスを回避しようとするのが、かえって現実とのフィードバックを正確にできなくなる状態を作り出してしまい、余計に悪い方向へ突き進んでしまうわけです。

精神病と呼ばれている現象は、ストレスや不安などを介して、このように現実との誤差がどんどん開いて行き、それがますます悪循環となり、ついには現実の中で生きること（現実とのフィードバック）を止めてしまう状態だと考えれば、つじつまの合う理解ができそうです。ここに、僕（徳永分身）が「精神病は病気ではない」と主張する根拠があります!! 僕たちはみんな錯覚の中を生きているのに、一方を異常（病気）、一方を正常（健康）と決め付けるのは、あまりにも非科学的だからです。

そのいい例が、オウム真理教や統一教会という特別の錯覚の中を生きていた人たちに対して、僕たちは彼らを異常とみなしました。あなたは、「だって、彼らは洗脳されていたのよ」と言うかもしれません。そう、あなたがお考えのように彼らは洗脳されてしまっていたんです。でも、あなたはご自分が洗脳されていることにお気づきでしょうか？

僕たちもまた、何物かの洗脳と無縁では生きれない存在ではないでしょうか？ 彼ら（オウム真理教や統一教会の人たち）には、僕たちの異常さや、この社会にたっぴりと洗脳されている僕たちの姿が、はっきりと見えているはずですよ。

戦時中などは、国を挙げて大いなる錯覚の中生きていました。今から考えれば人殺しを奨励する異常な社会かもしれませんが、当時

はそれが正常な状態で、戦争に反対したりするような人は異常(=非国民)扱いされました。と言っても、人殺しを奨励する社会が異常で、現在が正常と言っているわけではありません。戦時中ではない現在の人々が、人殺しを否定する錯覚の中で生きているというだけのことです。

だけど僕は、人殺しを奨励する錯覚を生むような社会で生きるよりも、人殺しを否定する錯覚を生むような社会の中で生きたいと思うんです。

それは当たり前のことですね。人殺しを奨励する社会では、僕たちはいつ殺されるかわからない恐怖の中で生きなければならないんですから。

何を言いたいかというと、僕たちは誰もが錯覚の中で生きているという大前提から始めない限りは、オウム真理教の犯してしまった事件の原因や、戦争の原因や、犯罪が起きる原因や、先日の尼崎脱線事故や、精神病と呼ばれる現象を起こす原因を正確に理解することはできないということです。そして、正確に理解できない限り、それらの悲劇をいつまでも繰り返すことになるということです。

オウムのような悲劇や、戦争の悲劇や、悲惨な犯罪や、悲惨な事故などがあるたびに、人々が必ず口にする言葉がありますが、あなたもその言葉を思い浮かべることができると思います。

二度と繰り返してはならない。

決してこの事実を忘れてはならない。

でも、やっぱり繰り返してしまいます。人々はどうしてもっと根本の原因を知ろうとしないのでしょうか？ あなたはどうですか!? その原因を自分の中に探ろうとしますか？ 事実を表面的に捉え、自分以外の誰かや何かに責任を探したり、感情的に歎いているだけでは、そこから何一つ学んでいないのと同じです。科学的な自己探究を深めることによって、誰もが分身主義に辿り着きます。分身主義は、僕たちの錯覚を生むこの土壌をきちんと耕してくれて、悲劇を二度と繰り返さないような錯覚を生む土地(環境)にしてくれるものです。

僕たちは誰かに責任をなすりつけて嘆いてばかりいないで、土壌を耕すために自ら鋤を取るべきだったんです。

どうですか？ 分身主義の森の中に踏み込んだ気分は？ 歩きづらいですか？ 心地よいですか？ この悲劇や悲惨の話は重要ですが、まだ森の中に踏み込んだばかりですから、しばらく置いておくことにして、さあ、もっと先に進みましょう。この分身主義の森の中は鬱蒼としていますが、あなたの頭の中もまるで霧がかかったかのように釈然としない感じではないでしょうか？ 霧を晴らすために、一つ一つ片付けて行こうと思います。

まずは、どうして僕たち人間の脳に、幻想(認識、連想、想像、思考、感情、意思 など)という現象が起きるのかということです。それには、人間の脳の「記憶」というメカニズムをはっきりさせなければなりません。

あなたに考えておいていただきたいことがあります。僕たちの記憶とは、一体何を記憶しているのでしょうか？

ヒントは「人間の記憶とは静的なものではなく、動的なものである」ということです。

ちょっと一言

人はそれぞれ、言葉に対するお互いのイメージが近似しているので会話を可能にしている、と言えます。

小澤 勲さんという、僕たち人類の誇るべき分身さんがいます。彼は長年、痴呆と呼ばれる方たちと共に歩いてきたお医者様です。そんな彼を媒体として、この地球上に産み落とされた『痴呆を生きるということ』(岩波新書)という素晴らしい本がありますので、是非、機会があったら読んでみてください。その本に、面白い会話の例がありましたのでご紹介します。

ある痴呆の分身さん(女性)が、突然、「穂高に帰る!」と言い出したそうです。穂高は彼女の生まれ故郷です。小澤分身さんが、「穂高は遠いよ。特急券を手に入れて、明日にでも行ってみよう」とごまかそうとすると、彼女は「いえ、穂高はついそこの角を曲がったところですよ」と主張します。それで付き添って近所を歩いてあげたら、彼女は気が済んでそうです。

このように、穂高に対するお互いのイメージが違う場合は会話が成り立ちません。でも、彼女は決して嘘や冗談を言っているわけではないのです。痴呆とは、脳の神経細胞の減少(萎縮)による記憶の障害であると言えます。僕たちと同じように、彼女もまた彼女の錯覚の中で生きていて、その錯覚に基づくフィードバックが、記憶の障害により、僕たちの現実と掛け離れてしまっているだけなのです。

僕たちの現実という言い方をしてしまったけれども、それだって、それぞれの記憶によって歪められた現実なのですが、その現実が、彼女の「穂高」ほどには掛け離れてはいないので、会話が大きくずれ違うということはあまり起こらないだけの話です。

もう一つ、この本に出てきた面白い会話の例を紹介しておきます。

痴呆の女性たちが数人集まって、楽しそうに肩を叩き合ったりしながら談笑していたので、小澤分身さんはそっと後ろに立って何を話しているのかと聞き耳を立てました。

「今日はいい天気じゃのう」

「そうじゃそうじゃ、うちの息子はいい息子よ。頭取になりよってな」

「ほんに、今日のご飯はうまかったげな」

「そういうことよのう」

はたから聞いていると会話が成り立っていません。でも、小澤分身さんは、彼女たちの笑顔に「理と言葉の世界を越えた直接的な関わり」を見て取っています。「人と人との関係性が原初的な姿で、いっさいの虚飾を脱ぎ捨ててそこにある」と感じています。

うーん、これこそ分身主義の目指す世界観だなと感じ入ります。徳永分身は難しいことばかり言って時々みなさんを困らせてしまいますが、本当は、難しいことを言うのが分身主義なのではなく、「理と言葉の世界を越え」たところこそ、分身主義の求めているものはあるの

です。そのためにも、「理と言葉の世界」であるこの「分身主義の森」を早く抜け出してください。

分身主義の真髄は、この鬱蒼とした森を抜けた向こう側にあります。そのためには、開拓者である僕たちだけでも、どうしてもこの森を通過するしかないんです。そうして、どうしてもあなた自身に、この森を抜けた瞬間を体験していただきたいんです。

この鬱蒼とした森を抜けた瞬間、いっさいの虚飾を脱ぎ捨てたあなたの全身をまばゆいばかりの光が優しく包み込み、あなたは全ての不安から解放させられることでしょう。あなたは真の自由を体験することでしょう。その体験をしていただきたいために、この分身主義の森の中に一緒に入らせていただいているのです。

くれぐれも、非科学に足を取られないように十分注意して、先に進みましょう。

5日目 私たちはひたすら環境を耕します

事故は人類を取り巻く環境が起こしたもので、自分がしっかりしていなかったから起きたのも、誰か一人が悪いから起きたのでもない。すなわち、人為的事故などというものは存在しない。

尼崎脱線事故という大変な事故に引き続き、またしても、大変な事故が起きてしまいました。

5月22日早朝(4時15分ごろ)宮城県多賀城市の国道45号交差点で、ウォークラリーに参加中の仙台育英高1年生の列に、酒を飲んで運転していた佐藤光分身さん(26)の車が突っ込んで、3人が死亡、22人が重軽傷を負ったという事故です。

今日は6月7日。事故から16日経過しています。何で今頃こんな話題を持ち出してくるのかしら? あなたには、そう感じられるかもしれません。日々、新しい情報が忙しく飛び交う時代です。あなたの中では、もうこの衝撃的な事故はとっくに過去のものになってしまっているかもしれません。でも、学校関係者や同級生や親族の方々にとっては、一生忘れることのできない出来事です。特に、後遺症を負ってしまった方や、遺族の方にとっては、これからの人生ですと背負っていかねばならない苦しみとなるのに、あなたや僕にとっては、今日の夕飯に何を食べるかということよりも興味のないことになってしまっています。

どうしてこのような個人差が生まれてしまうのでしょうか?

それは、僕たちが個人主義的(自己中心的)に生きているからなんです。

僕たちの頭の中はいつも、自分、自分、自分、関心事は自分と関係することだけで、それ以外は即座に切って捨てます。あんな事故が起きて、その時だけはちょっと興味を示し、「酒を飲んで運転するなんてとんでもない話だ」、「これからの希望に満ちた人生が断ち切られて可哀想だわ」などと憤慨してみせるけど、自分には直接関わりがないから、すぐに忘れてしまうし、酒を飲んで運転する人が少しもなくなりません。

でも、このような反応をしてしまう「あなた」や「僕」や「世界中のみんな」が、あの事故を起こしたとも言えるんです。このような反応をしてしまう個人主義的(自己中心的)環境の中に取り込まれている僕たちが、みんなであの事故を起こしたんです!!

尼崎脱線事故を考えることで分身主義の概観を眺めていただいたように、今回も、この多賀城市の飲酒運転事故を考えることで、分身主義を外側から眺めていただきたいと思います。

その前に、ちょっと今、あなたの想像力をお借りします。

宇宙を、「今」というこの瞬間で時間を止めたとします。ものすごいスピードで膨張している宇宙が、今動きを止めてあなたの目の前にあるとします。あなたの身体は、この宇宙を外側から一望できるくらいに巨大化したり、素粒子の一つ一つが見えるくらいに縮小化したりできると考えてみてください。あなたの視界に入る全てのものが静止しているので、あなたはそれを仔細に眺めることができる状態だとします。

今まさに、爆発した瞬間の星が静止しています。風にそよいでいた洗濯物も、時計の針も静止しています。つまりいて転ぶ瞬間の子供が見えます。車の中であくびをした瞬間の人がいます。誰かが誰かを刺そうと振り上げたナイフが光っています。鳥の声も車の騒音も聞こえません。

今、あなたの目の前にあるものは、ビッグバンから始まって140億年の中で起こった全てのものが、一つ残らず関係して、その目の前にあるということは、理解していただけますか? この宇宙という一つのステージ上で起こることは、全てが関係しています。もう、あなたには、この意味をわかっていただけると思います。

以前、囲碁を例に説明しましたね。一つのステージ(盤面)上に配置された石は、右上隅だろうが左下隅だろうが、中央だろうが、その一手を打ったのが有段者であろうが、初心者であろうが、その後の全てに関係して来るんです。

同じように、このビッグバン宇宙という一つのステージ上でも、たとえ一万光年離れたところで起きたどんな些細なことでも、それがもしなかったなら、今あなたの目の前に見えている宇宙は今とはまったく違うものとなっていました。と言うより、過去に起こった全ての現象は、現在から振り返るとそれしか起こり得ない確率で進行していて、「もし だったら」などということは、一切起こり得ないわけです。何故なら、「この宇宙の全てのものは、一定の方向性(=法則)によって動いている」ということや、「全ての物事には必ず原因がある」ということを科学は突き止めています。

つまり、あなたの目の前に今見えている宇宙は、過去のどんな些細な現象もおろそかできないくらいに緊密な関係で成り立っているわけです。それを言い換えると、どんな些細なことも今の宇宙を作っている部分であり全体である、と言えますよね。あなたの目の前に今見えている宇宙は、過去のどんな些細な現象もそれを取り去ってしまったなら、今の宇宙とは違うもの(つまり違う全体の姿)になっていた、

と言えるからです。

あなたは、10年前に地球の裏側であくびをした人なんて、自分と何の関係もないと思っているかもしれませんが、本当は、自分にとって被害や利益といった形で実感できないだけの話なんです。人間に実感できるものなんて、宇宙のほんのわずかなことだけです。でも、あなたには実感できなくても、確実にそれが「今」の宇宙を作っていることは、論理的に「理解」することはできますよね。

それができるあなたなら、もう、多賀城市の飲酒運転事故は自分の関係ない過去の出来事ではないことが「理解」できるはずですよ。あなたは、この宇宙で起こる全ての事を、同じ大きさ、同じ重要さで受け止めることができると思います。学校関係者や同級生や親族でなくても、その方たちと同じくらいの大きさと重要さで、あの事故を受け止めることができるはずですよ。それは、その方たちと同じように、あの事故を一生忘れることなく、苦しみを背負って生きるべきだと言っているではありませんよ。

その方たちにしても、それを一生忘れることなく、苦しみを背負ったような人生を生きなればいけない理由が、どうしてあるのでしょうか？ 子供を死傷させてしまった原因に対して、いつまでも憎しみや怒りを引きずりながら、苦しみの中を生きなればならぬ理由などどこにもないのと一緒で、その方たちに、そのような生き方を期待しなければならぬ理由などないはずですよ。

彼らも、そして僕たちもやらなければいけないことは、それは、この宇宙で起こったことはどんな些細なことでも必然であり、どんな些細なことでもこの宇宙を作っている部分であり全体である、ということをして「理解」することです。

例えば、人類に甚大な被害を与えた原発事故も、特定の人に被害を与えた飲酒運転事故も、あるいは誰かが地球の裏側であくびしたことも、誰かが地球の裏側で瞬きをしたことも、みんなみんな、今あなたが時間を止めて見ている宇宙を形作っている、どれもまったく同じ重要さの一つ一つの「パーツ(部分)」であり、またそれが、今見ている「全体」であるということです。それを「理解」したあなたには、あなたの目の前を覆っていた霧が、今、少し晴れて、向こう側の景色が見えたような感じがしませんか？ それこそ、分身主義の見える景色です。

それでは、多賀城市の飲酒運転事故を考えることで、分身主義というものを外側から眺めてみましょう。

この事故は回避できたのでしょうか？

今見てきたように、起こってしまった現在から考えると、この事故は、この宇宙創出以来140億年間に起こった現象の全てが複合的に絡み合っただけ起きた「必然」でした。

約140億前に起こったビッグバンに端を発し、2005年5月22日に11回目を迎えるウォークラリーを施行したことも、今年は大学進学を目指す「特別進学コース」などの1年生568人が参加したことも、前日は教室に泊まり、翌朝4時に第1陣327人(その中の25人が死傷した)が同校舎を出発したことも、15分遅れで第2陣が校舎を出た直後、約1キロ先の交差点で事故は起きたことも、それと平行して、その時刻にその場所で信号待ちをしていた男の人の乗用車がそこにいたことや、その乗用車に、友人ら五人と共に、約7時間もはしごして飲み続けた佐藤光分身さんの車が突っ込んで、特定の3人が死亡したことも、全て原因を遡れば、ビッグバンからつながる一筋の線が存在します。

この宇宙で起こる現象は、全て必然です!!

あなたの指の上げ下げ一つ、瞬き一つにしても、それはビッグバンに端を発し、そうするしかない必然の中で起こったことです。

「加害者の犯した罪は論外だが、あんな交通量の多い危険なコースを歩かせなければ、子どもが事故に遭うことはなかったよ」「学校は被害者に対して責任ある説明をしてほしい」と、被害に遭った子供の親が、やり場のない無念の気持ちを怒りに変えて、その矛先を学校に向けてしまうのもよくわかります。でも残念ながらそれは結果論で、この事故は避けられない必然だったんです。だけど、今後、飲酒運転による事故をなくすことは可能です。誰もが、一滴でも酒を飲んだら運転をしない世の中になればいいんです。

テレビを見ていたら、有識者と呼ばれているような方が出演していて、「もっと飲酒運転の罰則を強化するしかない」などと言っていました。でも、どんなに罰則を強化しようと、実は、そんなことでは、あのような事故はいつまで経ってもなくせはしません。そんな「取り引き」でごまかすのではなく、自分自身の心に、酒を飲んだら運転ができないような枷が作られなければいけません。実は、有識者などと言われるくらいの方が分身主義を理解して、「自分があの事故を起こしました」くらいのことを言ってくれるような世の中にならなければ、あのような事故はなくなるんです。

尼崎脱線事故の話の時も言ったように、この事故を起こしたのは佐藤光分身さんではなく、彼を取り巻く環境です。佐藤光分身さんは、彼を取り巻く環境に行動をさせられている媒体に過ぎません。彼は自分の意思でこの世に生まれたわけではないし、酒や車を作ったのも彼ではありません。彼もある意味、この環境の被害者だったんです。

彼に行動を取らせている環境の一つには、僕たち一人一人も含まれます。僕たち一人一人は、環境の媒体であると同時に、環境を作っている一つ一つでもあります。もちろん視点を変えれば、彼(佐藤光分身さん)も、僕たちの環境を作っている一つです。僕たちが、そのことに気づかない限り、同じような事故は繰り返されます!!

有識者と呼ばれているような人が語っている言葉も、実は、彼が彼を取り巻く環境に「語らされている」だけなんです。それどころか、彼は、彼を取り巻く環境に有識者などと呼ばれる立場の人間に作られてしまっているだけなんです。(そんなことすら気づいていない人が、現在、有識者などと言われているのが実情なんです)

そのことに気づかない限り、僕たちは永遠にこの環境の中で、この環境の中から混ぜ返されて、その都度浮かび上がってきたものを拾い上げるだけの話です。

僕たちは、たまたま被害者になってしまった人もたまたま加害者になってしまった人も、たまたま善人になってしまった人もたまたま悪人になってしまった人も、たまたま見識者になってしまった人もたまたま無学な人も、みんな同じ環境から出てきた「同じ穴の貉(=分身)」同士です。同じ穴の分身同士が、被害者として責任を追究したり、加害者の面持ちで頭を下げたり、第三者が良識あるような顔をして偉そうな意見を述べたり、そんなことをしているだけの、その現実、あなたはまだ気がつきませんか？

僕たちは、独占的に映画を作ることを許されている「個人主義（自己中心）株式会社」という名の映画会社が、手を変え品を変え作る映画、見せられているだけなんです。あるいは、役を演じさせられているだけの役者なんです。

僕たちを取り巻く環境は今、個人主義的（自己中心的）な環境です!!

（個人主義と言っているのではなく、個人主義的と言っている点に注意。人間は自我に目覚めた動物であるから、自己中心は当たり前で、それを個人主義的と呼んでいるだけです。その意味で、たとえ共産主義の国であっても、その中の一人一人は個人主義的であると言えます）

個人主義的（自己中心的）な環境は、「多賀城市・飲酒運転事故」を知った僕たちの脳に、自分を棚に上げて、「酒を飲んで運転するなんてひどい奴だ」といった言葉や、「ああ、自分じゃなくてよかった」という言葉や、「自分は金輪際、酒を飲んだら運転はしないぞ」などという言葉を浮かび上がらせます。このように、自分と他人のはっきりした境界線があるのが、個人主義的（自己中心的）な環境の特徴です。

でも何日かすると、個人主義的（自己中心的）な環境は、当事者ではなかった僕たちにそんなことはすっかり忘れさせて、次のような言葉を浮かび上がらせるに違いありません。

「自分は酒を飲んで、ハンドルを握るとシャキッとするので、事故を起こすようなヘマはしないさ」

「うるさいなあ、今日はビール2杯くらいだから、酔っ払ったうちに入らないよ。えっ、取締りをやってるって、それを早く言えよ。それじゃ駄目だ、タクシーで帰ろう。何でこんな日に取締りをやるんだ。ふざけたやつらだ!!」

「ああ、悔しい。昨夜はつかまってしまって運が悪かったな。警察は汚ねえなあ。やつらには本当に腹が立つ」

「しまった。今日は車で来てしまった。でも、ちょっとくらい飲んでも大丈夫だろう。もし、おれに轢かれるようなやつがいたら、そいつがドジなんだ」

「あいつは、車で帰ったけど、知ったこっちゃねえや。酒を飲むというのに車で来たあいつが悪いんだ。自業自得さ」

やっぱり、自分と他人のはっきりした境界線がある個人主義（自己中心）的な特徴は変わりません。僕たちは罰則を強化されても、この個人主義的（自己中心的）体質自体が変わるわけではありません。では、自己中心の反対は何でしょうか？

- 1、他人のために自分を犠牲にするとか、自分を他人に捧げる。
- 2、自分のことよりも他人の気持ちを真っ先に考える。
- 3、自己を滅却する。

そのようなイメージが浮かぶと思いますが、でも分身主義は、そのどれとも違います!! その理由を、この3点をもっと踏み込んで考えることで説明します。

[1、他人のために自分を犠牲にするとか、自分を他人に捧げる]

貧しい人や動けない人に手を差し伸べたマザーテレサの尊い行為や、ボランティアの方々の尊い行為は、他人のために自分を犠牲にした行為、と言えます。だけど、そこには、この身を捧げるための「他人」とか、犠牲にする「自分」の存在が前提としてなければなりません。自分の中に、自・他の境界線がある限り、彼らの行為は、自分のための行為に過ぎません。ちょっと厳しい言い方をして申し訳ありませんが、自分の喜びのために、彼らには他人が必要だったんです。分身主義には他人は存在しません。貧しい人も動けない人も自分です。

そこにあるのは、貧しい自分や動けない自分に手を差し伸べる自分があるだけです。

[2、自分のことよりも他人の気持ちを真っ先に考える]

徳永分身は、以前、飲酒運転事故に巻き込まれて自分の子供を亡くしてしまったという人のドキュメンタリー番組を見て、飲酒運転をする人を激しく憎むようになりました。「飲酒運転は犯罪行為だ」と思うようになりました。自分も、その親の悲しみを考えると、絶対に飲酒運転はしないぞと誓いました。それは、自分のことよりも他人（自分の子供を亡くした親）の気持ちを真っ先に考えるからそう思うわけですが、でも分身主義はそれとも違います!! 分身主義は、他人の気持ちを思いやることで飲酒運転をなくしようとするような低い次元ではありません。分身主義が思いやるのは「他人」ではなく「自分」です!!

人間は、他人を思いやるよりも自分を思いやる気持ちの方が、ずっとずっと強く大きいものです。分身主義は、その気持ちに嘘をついて、何とか他人を思いやることで飲酒運転をなくしようとする低い次元ではありません。もっと高い次元で飲酒運転をなくすものです。

ちょっと知っておいていただきたいのですが、「思いやり」の気持ちは確かに大切ですが、個人主義的（自己中心的）な環境から浮かび上がってくる「思いやり」の感情は、敵を作る感情を同時に連れているはずで、誰かを思いやった時の自分の感情に照らし合わせて、考えてみてください。その時、その人を特別視して、差別化して、その人を守ろうとしていませんか？ 誰かを、何かや誰かから守ろうとした瞬間、敵を作っています。個人主義的（自己中心的）な環境から浮かび上がってくる「思いやり」の感情は、敵を作り、争いを招く元ともなるわかるはずで。

もう一つ、知っておいていただきたいことがあります。思いやりと似たような言葉に、共感という言葉がありますよね。分身主義は、究極の共感、共感の極みであると言えます。分身主義とは、子供を亡くした親も、亡くなってしまった子供も、事故を起こした人も、みんな自分だったと「知る」ことです。みんな自分だったと知った時、心から慈悲の気持ちが生まれます。その、本当の慈悲の心から生まれた愛だけが、世界を平和にできる愛です。それ以外の愛は、世界に争いを招く愛です。

分身主義とは、「世界を平和にする自己愛」に目覚めることです!!

[3、自己を滅却する]

高名な禅僧や、舞台俳優や、演奏家などは、自分が今まさに行っている「行為」に没頭することで、一時的に自己を滅却させることはできるかもしれませんが。でもそれは一時的なことで、生きている限りは、自己を滅却したまま生きることではできません。それができる人間がいるとすれば、その人の脳に意思も欲望も浮上させることのない脳を持つ「植物人間」と呼ばれる人間だけです。

分身主義は自己を滅却するような無理難題は押し付けたりしません。分身主義は自己の滅却ではなく、自己の宇宙大への拡大です。科学が示してくださっている宇宙大の自己を知ることです。

さて、僕はこのごろ、分身主義を説明するために「個人主義(的)」という言葉を引き合いに出しますが、分身主義は個人主義(自己中心)の否定ではありません!! 自我に目覚めてしまった人類の歴史は、個人主義への道をひた走ってきた歴史である、と言い換えることもできます。これも必然の成り行きでした。

自我に目覚めてしまった人間は、目覚める前の動物に戻ることはできません。でも、分身主義は奇跡を起こせます!! 自我をこの宇宙にまで拡大させることによって、今まで囚われていた「自我」が、滅却されるという逆説が生まれます。そのことによって、事実上、今まで言われていた意味での「自我」がなくなります。つまり、分身主義とは、個人主義の否定ではなく、むしろ個人主義の拡大、あるいは自我の拡大です。

個人主義とは自分勝手ということではなくて個人を尊重するという思想である、と主張する人たちがいます。でも、自分が個人として尊重されたいための方便に過ぎません。要するに、やっぱり「個人主義=自分中心」でしかないのです。自分を尊重されたいための嘘や方便ではなく、本当の意味で個人を尊重することは、分身主義にしかできません。にもかかわらず、自・他の境界線がない分身主義こそプライバシーを完全に無視したもので、個人を踏みしめるものであると勘違いし、恐怖する方もいらっしゃるかもしれません。

でも、よく考えてみてください!!! 本当にそうでしょうか?

例えば、僕たちの身体感覚で考えてみましょう。僕たちは手も足も自分の身体の一部だと認識しています。だけど、手には手の役割があり、足には足の役割があることを知っています。手に歩かせたり、足にパソコンのキーボードを打たせたりしませんよね。手は足を、足は手を、それぞれ尊重しているわけです。

分身主義者とは、科学が教えてくれた諸々の事実によって、自分の周りの一人一人が、自分の分身(=自分と同じ分身同士)であることを理解した人です。みんなみんな大切な、あなたの分身です。だからこそ、嘘や方便でなく、一人一人の「自分」を尊重できるんです。

あなたの目の前の、その英雄はあなたです!! あなたに代わってそれをやってくれています。あなたは英雄を妬むことも羨むこともなく、自分のこととして誇りに思います。あなたの目の前の、その犯罪者はあなたです!! あなたに代わってそれをやっちゃいました。あなたは犯罪者を憎むことも怒ることもなく、自分のこととして慈しみます。

最後にもう一度、質問を投げかけます。多賀城市で起こったような事故が、二度と起こらないためには本当はどうしたらいいのでしょうか? 「もっと罰則を強化するべきだ」などと発言する有識者と呼ばれる方々や、子供を事故で亡くした親のドキュメンタリー番組を作るテレビ局の方々にも、このような事故をなくすためにはどうしたらいいか、もう少し踏み込んで考えてみていただきたいと思います。

さあ、あなたにも、質問させてください。このような事故が二度と起こらないためには、本当はどうしたらいいのでしょうか?

「二度とあのような事故を起こさないために、今日から私は分身主義者を目指します」そのように世界中の人が公言する時代が、早く来てほしいと心から願います。

ちょっと一言

「事故は人類を取り巻く環境が起こしたもので、自分がしっかりしていなかったから起きたのも、誰か一人が悪いから起きたのでもない。すなわち、人為的事故などというものは存在しない」

冒頭のこの言葉の意味を曲解しないでくださいね。

「じゃあ、誰もしっかりしなくてもいいの?」

「全て環境のせいにして、責任逃れをするのか?」

「分身主義とは、成り行き任せのことなのか?」

などと「無理解」なことを言わないでくださいね。

本当にあのような事故をなくすには、「自分のしっかりした行動」は、しっかりした環境に取られる、ということを理解し、誰かを責めるのではなく、ひとえに「私は、分身主義者を目指します」とだけ言うべきだということです。それは、「私は、環境を耕します」という言葉と同じ意味です。自分の良い行動は、耕された良い環境に取られるだけのものだからです。

6日目 記憶という反応の道

人間の記憶とは、何かを固定的(静的)に記憶することではなく、脳内に「反応の道」が形成される動的な現象である。

僕たちは、自分の意思のようなもので思考をしているのではなく、その人の脳内に作られている「記憶のネットワーク」が思考を生じさせている。

今日は、この分身主義の森で、「記憶」とはどのようなメカニズムなのかということを考えていきます。この前の質問、考えていただけま

したか？「人間の記憶とは、一体何を記憶しているのでしょうか？」という変な質問ですが、実はとても重要な質問です。

もったいぶらずに答えを先に言います。「記憶とは、刺激に対する一連の反応を記憶している」

どうですか、実にシンプルでしょう。

でも、このシンプルな答えには、ちょっと普通の本やテキストには書かれていないような、普通の人が見落としているようなある発見があることに、今日は気づいて欲しいんです。

記憶というと、「歴史の年表を記憶する」とか、「彼女の誕生日を記憶する」というような固定的なものをイメージするかもしれませんが、実は、あなたが記憶した1492年とか、2月15日とかは、単なる数字ではなくそれにまつわる一連の反応を記憶したということなんです。年表や誕生日に対して一連の反応をする回路を、脳内に作ったということなんです。

僕たちの脳の記憶は、紙に文字を記録したり、キャンバスに絵を定着させたり、磁気やレーザー光線を使って記憶媒体にデータを記録したりするのは基本的に違います。記憶とは、起伏のある土地に雨が降って川ができるように、ある刺激を受けて脳内細胞が反応した後に「反応の道」ができることです。

僕たちの脳は、顕微鏡でしか見えない小さな神経細胞（ニューロン）というものがぎっしりとつまってできていることは、現代人ならばほとんどの人が知っています。神経細胞からは長い手のような枝がのびて、お互いに手をつなぎ合う網の目を作っていて、上手に信号を受け渡すことで、ものを認識したり、判断したり、考えたり、あるいは手足を動かしたりしていることも、ほとんどの人が知っています。

実は、ものを認識したり、判断したり、考えたり、手足を動かしたり するための、全ての源となるものこそが「記憶」なんです。

脳の神経細胞は、ある閾値（神経細胞に興奮を生じさせるために必要な刺激の最小値）を超えた刺激を受けた場合、その生理的な構造から、電気を発生する仕組みになっています。その電気信号は次の神経細胞へ次の神経細胞へと引き渡される構造になっていますが、その接続部分（＝シナプスと言います）にはわずかな隙間があり、そこでは電気信号が化学物質に一時的に変換されながら伝達されて行きます。

この化学物質は神経伝達物質と呼ばれていて、現在100種類以上発見されているそうですが、それぞれに特徴があり、運動機能や情動などに影響を与えます。ノルアドレナリン、セロトニン、アセチルコリン、ドーパミン、など是有名ですよ。

このように、神経伝達物質というものをバトンにして、次々に隣の神経細胞に電気信号をバトンタッチしていく中で、その接続部分が増えたり、面積が広がったりします。それによって、反応の流れやすい通路が作られるわけです。この形成された「反応の道」こそ、記憶と呼ばれるものの正体です。それは決して、1492年とか、2月15日とかいうものなんかではありません。

しかもその「一連の反応」は、他のたくさんの回路とも網の目のようにつながっていて、もっともっと複雑な反応まで誘発させられます。この誘発させられる「複雑な反応」こそが、分身主義で言うところの「幻想」です。「幻想」の意味はわかりますね。分身主義はこの宇宙の全てのものを「実体」と「幻想」に分けるんでしたね。そして幻想とは、人間の脳の記憶と外部からの刺激との相互作用によって作り出される全ての現象。つまり、認識、連想、想像、思考、感情、意思 などのことです。

具体的に、りんごを例にとりて考えてみましょう。

生まれて初めてりんごを見た時、触った時、嗅いだ時、齧った時に刺激を受けた感覚器では、それぞれその刺激が電気信号に変換され、脳内の神経細胞の中を電気や神経伝達物質が走り、色や質感、味や食感、あるいは情感などを伴った一連の反応の回路が形成されます。

一つの神経細胞では、一種類の神経伝達物質しか作られないので、後日、目の前にりんごを差し出されれば、以前と同じ回路を流れる電気信号は、同じ神経伝達物質を放出させながら進行するので、最終的に、ごくりとつばを飲み込むなどの一連の反応をしてしまうわけです。

同じものを見る（同じ刺激を受ける）と、同じ気分が湧き上がるのも、これで理解できます。

僕たちの記憶とは、このような神経伝達物質などの反応をひっくるめ、その時に反応した「一連の反応のこと」であることに注意してください。つまり、紙に1492年とか、2月15日とか記録したりするのは違って、とても動的なものなんです！

さてここからが大事です。

いつか人間は、この一連の反応をする回路を一括りにして、音を貼り付けるようになりました。それがモノの名前です。名前とは、元来、聴覚刺激が元になって作られたものと考えられます。「赤い」「硬い」「甘い」「すっぱい」などという感覚を指し示す名前の他に、それらの反応をするものを一括して「りんご」と名づけたわけです。

いつの間にか、人類はあらゆるものに名前を付けていました。名前とは「反応の仕方を一括りにしたもの」につけられたものですから、いつの間にか人間の脳内は、様々な反応の仕方で一杯になりました。ある名前を聞くことで、様々な反応の仕方が、互いに反応をしてしまうわけですが、それらの反応に対して、その人の脳に形成された記憶の回路は、一定の方向性や決まりを持たせるので、接続詞などを伴った言葉となり、言葉はその人なりの思考というものを完成させます。

僕たちは、自分の意思のようなもので思考をしているのではなく、その人の脳内に作られている「記憶のネットワーク」が思考を生じさせている、というのが正しい言い方なのです。その証拠に、僕たちは記憶にないものは思考することすらできません！ あなたが思考することができるのは、あなたの記憶の範囲でしかありません！

「歴史の年表を記憶する」とか、「彼女の誕生日を記憶する」などという、一見、自発的で能動的に思えるものも、実は、記憶のネットワークの中から浮かび上がってきた受動的なものだったわけです。だから正確に記述するなら、「あなたの脳を取り巻く環境が、あなたの脳の中の反応の道と反応をしたことで、あなたの脳内に、彼女の誕生日を記憶しようという意志が浮かび上がり、それをあなたの脳が解読させられ、あなたは、彼女の誕生日を記憶しようという行動を取られた」となります。

ところで、あなたが今、一切の記憶がなくなったと想像してみてください。過去の記憶も現在の記憶もなくなったと想像してみてください。どんなことが起こるでしょうか？ その時、もしあなたの目が何かを見ていても何も見えず、あなたの耳が何かを聞いていても何も聞

こえず、何かを理解することも何かを感じることもないのではないのでしょうか。反応の道が形成されない脳（つまり記憶の回路が形成されない脳）は、木魚を叩けばポンと鳴るだけの反応と同じです。あらゆるものが自分の前をただ通り過ぎていだけで。

何も理解することも感じることもできないあなたの脳には、何らかの意思が浮かび上がることもなければ、それによって何らかの行動を取られることもなくなるでしょう。

もし、あなたの目の前に、お箸とホカホカのご飯とお刺身を出されても、何をするものかわからず、食べることすらできないでしょう。それどころか、口から食物を摂取するという遺伝子に刻まれている本能レベルの記憶すらなければ、生まれてきてもすぐに死に絶えてしまうことでしょう。記憶がなくなるとは、道端に動かないでいる石ころのような存在になることを意味するのかもしれない。

記憶とは、あらゆる生命現象の源であると言えます。

心理学の分野に「認知科学」というものがあります。これは、どのようにして僕たちは世界を認知しているかというメカニズムを研究する学問ですが、アメリカの心理学者ジェームズ・ギブソン分身さんが提案した「アフォーダンス理論」というものを聞いたことはありませんか？ これは現在、人工知能の設計原理や、都市環境デザインなどの分野にも応用されようとしているものです。

アフォーダンスとは、「afford（**が**できる、**を**与える）」に「-ance」をつなげた造語です。人間は、モノを認識する時、それが自分に対して「**を**与える」という行為の可能性によって認識しているということです。例えば、椅子は自分に対して「座る」ことをアフォードしているし、床はそこに「立つ」ことや「歩く」ことをアフォードしているわけで、そのような「椅子」や「床」を、僕たちは「椅子」や「床」として認識しているということです。

「**理論**」などと命名すると難しいことを言っているように感じてしまいがちですが、考えてみれば当たり前のことを言っているだけです。

僕たちが目の前に出されたお箸とホカホカのご飯とお刺身を認識するためには、それらが僕たちに「アフォードする（与える）」ものを知らなければなりません。しかし、もし人間に「記憶」という作用がなければ、目の前のモノは何の情報も僕たちに「アフォード」してくれません。僕たちに「アフォード」してくれる情報とは、まさに、僕たち自身の記憶が作っていたのです。

僕たちがお箸を認識する時、その二本の棒は僕たちに、「物をつまんで口に入れる」ことをアフォードしているわけですが、もしその二本の棒に対して、かつて作られた「記憶」がなければ、似たような記憶を当てはめて類推することで、その二本の棒から違う「アフォード」を受け取る（認識する）はずですが、アフォーダンス理論とは、まさに、今見てきた「記憶」の重要性を述べているに過ぎません。

ところが、アフォーダンス理論は、この、人間（や動物）の「記憶」という重要な働きをないがしろにして、モノ自体がアフォードする何らかの情報を持って宇宙に存在しているかのような捉え方をします。それは飛躍し過ぎた考え方です。

「**世界からのデータは十分にある**」とギブソン分身さんは言っていますが、もしギブソン分身さんと言えども、彼の脳に「記憶」という作用がなければ、世界にはまったく何一つデータがないのと同じです。何故なら、この自然界に存在する全てのモノは、元々、何らかの目的や意図があって存在しているわけではないからです。そこに目的や意図を見出すのは、人間の勝手な都合です。

例えば、人間は、遺伝子に自分のコピーを作る情報が書き込まれていることを知ると、「**遺伝子は自分が生き残りや自分のコピーを増やす目的を持って存在している**」という物語を作ってしまう癖があります。でも、遺伝子がそのような目的を持って存在しているのではなく、様々な分子が長い年月をかけてくっつきたり離れたりを繰り返しているうちに、遺伝子のような塊がたまたま作られ、たまたまコピーを増やすような作用をしているだけなんです。そこに意味はありません。人間だけが、そこに意味を見出してしまっただけです。

人間の都合によって自然界を解釈をしてしまう態度は、真に科学的態度とは言えません！ このような態度を自己中心的な考え方と言います！ だから、この自然界に存在する全てのモノは、アフォードを持って存在しているわけではありません。僕たちの記憶が、モノの中にアフォードを見出しているんです。

つまり、モノがあなたに語りかけるアフォードの声に、じっくりと耳を傾けるということは、あなたが自分自身の記憶に耳を傾けるということだったのです！

データとは、まさに、人間（たち）の都合に合わせた「解釈」の仕方、あるいは解釈を取り決めた約束事のことです！ 認識と言えども、それは人間の脳の中に、源となる記憶を通して浮かび上がる「幻想」に過ぎません。認識とは脳の中の閉じたプロセスではなく、環境と脳、そして身体との一連の相互作用の中で作られた「記憶」が、再び、環境や身体との相互作用をすることによって作られるプロセスである、とでも言ったらいいのでしょうか。

さて、話を最初に戻しますが、僕たちの記憶とは、CDやMDやDVDなどの記憶媒体の記録とは違い、神経伝達物質などの反応をひっくりめた、その時に反応した「一連の反応」であるということでした。人間の記憶とは、何かを固定的（静的）に記憶するのではなく、複数のニューロンの一連の反応（動的な現象）に対して、我々が記憶と名づけているだけだということです。記憶の過程には、記録、保持、想起の三段階があるとされています。これは、「一連の反応を記録」し、「一連の反応を保持」し、「一連の反応を想起」していると考えた方がより適切です。

僕たちは、何かを思い出した時に、愛着や安心感や恐怖というような情動を伴うことを経験しています。これが動的なもの（＝反応を記憶している）であるということの証拠です。記憶が動的なものだからこそ、連想や想像や思考といった幻想が生じるわけです。

人間の作った記憶媒体は静的なので、人間が手を加えない限り変化しません。情報が勝手に変化したり、勝手に想像や連想をしてもっては困ります。これに対して、人間の記憶は、強調や単純化などによって常に変容します。

僕たちは、決して過去に生きることはできません。昨日の昼飯を作ることはできません。ということは、過去の歴史を書き換えることも

できないのです。それなのにどうして僕たちは変えることのできない過去（歴史）にこだわるのでしょうか？

それは、明日のために必要だからです。

明日のために必要な歴史である限り、歴史という記憶は、未来のビジョンによって変容（へんよう）してしまうものである、と言えます。僕たちの記憶の中の歴史は、強調や単純化などによって常に変容させられることを忘れないでください。

先日、反日感情を持った一部の中国人たちの暴動が報道されましたが、彼らの行動は、彼らの脳に記憶させられた歴史（＝自分たちのビジョンに都合よく解釈されたもの）によって取らされている行動なのです。

世界中の人がどんなに力を合わせても開けなかった、平和へ通じる重たい鉄の扉は、僕たち人間とはそのように行動を「させられる」媒体である、ということを世界中の人が本当の意味で理解した時、きっと、子供の手でも押し開けることができることでしょう。

（ 少しずつ分身主義を小出ししています）

今日は歩き過ぎてちょっと疲れたのではないのでしょうか？ 頭の中を整理してゆっくり休養してください。明日は、この「記憶」が作っている「自我」とは何か？ ということを考えていきます。

デカルト分身さんの話をもう一度思い出してください。彼は、「われ思う、故にわれあり」と言ったんです。それは、彼が二元論を主張する以上、「われ思う、故に精神は存在する」と言うべきだったということは、既に書きましたね。

では、彼が疑い得るものをどこまでも疑っていき、その最後にどうしても疑い切れなかった「われ」とは何だったのでしょうか？

これこそ、どんなに否定しようとしても否定し切れない「自我」の高らかな存在表明です。

でも、自我（これが自分と信じているもの）とは、一体なんだったのでしょうか？ 分身主義の森に踏み入った僕たちが、どうしても向かい合わなければならない高い壁です。それを乗り越えるためには、やはり科学が必要です。

ちょっと一言

脳には神経細胞が網の目のように張り巡らされていて、それがどのような働きをしているかなどということは、昔の哲学者などはもちろんのこと、解剖を体験したデカルト分身さんですら知りませんでした。

それがわかったのはつい昨日のことです。つい昨日まで、そんなことを言う人は一人もいませんでした。

とてもよくできた web サイトを見つけました。

<http://jvsc.jst.go.jp/being/watasi/brain/index.htm>（科学技術振興機構 科学技術理解増進部 「JST パーチャル科学館」）

このサイトでは、脳の仕組みをわかりやすく、動画で見ることができます。ただし、Macromedia Shockwave Player がインストールされていないと全部の画像は見ることはできません。Shockwave は以下の場所から、簡単にインストールできます。

<http://www.macromedia.com/jp/software/shockwaveplayer/>

もう一つ、脳の仕組みをととてもわかりやすく詳しく書いた本をご紹介します。ナツメ社の『図解雑学・脳のしくみ』（1200円）です。図解入りで素人にもとてもわかりやすく書かれていて、自己中心の檻の中に囚われの身の僕たちが、自分探しをする上で最低限知らなければいけない自分の脳の働きのことが、もれなく書かれている本です。

僕たちは幸運なことに、自分を知るために最も近い時代に生きているんです。釈迦分身様やキリスト分身様よりも、科学的真理に近い場所にいます。宗教も一つの立場から見た真理には違いないのですが、宗教のような非科学的真理では、現代を生きる僕たちは決して一つになれません。科学の真理は世界にたった一つですが、宗教の真理は教祖の数だけあるからです。場合によっては、宗教の真理は、教理を解釈する人の都合によっていくつも存在してしまいます。現代人である僕たちは、そのことを嫌と言うほど知らされているはずですが。

確かに宗教は、かつて僕たちに喜びや救済を与えてくださいましたが、それは個人的喜びであり個人的救済でした。世界が（情報網や交通網によって）狭くなった今、個人的喜びも個人的救済も、意味を成さないものになりました。もはや、世界中の人が救済されなければ、個人の救済もあり得ない時代になっているんです。

ところで、脳には神経細胞が網の目のように張り巡らされているという科学的事実ですが、今でもそれを知らない人や、そんなことは知りたがらない人はたくさんいます。それは何故かと言うと、そんな面倒なことを知らなくても、そんな難しいことを考えなくても生きられるからです。でも、本当にそうでしょうか？ よく考えてみてください。

最近のニュースを見ていたら、いつ戦争が起きるかかわからない不穏な時代です。戦争が起きたら一発で何万人も殺戮できる兵器を持ってしまった時代です。いつ隣人から殺されるかわからない時代です。いつ自分が犯罪を犯す立場になってしまうかわからない時代です。

不安を煽って申し訳ありませんが、もう少し言わせていただきます。

いつ地震が起こって自分が被災者になるかわからない時代です。公害や不慮の事故で、いつ半身不随になるかわからない時代です。いつ科学技術や医療ミスの犠牲になってしまうかわからない時代です。

こんな時代に生きている僕たちが、のほほんとして「そんな面倒なことを知らなくていい、そんな難しいことを考えなくていい、生きられるもーん」なんて言っているのでしょうか？ 関心事は自分の健康や損得のことばかり、あるいは恋愛や遊びや収入のことばかり

、そんな狭い視野で、本当に僕たちは、この時代を不安もなく生きられるのでしょうか？

よく考えてみてください。

気づいた人から一緒に、脳の神経細胞のことを勉強しましょう。

それをできるあなたなら、世界と自分を救う分身主義の開拓者になれます。

7日目 若・貴兄弟が仲良くなるには？

彼らの喧嘩は、彼らを取り巻く環境の一部である僕たちみんながやらせているのです。

連日のようにテレビや週刊誌で報道された、若乃花・貴乃花兄弟分身さんたちの確執^{かくしつ}ですが、自分のことのように心を痛めています。それで今日はどうしても聞いていただきたいことがあるので、森の中を歩くのはやめます。ちょっと、その辺の草の上に腰を下ろしてください。

横綱^{よこづな}まで昇り詰めた若・貴兄弟という英雄は、僕たちのできないことを代わりにやってくださった、僕たちみんなの分身さんたちでした（英雄や天才はみんなに作られているものなので、分身主義は、そういう人たちに対して、僕たちの代わりにやってくださっている誇るべき僕たちの分身さんだ、という考え方をします）それは、兄弟といえども同じです。貴乃花にとってお兄さんの若乃花は、彼のできないことを代わりにやってくれている分身さんだし、若乃花にとって弟の貴乃花は、彼のできないことを代わりにやってくれている分身さんです。

でも、分身主義の「ぶ」の字も知らない個人主義者（と言っても別に主義主張をしているわけではありませんが）の彼らにとっては、お互いが同じ小さなフィールドで闘っているライバル同士なんです。そして宇宙というフィールドの大局を見ることができず、右下隅やら左上隅の自分の一手先の死活のことしか考えられないでいます。

どうして僕には、彼らの喧嘩が他人事とは思えないのかと言うと、この徳永分身^{きょうだい}の姉弟^{ぼうだい}も、数十億という膨大な親の遺産をめぐって同じような喧嘩をしているから、というわけでは全然ありません。（笑）

僕が完全無欠の分身主義者を目指しているからです。

もしあなたも分身主義の「ぶ」の字も知らない個人主義者（と言っても別に主義主張をしているわけではなくてもいいのですが）なら、彼らに関する報道に心を痛めることもなく、あるいはちょっと心を痛める振りをして、興味深く眺めてどちらかを批判したり応援したりしている一人かもしれません。

ある意味、彼らはとても恵まれた環境に生まれました。しかし、ある意味、とても可哀な環境に生まれたとも言えます。いずれにしても、彼らの環境は自分が選んだものではないし、彼らは、彼らを取り巻くその環境に相撲^{すもう}をやらされてしまった媒体に過ぎません。

極論を言えば、彼らの喧嘩は、彼らを取り巻く環境の一部である僕たちみんなが、彼らにやらせているとも言えます！

僕たちは約140億年の歴史を持つこの環境によって作られ、その環境によって作られた僕たちが、彼らを取り巻く環境の一部となって、彼らという媒体に喧嘩をさせてしまっているんです！

それは彼らだけに限りません。あなただって、この徳永分身だって、あなたや僕を取り巻く環境にやらされているだけの媒体です。

よく考えてみてください。彼らが、いわゆる自分の意思でもって相撲というものを始めたんでしょうか？ 彼らも、彼らのお父さんも、そして彼らのお父さんのお父さんも、みんなみんな最初から自分の意思で相撲をやったわけではありません。ちなみに、貴乃花分身さんが現役引退後、70キロもダイエットしたのだから、彼の意思ではありません。

今まで言われていた意味での自由意思などというものは、本当はどこにも存在しませんでした。意思とは、その人の脳を取り巻く環境によって、その人の脳に浮かび上がらせられた幻想のことです。

相撲という日本の国技^{こくぎ}だって、それは日本に最初からあったわけではなく、このビッグバン宇宙が140億年かけて作ったものであるということをあなたは理解できるはずですよ。

彼らが喧嘩をしているのも、家父長^{かふちちやう}制や、長男や次男、あるいは長女や次女などと呼ぶ家族制度や、法律や経済システムや、その経済システムの中で生き残りをかけて闘っているマスコミや、この日本という国に生まれ日本の文化に育^{はぐく}まれた僕たちが関わっているのはもちろんのこと、いろいろな文化の違う人々のもの考え方や生き方も全部関わっています。

もちろん、ものの考え方や生き方などという大層^{たいそう}なものでなく、あなたの指の上げ下げや瞬^{まばた}きも同じ重要さで関わっています。重要さにランク付けするのは、人間の経験に基づく判断に過ぎません。

天動説から地動説への意識の変革を成し遂げた科学や、相対性理論が教えてくれているように、今の僕たちは、単に自分（あるいは自分たち人間）を中心にして世界を眺めている現実を、正しい世界の姿だと錯覚しているに過ぎません。

誰かの指の上げ下げや瞬^{まばた}きが、法律や経済システムよりも重要でないと考えるのは、あなたの自己中心的な価値観に過ぎません。この宇宙で起こった現象は、どんなに些細^{ささい}なことであっても、その背後には、140億年分の原因が平等の重要さで隠れています。その140億年分の原因のことを、分身主義では、「ビッグバンの風」と呼んでいます。

真の科学とは、この宇宙のありのままの姿を教えてくれるものです。でも、残念なことに科学者と言われている人たちが、本当の意味で真の科学を行なっているとは言えません。分身主義の森では、真の科学の視点を身につけていただきたいと思っています。

ところで、先日、『世界平和への扉（分身主義への誘い）』という徳永分身のホームページのURLを下記のとおり変更しました。

<http://www.bunshinism.net/>

bunshinismという独自ドメインを取得したのは、分身主義（^{ブンシニズム}Bunshinism）に、自分の残された命の全てを捧げる新たな意思の表明です。もちろん、「意思」とは、この僕の自発的な意思などではなく、僕（徳永分身）を取り巻く環境に浮かび上がらせられた「意思」です。僕は媒体なのでから。

将来的に、あなたにもお願いしたいことがあります。徳永分身のようにホームページを開設して、その場所で、自分自身が「完全無欠の分身主義者を目指す」ことを宣言していただきたいのです。ホームページを作るなんて、この僕でもできるので、そんなに難しくありません。ちょっと勉強すればすぐできます。あなたのセンスを加えれば、僕なんかよりもずっとすばらしいホームページが作れるはずですよ。

僕たちが世界を平和にするために必要なものは、NPOなどの組織力でも政治力でも経済力でも権力でも、評論家やコメンテーターや有識者と言われる人の自分を棚に上げた社会批判でもありません。組織力も政治力も経済力も、もはやあなたを幸福にはしてくれません。それは古き時代の、泥でできた舟のようなものです。

この世界を変えるのは、あなたの「自分を見つめる力」です！ そこからあなたの脳に浮かび上がらせられた「意思」の力です！

あなたや僕が、真の科学によってこの宇宙の成り立ちをしっかりと理解し、そして、この宇宙の中で生きるあなたや僕が、どのように動かされている媒体であるかを理解したら、そのことをホームページで公言することです。そこから生まれたあなたが作るホームページこそ、世界を平和にすることができる唯一のもので、インターネットには、未知の力が秘められています。

「完全無欠の分身主義者を目指す」ということは、あなたの頭のとっぺんから爪先まで覆っていた重たい鎧を脱ぎ捨てると言うことです。眼を有害な光から守っていたサングラスも、はずすと言うことです。そして、ピカピカの裸を無防備にさらすことを宣言することと同じです。

現実社会では、まだ武器や鎧やサングラスが必要ですが、仮想現実(インターネット)の中ではそれができます。だけど、仮想現実はいずれ僕たちが生きている現実を、武器や鎧やサングラスが不要な現実に変化させることができます。あなたは、「幻想」が「実体」を変化させることを無数に体験済みです。

例えば、あなたは、自分の部屋に悪霊が住みついてしまったという幻想を持ってしまったとします。その幻想は、間違いなくあなたの身体(=実体)を変調させますし、行動を変化させます。そして、あなたの部屋の本棚には、28冊もの「心霊」に関する本が並ぶ、といったように、実体に変化させられるということが考えられます。もしかしたら、その後あなたは心霊研究者になり、この世界に99冊もの「研究結果」の本を残し、新たに生まれる実体(人類の子孫たち)に多大な影響を与えるかもしれません。

このように、幻想と実体は切っても切れない関係にあります。仮想現実だって同じように現実を変化させます。

僕たちが、自分は環境の媒体に過ぎないと理解した瞬間、僕たちは宇宙とつながります。世界中の人たちがそのことを理解した瞬間、世界中の人が一つになります。その時、この環境がガラリと変化するというのを、あなたにははっきりと想像できるはずですよ。今僕たちの生きている環境は、まるで、これまで生きてきた人たちの捨ててきたゴミの山です。芸術作品を作る作業すらも、実は綺麗な作業なんかではなく、その人一人では抱えきれない荷物を捨てることなんです。だけど、その捨てられた個人的なゴミも、見た人の心につながれば花に変化します。

僕たち人類は自我に目覚め、その自然の成り行きとして、個人主義的な道をひた走ってきました。でも、僕たちが自分の鎧を脱ぎ捨てて(脱皮して)新しい自分をさらけ出せるようになった時、つまり分身主義者になれた時、この環境がガラリと一変するはずですよ。

あなたの「自分を見つめる力」が世界に奇跡を起こします！

そこから浮かび上がるあなたの「意思」の力が世界に奇跡を起こします！

桜の花が一気に開花するように、あなたの力で、世界がゴミの山から桜が満開のゴミ一つない楽園に変わります。僕たち人類が、武器も鎧も捨てて、満開の桜の下で手をつないで生きる時代が来ます。その時です！ 僕たちの誇るべき分身さんたち、若・貴兄弟が仲直りしてくれるのは、

その時、彼らは同じ小さなフィールドで闘うライバル同士でも兄弟でもなく、この宇宙というフィールドで、お互いのできないことを代わりにやってくださっている誇るべき分身さん同士になるからです。

その時同時に、世界の平和と、僕たちの幸福も向こうからやってきます。だって、彼らの姿は、僕たち人類の姿そのものですから。

ちょっと一言

分身主義の森を一緒に歩いてくださっているあなたが、いつか、「完全無欠の分身主義者を目指すぞー！」というホームページを作ってくださる日が来ることを願っています。その時の参考として、脱皮した新しいサイト『世界平和への扉(分身主義への誘い)』を是非ご覧になってみてください。

8日目 「自我」とは何か？

“私”の時代の幕切れは近い！(T・ノーレットランダーシュ分身さん)

昨日はちょっと立ち止まってしまいましたね。今日は、お約束通り、この森の中で「自我」とは何か？ ということを考えていきます。まずは「自我」という難しい言葉の定義ですが、ここでは、これを「自意識」と同じ意味で用います。「自我」は、辞書によると「意識や行為をつかさどる主体としての私」とありますから、「自意識」と置き換えても意味は通ります。

カブトムシにも自我はあるか？

カブトムシにも自意識はあるか？

これは同じような質問であると言えます。

噛み砕いて言えば、誰の心の中にもある「自分、自分、自分」という、決して消し去ることのできない意識のことです。我々現代人が、病的なまでにその存在を主張し、必死で守ろうとしているもののことです。

デカルト分身さんは、「われ思う、故にわれあり」と言ったんでしたね。疑い深い哲学者の彼でさえも、疑い得るものをどこまでも疑っていった最後に、どうしても疑い切れなかった「われ」とは何だったんでしょうか？

それこそ、どんなに否定しようとしても否定し切れない「自我」の高らかな存在表明です。

次のような言葉、聞いたことがありますよね。

「天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）」

釈迦分身様が誕生した時、四方に七歩ずつ歩み、右手で天を、左手で地を指差して唱えたという言葉です。人間は馬などとは違って、生まれてすぐに立てないし、まして歩くことなどできないはずなので、もちろん作り話です。直訳すると「この宇宙の中で、唯、我だけが尊い」という意味になります。

徳永分身は中学生の時にこれを聞いて、イヤな感じがしたのを覚えています。なんて高慢ちきなことを言う人なんだろう、と少しガツカリしました。でも、先日、あるお坊さんが、この「唯我独尊」の中の「我」は、釈迦分身様が自分のことを言っているのではなくて、みんな一人ひとりの「我」のことだ、と話していました。つまり、これは自我の尊厳を言い表わしたものだということです。

なんだか少し手前味噌な解釈のような気もしますが、それなら少し許せます。

先ごろ流行った、スマップの「世界に一つだけの花」という歌も、これも自我を賞賛した歌と言えます。

さて、デカルト分身さんも、釈迦分身様も、スマップ分身さんたちも、こぞって絶賛する「自我」とは一体何でしょうか？そして僕たちが、「Only one」などと賞賛されると嬉しくなってしまう「自我」とは、一体何者なんでしょうか？

何だかとても大切な、現代人にとっては、片時も側にいてもらわなくては困ってしまうもののようなのです。

先日、「NHK人間講座」で『人間性の進化史（サル学で見るヒトの未来）』という講座をやっていました。講師は、京都大学霊長類研究所教授の正高信男分身さんです。これは彼の専門である霊長類学の見地から、ヒト、家族、社会、文化といったものを考察したものです。その中の最終回で、彼は「サルには自意識はありません！自意識は人間だけにしかありません！」と言い切っています。そして、先程のデカルト分身さんの「われ思う、故にわれあり」という言葉を引き合いに出し、「最近の研究ではどうやらそれは正しくないのではないかと言われるようになってきました」と言っています。

どういう意味かという、確固とした「自分」などというものが、外界から独立した形で存在しているわけではなく、自分（自意識）とは、環境によって脳の中に作られていく感覚である、ということが徐々にわかってきたということです。

つまり、人間はサルとは違って、言語活動などを通して周囲とコミュニケーションを行います。自分という感覚は、その時の他人からのフィードバックによって作られるものなんです。他人という鏡に映っている虚像を、自分の姿だと思込むことで「自意識」も作られていきます。

サルは他人の鏡に映っている自分を見るどころか、実際の鏡に映っている自分の姿を見ても自分であると認識できずに、本能のおもむくままに威嚇したりします。訓練しても、自分と鏡の中の像との等価関係を結べるようになるだけのようです。彼らにあるのは「自意識」ではなく、本能的な「自分」だけです。自意識がないということは他者の意識もなく、つまり自・他が地続きだということです。ちなみに、重度の認知症の人（記憶に障害？の起きた人）も、鏡に映る自分の姿を自分であると認識できずに、鏡の裏に誰がいるのか探したりするそうです。自我というものが、環境によって作られる脳の記憶と密接な関係にあり、記憶が作っている幻想に過ぎないことがよくわかります。「自我（＝自意識）」とは、このように、確固としたものではなく「環境によって作られ、僕たちの脳が、それが自分であると信じて執着させられているもの」といった程度のものだと考えればよいと思います。

と言うことは、偉大なるデカルト分身さんも、釈迦分身様も、スマップ分身さんたちも、単なる「脳の錯覚」をこぞって絶賛していたこととなります。

それを聞いても、まだあなたは、「なあんだあ、自我なんてものは、環境に作られているだけのものだったのかあ。じゃあ、今まで信じていた“自分”という感覚は、結構あいまいな他人任せなものだったんだなあ。本当の自分なんてなかったんだあ」などと納得できないと思います。だって、外界とはっきりと境界線で区切られた自分の肉体が、目の前に、というか、目と連続して存在しているのは否定できないからです。

そこであなたは言うかもしれません。

「じゃあ、もし百歩譲って、“われ”という意識は環境から作られているものに過ぎないとしても、でもこの肉体という“われ”は疑う余地はないじゃないですか!? この肉体の感じる痛みや快感は他の誰のものでもなく、まぎれもなく“われ”の痛みや快感ですよ!!」

ちよ、ちょっと怒らないで冷静に冷静に。

ここで一つサルを使った面白い実験を紹介します。東京医科歯科大学の入来篤史分身さんたちの行なった実験です。

まず、サルの手の届かないところに餌を置きます。近くには熊手が置いてあります。サルは頭がいいので、すぐに熊手を使って遠くの餌を引き寄せて食欲を満たすことに成功します。この時、サルの脳の神経細胞の活動を特殊な装置を作って観測してみると、熊手を手に取って眺めている時には、その反応は起こらなかったんですが、熊手を使用した際、彼の脳は熊手を自分の手の一部であると認識しているようだということがわかりました。つまり、その瞬間、熊手は彼の手の「延長」になったのです。

僕たちが、人ごみの中を長いスキー板を担いで歩く時は、スキー板は僕たちの身体の一部（延長）になっているので、誰にもぶつからずに歩けるのです。僕たちの認識している「自分の身体」などというものは、実はカッコリとしたものなんかではなく、このようにダイナミックに変化するものだったんです。

僕たちの誇るべき分身さん、養老孟司さんが次のように言っています。

「人間は自分の延長として、特に身体^{からだ}の延長として機械を作る」

徳永分身は、それを受けてかつて次のように言ったことがあります。

- > 車や自転車は足の延長、ナイフや杖は手の延長、アスファルトで固めた道路は身体^{からだ}の延長。人間は、ものを作り出すことで
 - > どんどん自分の世界を広げていきます。自分と外の世界とをつなげていきます。機械ではないですが、人間の作る情報というのは
 - > 脳の延長とも考えられます。（今では、もはやこの地球全部があなたの延長だと言えないでしょうか!?)
- (『世界を平和にする「自己愛的生活」』NO.36)

確固とした「自我」などは存在しないということは、逆に言えば、「自我」はどこまでも拡大させることが可能だ、ということも言えます。そして分身主義者とは、科学に導かれて、ついにこの宇宙にまで「自我」が拡大した人のことです!! ただし、あなたや僕が分身主義者になるためには、自分一人で思い込んでいるだけでは駄目です。

あなたの身体をこの宇宙だと仮定します。あなたの右手の小指は、ある日、自分はあなたの身体の一部であり全体であることに気づいて、「分身主義者」を目指すことを心に誓ったとします。でも、いくら右手の小指がそのように思い込んでも、中指が「おれは、おれだ。身体（宇宙）なんて関係ないさ」と言い張っている間は、右手の小指も完全な分身主義者になることはできません。あなたや僕が分身主義者になれた時というのは、全世界の人が分身主義者になった時以外にはあり得ません。それは、あなたという身体^{からだ}の全身に神経が行き渡り、あなたの身体が全身で喜びを表現して輝いているような状態です。

その日は、確実に近づいています！ 分身主義の森では、やみくもにあなたを連れ回しているのではなく、その場所にお導きしようとしているんです。

話を戻しますが、実は、先程あなたが主張の根拠に挙げた、人間の痛みや快感さえも、他人からのフィードバックによって作られるものなんです。

「サルには痛みはありません！」

と、「NHK人間講座」で『人間性の進化史（サル学で見るヒトの未来）』という講座をやっていた、京都大学霊長類研究所教授の正高信男分身さんは言います。「その証拠に、動物を飼った方はわかると思いますが、彼らは怪我をしても死ぬ直前まで元気です。ところが人間は、痛い痛いと言え続けるので、その病状が悪化していく経過を知ることができます」

「サルにも身体的な感覚としての苦痛はありますが、それは人間の苦痛とは、まったく違います。人間の場合は、周囲とのコミュニケーションを通して、身体的な苦痛が心理的に増幅されるからです。初めて歩けるようになった子どもを見ているとわかりますが、彼は転んでもケロッとした顔をしています。結構大怪我をしても平気です。でも、そこへ母親が駆けつけて、『ああ、痛かったね。ああ、大変』と慌てます。それによって、人間は“痛み”という心理的苦痛を学んでいくわけです」

そこで今日は次のように結論づけようと思います。

もし僕たち人間に言語というものがなくて、他人とのコミュニケーションが不十分な環境であったなら、僕たちは肉体に感じる痛みや快感さえもサルのレベルのままで、自分という意識（自我）も希薄なままであったに違いありません。言い換えれば、僕たちの肉体も心も、まさに環境に作られているものであり、僕たちの存在それ自体が環境の媒体であると言える。

今日、聞いていただいた、サルに関する二つの実験（鏡の実験と、熊手の実験）は、茂木健一分身さんの『心を生みだす脳のシステム』という本に詳しいです。説明が足りなかった分は、そちらでご確認ください。とても面白い本です。

ところで彼（正高信男分身さん）は、講座の最終回で、「近年、若者は自意識を喪失しようとしています」と言っています。

携帯電話などのコミュニケーション手段の発達、逆に僕たちの心のつながりを希薄にし、他人からの生のフィードバックが得られない関係性の中で、僕たちは自意識を見失いつつあり、その点で、サルに逆戻りしつつあると警告しています。これが、この講座を通して、彼の一番言いたかったことなんでしょう。

近年、四国八十八ヶ所を巡り歩くような、お遍路をする若者が増えているそうですが、彼ら若者が自分探しという行動に駆り立てられる理由は、自分がわからなくなり、不安になり、多くの若者が満たされない気持ちを抱き、すっぱりと空いた心の空間を満たしてくれる何かを探しているのではないだろうか、ということです。

本当に、そうでしょうか!?

確かに、ここだけ聞けば、おっしゃる通りで筋の通った推論ですが、先程の結論と合わせてみると、矛盾していることに気づきます。自我は初めから個人個人の持ち物として存在しているものではなく、周囲の環境によって作られるものだということでした。初めから自分のものでもなかったものに対して、「喪失」もクソもないではないですか？

彼（正高分身さん）の矛盾は、若者の不安や焦りや空虚さは、自我の喪失のせいだと信じている点です。そもそも、それが間違いでした。実は、自我を持たなければいけないという強迫観念こそが、若者に不安や焦りや空虚さをもたらしている原因だったんです。

そのことを、明日、この森の中でお話します。

ちょっと一言

「“私”の時代の幕切れは近い」

これは、世界8ヶ国で翻訳・出版された『ユーザー・イリュージョン』という本の著者であるトール・ノーレットランダーシュ分身さんの言葉です。ユーザー・イリュージョンとは、この本の中で、次のように説明されています。

「パソコンのモニター画面上には、“ゴミ箱”や“フォルダ”など様々なアイコンと文字が並ぶ。実際は単なる情報のかたまりに過ぎないのに、ユーザーはそれをクリックすると仕事をしてくれるので、さも画面の向こうに“ゴミ箱”や“フォルダ”があるかのように錯覚する。この現象をユーザー・イリュージョンと呼ぶ」

行動の主体として経験される“私”が錯覚なのはもちろん、僕たちが見たり、注意したり、感じたり、経験したりする全ての世界は錯覚である、という意味です。

彼は、コペンハーゲンで1955年に生まれ（徳永分身より2歳年上）ロスキレ大学で環境計画と科学社会学の分野で修士号を取得し、デンマーク工科大学に勤めた後、科学ジャーナリストとして、新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどで幅広く活躍する科学評論家として知られている分身さんです。この『ユーザー・イリュージョン』は、500ページを超える大著にもかかわらず、デンマークでは13万部もの空前の売り上げを記録した本だそうです。人口比で換算すると、日本では250万部に相当します。

彼はこの「“私”の時代の幕切れは近い」という名言の前に、次のような言葉を置いています。

「本書は数々の科学的経験に基づいているのだが、そうした経験から判断すると、意識ある自我の支配が今後も延々と何世代にもわたって続くことは、おそらくないだろう」

なんと心強い言葉でしょう！ 徳永分身には、この言葉が、「世界に平和の訪れは近い！」という言葉に響いてきます。最後にこの本に寄せられた賛辞の中の二つだけをご紹介します。

「驚嘆に値するほど豊富で興味深いアイデアを積み上げ、意識というものが、実はまやかしてあり、錯覚に過ぎないという主題を浮かび上がらせる」(ダグラス・ホフスタッター)

「私たちは脳にだまされている。意識などというのは幻想だ。いや、だまされるような私たちが存在するという感覚さえもが錯覚なのだ。本書の説明には思わず引き込まれてしまう。さらば、内なる“私”よ。それよりはるかに大いなるものよ、ようこそ」(イアン・スチュアート)

僕たちは今、「それよりはるかに大いなるもの」を、もう目前にしているというのに、どうしてこれ以上、まやかしてある「自我」にこだわる必要があるのでしょうか!? 一体、僕たちは何に恐怖しているのでしょうか!?

9日目 本当の自分探しとは？

「自我」なんてものは、神経系の錯覚のことだった。

僕たち若者の不安や焦りを煽るものの正体は、自我信奉が作り出す強迫観念である。

消費者金融の利子（個人主義のツケ）がたまって、首が回らなくなった僕たちが最後にとる手段は、アレ（自己破産宣言）しかない。つまり、今までの自我から解放されて、自由の身になることである。

昨日は、京都大学霊長類研究所教授の正高信男分身さんからの警告をご紹介します。時間切れとなりました。

近年、携帯電話などのコミュニケーション手段の発達で、広く浅くという人間関係を生じさせ、かえってコミュニケーションは希薄化し、他人からのフィードバックが得られにくい環境の中で、若者は自意識を喪失しつつあり、その意味で、サルに逆戻りしつつあるという警告でした。そのせいで、多くの若者が、自分がわからなくなり、不安になり、満たされない気持ちを抱き、すっばりと空いた心の空間を満たしてくれる何かを探して、自分探しという行動に駆り立てられるのではないだろうか、ということです。

確かに、これらの推論は論理的には筋が通っているのですが、その前の彼の主張と合わせてみると、矛盾していることに気づきます。

彼（正高信男分身さん）は、自我は初めから個人個人の持ち物として備わっているものではなく、周囲の環境によって築き上げられるものだと言っていました。簡単に言えば、自我とは自分の持ち物ではなく、消費者金融などが貸してくれる「他人のお金」に過ぎません。僕たちはいくらでも貸してくれる消費者金融から金を受け取って、それをまるで自分の金であるかのように錯覚して、湯水のごとく使い込んでいるようなものです。

その金は、初めから自分の金ではないから、ある日、消費者金融が金を貸してくれなくなったからといって、誰も「喪失した」などとは言わないですよ。初めから自分のお金でもないものに、「喪失」もクソもありません。

だから、僕たち若者の不安や焦りは、そんな理由ではないと考えられます（って、どさくさにまぎれて自分も若者の仲間に入ってみました）。それを知るには、もう少し過去に遡って、順序だてて考えてみる必要があります。

まず最初に、自我（自意識）に目覚めたことで我々はサルから人間になった、というのはいいですよ。つまり、簡単に金を貸してくれる便利な消費者金融ができたので、その金（つまり自我）を利用して、人間には、たくさんのことができるようになったというわけです。

(もう、消費者金融の比喻はいちゅうの)

そのことで、特に西欧の人たちの「自分、自分、自分」という意識はますます研ぎ澄まされ、個人と個人の競争や争奪が激化されていきます。激化される競争は、生活を豊かにする道具をたくさん作り出すことに貢献し、他の人が住んでいた土地まで取り上げて、華やかな文明を開化させ、文化や経済をまたたく間に発展(ちなみに分身主義には発展という言葉はなく、あるのは変化だけですが)させました。今まさに、その恩恵にあやかっているのが世界中の金持ちたちです。何故なら、強烈な自我に目覚めた彼らは、自分の損得に非常に敏感だからです。

自我という錯覚によって、僕たち人類が突き進んできた道は、それは、個人主義へ至る道でした。言い換えれば、今の僕たちは、「自分、自分、自分」という意識が作り上げた環境(=個人主義的環境)の中に投げ込まれて生きています。

ところが、日本の場合は、前段階がありました。

日本人は自我に目覚めたサルであっても、西欧の人たちほど強烈な自我には目覚めず、そのため個人を主張し合う文化は育たず、長いこと共同体的社会だったと言えます。日本人は、「控えめ」で「利他的」を尊いとする文化の中で生きていたので、江戸幕府が武士以外は名字を公称することを禁止したことに対して、抗議するという考えすらも浮かばないほどでした。

明治3年に平民にも名字を許すというお布令が出て、多くの人は公称するようになったけれども、僻遠の人たちはまだ名字を名乗ろうともしませんでした。というのは、集落の構成員が一つの共同体を作っていた辺地では、自分の家と他の家とを区別する発想すらも生じなかったためです。だから、明治8年には「苗字必称令」なるものを出して、強制的に名字をつけさせたほどです。

そのような共同体的で、控えめで、利他的で、のんびりとした日本にも、やがて個人主義の嵐が襲いかかります。その嵐は僕たちを叱咤激励します。

「お前ら、そんなにのほほーんとしていいのか！ 西欧諸国に置いてきぼりを食らうぞ！」

「さあ、競争だ！ やれ、戦争だ！ それ、略奪だ！ 他国に負けるんじゃないぞ！ 追いつけ、追い越せ！」

「自立だ！ 独立だ！ 自由を勝ち取れ！ 自分の意志で人生を切り開け！」

「人と違った自分を見つけて、人と違ったことをやって一旗上げろ！ 大切なのは自分、自分、自分だ！ 自分の人生をしっかりと生きろ！」

今では、僕たちは個性重視の教育を押し付けられ、何やら難しい横文字の「アイデンティティ」とやらを早急に確立せねばならないような強迫観念を持たされて生きています。今、そのように育てられた僕たちが、その子供たちをどのように育てるか、推して知るべしです。実は、僕たちを無言で縛り付けているこの強迫観念こそ曲者なんです！

欧米の人たちが、どうしてあれ程までにアイデンティティを云々するのかというと、それは彼らが、かつてののんびりとした日本人には想像できない程の強烈な自我に目覚めてしまっていたからです。その強烈な自我は、同じ迫害を受けても、日本人が体験する迫害の何倍も大きな迫害として一人ひとりに体験されます。日本人が体験する何倍もの大きさで迫害を体験してしまう彼らにとっては、一つの自己を貫く(アイデンティティを保つ)ということは、まさに死活問題でした。

例えば、名字を公称することを禁止されても、のんびりした日本人には痛くも痒くもなかったのに、強烈な自我に目覚めてしまった彼らには大きな迫害に感じてしまい、激しく抗議したり戦ったりするに違いありません。

しかし、共同体的社会でおっとり生きてきた日本人も、西欧の波が押し寄せてきてほったたかたかたでは、無理やり目を覚まさないわけにはいきません。「アイデンティティ」とやらを早急に確立せねばならないというような強迫観念や、個性的でなければ生きていく資格がないというような強迫観念を持たされることになりました。

もしあなたが、教育とは個性を伸ばすことだとか、個性を開花させることだなどと思い込んでいたら、そのような教育(洗脳)を受けてきた一人であり、この強迫観念に縛られている可能性があります。考えてみてください。僕たちにこの「強迫観念」さえなければ、古き良き時代(?)の日本のように、別に自分探しに躍起になることもなく、「サルに逆戻りだ！」などと脅かされても、「サルってかわいいよね」って喜んでいれればいいんです。ねえ、そうでしょう?!

僕たちが「自分がわからなくなり、不安になり、何か満たされない気持ち」になってしまうのは、正高分身さんのおっしゃるように自意識を喪失したからではなく、「自分というものをしっかり持たなくては行けない」という強迫観念に脅かされているにもかかわらず、確固とした自意識を持ってないからだったんです。

ちなみに、誤解のないように言っておきますが、僕(徳永分身)は、個性を伸ばす教育を否定して、個性を殺す教育をしろと言っていているわけではありません。僕たちを取り巻く環境が分身主義的な環境になれば、個性を伸ばす教育をしようなどと気張らずとも、自ずと個性を殺すような教育はしなくなります。

僕たちは一人でいろいろな個性や適性を持ち、いろいろな職業につくわけにはいきません。人前で派手な衣装を着て歌ったり踊ったりすることが向いている人もいれば、黙々と一人で研究に没頭することに向いている人もいるし、他人と話すことが好きで社交的な人もいます。そのどれもが一人の人間にできるわけではないので、自分にできないことができる人たちを、自分の代わりにやってくれている分身さんである、という考え方をするのが分身主義です。だから、自ずと他人の個性を殺すような行動は取らなくなるわけです。

ところで、村上春樹分身さんと河合隼雄分身さんの対談集『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』という本を読んでいて、面白い言葉にぶつかりました。それは河合隼雄分身さんの次の言葉です。

「アメリカ人は、とくにいわゆる西洋流のエゴをものごく大事にしているから、自分の意思とか自分の考えとか、そういうものに寄っかかっているんですね。(中略)自分の力で事業を起こして、自分の力で儲けて、自分の好きなようにしてどこが悪い、それができないやつはそいつがだめなんじゃないかという考え方で来ています」

この言葉は、個人主義のアメリカの国民性をよく言い表していると思います。日本にも、そのような考え方をする人がたくさん増えていきますね。ただし、河合隼雄という分身さんは、このアメリカ人の持つ個人主義的な感覚に対して肯定的な方のように、言葉の端々に、日本

人ももっと見習わなければいけないなどという言葉が出てきます。僕たち日本人が、事あるごとに、アメリカ人だったらこう考える、アメリカ人だったらこう行動する、アメリカ人を見習おう、というような発想をしてしまう脳には、ちょっと古臭さを感じます。では、この辺で、僕（徳永分身）の考えを述べます。

「自分探し」は不要だと言っているのではありません。僕が過去に著した著作物は全て、一言で言えば「自分探し」そのものです。文章を書くことで「自分探し」をしていたのです。「自分探し」は、必要なことだと考えています。ただ、今の僕たちの「自分探し」は、往々にして、「どうして自分は生まれてきたのか?」「自分には生きる意味があるのか?」「自分には何ができるか?」「自分は何に向いているか?」「自分の個性は何か?」「社会は、自分の何を必要としてくれるか?」などという「自分、自分、自分」ばかりで、それではあまりにも近視眼的（＝自己中心的）な自分探しです。

その程度のものは「自分探し」とも言えない、と断言できます。そんな自分探しは、ほんの少しだけ海面に姿を見せている「氷山の一角」としての自分だけを問題にしているようなものです。本当の自分探しは、その下に広大に広がる氷の真の姿を探ることです。そして、その氷と海水との関係を研究したり、海水と空気との関係を研究したり、その氷がどこで生まれ、どのように運ばれてきたかを調査したり、科学的方法論によって、いろいろな原因をどこまでも遡って探っていくことです。

科学者たちの、気の遠くなるような長い年月の努力と情熱が突っつ、今、科学は僕たちに一つの結論を提示しています。「自我」とは、神経系の錯覚が作り出していた意識である。ということだったので（神経系とは、脳と脊髄からなる中枢神経系と、脳および脊髄から出て全身に分布する末梢神経系の総称です）、そしてそれはまた、約140億年をかけて、素粒子たちが作り上げたものだったということです。

氷山の一角だけしか見ない近視眼的な自分探しは、うまくすれば一時的に、ごきげんな結論を導き出せるかもしれませんが。

「私は、多くの人の愛によってこの世に誕生したんだわ。ああ、大切な私の命」

「僕は自分の声を活かして、人々に喜びを与えてあげることのできる歌手になろう！」

「私は人間が好き。困っている人を救う仕事をしたい！」

「私はお金が大好き。世界一のお金持ちになりたいわ」

「俺は、誰にも文句を言わせない権力を手にしたい」

これらは「自分探し」というよりも、「自分らしさ探し」をしているだけと言えます。そのような結論を導き出し、なんとなく、幸せな気分になり着いたとしても、それは一時しのぎの単なるごまかしでしかありません。それと正反対に、科学に基づいた本当の「自分探し」が辿り着いた結論は、とんでもないものでした。

「僕たちは、環境の媒体に過ぎなかった」

「僕たちには、自由意思などなかった」

「自我なんてものは、神経系の錯覚だった」

それはまさに、自我を信奉して個人主義への道をひた走ってきた僕たち人類にとって青天の霹靂でした。人類の「敗北」でした。あなたは、科学的方法論による真の自分探しが導いたこの結論を、受け入れることができますか？ それでもまだあなたは頑なに言い張りますか？

「“自分”という意識は、単なる神経系が作り出す錯覚に過ぎなかったというのは百歩譲って認めたとしても、尚、厳然として“自分”は、他との境界を持ったこの身体に存在している。その証拠に、僕たちが意識しようが意識しまいが、僕たちの身体には、自・他を明確に認識する仕組みが出来上がっている」

「免疫系」のことをおっしゃっているのですね。それでは、明日は、「免疫系」の話をさせていただくことにします。免疫とは、体内に侵入するウイルスや病原菌などを、「自分ではないもの」として認識し、体内から排除しようとする僕たちの身体に備わっている仕組みだと言われています。つまり、僕たちが意識しようが意識しまいが、僕たちの身体には、自・他を明確に認識する仕組みが出来上がっていたということになります。

果たして、それは科学的な理解なのでしょうか？

明日は、その他にも、科学が導いた結論を受け入れることができない人たちの意見や理論をご紹介します。彼らの意見は、とても参考になることと思います。

ちょっと一言

「自我」は僕たち人類に、様々な発展(?)をもたらししました。それは、個人主義的社会と共同体的社会の発展(?)の違いを考えてみれば一目瞭然です。元々は共同体的社会で生きていた僕たち日本人ですが、自我の強い西欧人たちの影響により個人主義的社会に移行したおかげで、かつてバブル時代と言われるおいしい時期を経験させていただきました。

しかし、同時にその「自我」信奉が撒いてきたツケが、今となっては現代社会に様々な問題を生む原因にもなってしまったんです。決してなくなる様子を見せない犯罪や戦争も、「自我信奉」が引き起こす社会問題です。若者たちが「自分がわからなくなり、不安になり、何か満たされない気持ち」になってしまうのも、「自我信奉」のツケでしたよね。そして、人々が「精神病」と命名したのも、実はこの、「自我信奉」から生まれてきたものだったんです。

いくらでも貸してくれた消費者金融のお金に甘えて、他人が羨むようなきらびやかな物を放埒に買い漁り、この物質文明の中で存分に甘い汁を吸ってきた僕たちですが、その利子がいつの間にか膨大に膨らんでいて、今では、首がどうにも回らなくなってしまった状態です(おい、おい、最後にまた消費者金融の比喻かい!)でも、もう少しこの比喻を使わせていただきます。

こんなにお金を借りすぎて、その膨らみ過ぎた利子によって、追い詰められてしまっている僕たちにできる最後の手段は、そう、アレしかありません。

自己破産宣言！

つまり、今までの自我から解放されて、自由の身になることです。

10日目 免疫系とは？

この体内は、**悲惨な戦場などではありません。ただ静かに、穏やかに、ひたすら与えられた化学反応を遂行しているだけです。**

今日は、免疫系についてでしたね。

僕たちの身体は、それぞれ専門の（約200種類の）役割を持った細胞でできていますが、その総数は約60兆個とも言われています。その細胞の表面には、赤血球など一部の例外を除いて、一つ一つに「自分の一部である印」がついています。専門用語で言えば、**主要組織適合抗原（MHC：Major Histocompatibility Complex）**というものです。

これは、父親由来の3種と母親由来の3種の、合計6種の分子からできています。いわば、生まれながらにして6桁のI D番号が刻み込まれていると理解すればわかりやすいと思います。

父親3種+母親3種=6桁のI D番号

そして僕たちの生体内では、このI D番号が一致しないものは自分以外のものと認識され、排除（拒絶）されるという仕組みがあるとされています。その仕組みを免疫系と呼びます。

ヤケドを例にとりて考えてみましょう。ひどいやケドをして皮膚を移植しなければならなくなった場合に、自分の皮膚の一部を自分に移植したとします。この場合には、「わたし」を示す印がついた皮膚なので移植は成功します。しかし、他人の皮膚を移植した場合には、異なる印がついているので、もし皮膚移植がうまくいったかのように見えても、やがては体内の免疫活動によって、拒絶反応が起こり、移植された皮膚はかさぶたのようになってはがれ落ちてしまいます。

ちなみに、このMHCは一卵性双生児では完全に一致しますが、赤の他人で完全に一致することはほとんどなく、兄弟姉妹でも4分の1の確率なので、臓器移植などのドナー（提供者）探しを難しくしています。また、僕たちの身体を、ウイルスや細菌や目に見えない有害な物質などの抗原から守って、健康を維持してくれているのも、この免疫系という防衛システムのおかげだと考えられています。（しかし、このような説明は、本当に科学的と言えるでしょうか？）

免疫系は、「自己」と「非自己」を区別して“わたし”の身体を、危険な外界の攻撃から守るために存在している、と一般的な本には説明されています。つまり、前回、あなたが主張されたように「僕たちが意識しようが意識しまいが、僕たちの身体には、自・他を明確に認識する仕組みが出来上がっている」ということの証明です。（でも、このような説明は、本当に科学的と言えるのでしょうか？）

もし、この生体内で、自分を守るために外部からの異物を排除（拒絶）するような何か（人間で言えば意思のようなもの）が存在するというなら、アレルギーはどうでしょう。守らなければならない自分を攻撃してしまう現象がアレルギーです。

そのことから考えれば、実は、生体内には、守らなければならない自分などという概念のような何かがあるわけではなく、自然界の法則に則った単なる化学反応に対して、人間が勝手に感情移入してしまって、守っていると攻撃しているとか、みなしているだけなのではないでしょうか？

でも、「アレルギー」に対しては、次のような巧妙な理由づけが、既に用意されています。**アレルギーとは、生体（自己）内に入り込む異物（非自己）に対する過剰防衛が引き起こした結果である。**これは実にうまく考え出された理由づけでもあります。何に対しても、何とか自分を納得させる理由を見つけたのが人間ですが、それにしても人間は、実に頭が良くできていますと感心します。

だけど、もし、真の科学者であったなら、免疫を「自己を守る仕組み」だとか、アレルギーを「過剰防衛」などと考えないはずで、真の科学者なら、「生体内には、ひたすらそのような反応があるだけだ」と答えるはずで、そのような単なる反応に対して、人間が感情移入した場合のみ、「自己を守って」いるように見えたり、「過剰防衛して」いるように見えるだけです。

彼ら（真の科学者たち）は、ただ、僕たち素人にもわかりやすく説明するために、あるいは自分で理解しやすく整理するために、感情移入してみたり、人間界の営みに置き換えたりする言い回しをしてしまうだけなんです。

『身体を守る免疫の仕組み』（かんき出版）という本は、僕たち素人が免疫のことを勉強するには、とても詳しく、かつわかりやすく書かれた本です。せつかく分身主義の森で自分探しを始めたからには、是非とも読んでいただきたい本の一つです。これは才園哲人という分身さんが書いた（媒体となって書かされた）本です。

彼は、1946年生まれれの農学博士の方です。分身主義的に言い直せば、1946年に生まれさせられて、その後、彼を取り巻く諸々の環境によって、現在、農学博士をやらされている方 となります。

彼（西園分身さん）の文章をちょっと抜き書きしてみます。

「免疫システム（生体防御機構）は、敵の侵入、内乱者の発生を常時、監視している常備軍から、侵入した敵に合わせて訓練された特殊部隊まで、それぞれが綿密な連携をとりながら、自己と非自己を厳格に識別することによって、確実に生体（自己）を敵（非自己）から守っている総合システムである」

どうですか？ 確かにわかりやすいでしょう!? だけど、彼のわかりやすい説明はさらに過熱します。

「リンパ球の中で、T細胞が陸軍特殊部隊なら、B細胞は空軍特殊部隊といったところでしょうか。B細胞は抗体というミサイルを生産し、さながら空爆のように敵に向けて次々に発射します」

このT (Thymus)細胞やB (Bone marrow)細胞というのが、抜き書きの説明に出てきた「侵入した敵に合わせて訓練された特殊部隊」のことです。

彼の記述は、ついにはテロリストやらアルカイダやらが登場して、まるでこの体内は悲惨極まりない戦場であるかのような危機感まで抱かされてしまいます。それは確かに彼の文章の力ですが、ここまできたら悪ノリに感じます。

この本を読んで免疫系のことを勉強するのはお勧めしますが、だけど注意していただきたいことがあります。彼(才園哲人分身さん)は、僕たちの理解を助けるために、わかりやすい比喻を用いているだけだということをお忘れなさい。そして、免疫のことを「自・他を認識する仕組み」と説明するのも、実は「自我」という幻想を持っている僕たち人間に置き換えて、わかりやすく説明しているだけなんです。

ヌードマウスというのがあります。免疫の実験で使われるマウスですが、どうして彼がこんな恥ずかしい名前をつけられてしまったかという、その名が示すとおり、毛がない真っ裸のマウスだからです。最初は、突然変異として見つかりました。彼(ヌードマウス)が免疫の実験で使われる最大の理由は、裸だからではありません。先天的に胸腺を欠損しているからです。

胸腺とは、人間では胸骨上部の後ろ側にあり、木の葉の形をした器官で、免疫機能で中枢的な役割を担っている場所です。具体的に言えば、この身体をウイルスや細菌などから守ってくれるリンパ球の一種である「T細胞」が作られる場所です。ちなみに、T細胞のTは、Thymus (胸腺)のTです。

ヌードマウスにはこの胸腺がないので、T細胞が作られず、免疫機能がきちんと働きません。それで、別のマウスから皮膚などの移植をした時でも、その組織は拒絶反応などの問題を起こさずちゃんとついてしまうし、また、マウス以外の動物の組織すら移植できてしまいます。胸腺のないヌードマウスには免疫機能がなく、したがって、「自己」も「非自己」もないことになります。

もし、あなたが免疫系を持ち出してきて「我々が意識しようが意識しまいが、人間の体内には自己と非自己とを明確に認識する仕組みが備わっている。すなわち“自分”は確実に存在する」と主張するとしたら、極端なことを言えば、「自分」とは「胸腺」のことである、ということになります。そのこと(免疫系の仕組み)をもって、「自分」はある(存在する)と主張するのなら、自分とは胸腺のことであるという理屈になってしまうということです。

どうして、こんな変てこな結論に至ってしまうかわかりますか!?

それは、あなたの初めの主張からして、科学的ではなかったからです。それは、僕たち素人にわかりやすく説明して下さった才園哲人分身さんのように、人間の営みに置き換えた文学的なたとえ話であって、自然界中心に考える真の科学ではなかったからです。体内で行われている単なる反応に対して、人間が勝手に意味づけをしてしまっているだけなんです。体内で行われていることは、鍵穴に合う物質が飛び込んできたら扉が開かれて内容物が吐き出されたりという、単なる化学反応が起こっているだけです。胸腺があるマウスはあるなりに、胸腺がないマウスはないなりに反応しているだけです。ただ単に、自然界の法則に則したしかるべき反応が起こっているだけです。何故そのような反応が起こるかという、それには理由も目的もありません。自分を守るためでも敵をやっつけるためでもありません。長い年月の自然淘汰の中で、そのような反応をするタンパク質を作り出す遺伝子が絶滅せずに繁栄しているから、と言えるだけの話です。

だけど人間は想像力が豊かなので、この「絶滅せずに繁栄して」いる状態を、「生き延びようとする力が働いている」とか「生かそうとする目に見えない力が働いている」というような詩的な解釈をしてしまう癖があります。それはどこか宗教の考え方と似ています。

宗教とは、自然界を詩的に解釈したもの　つまり、人類の作った究極の「詩」なのかもしれませんね。

自然界には、決して、攻撃も防衛も存在しません。単なる化学反応を、人間がそのように見てしまうだけなんです。まして、過剰防衛などあり得ません。アレルギーも、人間中心に見なければ過剰防衛でもなんでもなく、単なる自然界の物質同士の化学反応に過ぎません。防衛している意識すらない自然界の物質にとって、過剰などという言葉は当てはまりません!

それらはみんな、科学者が我々素人にわかりやすくするために、人間界の営みに置き換えたり、人間の思考形態に合わせて説明しているだけなんです。

いいですか!? この体内は、悲惨な戦場などではありません。ただ静かに、とても穏やかに、ひたすら与えられた化学反応を繰り返しているだけです。それぞれがそれぞれの役割を、ひたすら忠実に遂行しているだけです。とても静かにゆったりと時間は流れています。

実は、真の科学が教えてくれていることは、このことだったんです。決して、これ以上でもこれ以下でもありません! もし、そこに何らかの意味づけをするなら、それは人間の側の都合であることを忘れずに行動してください。

そのようにして意味づけされたものは、あくまでも詩や文学などの範疇で、もはや科学ではなく、非科学の話であることを忘れずに行動してください。何故なら、自分たちの中でそれを明確に区分していなければ、せっかく辿り着いた科学的真理が歪められてしまうからです!

最後に、『身体を守る免疫の仕組み』という本の中で、それを書かされた媒体である才園哲人分身さんが語って(語らされて)いる、次のような言葉をご紹介します。

「生体防御機構(免疫システム)は、それがどんなに厳しい戦いであっても、体の内部での戦いであり、決して体の外に攻め出すことはない。すなわち、あくまでも占守防衛(専守防衛の間違い?)に徹している自衛隊なのである。自然科学が生物から多くを学び、それを模倣することによって進歩しているように、人類社会も生物から自衛システムを学び、模倣することが、今こそ必要な時代なのではないだろう

か。生物の生体維持システムの中にこそ、テロリズムや戦争のない地球社会を実現するヒントが隠されているように思う。21世紀の人類、国家の在り方について、一緒にそのヒントを探してみたい」

なかなかすばらしい発想ですし、おっしゃりたいことはよくわかります。ほとんどの方が、このような意見を聞いてうなずかれることと思います。だけど、ちょっと考えれば、でたらめな論理であることに気づきます。

まず、「生物から自衛システムを学ぶ」と言っていますが、彼のやっていることは実はその逆で、人間社会にある自衛システムを生物に当てはめて見ているだけなんです。自分の描く平和という見取り図を、生物の営みに重ね合わせているだけなんです。

自然界にあるのは、自衛システムでも、テロ行為でも、戦争でもありません。人間界に棲む彼が、自然界にそのようなものを見て取ってしまっているだけです。

そして、彼の描く平和という見取り図は、どうやら、専守防衛に徹する完璧な「自衛システム」によって実現することのようです。それさえできあがれば、テロ行為も戦争もない社会が来ると言っているかのように聞こえませんか。だけど、専守防衛に徹しているはずだった免疫界を説明するのに、そこにはないはずのテロリストや戦争のたとえを持ち出してきて説明していたのは彼自身だったではないですか!?

せっかく、世界平和のために、生物の営みから文学的な教訓を引き出すとすれば、完全無欠の分身主義者を目指す僕（徳永分身）なら、次のように考えます。

世の中にはアレルギーで悩んでいる人とそうでない人がいます。アレルギーを起こしやすい体質を「アトピー素因」と言います。ちょっと専門的な用語を使って説明すると、アトピー素因とは、IgE抗体を産生しやすい体質のことです。このIgE抗体はB細胞から作られる抗体ですが、その際にヘルパーT細胞が重要な役割を果たします。ヘルパーT細胞には、Th1細胞とTh2細胞があって、Th2細胞からインターロイキン4という物質が放出されると、B細胞ではIgE抗体の産生が促進されます。その反対に、Th1細胞からインターフェロンガンマという物質が放出されるとB細胞ではIgE抗体の産生が抑制されます。つまり、次のような図式になります。

・Th1細胞>Th2細胞の場合 IgE抗体が少ない=非アトピー素因

・Th1細胞<Th2細胞の場合 IgE抗体が多い=アトピー素因

そしてまた、Th1細胞は、体内の細菌を貪食したマクロファージから分泌されるインターロイキン12という物質の作用から作られます。そのため、幼少時（3歳ぐらいまでの間）に細菌感染を繰り返すことで、Th1細胞が多い非アトピー素因になると言われています。

ちょっと専門用語を使い過ぎましたが、何が言いたいかというと、非アトピー素因とは、物心つく前から、外部の敵（細菌）を敵とも思わずに仲良くやっていくことで作られる体質だということです。そのことで大きくなって敵を作らずに、外部のみんなと仲良くやっていけることになったんです。細菌を敵として隔離してしまった僕たちの環境が、細菌を本物の敵にできてしまっていただけなのかもしれません。非アトピー素因のように周囲に敵がいなければ、防備という概念も不要になります。

いいですか？ 敵とは、僕たちの脳の幻想が作り上げているモンスターに過ぎません。「自我」という観念も、僕たちの脳が作り上げている幻想に過ぎませんでした。僕たちのこの境界線を持った一時的な身体は、自分の持ち物ではなく、また、この身体は外部の敵と闘っているのではなく、ただ反応し適合しているだけだったのです。

科学から文学的な教訓を引き出すという同じ作業でも、このように、分身主義の方がずっと穏やかで平和であることを理解していただけますか？ それは何よりも、自然界の現象を人間の都合、あるいは自分の都合に合わせて理解しようとするのではなく、どこまでも自然界中心に謙虚に理解しようとするからです。

僕たちの世界が平和になる時は、防備という概念もなくなり、武器も不必要になった時だけです。たとえ専守防衛に徹したとしても、「自衛システム」が存在する限り、世界は平和ではありません。もしあったとしても、それは戦争を回避する状態が存在しているだけです。

平和とは、決して「戦争を回避している状態」のことではありません！

さて、今日は森の中をずいぶん連れ回してしまって疲れたことと思います。何だか、戦争で爆弾が飛び交う中を逃げ回ってきたような疲れが残りました。前回お約束した、「人間には自由意志などない」という結論に到達してしまった科学に対して寄せられた反論のご紹介は、明日に持ち越しです。今日は頭を整理してゆっくり休んでください。

ちょっと一言

真の科学とは何かという理解していただけたでしょうか？ 真の科学とは、あくまでも自然界中心に物事を理解しようとするということです。そうしないと、せっかく辿り着いた科学的真理は歪められてしまいます。

「科学者でもないお前が、生意気なことを言うな！」なんておっしゃらないでください。いつも言うように、科学者と言われる人たちが、いつも科学的だとは言いきれません。傍目八目という言葉があるように、傍から見ている僕たちの方が、近視眼的に自分の研究に没頭してしまっている科学者よりも大局を見ることがあるんです。

免疫系の話で言えば、現在、科学はものすごいところに辿り着いています。今回の話に出てきた抗体（=抗原という敵に対して発射させるミサイル）のことですが、今では必要な抗体だけを純粋培養させていくだけでも増やす技術や、抗体の遺伝子进行操作する抗体工学により、より強力な、使い勝手のよいものをデザインし、作り出せるまでになっています。

それは、空を見上げることも忘れて、トンネルの内部をどこまでも掘り進む科学者だから成し遂げられたことです。もし科学者が、僕たちのように傍らから大局を見ているだけだったなら、とてもここまでは辿り着けなかったでしょう。

お互いに、お互いの得手・不得手を補い合うべきです。血のにじむような努力の末に、たくさんの発見や発明をしてくださった科学者の方たちに、僕たちからできるお返しは、自分の目先のことに夢中になって真の科学を忘れそうになっている彼らに、時々「真の科学」を

思い出させてあげることです。

分身主義は、あくまでも真の科学から導かれたものです。繰り返しますが、真の科学とは、自然界中心に物事をありのままに理解しようとするものです。もし、人間中心になってしまったら、同じ言葉も違う意味になってしまいますので、十分に注意してください！

例えば、分身主義は、科学の「全ての物事には必ず原因がある」という基本原理から、「この世界で起こる全ての現象は必然である」という真理を導き出しましたが、この言葉を人間中心に捉えるとどうなるでしょう？

同じ、「この世界で起こる全ての現象は必然である」という言葉は、人間中心的に解釈すると、「この世界で起こる全ての現象には、必ず何らかの意味や目的がある」という意味になってしまい、占い師や霊能者たちの論証の根拠にされてしまいそうです。同じ言葉でも立場を変えると、まったく逆の解釈になってしまいます。

くれぐれも言うておきます。どんなに綺麗に聞こえる言葉でも、それが人間中心である限り、個人的な救済はできても決して世界を救済できません！そして、情報化時代の現代を生きる僕たちは、世界が救済されなければ、決して個人の救済もあり得ません！！これを声を大にして言うておきます。

どんなに綺麗に聞こえる言葉でも だま 騙されないのでくださいね。

11日目 トゲは身を守るためにあるのか？

科学時代を生きる僕たちは、この宇宙には敵など一つも存在しないと教えてくれている科学の声に耳を貸すべきです。

先日、妻と近くの公園をウォーキング散歩（ちょっと早足の散歩といった程度のもの）をしていたら、大きなアザミを見つけました。僕（徳永分身）は花の名前は少しも覚える気がなくて、彼女に教えてもらってもその都度忘れませんが、アザミくらいは知っています。

「うわあ、アザミだ。怖いねえ」

子供の頃、姉が購読していた少女雑誌に連載されていた、確か「紅アザミ」とかいう題名の恐怖漫画が脳裏に浮かびました。連続殺人が起こり、事件現場にはいつも、何かを象徴するかのようには紅アザミが刺さっている、というような内容だったと思います。夢にまで見たり、夜には一人でトイレにも行けなくなったりしたほど印象強く怖い漫画でした。「アザミ」という言葉を聞くと、そのせいで、今でも条件反射的に鳥肌が立ちそうになってしまうのです。

「すごい、よく知ってるわね。ずいぶん大きくて立派なアザミね」

「紅アザミだね。ヒュー怖い怖い」

口からでまかせを言うてみたけれど、妻はちょっと首をかしげたまま否定はしなかったので当たっていたのかもしれない。僕は怖いものから遠ざかるように、少し足早に歩くと、彼女は後を追いつつポツリと言いました。

「アザミのトゲは何から身を守っているのかしら？」

分身主義の森の中を歩いている最中の僕は、即座に次のような言葉が口をついて出てしまいました。「普通は誰もがそう考えるけど、実は、その考え方は間違ってるんだよ。奴らは何かから身を守ってるんじゃないんだ。そのように解釈するのは科学的とは言えないよ。アザミはただ」

「そんな話、どうでもいいのよ！」妻は僕の話のをさえぎって声を荒げました。「あたしは、そんな理屈なんか聞きたいんじゃないで、トゲは何から身を守るためにあるんだから、何から守ってるのかなんて思っただけで」

「いやっ！だから、トゲは別に何かから身を守るためにあるんじゃないんだ！前後関係をよく確認してみなよ。遺伝子が突然変異を繰り返しているうちに、そのような形態を持ったものがたまたま出現し、その形態がたまたま他のものからの捕食や採集などから免れる働きをしているので、そのせいで、そのような形態を作る遺伝子を持ったものが今も絶滅せずに残っていて繁栄しているというだけの話なんだ。その結果だけを見てトゲが何かから身を守るためにある、と考えるのは文学や詩の話で、人間が感情移入してそのように感じてしまうだけなんだ」

隣を歩いている妻が、不満そうな顔をしているのがわかりました。「そのように感じていけないわけ！」

「うん、それがいけないんだ。文学的な話をするならば、という前提でそのように話すのは一向に構わないけど、それが自然界の真の姿だと思ってしまったら、とんでもないことになる。トゲは身を守るためにあるのではなく、たまたま、結果的に身を守る働きをしているだけなんだ。少なくとも科学者は、トゲは何から身を守るためにあるなどという嘘を使って自然界を説明してはいけないんだよ。だって、そのような考え方をしてしまうことが、自分の周りに作らなくていい敵を作ってしまったらしてらんだから。本当の科学は、少しもそんなことは教えてない！僕たちに守るべきものなんてないって科学は教えてくれている！」

次の瞬間、脳内に浮かんだ言葉を、僕はそのまま口に出していました。

「この宇宙には敵など一つも存在しないんだ！」

その言葉は、僕の心の中に神の啓示のように響き渡りました。

妻にも時々、分身主義の話聞いてもらおうと試みてはいるのですが、僕が分身主義の話をする、彼女はまた拒絶反応を示すので、あなたに聞いていただいている100分の1も話してはけません。でも、最後の言葉に対して、何も言い返してこなかったということは、少しは分身主義の優しい肌触りくらいは感じてもらえたかなと思いました。

黙ってしまった妻は、何かを考えてくれていたのかもしれない。あるいは、それ以上、何も考えまいとしていたのかもしれないけど、いずれにしても、僕は今はこの話はここで打ち切るべきだなと感じました。

「あっ、そろそろ、湖が見えてくるよね」

「うん、ほら、もう見えてるじゃない。そこよ。そこっ！」

この広大な公園の敷地内には池がいくつかあるのですが、木立に囲まれたその場所から垣間見える池は、遠くに湖があるような感じに見えることを、以前、彼女が発見したんです。

「幻想的だね。霧の摩周湖だね」

霧なんてどこにもないけど、彼女は「うん」と答えました。

否定されなかったことに気を良くして、僕がもう一度「ね、まるで霧の摩周湖だ」と繰り返すと、彼女は再び「うん」と答えて、『霧の摩周湖』を歌い出しました。

彼女には、まだまだ時間はかかるかもしれないけど、きっといつか分身主義を理解してもらおう、と僕は考えています。そのためには、少しくらいの喧嘩も仕方ないなと思います。それが彼女の一番の幸せのためだと信じているからです。

完璧症とでもいうようなハンデを抱えて48年間生きてきた僕に、ちょうどその半分に当たる24年間も我慢して付き添ってきてくれた分身さんです。彼女の払った犠牲は相当なものだったと感じています。今、仮に名づけたこの完璧症というハンデは、見るもの聞くもの感じるものの全てを自分自身で理解し、納得した上でなければ不安で、先へ進むことすらできないというような病？です。何かを作っても気に入るまでいつまでも手を入れていたり、気に入ってもいつまでも眺めていて次のものが作れなかったりします。石橋を叩いて渡るところか、石橋を叩きすぎて壊してしまい、自分自身で石橋の構造を研究してもう一度作り直し、その上でやっと向こう岸に渡るというようなやっかいな歩み方をする僕の人生でした。

少しも安心して前に進めない、自分の立つ位置に常に不安を感じてしまう完璧症の僕は、この宇宙の真の姿をギュッと凝縮して、手のひらに乗せて眺めることができたなら、きっと安心して生きることができるだろうと思いつけてきました。そんなハンデを抱えて生きてきた僕だからこそやっと手にできた分身主義という輝く宝石を、彼女も共に享受し、恵みを受ける権利は十分あります。そのためには、一時の喧嘩もやむを得ません。何より、今の僕にとって二番目に親しい分身さんだからです。ちなみに、一番親しい分身は自分という分身です。

あなたという分身さんだって、とっても大切な分身さんです。僕はあなたとだって、喜んで喧嘩をします。その喧嘩は、あなたを責めかすための喧嘩ではなく、あなたに幸せになっていただきたいためにする喧嘩だからです。世界を平和にするためにする喧嘩です。

こんなに友好的な楽しい喧嘩はありません。できれば冗談を交えて、笑いながら喧嘩をしましょう。

「トゲは何かから身を守るためにある」そんな非科学的な言葉を、科学者までもが素人に説明する時に使ったりします。おかげで僕たちは、それが本当の自然界の姿だとすっかり思い込んでしまっています。だけど、花には、もちろん人間のような意思などありません。それどころか、人間にだって「今まで考えられていたような意思」などありません！

他人がいくらでも貸してくれる自我というお金を、まるで自分の物であるかのように自由気ままに使い込んで、今では人間はあまりにも傲慢になってしまいました。自我を浪費していい気になっています。何でも自分の意思でやっていると思いついて上がようになっていきます。「自分、自分、自分」という意識が強くなり、自分を守る気持ちが強くなり、自分の周りや自然界に敵を作っています。

真の科学は、そんなことは一つも教えていません！この宇宙には敵など一つも存在しないと教えてくれています。科学時代を生きる僕たちは、もっと科学の声に耳を貸すべきです。

昨日、分身主義の森と一緒に歩いてくださったあなたには、そのことを見つけていただきたかったのですが、どうでしょうか。

さて今日は、「人間には自由意志はない」という結論に到達した真の科学に対する反論のご紹介をする予定でしたが、またしても時間切れで、明日に持ち越しになりました。今日もぐっすりとお休みください。

分身主義の森は、普段使わない筋肉を使って歩くので、とても疲れますから。

ちょっと一言

僕は自分のことを話すのが苦手です。

個人主義的な環境で生きている僕たちは、基本的には自分以外のもの（あるいは自分と関係が浅いもの）には興味がないし、自分と相手と比較して優越感や劣等感を抱き、激しい嫉妬や羨望に胸を焦がしたり、自分と違う価値観を押し付けられることに対して怒りや恨みを抱いてしまう傾向があります。こんな環境の中で自分のことを話すと、大概は、いらぬ嫉妬や羨望、いらぬ怒りや恨みを貰ってしまうことになりかねません。だから、極力、自分のことは話すのはよそうと考えているのですが、今日はちょっとだけ自分のことをしゃべってしまいました。分身主義が行き渡れば、こんな心配もせずにみんなが自分のことを話せるようになります。それも、嫉妬や羨望、怒りや恨みとはまったく無縁に。

分身主義が行き渡れば、今まで嫉妬や羨望の対象だった天才や英雄は、みんなの総力を結集して、あなたの代わりにやってくださっている誇るべきあなたの分身さんなので、彼らに対して、自分自身を誇りに思う感情しか抱かなくなります。誰かが悪いことをしたとしても、それもあなたやみんなの総力の結集なので、その人一人に怒りや恨みをぶつけて責めることはしません。自分自身が救われるために彼に手を差し伸べます。そこにあるのは慈悲の愛だけです。

本当の意味で個人を尊重することは、個人主義にはできません。本当の意味で個人を尊重するのは、個人主義を受け入れつつその欠点を乗り越えた分身主義にしかできません。その時が来るまで、僕は極力、自分のことを話さずにおこうと考えています。

でも、最後にもう一つ、自分のことを書かせてください。先日、僕のマンションにも、ついに監視カメラが取り付けられました。それで僕は毎日悲しい気持ちで外出し、重い気持ちで帰宅します。個人主義的な環境が作り出した、悲しい道具です。こんな物騒なモノが不必要になる環境が、早く来てほしいと願います。こんな物騒なモノに対して、悲しい気持ちが湧き起こる感受性を忘れないで欲しいと思います。

こんなモノを必要とし、こんなモノに頼らなければ安心できない僕たちの感覚は、あまりにもおかしな方向に向かい過ぎていないでしょうか。でも、科学が人間の感受性を枯渇させたわけではありません。自分中心に突き進んできた結果、他人の気持ちを推し量る想像力が低下してしまった人間が、科学を扱ってしまっているだけです。

12日目 人間に自由意志はあるか？

今では、誰もが否定する「生物自然発生説」ですが、昔は多くの科学者たちが「自然発生説」を信じていました。

さて、分身主義の森もずいぶん深く入り込んでしまって、今さら帰ろうとしても難しいと思います。こうなったら、行くところまで行ってしまった方が楽ですよ。（おどし？）

今日は、「人間には自由意志はない」という結論に到達してしまった真の科学に対しての反論のご紹介です。取り敢えず、7つを抜粋してご紹介します。

- 1、私は自由意志は存在すると思います。人間は、他人の意見や行動に対して拒否的に感じたり、その自分の感じ方に則^{のっと}って自分が行動を起こすことができるからです。
- 2、あらゆる物質^{しこうせい}には指向性がある。物質の持つ指向性、もっと拡大すればこの宇宙の持つ指向性こそ、完全なる自由意志とも取れるものである。
- 3、自由意志はあります。意識や精神など、人の心は、自分を取り囲む^{もろもろ}諸々の慣習や制度や物質や文明などに支配されてはならない自由な存在なのです。
- 4、自由意志がないということは、自分が考えること、自分が行動すること、その全てがあらかじめ定まっています変更不可能ということになります。それでは自分の存在する意味もなく、つまらないので死ぬことにします。あれっ、これって自由意志でしょうか？
- 5、私は人には自由意志があると思います。理由としては無いと寂しすぎると考えるから。
- 6、「自由意志が存在しない」という考え方は、人間を機械の一種と見なす発想、人間を因果律に縛られた存在と見なす発想であり、人間性や想像力という言葉も無意味なものになりそうです。人間の可能性を否定するような考えは、文化や芸術^{ぶいもつ}の不毛につながるし、精神衛生上にも良くないので断固反対します。
- 7、人には自由意志があるがゆえに行動を自律的に統御できる、という前提にわずかでも問題があるとすると、犯罪に対する規制さえも困難になる。人が何かしでかしたとしても、本人が自ら決めてやったのではないので責任はないという言い逃れにもなるし、誰も罰することができないことになり、現行の法にも効力がなくなる。自由意志という支えがなくなると、統制ある社会が崩れ去るのではないだろうか。

どうですか？ あなた自身も同調できる意見があったのではないかと思います。

しかし、「人間には自由意志などない」というのは、よく考えれば当然のことで、よく考えないから「ある」と思い込んでいたり、そのようには考えたくないから、「ある」と思い込みたいだけのことなんです。

まず、自由意志と表記している本と、自由意思と表記している本がありますが、意志と意思は、意味的に重なり合っているところもあって紛^{まぎ}らわしいので、確認しておくことにします。

【意思】

(1)物事に対して持っている考え、思い。「表示」「の疎通を欠く」「個人の^{いんがいつ}を尊重する」「本人の^にに任せる」「撤回する^{はない}」

【意志】

(1)物事を行おうとする積極的な心。意欲。「^をを固める」

(2)物事をなすにあたっての積極的なこころざし。「^のの強い人」「^のの力でやりとげる」「^のの薄弱」「自由^の」「^がが通じる」

それで、ここでは自由意志という字を当てることにします。それでは、自由意志とは何かということから考えてみましょう。

僕たちは、耳が痒い^{かゆ}時や蚊に刺されて痒い^{かゆ}時、無意識で搔^かいていることがあります。眠っている時に搔^かいていることもあります。太陽が眩しく感じた時、即座に手で光を遮^{さへぎ}っています。熱いものに触れた時、「アチッ」と言って、無意識で手を引っ込めています。僕たちの行動は、どちらかという、大半がこのような無意識の行動で占められているように感じます。これらを、自由意志と呼ぶ人はいません。

自由意志とは、無意識に行動を取らされている時には動いていなくて、何かを意識的に行おうと思うことに対して使われる言葉のようです。つまり、本人の「意識」が関わってくる言葉です。

でも、意識して行動をしているとしても次の場合はどうでしょう。母親に、部屋の中を掃除しなさいと言われて、しぶしぶ掃除をするような場合です。自分が掃除をしているのは意識しています。面倒臭い^{めんどうくさい}なあと思っているくらいですから。だけど、親に命令されてする行動は、自由意志でやった行動とは言えません。何かの影響（指図^{さしず}や制約）を受けて行動を起こした場合、それは自分の自由意志で行動したとは言えないですね。つまり、自由意志とは、何からも影響（指図^{さしず}や制約）を受けずに、自発的な決定に基づく「思い」のこのようです。

では、あなたの人生の中で、「何からも影響を受けずに、自発的な決定に基づく思い」のようなものが一度でもあったかどうか、考えてみ

てください。

「お小遣いを2000円ためて、ガンダムのプラモデルを買おうぞ！」

ある日、あなたがそのように思い立ったとしたら、それはあなたの自由意志でしょうか？ 確かに、誰かに「プラモデルを買え」などと命令されてはいません。自分のお小遣いをためようが、どうしようが、自分の勝手です。でも、何にも影響されていないと言えるでしょうか？ 第一なんであなたは、ガンダムやプラモデルを知っているのですか？ テレビでガンダムを見たり、コマーシャルで精巧にできたプラモデルを紹介していたりしていませんか？ また、お小遣いにしたって、あなたのズボンのポケットから自然に湧いてくるものではなく、誰かがくれるのですよね。お小遣いというありがたい風習だって、あなたが作ったものではありません。あなたは、知らず知らずのうちに、たくさんのものに影響を受けていたのです。それは、「よーし、今日からダイエットをするぞ！」などというのも、たくさんのものに影響を受けて浮かび上がってきたものであるという点で同じです。

「わたしがあの人を好きになったのだけは、まぎれもなく自分の自由意志です。背が高い人が好きなわたしなんです」などと言ってみても駄目です。背が高い人が好きになるような影響を、あなたは知らず知らずのうちに受けていたんです。それに、その男の人が、あなたに対して何らかの影響を与えていて、それであなたは彼を好きになったのは明白です。

このように考えていくと、僕たちには「何からも影響（指図や制約）を受けない、自発的な決定に基づく思い」などというものは一つもないと言い切れます。

1979年、アメリカの神経生理学者ベンジャミン・リベット分身さんたちが、自由意志をめぐる興味深い実験をしています。

被験者は頭皮に電極をつけ、自分が好きな時に指を曲げるか手を動かすかすることにします。動作を行うということは、脳内に電気が発生しているわけで、それを捉える脳波計は、動作が行われる時点を正確に記録するはずですが、同時に、被験者は自分がいつ指を動かそうと思ったのが記録しておくことにします。その結果、面白いことがわかりました。

被験者がそのような動作を行おうと意識してから、実際にその動作が起こるまでには、0.2秒かかりました。これは別に不思議でも何でもありません。意識と動作の間には、わずかな時間差があって当然のことだからです。

しかし、不思議なことは、被験者が指を曲げるか手を動かそうと決める「前」、その約0.3秒前に神経系の動きが観測されることを発見したのです。この実験は、「決意の意識（=意志）」が発生する前にまず神経回路網が活動を開始し、その後で「決意の意識（=意志）」が発生することを示しています。「意志」が発生する前に活動を開始するこの奇妙な脳波は、準備電位と名づけられました。

この実験結果は、人によっていろいろな解釈がなされるかもしれませんが、しかし、この実験が示している事実は唯一つです。「決意の意識（=意志）」を自由意志と呼ぶとしても、その自由意志と呼ばれるものは、0.3秒前の神経系の動きによってもたらされていた、という動かしがたい事実です。言い方を換えると、僕たちは、神経系の働きによって浮上させられた意志によって行動をさせられていたにもかかわらず、脳は、さも自発的に行動を起こしたかのように後づけで認識していたということです。指は曲げようと思ったから曲がったのではなく、脳が無意識のうちに指を動かす準備を始め、それにつられて指を曲げようとする決意（意志）のようなものが生まれていただけだったのでした。

この実験は、他の科学者によっても追試され、同じ結果が出ています。リベット分身さんたちの実験に冷めた目を向ける科学者がやってみても、結果は同じでした。

ガンダムのプラモデルを買おうと決意することや、ダイエットをするぞと決意することや、誰かを好きになるような大それたことだけでなく、指を曲げるというちょっとした動作一つにしても、僕たちは自分の自由意志では行えない不自由な存在だったんです。

現代科学の最も大きな功績は、「全ての物事には原因がある」ということを、僕たちに証明してみせてくれたことです。これは科学の大原則と言ってもいいと思います。もしこの原則にほんの少しでも疑問が生じるようなことが起これば、今まで築き上げてきた科学の方法論や発見は疑わなければならなくなり、また、科学が発明してきたものまで、危なっかしく使えなくなります。

「何物の影響も受けない、自発的な決定に基づく思い」のことを自由意志と呼ぶと規定したわけですが、「意志」だけは何物の影響も受けなるとすれば、意志に関しては原因となるものが存在しない、ということになります。そんなことは、科学の大原則に照らし合わせても考えられないことです。

「何物の影響も受けない、自発的な決定に基づく思い」というものがあると考えるのは、何だか「生物自然発生説」を信じていた昔の人たちのような感じです。今では、誰もが、生物は自然発生などしないと知っていますが、1861年に、パスツールが生物は自然発生しないことを実験によって証明するまでは、多くの科学者たちが「自然発生説」を信じていました。生物は、うじが湧くという言葉のように、自然に、自発的に湧いてくるものかもしれないと信じられていたのです。

さて、「全ての物事には原因がある」という科学の大原則を使って、あなたも何かを考えてみてください。例えば、あなたが今、パソコンに向かって原因を考えてみてください。ではその原因の原因を考えてみてください。その原因の原因の原因を と、どこまでも遡ってみてください。どこかで途切れてしまうのでしょうか？ あなたが生まれる100年前も越えて、どこまでも遡れます。そして最後に行き着くところはどこでしょうか？

現代科学は、それはビッグバンに行き着くと考えています。ビッグバンは想像上の仮説ではありません。いろいろな観測によって、ビッグバンの正当性を裏付ける証拠がいくつも発見されているからです。

そこで、分身主義では、この宇宙で起こる全ての現象（人間の精神現象も含めて）は、「ビッグバンの風」が作り出していると表現します。

僕たちは、この宇宙という広大なビリヤードテーブルの上で、ビッグバンという最初の球が突かれてから、延々とその中の素粒子がぶつかりながら何かを形成したり分解したりしている、まさにその劇場の中にいるわけです。と言うより、僕たちのこの身体も、その劇場の中

で素粒子という役者が演じて見せている一時的な姿なんです。分身主義では、延々と、ビッグバンの影響を引きずっているその姿を、「ビッグバンの風」と形容するわけです。この言葉を使えば、ベンジャミン・リベット分身さんたちの実験によって確認された、約0.3秒前の準備電位の正体は、「ビッグバンの風である」と簡単に表現できるので便利です。

それでは、冒頭にご紹介させていただきました7つの意見に対して、分身主義的に回答させていただきます。

[1、私は自由意志は存在すると思います。人間は、他人の意見や行動に対して拒否的に感じたり、その自分の感じ方に則って自分が行動を起こすことができるからです]

この分身さんは、「他人の意見や行動に対して拒否的に感じ」る自分は、現時点のこの人の脳がそのような感じ方を浮かび上がらせる脳であるために、「他人の意見や行動に対して拒否的に感じ」てしまっているだけだ、ということに気づいていないだけです。

現時点のこの人の脳に幻想を浮かび上がらせる火種となるものが、記憶です。記憶とは、この人の脳を取り巻く環境（注 遺伝も、この人の脳を取り巻く環境の一部です）によって、植え付けられていくものことです。記憶は、たとえどのようなものであっても、この人自身の意志で作っていくものではありません。

例えばA子さんの誕生日を記憶する、などという場合であっても、それは因果関係をよく考えればわかりますが、現時点のその人の脳がそのような行動を取るような意志を、その人の脳に浮かび上がらせたのです。脳を取り巻く環境が脳に記憶を作り、その記憶が意志を作り出すわけで、そのように浮かび上げられた意志は自由意志とは言えません。

つまり、意志は確かに存在しますが、それは今まで言われていたような自由意志のような意味での意志ではなく、その人の脳の記憶（記憶とは反応の道でしたね）が浮かび上げられるものだったということです。

ちなみに、分身主義では、意志（will）のことを、正確を期するためミラード・ウィル（mirrored will）と呼ぶことにしています。意識とは自分の脳の中を鏡に映して見ているような状態ですが、今日ご紹介した実験でもわかるように、脳内に浮かび上がった意志を鏡に映し出した意識的な状態で見て、それを「意志」と呼んでいたわけですから、実際は「ミラード・ウィル（mirrored will）」、つまり、「鏡に映し出されている意志」と呼ばれるべきだからです。「意志」という言葉は、科学がまだ不十分だった頃のネーミングなので、現在では、本来の「意志」の意味を言い尽くしているものとは言えません。納豆と豆腐のネーミングはあべこべに用いてしまって、仕方なしに今でもそのまま用いているという説もあります。しかし、科学時代を生きる僕たちは、そろそろ、「意志」という言葉を正確な文脈の中で用いるべきです。

例えば、意志という言葉の前に「浮かび上げられた意志」とか、「映し出された意志」などという言葉を使って用いたり、ミラード・ウィルなどという言葉を用いるべきです。

[2、あらゆる物質には指向性がある。物質の持つ指向性、もっと拡大すればこの宇宙の持つ指向性こそ、完全なる自由意志とも取れるものである]

物質の指向性、この宇宙の指向性に全てが支配されているとするならば、むしろ自由意志は存在し得ないという理屈になるはずですが、物質や宇宙の指向性を自由意志と感じてしまうのは、この人が物質や宇宙に、人間だけが持つ「感情」を重ね合わせてしまうから起こる錯誤です。人形に感情移入して「リカちゃんに悲しんでいる」とか、花に感情移入して「ヒアシンスが水を浴びて喜んでいる」とか用いる場合と同じです。それは、詩や文学の範疇で、ここで交わされるべき意見ではありません。

[3、自由意志はあります。意識や精神など、人の心は、自分を取り囲む諸々の慣習や制度や物質や文明などに支配されてはならない自由な存在なのです]

立派な意見ですが、自分の理想や望みを語っているに過ぎません。論理的な話をしている際に、自分の理想や望みを介入させると、それはあくまでも非論理的な話になります。非論理的な話というものは、人間の想像力の数だけいくらでも考え出せてしまいます。

実は、この分身さんの理想や望みといっても、この分身さんの脳が、以前、「人の心は自由な存在であるべきだ」という「立派な考え」を記憶した脳であるために、そのような考え方を浮かび上げられて、今、そのような言葉を口にしてしまっただけです。

[4、自由意志がないということは、自分が考えること、自分が行動すること、その全てがあらかじめ定まっていて変更不可能ということになります。それでは自分の存在する意味もなく、つまらないので死ぬことにします。あれっ、これって自由意志でしょうか？]

この宇宙の全ての現象には、一定の法則性があるということは動かしがたい事実ですが、だからと言って僕たちはあらかじめ決められたルールの上をなぞって生きているだけと結論づけるのは、短絡的過ぎます。

$$X = a + b - c + d + e - f + g + h + i - 2(j + k) - jk$$

という法則性がこの宇宙にあるとします。しかし、この宇宙の中では、a . b . c . kにどのような値が入るのかを決定するのは、その直前の状況です。この宇宙は、a . b . c . d . e . f . g . h . i . j . kに、人間には予測不能な値を瞬時に放り込みながらXを決定して進んでいるようなものです。

僕たちに言えることは、結果からそれらの値が何だったか言い当てることだけできるだけです。ちなみに、この面倒な、値を同定する作業を省略して、分身主義では全てひっくり返して「ビッグバンの風」と形容するんですけどね。僕たちには、結果から見れば全ての物事は必然である、と言えるだけの話で、未来のことは決定されていることは何一つありません。もし運命を決める神様がいて、その神様が振るサイコロの出目は、神様本人にもわかりません。それと僕たちは、自殺に対して大きな思い違いをしてきました。

今まで僕たちは、自殺のことを、（自殺と言うくらいだから）自分で自分の命を絶つことだと信じていました。しかし、そのような直前の状況を作り出すのはやはりその人の脳を取り巻く環境、およびその環境に作られる記憶ですから、本来はあらゆる自殺は「他殺」と解釈されるべきものだったのです。そして、彼を死に至らしめた真犯人は、その人を取り巻く環境です。科学が不十分だった頃に作られた観念が、科学時代の今でもそのまま浸透しているだけです。

[5、私は人には自由意志があると思います。理由としては無いと寂しすぎると考えるから]

可愛らしい意見で、自然に笑みがこぼれます。子供が駄々をこねているみたいな感じで、許してあげたいような意見ですが、「無いと寂しいから、あると思う」というのは、誰か聞いてもわかる通り、自分勝手にでたらめな論理です。繰り返しますが、論理的な話をしている際に、自分の理想や望みを介入させると、それはあくまでも非論理的な話になります。非論理的な話というものは、人間の想像力の数だけいくらでも考え出せてしまいます。

もし、人類が、いつまでも子どものままで、しつこく非論理（非科学）的な話を押し通しているなら、この世界には永遠に平和は訪れられません。

[6、「自由意志が存在しない」という考え方は、人間を機械の一種と見なす発想、人間を因果律に縛られた存在と見なす発想であり、人間性や想像力という言葉も無意味なものになりそうです。人間の可能性を否定するような考えは、文化や芸術の不毛につながるし、精神衛生上にも良くないので断固反対します]

おっしゃることはよくわかります。しかし「良くないので断固反対します」という意見は、「無いと寂しすぎるとあると思いたい」という論理と大して変わりません。良くなかろうが、寂しかろうが、科学時代を生きる僕たちは、事実を直視すべきです。そしてまた、事実を直視して生まれた分身主義は、少しも人間の可能性を否定するものではありません。

この分身さんの不安は、海に入ったことのない人間が海を恐がっているようなものなんです。今必要なことは、取りあえず「良くなかろうが、寂しかろうが、事実を直視する」ということです。その上で、僕（徳永分身）と一緒にそこから立ち上がりましょう。そこには決して絶望的な海が広がっていません。今まで僕たちが経験し得なかった素晴らしい世界が広がっています。

[7、人には自由意志があるがゆえに行動を自律的に統御できる、という前提にわずかでも問題があるとすると、犯罪に対する規制さえも困難になる。人が何かしてかしたとしても、本人が自ら決めてやったのではないので責任はないという言い逃れにもなるし、誰も罰することができないことになり、現行の法にも効力がなくなる。自由意志という支えがなくなると、統制ある社会が崩れ去るのではないだろうか]

この分身さんの意見は、「自由意志があるかないか？」ではなく、「自由意志がないとすると、大変なことになる」という観点からの意見のようです。たとえ、「大変なこと」になろうと、人類は子どものように駄々をこねて嫌がっていないで、事実を直視すべきです。もちろん、「自由意志がない」とすれば、現行の法律自体も自然に改正されることになります。現行の法律は「自由意志がある」と考える人間の幻想から生まれてきたものだから、「自由意志はない」と考える人間たちの幻想から生まれる法律は、まったく違うものとなるのは当然のことです。その時に法律を作る人たちは、法律は自分たちが作るものではなく、環境が自分たちを媒体にして作らせているという真実を理解して、その環境に目を向けることを忘れないでしょう。

僕たちが今やらなければいけないのは、法の改正ではなく、素晴らしい法が生まれる環境を整えることです。分身主義の目指していることは、良き文化や法律の生まれる「環境」を整えることです。文化も法律も、環境によって生まれているだけだと知っているからです。

そして、十分に耕された分身主義的な環境には、「自分が決めてやったことじゃないので自分の責任ではない」などと言い逃れをしななければならない犯罪自体が、生まれる素地がないのです。

さて、今日の森の中では、新しい発見をしていただけましたか？ 分身主義の森は、前人未踏の森です。僕たち自身の手で切り開いて進まなければならないので、大変な苦労ですが、ちゃんと着いてきてくださいね。でも、それは、僕たちの自由意志ではなく、僕たちの環境が僕たちにさせていることなんです。

僕たちは、未だかつてない科学の時代に生きています。分身主義は、この科学の時代という環境が生んだものです。僕たちは今、個人主義的な環境から分身主義的な環境に移行しつつある過渡期に直面しています。過渡期の混乱の最中です。しっかりと地面を踏みしめて、事実を直視しながら進みましょう。

今日、一緒に歩いてくださったあなた、まだ「自由意志はある」と考えますか？ まだ納得されませんか？ そのようなあなたのご意見をどうかお聞かせください。あなたと仲良く喧嘩をしたいと思えます。あなたを負かすためではなく、あなたに幸福になって欲しいからです。もう十分幸福だ、余計なお世話だ、ですって!? そうなんですか？

分身の一人である僕は、世界中の人が幸福になって欲しいんです。それを分身主義は、唯一、平和な状態と考えます。明日は、少し寄り道して、分身主義の考える平和とは何かということ、深く深く、掘り下げてみたいと思えます。あなたも、平和とは何か、ということを考えておいてくださいね。

ちょっと一言

実験によって「自由意志」はないという結果が導き出されたにもかかわらず、リベット分身さん自身はその結果に不服だったようです。彼はその後、「禁止権説」なる救済案を考え出したりしているからです。

僕たちの意識が、いくら 0.3 秒前の神経回路網の活動によって浮かび上がらせられたものだとしても、それによって動作を行おうと意識してから、実際にその動作が起こる 0.2 秒の間に、もし、その動作を禁止することができたらそれは自由意志と呼べるに違いない、と彼は考えました。

例えば、母親から「豚肉 300 グラム買ってきて！」と頼まれたとします。夕飯のカレーに入れる肉を買い忘れちゃった、というのです。あなたは、今、見たいテレビがあるのだけれど、夕飯に豚肉のないカレーを食べさせられるのは困るのでしぶしぶと買いに行きます。これはいわば母親からの命令で、明らかに自由意志ではありません。道すがら、あなたは豚肉がたっぷり入ったカレーを想像してゴクリとつばを飲み込みます。そして、肉屋で「豚肉をさんびゃく」と口まで出掛かって「ごじゅうグラムください」と注文しました。つまり、母親の命令に逆らって、350 グラム買ってしまったわけです。

このような状態の時、自由意志を行使したと言えるのではないかと、トリベット分身さんは考えたようです。

母親の命令を、約 0.3 秒前に起こる神経回路網の活動だとすれば、それによって意識される「指を曲げるぞ!」という意志は、豚肉を貰わなければという意志に相当します。そして、その 0.2 秒後、指を曲げようとするまさにその瞬間、あなたは指を曲げることを拒否した、つまり「350グラムください!」と自分の意志で注文した、というわけです。

「自由意志は、意思決定の結果を選択ないし制御する目的で作動する」

トリベット分身さんは、そのように考えました。つまり、自由意志は、無意識からの命令に服従している間は出番はないが、無意識からの提案を退け、無意識が勧める決定を拒む時にのみ機能するということです。それを禁止権説と言います。でも、この説がでたらめなのは、論理的に考えればすぐにわかります。

肉屋で「豚肉をさんびやく ごじゅうグラムください!」と注文したあなたは、「何からも影響(指図や制約)を受けない、自発的な決定に基づく思い」によって、そのような注文をしたと、誓えますか? 道すがらあなたの脳内に浮かんだ想像によって「ゴクリとつばを飲み込まされた」自分をお忘れですか? それは、豚肉入りカレーを食べた時の美味しい記憶(記憶とは反応の道でしたね)などが、脳内に浮上させたものです。どんなにあなたが、自由意志を持っていると信じたくても、あなたは決して脳の神経回路網の作る現象からは自由になることはできません。なにより、あなた自身、つまりあなたが自分自身であると信ずる「自我」というものも、脳の神経回路網の作る現象に過ぎないのです。

脳内で起こる様々の現象は、全て、取り巻く環境からの刺激と、脳内記憶との相互作用が作り出す幻想です。そして脳の記憶とは、あなたの脳を取り巻く環境(注 遺伝も、あなたの脳を取り巻く環境の一部です)によって、植え付けられていくものことです。つまり、あなたが豚肉を350グラム買う行為一つにしても、それはあなたが、あなたの環境にやらされているだけだったんです。

もういいじゃないですか!? もう、いい加減に観念しませんか? 子どものように、駄々をこねるのはいい加減にやめにしましょう。僕たちに、自由意志がなかったからと言って、何か困ることがあるのでしょうか? もし困ることがあるとしても、目の前の事実から目をそむけることは賢明なこととは思えません。僕たちは、目の前の事実を直視して、そこから立ち上がりましょう。大丈夫! 分身主義が、その先の道を照らしてくれています。

13日目 平和とは何か?

個人主義的な環境の中で生活している僕たちは、結局は、自分と違う価値観を認めたり、尊重したりはできない存在である。

平和とは、戦争や犯罪を回避(あるいは抑止)している状態のことではなく、全世界の人が不公平感や不満を持たずに仲良く生きれる社会のことである。

今日は、お約束どおり、少し寄り道して、平和とは何かということを深く掘り下げてみたいと思います。

以前、ご紹介させていただいた安齋分身さんは、何かを判断しようとする時、それは「科学的命題(合理的命題)」なのか、「価値的命題(非合理的命題)」なのか、はっきりさせておく必要があると言っていましたね。忘れている方のために、もう一度繰り返します。

- > 科学的命題とは、その命題が正しいか正しくないかを客観的に決めることができるもののことです。つまり、命題の真偽が
- > 価値観に依存しないような命題のことです。例を挙げると、「昨日、栃木県の北部では雪が降っていた」という命題がある
- > とします。それは、実際に調べれば正しいか正しくないかすぐにわかります。「気象庁に問い合わせたらカンカンに晴れて
- > いたと言うけど、僕は雪が降っていたと信じたい」などと言っても駄目です。このように、誰が見ても客観的に真偽を決
- > 定できる命題を「科学的命題」と言います。
- > それに対して、「価値的命題」とは、命題の真偽が価値観に依存するため、客観的に決定できない種類の命題のことです。
- > つまり、好き嫌いとか、賛否の数とか、主張者の声の大きさなどに決定されてしまう命題のことです。「ピカソの絵は素晴
- > らしい」とか、「女の幸せは結婚である」とかという命題がこれに当たります。これは、それを主張する人の好き嫌い
- > 価値観に根差しているため、客観的にどちらが正しいという決定ができません。
- > では、あなたに質問します。「霊は存在する」これは、科学的命題でしょうか? それとも、価値的命題でしょうか?
- > 実は、「科学的命題」なんです。
- > 霊が存在するかどうかという命題は、「自分は存在すると思いたい」という好き嫌いや、「存在するとしたら人生が楽しく
- > なるから、その方がいい」などという価値観で決められることではないからです。そのようにして決めてしまっ
- > ない種類のものなんです。(予備知識11・科学の限界と可能性)

「科学的命題(合理的命題)」と、「価値的命題(非合理的命題)」の違い、思い出していただけましたか? ところで彼(安齋分身さん)は、立命館大学の教授で、「平和学」なるものを講義されたりしているとのこと。

科学的命題は、何十年、何百年かかるかと最終的には万人が必ず一つの結論に至りますが、価値的命題は、各人の好みや影響力の大きい人の声に左右されるものなので、どこまで行っても一つになることができません。そんな中において、平和学とは、「多様な価値観を持った社会の構成員が、非暴力的に共生する条件を見出すための学問」だそうです。

価値観の違いとは、善悪の基準、正義・不正義の基準などが違うことですが、それが違うにもかかわらず、各自が自分こそ絶対で正しいと思っているから争いが起きるわけです。彼(安齋分身さん)は次のように言います。

「この困難な問題を調停するための基本原理は、『他者理解』と『自己を相対化する(=絶対化しない)』ことだ」

確かに、その言葉に尽きると思います。

実は、将来、僕たちの脳が分身主義的な環境の中に置かれるなら、「価値的命題(非合理的命題)」に関しては、無意識のうちに、その「他者理解」と「自己の相対化」をすることになります。他人のことを、自分のできないことを自分の代わりにやってくださっている分身さんとして、誇りに思うのが分身主義だからです。一つの学問に仕立てて難しく掘り下げたり、壁中にべたべたと標語を張ったりしなくても、自然に身体がそのように反応することになります。しかし、現状のように、僕たちの脳が個人主義的な環境の中に置かれている限り、たとえこのような立派な意見を考え出そうと、身体はその立派な意見の通りには反応してくれません。

あなたも今までに何度か、「多様な価値観を持った社会の構成員が、非暴力的に共生するにはどうしたらいいか?」と考えたことはあると思います。小学生時代でも、中学生時代でも、あるいは社会に出てからでも、必ずまわりついてくる問題です。でも、大概の人は、次のような結論を出して終わりにしていたのではないのでしょうか?

「互いの価値観を認め合うことだ!」

自我に目覚めた人類の歴史は、もちろん人間中心に進んできました。人間中心の根っこは、自分中心であり、それは限りなく個人主義的方向を志向してひたすら突き進んできた歴史であったとも言えます。今、個人主義的な環境にどっぷりと浸かって生活している僕たちが共生を図るには、「互いの価値観を認め合う」という解決策しか描けないのは当たり前のことです。人それぞれ価値観(善悪の基準、正義・不正義の基準など)が違うので、そのことを互いに認め合い、共生する条件を模索していく努力が平和への道だ、と言われると、一見、よく考え込まれた良識ある意見のように感じます。でも、これはかなり大雑把な結論だし、価値的命題は結論は出ないので平行線のまま何とか事を荒立てずにやっていきましょう、と言っているだけで、少々悲観的で消極的だと思います。しかも、世の中を見てみれば、これは解決策と言うより、個人主義の辿り着いた「諦め」であり、しかも実現不可能な「理想論」に過ぎないように思えます。

「互いの価値観を認め合う」などという個人主義的問題回避法が、理想論に過ぎないと僕が考える理由は、個人主義的な環境で生活している(させられている)僕たちは、結局は、自分の価値観と違う価値観を認めたり、尊重したりはできない存在だからです。

試しに、あなたに質問します。あなたは、自分と違う価値観を認めたり尊重したりしたことがありますか?

もし、したことがあると言うなら、それはあなたの価値観と非常に近いが、あなたの価値観より優れていると素直に認めることができた時で、その時は、あなたは既に、自らの価値観をそちらの価値観に変更しているはずですが。あるいは、自分と全く違う価値観を認めたり尊重したりできたように思っている場合でも、よく考えてみれば、実は、期待を断念しているだけだったり、無関心でいようとしているだけだったり、その価値観がよく理解できないので好奇心的な気持ちが優先していたりするだけで、本当の意味でその価値観を認めているわけでも尊重しているわけでもないはずですが。だからこそ、他人の価値観を認めよう、尊重しようなどと、僕たち人類は、うわごとのようにいつもし合っているのかもしれない。

また、「個人主義の本当の意味は、自分勝手ということではなく、個人を尊重することである」などともっともらしく言う人もいますが、これも自分の権利を侵害されないための予防線としての理由づけであり、理想論に過ぎません。個人主義的な環境にいる僕たちは、自分が尊重されたいだけで、後はどうでもいいのですが、自分が尊重されるための交換条件として、他の個人も尊重する素振りを見せておくだけの話です。

そうである限り、依然として人類は争いと縁を切ることはできません。だからこそ、人類は争いと縁を切ることはできなかったんです。

僕たち人間は、誰でも自分が一番大切です。そのせいで個人主義的な道をひた走り、その恩恵を十分享受した時期もありましたが、今では個人主義の行き着く果てにまで到達してしまっ、その断崖から落ちてしまう人が続出するほどです。

本当に自分という個人を大切にすれば、今までのような個人主義では限界が来ていることにそろそろ気づくべきです。本当に自分を大切に思うなら、自分とは何かという探求から始まって、自分が育つ「土壌」に目を向けなければいけません。個人主義は、自分が育つ土壌を耕すどころか、むしろ荒らしてきてしまったようです。そのせいで、大切にしようとした自分が、今ではこんなにも生きにくい状態に陥ってしまっています。

さて、それでは分身主義に目を移しましょう。

分身主義は、たとえ価値的命題であっても、必ず一つの結論に到達すると考えます。例えば、先程の「ピカソの絵は素晴らしい」とか、「女の幸せは結婚である」などという命題であっても、必要となれば、一つの結論に到達することは可能です。僕たちが価値的命題に結論を出せないのは、今まで、「共通の目標」がなかったからなんです。その共通の目標こそ、「世界平和」です。世界平和という観点から考えれば、ピカソの絵を差別化して絶賛する行為や、女の幸せを限定する考えは良くないことはすぐにわかります。

分身主義的環境とは、「世界平和こそ善である」というたった一つの価値観だけを持った社会である、と言えます。その価値観の上には、どんな価値観も置かないという社会です。たとえ「価値的命題」であっても、「世界平和こそ善である」というたった一つの旗印を掲げて議論をすれば、必ず一つの場所に到達する、と分身主義は考えます。科学時代を生きる僕たちは、一発で何万人も殺戮する兵器を持ってしまったし、その気になれば地球を壊滅させることだってできるようになってしまいました。科学時代を生きる僕たちは、万人が「世界平和」に目を向けなければ、生きていけない時代を生きているんです。

と言っても、分身主義の考える平和とは、それは決して戦争や犯罪を回避(あるいは抑止)している状態のことではありません。全世界の人が不公平感や不満を持たずに仲良く生きられる社会と考えます。不公平感も不満もないから、嫉妬も羨望も、恨みも怒りもない社会です。僕たちは、そのような社会(土壌)の中に置かれたい限り、たとえ幸福を手にしたと思っても、それは、ほんの束の間の幸福でしかありません。

個人主義的環境が作っている、今の僕たちの社会を考えてみてください。それは、嫉妬や羨望や、恨みや怒りが渦巻いている社会です。競争や奪い合いが不可避の社会であり、争いや犯罪を導くべくして導いてしまう社会です。そのような社会で、僕たちが掴む幸福とはどういふものなのでしょうか? それは、優越感に根差した束の間の幸福です。それは不公平感、不満、不安、恐怖感を、より大きな「優越感」で覆い隠しているだけの幸福です。

世界平和とは、僕たち一人ひとり全ての人間が不公平感や不満を持たずに生きなければならない社会のことだから、例えば、何かを改

善されることによって、何人かの人たちが不満を持たなくなっても、そのことによってそれ以外の人々が不満を持つようなことがあったなら、本当の「世界平和」とは言えません。だけど、「全世界の人が不公平感や不満を持たずに仲良く生きられる社会」などと言うと、必ず「**そんな社会はできるはずがない!**」、「**それこそ理想論だ!**」と言う人がいます。でも、それが実現できないのは、個人主義的な環境の中で生きている僕たちだからなんです。そして、その人の口にそのような言葉を語らせるのも、その人の口を動かす脳が個人主義的な環境の中に置かれているからなんです。と言うより、個人主義的な環境がその人を媒体にして語っていると**言った方が正確**かもしれません。

もし、僕たちの脳を取り巻く環境が分身主義的な環境になれば、当たり前のように、「全世界の人が不公平感や不満を持たずに仲良く生きられる社会」がやってきます。

分身主義の考える平和な社会とは、決して理屈の上だけの話ではありませんよ。それは、個人主義的な環境が、理屈ではなく争いや犯罪を導いてしまうのと同じように、分身主義的な環境が理屈ではなく「仲良しな人間関係」を導いてしまうだけの話だからです。

ちょっと前の話になりますが、「ライブドアとフジサンケイグループとの対立」は、お茶の間話題を独占したので、まだ皆さんの記憶に新しいと思います。日本放送側は、「**自分たちがライブドアの傘下に入れれば、企業価値は低下してしまう**」と言っていました。ライブドア側にしても、彼らの信じる価値観を主張していたわけ。互いの信じている価値観を主張し合っても、平行線のままです。個人主義的環境の中で踊らされている僕たちの脳は、自分たちの利益や勢力の拡大ばかりを考えてしまいやすい脳で、互いの価値観を持ち寄って話し合う時に一番考えなければならぬことが浮かび上がりにくい脳です。

では、互いの価値観を持ち寄って話し合う時に一番考えなければならぬことは、何でしょうか？ それは「**世界平和**」という**たった一つの目標**を掲げて話し合うことです。

ライブドアの堀江分身さんは、「**一番に考えなければいけないのは視聴者のことだ**」などと嬉しいことを言ってくれていましたが、最も念頭に置かなければならぬことは、僕たち視聴者のことではありません。対立している彼らこそ、最も念頭に置かなければならぬものは、「全世界の人」のことです。一番に考えなければいけないことを僕たち視聴者に限ってくださっては、むしろ世界は平和になりません。世界平和のためには、僕たち視聴者がむしろ犠牲を払わなければいけないことも出てくるんです。

僕たちを取り巻く環境が分身主義的環境なら、僕たち視聴者は、世界平和のためには喜んでその犠牲を払うよう行動してしまうはず。同じ行為であっても、個人主義的環境では犠牲でも、分身主義的環境では喜びに変わるからです。

世界は一つなので、世界が平和の状態も一つです。それは、世界中の人が不公平感も不満もない状態です。世界平和はいくつもの状態があると考えるのは間違いです。そのように主張する人の頭の中では、世界が一つということが理解できていません。価値観の対立する者同士でも、「世界平和」という**たった一つの目標**（価値観）を掲げて話し合えば、必ず一つの結論に到達します。

ただし、それは個人主義的環境の中にある限り、まだ誰にもできません。分身主義の「ブ」の字も知らないライブドアさんも、フジサンケイグループさんも、「世界平和」という**たった一つの目標**（価値観）を掲げて話し合うことは、まだできません。誰もが分身主義的環境の中にその身を置いた時に、僕たちは初めて「世界平和」という**たった一つの目標**だけを目指して話し合うことが可能となります。

この世界を平和にする方法は、以前にも少しお話ししましたが、組織を作ったり、抗議活動をしたり、政治的な力で何とかしようとしても無理です。僕たち一人ひとりが、完全無欠の分身主義者を目指して生きることをこのインターネットで宣言することです。世界を平和にできる道具は、あなたの声を反映させることができるインターネットだけです。完全無欠の分身主義者を目指すための最も大きなモチベーションは、あなたの中にある不公平感、不満、不安、恐怖です。だから、決してごまかさず、自分と向き合ってみてください。

今あなたは、何の不公平感も不満もなく生きていますか？ 何の不安も、恐怖もなく生きていますか？ どんな人も、不公平感、不満、不安、恐怖などと無縁ではいられないはず。そんな中で生きていてもなお、「私は今、幸せです！」と目を輝かせて言い切れる人は、それは不公平感、不満、不安、恐怖を、より大きな「**優越感**」で覆い隠して生きているだけです。日々、不公平感、不満、不安、恐怖などにさらされて生きているのに、精神に変調を来さないでいられる人は、単に優越感というごまかしが得意な人なのかもしれません。優越感というごまかしは世界を平和にしないし、ひいてはあなたも束の間の幸福しか手にできませんが、分身主義を知った僕たちには、もうごまかしは必要ありません。だけど、当然のことですが、もし、あなたも完全無欠の分身主義者を目指すというなら、分身主義というものをよく知らなければいけません。少なくとも、今、あなたの頭の中に浮かび上がっている不公平感も不満も不安も恐怖も、みんな個人主義的環境があなたの頭の中に浮かび上がらせている**錯覚**（＝幻想）に過ぎなかったと理解できるようにしなければいけません。このことを理解する鍵は、あなたが踏み入ったこの分身主義の森の中に落ちています。あなたは、もう、その鍵を見つけ出してくださったでしょうか？

そろそろ、分身主義の森も出口に近づいています。早く、その鍵を見つけ出しておいください。

ちょっと一言

いつもながら、個人主義批判のようになってしまいましたが、分身主義は決して個人主義を否定しているわけではありません。自我に目覚めてしまった人類が、個人主義への道を一心にひた走ってきたのは、いわば必然の成り行きだと考えます。

分身主義は、個人主義の最も信奉している自我を、滅却させようとは思いません。どんなに修行を積んだ**禅僧**でも、自我を滅却させることは一時的にしかできません。そんなことは、人間をやめることと同じ意味だからです。分身主義は、個人主義の最も信奉しているその自我を、むしろもっと拡大させようとして。世界にまで、いや、宇宙にまで。するとその時、今までのような自我は消滅しているというパラドックスが起こります。何十年も苦行を積んだ**禅僧**にも成し遂げられなかったことが、簡単にできてしまうのです。だから分身主義は個人主義を否定するものではなく、むしろ個人主義を拡大し、その欠点を乗り越えたものだと言えます。

僕たちは世界に目を見開く必要があります。宇宙に目を見開く必要があります。自分や人間を中心にして物事を考えるのではなく、自然界を中心にして物事を考える柔軟性が必要です。それを真の科学と呼びます。真の科学だけが、僕たちを、世界を平和にする分身主義に導いてくれます。

3Dアート(ステレオグラム)というをご存知ですか？

『3Dで語る分身主義』というのを考えましたので試してみてください(注:巻末の付録1 103ページ)。その中に「分身主義」という字が見えますか？ 立体視ができるようになるにはちょっとした訓練とコツが必要です。だけど、一度見えるようになると、次回からはそれ程苦勞しなくても見えるようになります。何が言いたいのかというと、これまで分身主義の森の中で体験してきたような、自然界中心に物事を見る「真の科学」の視点がなければ、分身主義の見えている光景が見えないのです。その視点がなければ、僕の言っていることが、残念ながらあなたの心には届きません。

だけど、個人主義に行き詰った僕たち人類は、今までとは全く違う視点、全く新しい視点を持たなければ、もう乗り切れない時代に入っています。そのことに気づいた人から、今まで見えなかったものが見える分身主義の視点を持って欲しいと思います。

繰り返します。分身主義の視点を持つための鍵は、自然界中心に物事を見る「真の科学」にありますよ。

14日目 平和は家庭の平和からか？

世界を平和にするということは、自分の問題が片付いてから着手するなどという性質のものでは決してありません。

昨日は、この分身主義の森で、平和について考えていただきましたが、いかがでしたか？ 世界平和などという言葉を用いると、国連や、国の組織や、物好きが集まった団体などがやることで、自分の現実とはかけ離れたところで勝手にやっていることというイメージを持つ人がたくさんいます。そういう人は、もっともらしく次のように言います。

「自分の頭の上の蠅も追えないで、何が世界平和だ！ それよりも自分の家庭や国を平和(幸福)にすることから始めるべきだ」

これは本末転倒です。

その言葉を語った時点で、その人の頭の中から「世界」は、消え失せてしまって、自分のことしか目に入っていません。もしかしたら、その人は、世界平和を考える面倒から解放されたいために、その言葉が必要だったのかもしれない。だけど、世界を念頭に入れない自分の家庭の平和(幸福)というものは、現実にはあり得ません。何故なら、自分の家庭だけが平和(幸福)であることは、その外側にいる人たちに不公平感や不満をもたらす、嫉妬や恨みを買ってしまいます。嫉妬や恨みを買われてもまだ、自分の家庭の平和(幸福)を維持していくことは不可能だからです。

それは家庭をもう少し拡大させて、会社、あるいは国というものの平和(幸福)に置き換えても同じです。世界中の人から不公平感や不満が消えない限り、僕たちは決して幸福にはなれません。だから、世界を平和にするということは、自分の問題が片付いてから着手するなどという性質のものでは決してありません。彼は正しくは次のように言うべきなんです。

「自分は幸福になりたいから、自分の土壌となる世界を平和にしなければいけない。だから世界平和を常に念頭に置きながら、自分の日常の行動を決定していこうと思う」

そのように言ったなら、彼の頭の中から「世界」が消え失せることはありません。「世界」を常に片隅に見据えている彼の日常が、自分の本当の幸福から大きくそれることもありません。つまり、僕たちが幸福になるためには、日常の全ての行動に対して常に「この行為は、全世界の人が不公平感や不満を持たずに仲良く生きれるための行動かどうか？」と考えながらできるようにならなければいけないということです。例えば、煙草の捨て場所を探す時も、子供を叱る時も、上司に腹が立って抗議をしようと思いついた時も、いつも世界に照準を合わせて行為を決定していくということです。これは、初めのうちは難しいけれど、分身主義者を目指していると結構簡単にできるようになりますよ。

さて、いつも分身主義の森を अच्छこっち連れ回してお疲れでしょう。今日は中休みとして、これくらいにしておきます。脳と身体をゆるめて、ご休養ください。

ちょっと一言

あなたは、「人間には自由意志はなかった」ということを理解し、その敗北を受け入れていただけましたか？ 人類がそのことに目をそむけていたり、その敗北を受け入れないでいたりする限り、世界は決して平和にはならないし、僕たちは決して幸福にはなれません。どんなに世界平和と幸福のための努力をしても

この意味は、昨日ご紹介した「3Dで語る分身主義」を試していただければ、わかっていただけると思います。

15日目 誰が精神病患者を作ったのか？

ある人の心に心的外傷(トラウマ)が成立するのは、その経験が心的外傷として体験された場合だけである。

昨日は、ゆっくり休養できましたか？ 今日にはちょっと過激な道を歩きますので、心を静めてから着いてきてください。

4日目に歩いた分身主義の森では、なぜ僕(徳永分身)が「精神病は病気ではない」と主張するのかという理由を、聞いていただきましたね。精神病患者と言われる人たちは、正常と言われる僕たちから見れば、現実から掛け離れた「錯覚(=幻想)」の中で生きていると思われるが、僕たちだって「錯覚(=幻想)」の中で生きている限り、精神病と言われている人たちと、全く変わりない。同じように錯覚(=幻想)の中で生きていく僕たちなのに、一方を異常(病気)そして一方を正常(健康)と決め付けるのは、あまりにも非科学的である。だから、精神病を病気(異常な状態)と見るのは間違っている。という理由でした。

しかし、他にも大きな理由があります。それは、僕たちのあらゆる肉体的・精神的な現象は、その状態こそが自然界に適応している姿であり、病気と呼ばれて疎まれていたものですら例外ではないからである、と考えるからです。

そのように考える分身主義は、病気という言葉で廃止して、治さずに放っておけ、と主張しているわけではありません。自然に任せるしかないと考えているだけです。と言うよりも、人間がどのように抵抗したとしても、それは自然に任せている状態ではなかったんです。実は、脳という自然物が考えることは、全てが自然に任せている状態だったんです。放っておくのも自然、治そうとするのも自然です。

よく僕たちは、自然物と人工物を区別しますが、どのような人工物も脳という自然物から作り出されたモノである限り、それは自然のモノなんです。これからは、僕たちの身の周りの全てのモノ、本も机も洗濯機も、水道水も薬もクッキーも、パソコンも車もロケットも、全部、自然物であるという見方もできるようになる必要があります。人間が作り上げたと言ったって、この自然界に転がっている素材の組み合わせ方を変化させているだけの話なんですから。どれも粉々にバラしていけば、分子になり原子になり、そして素粒子になるわけです。

人間が手を加えたものを「人工」と呼び習わしているわけですから、その意味では、人工という言葉が間違いだというわけではありませんが、ただ、都会は自然が失われて人工物ばかりになったという解釈だけでなく、都会とはそのような自然に変化したものであるという解釈が、世界を平和にする分身主義的な視点だということです。今日の分身主義の森では、この言葉をしっかりと手に取って自分のものにしてください。

放っておくのも自然、治そうとするのも自然ですが、もし精神病と呼ばれているものを治そうとするなら、それは今までのように“個人”を治そうとしても絶対に無理です。それが、この分身主義の森の中で一番知って欲しかったことなんです。

病気と言うと、家族も医者も、とかくその人“個人”を治そうと努力しますが、例えば精神病と呼ばれているものを治そうと思うのであれば、実は、治さなければいけないのは個人ではなく、彼を取り巻く環境である、と分身主義は考えます。何故なら、病気と呼ばれているものは、特に精神病と呼ばれているものは、それは学者も精神科医もカウンセラーも親も含めて、その人を取り巻いている社会、ひいては地球全体の人々の心が、その人“個人”に反映されている状態だからです。

そこで今回は、そのことを裏付けるために、解離性同一性障害(=多重人格)に触れてみたいと思います。

通常、個人差はあるけれども、僕たちは社会生活をしていく上で、誰でもいくつかの人格を使い分けています。家族といる時の顔と、恋人といる時の顔と、一人である時の顔は違うし、また、友達といる時の顔と、会社の同僚といる時の顔と、上司といる時の顔は、みんな違うはずなんです。もちろん友達によっても違う顔を使い分けていたり、仕事なんかじゃ、10人の人に対して10の顔を使い分けていると言ってもいいくらいです。いくつもの人格の取る行動なのに、それが全部同じ自分であると思えるのは、それらが一本の記憶の糸で結ばれているからです。だから、恋人とのデートから帰って部屋に一人である時にも、その日、彼氏に買ってもらった3万円の洋服を見つめて、満たされた気分になることができます。

解離性同一性障害というものは、このいくつもの人格が、相互に記憶でつながってなくてバラバラに分断されてしまっている状態です。例えば、恋人と会っている時の人格と、一人である時の人格それぞれの記憶が、分断されていたらどういうことになるのでしょうか？恋人と会っている時の人格の時に、3万円の洋服を買ってもらった彼女ですが、家に帰った時の人格はその記憶がないので、どうして自分の家に見たこともない洋服があるのが理解できないということになります。こういった症状が、解離性同一性障害というものです。

どうしてこのような記憶の障害(解離性同一性障害)が起こるのかと言うと、一般に幼児期の虐待体験によって発症すると言われています。もともと子供は、成人に比べて催眠感受性(催眠能力)が高いのですが、幼児期の心的外傷体験はこの解離能力をさらに高めます。慢性的に心的外傷にさらされている子供は、「これは自分に起こっている出来事ではない」、「何も起こらなかった」、「痛くない」と自己催眠をかけ、身体的に避けられない苦痛から精神的避難をすることによって事態を乗り切ろうとします。子どもは、どんなに苦痛な仕打ちを受けても、家族や周囲の成人への愛着を断ち切ることができないという構造の中で生きてるので、そのような苦痛と困難な状況の中を生き延びるための防衛規制として解離が起こるわけです。

ところで、最近、『トラウマをかかえた子どもたち』(誠信書房)という本でたくさん事例を調べていた時のことです。ハッと気づかされたことがありました。それは、父親に性的虐待を受けたジョニーという5歳の少年の事例を読んでいた時のことです。少年は性的虐待を受けた後、父親に屋外に連れ出され、銃で鳩を撃つところを見せられました。そして、「今日したことを誰かに話したら、こういう目にあわせてやるぞ」と脅されたのです。その後、性的虐待を受けるたびに、このような脅しは何度となく繰り返されることになります。

その時、5歳の少年の心の中には、父親にやられていることはとてもいけないことなんだという罪悪感のようなものが刻印されるに違いありません。僕の頭にハッと浮かんだ気づきとは、もしかしたら、ジョニーの心的外傷の原因は、父親の行為自体にあるのではなく、後ろめたい気持ちで行為に及んでいる父親の気持ちの反映なのではないか、ということです。

わかりやすい言い方をすれば、もし父親の行為が社会的に容認されている行為であるなら、ジョニーの心に外傷を残すことはなかったのではないかと、ということです。

恋人同士が性的交渉を行なうのは社会的に容認されています。また、売春などで性的交渉を結ぶのは法的には容認されていませんが、今の日本では社会的にはほぼ容認された状態です。あっけらかんと、笑いながら、あるいは誇らしげに昨夜のことを友達に話して聞かせたりできます。こういった状況下で性的交渉を持ったからといって、それが心的外傷になる人たちはいません。

だけど、同じ性的交渉だとしても、レイプなどは法的にも社会的にも容認されていないので、その人のそれからの人生に暗い影を落とすほどの心的外傷になります。それはレイプを犯す人も、犯される人も、レイプそのものに罪悪感を持っているからに他なりません。そのような価値観を持つこの社会に、僕たちの脳が浸かっているからです。

行為自体を取ってみれば、恋人同士も売春もレイプも同じことをしているのに、社会的に容認されているかいないかによって、外傷として体験されたり、喜びとして体験されたりするわけなんです。納得されない方のために、もう一つ例を挙げます。

女性の性的な快感を不純なものとするアフリカ諸国では、現在でも、女の子が生まれた時にクリトリスを切除する風習が広く行き渡っているそうです。これは、女性器切除、あるいは、女子割礼と呼ばれている風習です。もちろん、割礼を行ったならば地域でお祝いをします。1970年代頃から、欧米人の中から、この風習は野蛮であり、著しい女性虐待であるとして非難の声が強くなりました。しかし、

当事国はそうしたプレッシャーは自国の文化を否定するとして、文化相対論的論議になりました。

WHO（世界保健機関）は、このような風習をやめさせようと様々な広報活動などを行っています。何百年も続いている文化は容易には廃れそうにもありません。欧米人にとっては虐待であっても、アフリカ諸国の人たちにとっては当たり前さしきの儀式なので、今までは、それを受けた女性たちの心に心的外傷を残すことはありませんでした。

ジョニーのお父さんのしたことが、これと同じ意味を持つ社会的に容認されている誰もが通過しなければならない儀式だったとしたら、と想像してみてください。ジョニーは決して不安定な精神状態を抱えることはなかったでしょう。このことをよく考えてみてください。

次に読んだ『心的外傷を受けた子どもの治療』という本は、その時の僕の直感をますます補強してくれました。この本は、ビヴァリー・ジェームズという女性の分身さんが書いた（分身主義的に言えば書かされた）本です。カウンセラーを目指す方は、読んだことがある本かもしれません。

「家族で外出していて、子どもが数時間一人にされた場合がトラウマになることもあるし、反対に銃を突きつけられて家族と一緒に人質になっても、子どもは危険を理解していなくて、比較的安んずる感じられるかもしれない。ある出来事が、子どもにとって心的外傷になったりならなかったりする。子どもの生物・心理・社会的経歴、気質、発達段階、準備性などから影響を受け、出来事が起こった文脈や愛着対象から得られる支援にも影響される」

「子どもは、大切な大人から何か危険かの手がかりをもらう。家の倒壊を新しい始まりの機会と見たり、怪我をしなかったことを喜び合ったりする家族であれば、事件に関連して愛着にマイナスの衝撃は与えられない（＝愛着が損なわれることはない）」

どうでしょうか？ ここまで来てはまだ納得できないという方は、7日目に歩いた場所にまで戻ってもう一度歩き直してみてください。実は、7日目に分身主義の森を歩いている時には、既に、今日の解離性同一性障害の話に結び付けようと考えていたのです。正高信男分身さんの「人間の痛みや快感さえも、他人からのフィードバックによって作られる」という言葉がキーワードです。その時の彼（正高分身さん）の言葉を、もう一度復唱します。

「サルには痛みはありません！」

「その証拠に、動物を飼った方はわかると思いますが、彼らは怪我をしても死ぬ直前まで元気です。ところが人間は、痛い痛いと言え続けるので、その病状が悪化していく経過を知ることができます」

「サルにも身体的な感覚としての苦痛はありますが、それは人間の苦痛とは、まったく違います。人間の場合は、周囲とのコミュニケーションを通して、身体的な苦痛が心理的に増幅されるからです。初めて歩けるようになった子どもを見ているとわかりますが、彼は転んでもケロッとした顔をしています。結構大怪我をしても平気です。でも、そこへ母親が駆けつけて、『ああ、痛かったね。ああ、大変』と慌てます。それによって、人間は“痛み”という心理的苦痛を学んでいくわけです」

言い換えれば、僕たちの肉体も心も、まさに環境に作られているものであり、僕たちの存在それ自体が環境の媒体であると言えるわけです。この「痛み」という言葉を「心的外傷」に置き換えてみてください。僕たちの「心的外傷」は、実は、環境やコミュニケーションを通して学習させられていくものだったんです。それは親や周囲の人間だけでなく、たくさんの病名を考え出す世界中の精神分析学者や、クリニックに訪れた人を患者として扱うカウンセラーたちも、もちろん関わっています。それはまるで、世界中の人間が寄ってたかって精神病の患者を一人作り上げようとしているかのようにも見えます。精神病と呼ばれているものは、まさに今現在の世界中の人間の心が、個人に反映されて映し出されている現象だったんです。

ちょっと一言

放っておくのも自然、治そうとするのも自然ですが、もし精神病と呼ばれているものを治そうとするなら、それは今までのように“個人”を治そうとしても絶対に無理です。それが、この分身主義の森で一番知って欲しかったことなんです。

だんだんと核心に近づいてきました。

もし精神病と呼ばれているものを治そうとするなら、人類は分身主義を受け入れるしかありません。個人主義的環境で生きる僕たち人類が、精神病と呼ばれるものを作り上げてしまっているからです。そのことに気づかない限り、精神病と呼ばれるものは、ますます深く、ますます複雑になりながら、確実に仲間（＝病名）を増やして潜行していきます。

解離性同一性障害の人たちの記憶が分断され、彼らの脳の中に無関係な記憶の断片が立ち並び混乱を招いているように、今、僕たち人類は一人ひとりが互いに無関係な断片になり、そして混乱の中にいるかのようなようです。それを個人主義的環境と呼びます。僕たちがこの苦しみから救われるためには、ビッグバンから一本につながる記憶の糸を取り戻すことです。

やがて、解離性同一性障害の人の記憶は統一され、一つの自分を知ることによって平静を取り戻すように、僕たち人類も一つに統一された真の自分の姿を知る必要があります。宇宙という自分の真の姿を。

16日目 郵政民営化・総選挙を考える

人間社会は、まるで悪人同士がお互いを裁き合っているような状態である。

「清き一票」など、まやかしの過ぎない。一票はどんな一票も、人種差別と同じような不平等な「汚れた一票」である。

昨日は、次の言葉を確実に自分のものにしてくれましたか？

「僕たちは、自然物と人工物を区別しますが、どのような人工物も脳という自然物から作り出されたモノである限り、それは自然のモノなんです。人間が作り上げたと言ったって、この自然界に転がっている素材の組み合わせ方を変化させているだけの話なんです。どれも粉々にバラしていけば、分子になり原子になり、そして素粒子になるわけです。これからは、僕たちの身の周りの全てのモノ、本も机も洗濯機も、水道水も薬もクッキーも、パソコンも車もロケットも、全部、自然物であるという見方もできるようになる必要があります」

だからと言って、人工物という言葉を用いてはいけないと言っているわけではありませんから、誤解のないようにお願いします。人の手で作ったもの、人の手が加わったもののことを、過去の人が「人工」と呼ぶことにしたわけですから、その意味では間違いではありません。今までは、人間は自分の意志で考え、自分の意志で行動していると考えられていたので、そのような言葉が生まれてしまったのは当然のことです。でも、これからは「人の手」がどのようにして動かされているかを知る視点も持てるようになることが必要だと言っているだけです。それは人間中心ではなく自然界中心の「真の科学」の視点です。真の科学から見れば、この人間の為すこと考えること全てが、自然界の手のひらの上で泳がされているだけの話だったんです。

僕たちは今まで、自分の頭で考え、自分の意志で行動していたと思ってきましたが、実はそうではなく、僕たちを取り巻く環境（環境とはこの宇宙140億年に起こっている全てのことです。それをビッグバンの風と名付けました）によって、僕たちは考えたり動いたりさせられていたんです。他の植物や動物がそうであるように、そしてまた、全ての自然現象がそうであるように。人間だけが例外ではありません。何でも自分たち人間中心に考えてしまう僕たち人間が、そのような自然界中心の視点によって、自分たちの本当の姿を知った時、初めて人間は謙虚になれます。

そして、その自然界中心の「真の科学」が導いてくれた分身主義の視点を持てるようになれば、本も机も洗濯機も、水道水も薬もクッキーも、パソコンも車もロケットも、みんなが一つにつながった光景が見えてくるんです。そのためにはちょっとした訓練も必要ですが、それは、先日試していただいた、3Dを見るために視点を変化させる訓練にちょっと似ています。しかし、一度見れるようになれば、次回からは簡単にその視点を作れるようになります。

これは、僕たちが本当の幸せをつかむために、そして世界を平和にするためにどうしても必要な視点です。その視点こそ、「人の手が加わったものでさえも自然物であるという見方」ができる視点なんです。3Dでは二つの視点が作れるようになったように、これからの僕たちは、容易に二つの視点を行き来できるようになる必要があるということです。

さて、今日は、その分身主義的視点から見た、郵政民営化とそれに関わる総選挙について考えてみたいと思います。

2005年、8月8日、小泉内閣が最重要課題としていた郵政民営化関連法案が、参院本会議で否決されました。小泉純一郎分身さんは、それを受けて衆議院解散を断行しました。彼は、衆院解散の理由について、「国会は郵政民営化は必要ないと判断した。今回の解散は『郵政解散』だ。郵政民営化に賛成してくれるのか、反対するのか、国民に聞きたい」と記者会見で力強く発言していましたね。

そのように期待されると、頭も良く勤勉で精力的な議員先生方よりも、僕たちの方が良識があり、判断力があるように思ってください。いるみたいで嬉しくなりますが、でも、そんなおだてに乗らないでください。実際、政治や経済の勉強もしていない僕たちに、しかもその内幕も知らない僕たちに、そんな難しい問題を突きつけられても困ってしまうんです。政治家という人たちは、本当は国民を都合のいい時だけおだてて、内心ではバカにしているものなんです。選挙の時だけ「お願いします。お願いします」とペコペコして、向こうから走ってきて握手などを求めてきますが、心の中では、当選するまでの辛抱だと思っています。

だいたいお願いしなくちゃいけないのは、国民の方なんです。そして、少ない報酬でも国民のために働くことに生き甲斐を持つ人たちが本当の政治家なんですけどね。でも、少ない報酬なら世界中の政治家はみんな辞めてしまうでしょうね。彼らにしてみれば、国民が賢くなれば政治がやり難いので、むしろ、あんまり勉強して欲しくないのが本音でしょう。国民を無知にしておくことを目論むのは古今東西を問わず、為政者の常套手段です。

それに小泉分身さんは、国民こそはクリーンだとも思っているのでしょうか。民間の企業だって賄賂やファミリー企業の天下りはたくさんありますし、僕たちの日常だって気に入られようと贈り物（賄賂）を送ったり、コネを使って自分だけ得をしようとしたり、優遇されるように計らったり、思い通りにならなかったら恫喝して思い通りにさせようとしたり、と同じようなものなんです。

小泉分身さんが審判を仰いでくださっている僕たち国民も、「官」や「役人」や「政治家」たちと、そもそもの考え方ややっていることは全く同じです。ただ、その時使われる額や影響力が小さいだけの話なんです。置かれた立場・環境が違うだけの話です。この人間社会は、まるで悪人同士がお互いを裁き合っているような状態だったんです。小泉分身さんは、まさにそのことを今やろうとしているのです。つまり、僕たち悪人に悪人を裁かせよう。その方法は簡単です。僕たちの嫉妬心や被害者意識を、ほんのちょっと煽ればいいだけです。

彼の熱意や正義感は大いに評価しますが、彼のやり方では、権力に対してより大きな権力をぶつけることでしかなく、永遠に権力の交代劇が続けられるだけです。つまり、本当の意味の構造改革は成し得ません！

さて、投票日は9月11日に決定されました。「国民に聞きたい」と言われたからには、僕たち国民は勉強して臨もうではありませんか？意地でも、いい加減な第一印象とか、好き嫌いとか、しがらみとか、情とか、偏見で投票しないようにしましょう！

そんなわけで僕もちょっと勉強してみました。まずは、小泉分身さんの主張に対して、みんなが賛成だ反対だと議論しているわけですから、その主張をきちんと聞いてみることにします。自民党のホームページに次のようなものを見つけました。

http://www.jimin.jp/jimin/jimin/2005_seisaku/question10/index.html（『郵政民営化はあらゆる改革につながる』）

小泉分身さんは、要するに日本の古い社会構造（お金の流れ）を改革しようとしてくださっているようです。巨額の資金源となる郵便貯金や簡易保険などによって甘い汁を吸ってきた「官主導」「役人天国」の社会を、シビアな競争原理の働く「民間主導」の社会に変えて活力を取り戻したいということです。それに対して、実際に郵政民営化を行ったドイツやニュージーランドの例を挙げて、反論をされているホームページもご紹介します。<http://www.geocities.jp/dokodemodoa.jp/>（『よく分かる郵政民営化論』）

勉強すればする程、迷ってしまうって!? それでいいんです。迷わない方がどうかしているんです。迷わない人は、自分の頭の固さを疑

ってみた方がいいですよ。

実は、本当の意味の社会の構造改革は、小泉分身さんが考えていることくらいでは成し遂げられません。もちろん、彼が、今まで誰も手をつけなかったことができる天才的な政治家であることは認めます。だけど、その彼の力を持ってしても、さっきも言ったように、権力の交代劇が起きるだけなんです。本当の構造改革を成し遂げるためには、小泉分身さんも、日本を背負って立つ政治家の方々も、僕たち国民も、自分の本当の姿を知る必要があります。小泉分身さんも、日本を背負って立つ政治家の方々も、僕たち国民も、実は同じ一つの身体の部分であったことに気づく必要があるんです。今の状態は、あなたの身体の中で、それぞれの部位が自分の本当の全体の姿を知らずに、自分の立場を守ることに固執し、自分の考えを主張し、言い争っているのと同じなんです。

次の『自分の中の身体たち』という話は、僕の創作ですが、これは、右足と、左足と、足の指と、頭と、右手と、左手と、お腹と、目と、鼻と、背中たちの会話です。これらの会話を、あなたは誰たちにたとえて読み解きますか？ 大きく見れば国家間の会話とも取れるし、中くらしい見れば、政治家と国民と公務員と経営者などの会話とも取れ、小さく見れば、政治家同士の会話であったり、隣近所の人たちの会話であったり受け取れます。つまり、どの階級にも当てはまるんです。その辺りのことを想像しながら、何か教訓となるものを引き出してみてください。

=====

『自分の中の身体たち』

ある日、思い出したように右足が左足に言いました。

右足：おい、左足野郎、てめえ今日ズルしただろう。家を出た時の最初の一步は俺からだったのに、会社に着いた時は俺の一步で終わったぞ。いつも言ってるだろう。俺は一步たりとも損したくないって。

左足：しょうがないよ、それは。それより君はホームで7分電車を待っている時、5分間も僕の方に重心をかけてたじゃないか。

それを聞くと、いきなり右足は左足を蹴りました。

左足：痛い、何すんだよ。

今度は左足が右足を踏みました。

踏まれた右足の指たちが騒ぎ出しました。

右足の指たち：おい、何で僕たちを踏むんだよ。

それを見ていた頭がなだめました。

頭：おい、おい、お前たち、みんな仲間じゃないか、喧嘩はやめとけよ。

右足：なんだとこの能無し野郎。だいたいてめえがバカだから、この前だって気の利いたことを言えずに可愛い彼女を怒らせちゃったじゃないか。

左足：そうだよ。バカな君のせいで僕たちまでボケナスと思われちゃうよ。なあ、左手君。

左手：そうだよ。(ポカッ！ 頭を殴った音)

頭：痛いなあ！ なんの権利があって、そんなことするんだよ。

左手：うるさい。僕はみんなを代表して君を成敗したんだ。ああ痛い。叩いたおいらも痛いよ。右手君、君も黙ってないで叩かないとズルイよ。僕だけ痛いじゃないか。

右手：君が勝手に手を出しておいて、僕にもやらせることないじゃないか。僕は平和主義者なんだ。

その時、寝ていたお腹が起き出してきて言いました。

腹：まあ、うるさいわねえ。寝てられやしない。今何時かしら。ああ、もうこんな時間。口さん、あの人たちは放っておいてそろそろおやつを食べましょうよ。

口：はい、お腹様、今日のおやつは冷たい氷羊羹といきましょうか。

右足：おい、お腹。やめてくれないか。てめえがバカみたいに暇さえあれば食べてるから、こんなに太っちゃまって、その負担はみんな俺に来るんだ。おかげで最近、膝が痛いんだよ。

腹：ごめんなさいね。食べたらまた湿布をはってあげるわ。気持ちいいわよー。

右足：本当かい。ありがとう。

左足：そんなんで騙されてどうするんだよ、バカ！

右足：うるせえ！ 俺は湿布が大好きなんだ。だいたいてめえに俺の苦しみなんかわからねえだろう。黙っててくれ。

左足：わかりたくもないね。だけどどうして君はいつもそんなに偉そうな口の聞き方をするんだよ。

右足：昔から左よりも右が偉いて決まってるんだ。なあ、右手。

右手：えっ、ええ、まあ。

右足：人を指差すのも右手、握手も右手、軸足も右足。そくだよな右手！

右手：えっ、ええ、でも。

右足：だったら少しも遠慮することあねえ。俺が許すからもっと威張っていいぞ。

右手：は、はい、ありがとうございます。じゃあ、お言葉に甘えて。

腹：水羊羹もいっぱいけれど、今日のおやつはポピュラーにチーズケーキにしとくわ。

口：はい。お腹様。それでは流しますよ。

目：ああ、美味しそう。うっとりするなあ。本当にお腹様は高尚ですね。

鼻：うーん、いい匂いをかくと心が癒されますね。私たちがこんないい目にあえるのもお腹様のおかげです。

背中：気に食わねえ。おいらはお腹のやることなすこと何でもムカつくんだ。こうしてやる。

腹：痛い！ 何てことするの。胃に穴が開いたじゃないの。口さん助けて！

口：(ガリッ)

背中：ちきしょう、大事な脊椎に噛み付きやがって。

右足：あっ、あの野郎、バカなことやりやがった。これじゃ立ってられやしねえ。

左手：あれっ、なんだかシビレてきた。

=====

どうでしょうか？ 何故、本当の構造改革を成し遂げるためには、小泉分身さんも、日本を背負って立つ政治家の方々も、僕たち国民も、自分の本当の姿を知る必要があるのかということ、理解していただけましたか？ 僕たちは部分が争うことで、その全体の身体が壊されていることに気づいていません。世界から不満や不公平感をなくす本当の構造改革は、それは、部分たちが自分の全体の姿を知り、全体に気を配ることができるようになる「意識改革」によってしか成し遂げられません。それが分身主義の目指している状態です。それは大して難しいことではありません。あなたは自分の身体を健やかに保つために、身体の全部の部分に神経を注いでいますよね。それと同じ視線を世界に注げばいいだけの話です。そして、一度そのような視点が作られれば、次回からは簡単にその視点に合わせることができるようになります。

まだ、世界(=自分の全体の姿)の平和に目を向けることのできる政治家は一人も現れていません。あなたが誰かに投票する行為も、それは自分の立場を守ろうとする彼らと同じで、それは少しも世界(=自分の全体の姿)に目を向けていません。

もしあなたが、今のような環境(=個人主義的環境)の中で誰かに一票を投じるということは、右足とか、左手とかの部分の言い分に共感して、加勢するだけの話なんです。もしあなたが世界(=自分の全体の姿)の平和に目を向けることができる人なら、部分に対してどこまでも公平な目を注げるようにならなければいけません。

だから、今回の選挙には誰にも一票を投じないという意思表示をすることです。僕たち部分が、自分の全体の姿を知り、助け合う意識が持てる日が来ることをひたすら願って、今は、誰にも「汚れた一票」は投じないという選択をすることです。

ちょっと一言

僕(徳永分身)は、2005年現在、48歳ですが、この年になるまで一度も選挙の投票に行ったことがありません。それが僕の唯一の誇りでもあります。暇がないからでも面倒臭いからでもありません。

最近では、選挙が始まる時期になるとテレビでは盛んに「棄権だけはしないように」と偉そうな顔をして呼びかける人がいます。棄権する人を非難の目で見ます。だけどこれは、不平等な行為を強要しているのと同じです。あなたの手を汚そうとしているのと同じです。「清き一票」なんて現実にはありません。それは、国民をおだてるための偽りの言葉です。この個人主義的社会においては、一票はどんな一票も、人種差別と同じような不平等な「汚れた一票」なんです。

もちろん棄権をする人の中には、政治なんかには無関心であったり、自分のことにしか興味のないつまらない人物も多いかもしれないので、非難されるのも仕方ないかもしれません。だけど僕(徳永分身)が今まで投票に行かなかったのは、無関心でも無責任でもなく、むしろその反対です。もし僕が政治なんかには無関心であったり、自分のことしか考えられない面倒臭がりやな性格であったなら、こんな歩きづらい分身主義の森なんかに、初めから踏み入ったりはしなかったでしょう。

僕が誰にも一票を入れたくなかった理由の一つは、今の個人主義的環境から輩出されてくる政治家という人たちの発言が信用できないからです。彼らは、選挙の時だけペコペコして「お願いします」などと言ってきて、いざ当選すれば手のひらを返したようにふんぞり返り、公約を破っても賢い言い訳をしたりします。今まで何度もそのような目に遭っているくせに、凝りもせず毎回投票に出かけて行ける人は、同じ詐欺に何度も遭ってしまうバカな被害者と思えません。あなたは、もしそのような詐欺師？ に一票を入れてしまったとしたら、責任を感じないでいられますか。彼の片棒を担いでしまったことと同じなんです。それ程の重みを自分の一票に感じて投票していますか。

僕が信用する政治家は、「自分に一票をお願いします」などと決して言わない人です。こちらに「お願いします」と言わせてくれる人です。しかも、そのように言われても驕ることなく、「私は国民みんなのために政治家になる覚悟ですから、自分の年収は300万円もあれば十分です。それ以上はいただきません」と言ってくれる人です。僕が信用する政治家は、「世界(=自分たちの全体の姿)の平和のために一緒に頑張ってください」と、国民一人ひとりをお願いに来てくれる人です。そして「そのために、あなたの税金を上げさせてください」とお願いしてくれる人です。僕は世界平和というちゃんとした目的のためなら、生活ギリギリのお金だけいただければ、後は全部税金で持って行ってもらうのもいいとさえ思っています。車も冷房も高価な外食も我慢します。そのような助け合いが当たり前の社会になればいいと思っています。(もちろん、このような感覚は、僕たちを取り巻く環境が分身主義的にならなければ身につけません。当然、現在ではまだ分身主義的な環境から輩出される政治家もいないので、僕は誰にも一票を入れたくないんです)

もう一つ、僕が誰にも一票を入らなかった理由は、誰かに一票を入れるということは、その人を鼻負して、他の人に不利益を与えるわけで、そんな不平等な行為をして自分を汚したくなかったからです。それは誰かにコネを使ったり賄賂を贈ったりして、自分だけ優遇されようとする行為と同じような、不平等な汚い行為だと思うからです。

今まで、投票に関してだけは一度も汚れた行為をしないですんだ自分を、今ではとても誇りに思っています。恐らく、いや、間違いなく、今の選挙制度自体が間違っています。間違っているというのは、平和とは逆行しているという意味です。いいえ、この言い方も間違っていました。平和とは逆行する今の環境だから、このような選挙制度が成立しているんです。もし、平和を志向する社会ならば、つまりこの社会が分身主義的な環境に変化したならば、このような選挙制度自体が変化するに違いありません。社会も経済も今とは違う形態のものになっているに違いありません。その時は、あなたに対して、誰一人として不平等な行為を強要しなくてすむような社会になっているでしょう。その時は、ある種の人たちだけが甘い汁を吸うような社会ではなくなっているのです、誰の心にも不満や不公平感がない社会になっています。全体のために部分が我慢したり働いたりすることに、みんなが喜びを感じる社会になっています。

だから、もしあなたが自分の本当の姿を見ることができたら、つまり、世界という自分の本当の姿に目を向けることができる人で、その健やかな姿(=平和)を願う人なら、今回の選挙で、誰か一人に投票するような不平等なことはしないでください。あなたの身体の部位に目を奪われるようなことはしないでください。

分身主義的な環境が来るその日まで、誰かに一票を投じるようなまねをして、自分の手を汚したりなさらさないでください。あなたの分身からお願いします。

17日目 本当の「清き一票」とは？

詐欺は、自己中心的な心があるところには、どこにでも日常茶飯事に存在しています。

詐欺は、自分の身体を治すことや、自分の経済的利益に捕らわれている自己中心的な「心のスキ」に入り込む魔物です！

事故や犯罪や災害によって僕たちが苦しむのは、それはそのこと自体のせいではありません。

昨日、あなたの分身からお願いをしました。「あなたの『汚れた一票』を投票しないでください」というお願いです。あなたはあの言葉、どのように受け取ってくださったでしょうか？ お願いしているのは「棄権をすること」それ自体ではありません。闇雲に棄権を奨励しているわけではありません。「棄権をすること」の真意を汲み取っていただきたいと思い、もう一度話を聞いていただくことにします。

昨日は、政治家のことを「詐欺師」呼ばわりしてしまいました。でも、その言葉は撤回するつもりはありません。僕たちは、政治家に限らず、誰もが詐欺師的な生き方をしているわけです。自分を騙し他人を騙しながら生きているのが僕たちの現実だからです。そのことは以前、『世界を平和にする「自己愛的生活」』のNO.21(「誰よりも有能な詐欺師」)に書きました。http://www.bunshinism.net/jikoai21.htm

自分が「邪」な行為をしているかもしれないと思っても、みんなやっていることだと自分の気持ちを騙すことはよくあります。美味しい話を持ちかけられて、騙されているのかもしれないと感じても、そんなはずはないと理由づけをして自分を騙したりしていることもあります。

そのようにして自分を騙し騙しながら生きている僕たちは、結果的には他人を騙していることになります。そのようにして結果的に他人を騙した上、それによって金品を巻き上げ、私腹を肥やすようなことに用いたとしたら、それは立派な詐欺行為です。その金品が税金だったらどうでしょう。ただ、僕たち国民の税金を使う方たちは、自分の理性や正義感を騙し騙し、お互いによくやっているのです。そのようにして立派な詐欺行為を働いても、誰もお互いを責めたりしないだけの話です。もちろん、内情を知るすべもない僕たち国民が責めるわけありません。

僕だって、もし税金を自由に使える立場になったら、そしてその時、自分たちを監視する立場の人の目がなければ、税金は国民みんなのために使うだけでなく、できるだけ自分たちの有利なものに使おうとするでしょう。架空の経費を計上して自分たちが得する方法を編み出せば、内輪のみんなに、いい人だと感謝されるに違いありません。もし就職した職場が、あらかじめそのようなシステムになっていけば、いくらそれが不正であっても、いい職場に就職できたなあ、などと感謝してしまうでしょう。

上司に対してよほど恨みに思うようなことがあって、自分が首になってもいいから困らせてやりたいというくらいのことがなければ、誰も内部告発するなどというバカなまねはしません。双方共に何の得にもならないことをする必要がないし、それをすることで自分の首まで絞めてしまうわけですから。その慣習に甘んじていけば双方が得するんです。

そのようにして、お互いをかばい合うように生まれた既得権益は、チェック機関がない限り、夢のようにますます増大するのは当然です。世間から見たら非常識なことでも、自分たちにとっては常識になります。例えば空残業を3時間つけるのが常識化したり、研修や視察などの名目で、贅沢三昧の海外旅行が常識化したり、毎月、綺麗どころをつけて豪華な飲み会を催すのが常識化したり それらに全て税

金が使われるのです。自分たちの不正を、自分たちは特権階級だから当然なんだというような根拠のない理由づけをして、自分の良心を騙します。チェック機関がなければ僕たちだってそうなるんだから、政治家やお役人様たちを責めることはできません。もし僕たちがそのような社会構造を改革したいなら、自分の利益ばかり考えてしまうような脳の構造を改革しなければいけないんです。

今日まで分身主義の森と一緒に歩いてくださった方は、脳は環境に動かされているものだとわかっていると思います。だから、僕たちの脳を取り巻く環境が個人主義的なものから分身主義的なものに変わらなければ、永遠に権力の交代劇が起こるだけだ、と主張する僕の言葉を理解していただけたと思います。つまり、得する人たちが移り変わるだけの話です。

以下は、『世界を平和にする「自己愛的生活」』NO.21「誰よりも有能な詐欺師」からの抜粋です。

詐欺的言動とは、「常識」というバックボーンに支えられて、実はあなたも僕もみんな日常茶飯事に、むしろ堂々となっている行為だったんです。でも、いいですか!? 一番の詐欺師は、あなたをうまく丸め込もうとしている人たちではなく、その詐欺師たちの言葉を「信じようとしているあなたの心」の中にいます。自分自身が、自分に対して、誰よりも有能な詐欺師を演じていたんです。

(中略)

詐欺は、人間の自己中心的な「心のスキ」に入り込む魔物です!! 何かを信じようとしているその時、その自分の意識に目を向けてみてください。それは、自分の身体を治すことや、自分の利得に絡むこと、そういう自分中心(自分だけ、あるいは自分たちだけを救うこと)であったなら、そこには必ず詐欺的言動がくっついていきます。

(中略)

疑い深い僕だって、この46年の人生の中で、何度詐欺行為に引っ掛けてきたことでしょうか。僕は、誰も恨めません。何故なら、一番の詐欺師は自分自身だったからです。ある人が自分を騙そうとしているかもしれないと思っても、「そんなはずはない」と、なんだかんだとお人好しな理由づけをしてしまい、事実を直視しようともせず自分を騙し、結果的には詐欺師の片棒を担いできたのは、他ならぬ僕自身だったからです。客観的に見たら、とても非常識な行為をどれほど行ってきたことでしょうか。

詐欺師の中でも天才の部類に入る政治家という方たちに、あなたが一票を投じるということは、なんだかんだと自分自身の行為に都合よい理由づけをして、事実を直視しようともせず、彼らの片棒を担いでしまっているわけです。

選挙の時期になれば、僕たち国民はみんな大事な「お客様」に祭り上げられます。政党をたとえれば、お客様に喜ばれる商品を陳列するお店で、政治家は宣伝マン・営業マンたちです。広告塔のような人たちもたまにいますが、。だけど、普通のお店と違ってタチの悪いことに、そこに陳列されているのは実際に出来上がった商品ではなく、これから作る予定の商品です。彼らのマニフェスト(政権公約)は、あくまでも守ろうとしている目標であって、守られるという保障などどこにもありません。どうせ陳列しない商品なら、良いものはより良く見せかけるように、そして都合の悪い商品にはわざわざ触れないでおくのが常識です。どんな政党も、わざわざ「増税します」などと言う必要はありません。守れないにしても、聞かれたならば、お客様の手前、「増税はしません」と答えておくに決まっています。もし政権を握ってしまって止むなく増税をすることになっても、頭の良い彼らのことですから何とでも言い訳が立ちます。だから、政見放送とは客を釣るためのコマーシャルのようなものなので、丸々信じてはいけません。

彼ら(立候補者)は、まだ自分が、自分の脳を取り巻く環境にしゃべらされている媒体であることにも気づいていないから、あまり謙虚ではないし、なにしろ自分自身も、自分を騙していることにも気づかないでいるんですから。

あなただって、何度も何度も、政治家のそのような詐欺的言動にホトホト騙されているはずですよ。それなのに、今度こそはと自分を騙し、凝りもせず毎回投票に出かけて行くのは、同じ詐欺に何度も遭ってしまうバカな被害者みたいです。テレビだって、「同じ詐欺に引っかからないように十分注意しましょう」と呼びかけているじゃないですか。それでも、未だにオレオレ詐欺(*6)に引っかかる人がいるというのはどういうことでしょうか。

だけど、僕たち国民は被害者とはばかりは言えません。僕たちの中に「他の人はどうでもいいけれど、自分はいい暮らしをしたい」という自己中心的な感覚があるからこそ、政治家は僕たちを騙せるわけです。もし政治家が「増税はしません!」と言っても、「私は自分が生活できるギリギリのお金さえあればそれでいいので、世界平和のために増税をして欲しいと思っているんです」などと考える人の一票を、彼は勝ち取ることはできないからです。

政治家は、僕たちの自己中心性についてくるわけですし、その自己中心的な感覚を持った僕たち一人ひとりが、小泉分身さんが改革したいと願っている社会構造を作ってしまったので、むしろ僕たちは加害者でもあったわけです。

選挙の時だけ大事な「お客様」に祭り上げられる僕たち国民ですが、そんなことでふんぞり返って得意になっている僕たちの感覚は、自分たちだけ得しようとする「役人」や「公務員」たちの感覚とどれほどの違いがあるのでしょうか?

年金を払う立場の若い世代は、「なるべく少なく払いたい」と考えるし、貰う立場のお年寄りも、「なるべくたくさん貰いたい」と考えます。「なるべく少なく払いたい」と考える若い世代にしても、「だけど、自分が貰う段になったらなるべくたくさん欲しい」と考えます。そのような僕たちみんなの自己中心的な感覚が、「政治家」や「官僚」たちの感覚とどれほどの違いがあるのでしょうか?

この不況の中であって、高級車の売れ行きはアップしているそうです。トヨタも、国内で高級車レクサスブランドの販売を始めました。店内をまるで高級ホテルのように装飾して、消費者の優越感を刺激します。他人が羨むようなモノを持ちたい、僕たちみんなの心の中に

(*6)オレオレ詐欺。
電話口で、親族(子や孫、兄弟姉妹)などであるかのように装ったり、または電話口に直接でなくても、その背後に親族などがいるかのように装ったり(背後で泣き声が聞こえるようにして、親族などの存在を感じさせる)などして、被害者に電話をかけて、緊急に多額の現金が必要(たとえば、交通事故の示談金/じだんきん)などの理由から、金融機関の口座にお金を振り込ませるなどして、お金をだまし取る手口のこと。2003年(平成15年)頃に顕在化。

内在するそのような自己中心的な感覚こそが、詐欺師たちのねらい目です。このような、誰の脳にも浮かび上がる自己中心的な感覚が、この「役人天国」と言われるような社会構造を作ってしまったんです。

テレビのキャッチフレーズでは、「あなたの一票が日本を変える」ですが、どの政党が政権を獲得しても、表面的にしか変わりません。僕たちを取り巻く環境が個人主義的なものままで、人間が自己中心的な感覚で動かされている限りは、本当の意味の構造改革は成し得ません。本当の構造改革をするためには、僕たちの中から、自分の全体の姿を見ることが出来る人間が現れる必要があります。

自分の全体の姿を見る視点を持たない若い世代なら、「年金はできる限り多く払って、自分の分身であるお年寄りを助けたい」と言うでしょうし、自分の全体の姿を見る視点を持たないお年寄りなら、「自分の分身のために、なるべく切り詰めるので、少しの年金でもいいです。それよりも、働けるうちはみなさんのお役に立ちたいので働かせてください」と言うでしょう。高級車に群がっていた消費者も、「高級車は必要ありません。その金を世界のためにもっと有効にお使いください」と言えるようになるでしょう。公務員は「私たちは喜んで公僕になっただけですから、年中無休で（土・日や年末年始も交代出勤で）働きます。報酬も皆様以下に引き下げてください。その金を世界に役立てます。みなさんに感謝される顔を見ることだけが生き甲斐で働いています」と言うでしょう。政治家も、「今まで貰っていた年収を引き下げてください。そうしないと、国民の方たちに増税は求められませんから」と言うでしょう。お役人たちも「いいえ、自分たちこそ年収を引き下げてください。自分の全身のために税金を使います。全身が幸福にならずに、何が自分の幸せだと気づきました。私たちはつながっていたんです。だから、税金を今までのように無駄に使いません」と言うでしょう。

本当の構造改革をするためには、脳を取り巻く環境を変えて、脳にこのような考えが浮かび上がるように変化させる必要があります。全人類の意識改革です。分身主義を知れば、みんなのことを考えることが自分のことを考えることと同じになるので、助け合いの世界が出来上がります。

でも、あなたは次のように反論するでしょうか？ そんなことをしては、社会の発展はない。お金は回らなくなり経済は発展しないし、いいモノだって作られなくなる。

その心配は、個人主義的環境に浸っているあなたの脳に浮かび上がる心配に過ぎません。あなたが相変わらずきらびやかな物に目を奪われ、金持ちになるサクセスストーリーに憧れているのは、あなたの脳がただそのような環境にあるからそのような反応をしているだけなんです。あなたの視点は、まだ、分身主義の見る光景を見ることができません。分身主義は、「発展」という言葉がまやかしかであることを知っています。この世には「発展」とか「進歩」などはありません。あるのは「変化」だけです。たとえ原始的な生活に戻ろうと、それは「衰退」でも「退歩」でもなく、変化です。極端な話、お金なんて回転しなくなったら、経済状態なんか貧しくなったら、車がなくなってみんな自転車に乗るようになったら、冷房がなくなって扇風機や団扇だけになったら、ロケットの開発ができなくなって火星に行けなくなったら、世界中の人の心が一つになって助け合って生きれば、その方がずっと幸福だという考え方に、切り替えようじゃありませんか。実際、今の僕がそうです。車もやめてバイクにしましたが、そのバイクが盗まれて自転車にしました。今ではバイクが盗まれて本当によかったと思っています。自転車にしたことで、身体も数倍喜んでいて実感しています。冷房はここ何年も使わないをやめています。汗を拭き拭きパソコンを打っているのが人間的な感じがして嬉しいのです。収入も、一番稼いでいた時から比べると半分以下になりましたが、支出を抑えているせいで、貯蓄は以前よりできるようになりました。もし死ぬ前にいくらでもまとまった蓄えがあれば、「全身」のために使っていただきたいと思っています。禁欲的な生活は、ダイエットをしているような快感が伴うことを知りました。自分の身体がスリムに引き締まり、精神的にもピュアになっていくような幸福感を感じています。

他にも、分身主義的な感覚によって僕が取らされている行動があります。水はなるべく無駄遣いをしないようにしているし、酒は外で飲まないようにしたし、外食をやめて質素な野菜中心の食生活に切り替え、ゴミはなるべく出さないようにしています。挨拶を心がけ、周囲の人を快くさせる質素なおしゃれに気を使うようになりました。僕の体験から言わせていただければ、お金の余裕があって贅沢していた頃は、心に不要な皮下脂肪がたまっていくような、不快感だけがありました。

裕福で贅沢な生活は決して幸福とイコールではありません。裕福で贅沢な生活は、そのような生活をさせられるような環境にいる可哀想な分身さんにお任せします。分身主義的な環境の中では、裕福で贅沢な生活をする人も、自分がその取り巻く環境にそのような状態を強いられていることを知っているのだから、その自分の人生を受け入れるだけです。誰にも自慢することもないし、誰からも妬まれません。分身主義的な環境の中では、優越感も劣等感も存在しません。分身主義の考える「世界平和」とは、世界中の人が不公平感や不満を持たないで生きられるようになった社会のことです。その時こそ、人類は本当の幸福をつかみとることができると考えます。

本当の幸せは、経済の発展を善しとする社会の中や、高価なものの中にはありません。そこにあるのは優越感というまやかしの、一時しのぎの幸福でしかありません。そこには、妬みや不公平感や不満が渦巻いています。優越感という幸福は、争いを生みます。そのことを是非あなたにもわかってほしいんです。僕たちはいかに削減、この個人主義的な環境が作り上げてきたまやかしの幸福と縁を切る覚悟をする必要があります。いかに削減、目を覚まそうじゃないですか！

まだ9月11日の選挙には間に合います。もう一度、よく考えて、この選挙をきっかけにあなた自身が変わろうとしてみてください。詐欺は、自己中心的な心があるところにはどこにでも存在していることを忘れないでください。あなたの行為が詐欺的行為であるかどうか、よく見極めてください。あなたの一票にかける願いが、もし自分や自分たちの経済的危機を救うことだったなら、そこには間違いなく詐欺の臭いがします。まずは自分から、「自分の利益だけを考える人間をやめるぞ」と決意するところから始めましょう。そして、手始めとして「自分は自分だけの利益に加担する『汚れた一票』は投じない」という行動から始めましょう。

目的は「棄権すること」それ自体にあるものではありません。分身主義者を目指すことを、自分から始めるんだという気持ちの表現です。世界（自分の全体の姿）に目を向け、自分（自分という分身）から変わらなければ真の構造改革は成し得ないと理解し、自分から変わる行動の一環として「棄権を選択する」、そのことに意味があるんです。面倒とか無関心で棄権するのは、同じ棄権でも全く違います。

最後のお願いに参りました。どうか、世界平和のために、勇気を持って棄権をしてください。

ところで、この分身主義の森は、もうすぐ出口に差し掛かりますが、約束していたことが2点あります。政治家の公約ではないので、ちゃんと守っておこうと思います。一つ目は、「予備知識7・霊は存在するか(3)」でお約束しました、次の文章です。

- > 人間の脳というものは、いかに非合理的な考え方をしてしまうものか、ということを知ることが(世界を平和にするための)
- > 第一段階なんです。それを知るとということは、自分たちの姿をちょっと上から見下ろす視点を持つということです。
- > ちょうど、臨死体験をしたという人が、病院のベッドに寝ている自分とそれを囲んで泣いている家族の姿を上の方から眺めて
- > いるような視点です。この比喩は誤解を招きかねないので、また最後にちゃんと書こうと思っています。

臨死体験を靈魂不滅説の証拠として取り上げる人がいますから、このような比喩は、適切ではなかったかもしれません。臨死体験は今では、酸欠状態に陥った脳の中で、脳内記憶とアヘン様の脳内化学物質が作る夢であることがわかっています。つまり、彼が見ている「病院のベッドに寝ている自分」や「それを囲んで泣いている家族」とは、脳がその人の記憶を元に見ている幻覚だったんです。その証拠に、臨死体験の中に現れるものは、その人の記憶の中にあるものか、あるいは記憶を組み合わせたものだけで、それ以外のものは一切現れません。臨死体験を持ち出したのは、ただ、分身主義的な視点をわかってほしかっただけです。

臨死体験をした人は一様に「人生観が変わった」と言うそうです。分身主義を味わった人は必ず、その後の世界観が変わります。と言うより、宇宙観が変わります。世界中の人が新しい宇宙観を持った時、つまり世界中の人が分身主義者になれた時、この世界は平和になります。個人主義的な環境の中に浸かった脳を持つ世界中の有識者たちが、いくら難しい顔をして話し合ってたって、世界は平和になりません。彼らは、むしろ僕たちを平和とは逆の方向に先導しています。世界中の人が分身主義者になれた時、あなたも僕も、どんな災害に遭っても動じない本当の幸せの中にいます。事故や犯罪や災害によって僕たちが苦しむのは、それはそのこと自体のせいではありません。僕たちの置かれた状態を、事故や犯罪や災害と名づける環境のせいです。幸せを遠ざけるのは、それらを不幸と感じさせる環境に問題があったのです。

明日は、この分身主義の森に入って3日目にお約束した、もう一つのお約束を果たしておきます。

- > 安齋育部分身さんが、人間が死んだらどうなるかということ科学的・数量的に記述するという画期的な試みをしてみせました。
- > それによってわかった驚くべき事実を、あなたに知っていただきたいと思っています。

この「驚くべき事実」を楽しみにしててください!!!

ちょっと一言

分身主義を知った僕たちは、政治家の言動は彼の環境が彼を媒体として取らせているものだと知っているのだから、彼らを責めることはしません。政見放送などを見ていて、小泉分身さんや、岡田・運動分身さんや、志位分身さんたちがしゃべっているのを聞いて、「ああ、この人たちは、自分の脳を取り巻く環境にしゃべらされている媒体なんだなあ」という視点で見れるようになれば、かなり分身主義的な視点を持てるようになっていきます。それがわかれば、真の構造改革とは、自分たちを取り巻く環境を変えること以外にないことがわかります。それは、一人ひとりが、自分が変わろうと決意することから始まります。(正確に言えば、自分を取り巻く環境に決意させられるわけですが)

誰もが3Dアートを体験できるわけではないのと同じように、誰もが分身主義を体験できて、その視点を作れるようになるわけではありません。主義などと言っていますが、分身主義とは何らかの主義・主張やイデオロギーのようなものではありません。個人主義の欠点を乗り越えようとしたので、それに倣ってそのように命名されただけで、実は、「物事を真の科学の目で見る視点」のことなんです。

あなたにその適性があるかどうか、簡単に質問してみます。「はい」か「いいえ」で答えてください。

- 1、自分は幸福になりたいと思うが、まったくの他人(世界中の人)に幸福になって欲しいとはあまり考えない。
- 2、差別はよくないとは思うけど、自分が優遇されたり(=差別されたり)誰か一人を愛したり(=差別したり)するのは、悪いこととは思わない。
- 3、自分の信じている宗教は絶対である。
- 4、占いや非科学的なことを安易に信じるところがある。
- 5、部分だけ聞きかじって理解したつもりになる傾向がある。
- 6、一度先入観や固定観念を持つと、なかなか変えられない。
- 7、感情的に行動してしまっても特に後悔などしない。
- 8、物事を論理的に考えるのはまどろっこしいし、性に合わない。

これらの質問に全て「いいえ」と答えられる人なら、分身主義は必ず体験できます。でも、全てに「はい」と答えた人は、残念ながら無理かもしれません。無理だとしても、その人の何一つ悪いわけではありません。人にはそれぞれ適性があるわけです。僕がたまたま「物事を真の科学の目で見る視点」を持つ適性に恵まれていたといっても、それは他の適性に恵まれていなかったせいであり、そのせいで誰よりも早く分身主義に出会えたからと言っても、僕は単なる媒体なんです。

それに、もしあなたがこれらの適性に合わずに、分身主義を理解できないとしても、分身主義はあなたを切り捨てたわけではありません。あなたはみんなの部分であり全体でもあるわけですから、僕があなたを切り捨てるということは、それをした自分を切り捨てることになるからです。もし、あなたが自分の幸せばかりを考えたり、他人の幸せを妬む人だとしても、それはあなたが悪いわけではありません。あなたは、その取り巻く環境に「自分の幸せばかりを考える」人間をやらされているだけだからです。同じように、僕が「自分の幸せばかりを考える人間でありたくない」人間なのは、自分の脳を取り巻く環境がそのような僕にしている、というだけの話です。もしあなたが分身主義を理解できない人間であっても、あなたを取り巻く環境が、分身主義的な感覚を持った人間で満たされてくれば、あなたの感覚も自然に

「自分の幸せ」だけを幸せとは感じないように変化します。金持ちになって贅沢をしようとか、優越感でいい気持ちになろうなどという考えが浮かび上がりにくい脳になります。

『バラ色の素粒子』を読んでくださった方は、自然界が素粒子というブロックをあれこれと組み合わせているうちに、長い年月をかけて僕たちの脳の中に扇風機を作った話を覚えていると思います。それはモーターを持たない、外から吹いてくる風にだけ反応して回っている扇風機に過ぎませんが、その扇風機が回転することで、今度は外の風の動きを変化させることになるんです。人間の脳が環境を変化させるようになる過程を、扇風機の比喩で表現しました。煤煙を撒き散らしたり、生物を死滅させる風を送る扇風機もありますが、もちろん外の風を清らかな風に変化させる扇風機だってあります。それは、僕たちが自分の真の姿を知り、宇宙と一体になった時に、僕たちの脳内に浮かび上がる、「万物を愛する気持ち」や、「万物の幸福を願う気持ち」が、動力となって回転する扇風機です。モーターを持たないはずの扇風機に動力が取り付けられたのです。浮かび上がらせられた「意志」という動力です。

その時です。僕たちが本当の意味で「清き一票」を投じられる時は、

18日目 科学は輪廻転生を認めているか？

精神科医とは、自分たちの物語の中に、自ら創作した「病気」や「患者」などを登場させて、貧弱な物語を語る語り部たちである。

僕たちの身体とは、細胞を自己複製するDNAという映写機が映し出している映像のようなものである

9月11日の総選挙、自民党が圧勝でしたね。全国的に高い投票率だったようですが、「あなたの汚(け)かれた一票を投票しないでください」という分身の願いは、あなたに届いたでしょうか？ あなたは投票に行っていましたか？ それとも願いを聞き入れてくださって棄権していただきましたか？ 棄権したといっても、無関心とか、面倒とか、あるいはどうせ期待できないからなどという理由なら、僕の願いは届かなかったのと同じです。それでは自分中心で自分を棚に上げる姿勢は全く変わっていません。

あなた自身の詐欺的部分、ずい部分、自己中心的な部分、汚い部分に気づいて欲しかったんです。僕自身も自分のそのような部分に気づいて自己嫌悪に陥り、人間をやめたくなくなったように、あなたにも自己嫌悪に陥って欲しかったんです。それはあなたを傷つけるためでも痛みつけるためでもありません。自己嫌悪に陥って人間をやめたくはなかった僕ですが、なんとかそこから立ち上がろうともがき続けたことで、ついに分身主義に出会えたんです。あなたも分身主義に出会うためには、本当の自分から目をそらせてはいけません。何か事件や事故があるたびに、自分を棚に上げて、自分は被害者であるような沈痛な顔をして、あるいは正義の味方のような顔をして、テレビでコメントをしているような人々には、事件や事故を何一つ根本からなくせないし、決して分身主義が理解できないからです。

僕(徳永分身)の言葉は、あなたの身体の内部からの「内部告発」です。あなた自身もまだ気づいていない、あなた自身の心の叫びなんです。内部告発というのは、内部の人間から見れば、顔を背けて知らん顔を決めこみたいものかもしれません。だけど、しっかりとその声に耳を傾けてください。これまで僕と一緒に森の中を歩いてきてくださったあなたは、あなたや僕はこの宇宙の中の部分であると共に、全体でもあったんだということを理解してくださっていますよね？ この宇宙を一つの身体にたとえると、僕は全身の一部、例えば右手の薬指の爪かもしれないし、あなたは左足の小指かもしれません。でも、ちょっと視点を変えてみれば、右手の薬指の爪や左足の小指をひっくり返した姿が全身なんですよ。右手の薬指の爪や、左足の小指がなくなったら、今の全身とは違う形をした全身になります。つまり、僕やあなたは今の形をした宇宙の部分であり、同時に今の形の宇宙そのものだということなんです。なぜかと言うと、全部切り離すことのできない、つながっているものだからです。

それなのに今の僕たちは、一つの身体の中で部分部分が自己主張し合い、いがみ合い、足を引っ張り合い、競い合い、優越感に浸ったり、妬んだり、憎んだり、恨んだりしています。時には殴り合いの喧嘩(=戦争)をしています。それはみんな、つながっている自分の全身が目に入っていないからです。相手を叩けば、自分自身にダメージを与えているということに気づいていないんです。

人類は、これまでに2000回を超える核実験を行ってきたという事実を知っていますか？ 可哀想に地球は汚染され、ボロボロに穴が開いて、傷だらけ血だらけです。それはまるで自傷行為のように見えませんか。僕たちの心が今、何かに贅え、不安や苦しみや迷いの中にいる証拠です。自分の全身を見る視点のない僕たちは、あちらこちらに監視カメラを取り付けて、自分を攻撃してくるものに対して身構えています。こんなのが、今のあなたの全身の姿なんですよ！ あなたの全身はこんなにも不健康だということに、あなたはそのことにもまだ気づかず、自分だけは楽しく生きると信じますか？ あなたの大事な右手の薬指の爪(=僕)が叫んでいます。あなたの内部からのその叫び声が、あなたには、今、聞こえますよね！ それはあなた自身もまだ気づいていない、あなた自身の心の叫びなんです。

さて、そろそろ分身主義の森も出口に近づいています。気がつきませんか？ 前方が薄っすらと明るくなりかけているでしょう？ この森を抜ける前に、約束を果たしておかなければいけないことが、もう一つありました。人間は死んだらどうなるか？ という疑問に答えることです。この森の中に入って3日目に、あなたにお約束したことです。

> 安齋育部分身さんが、人間が死んだらどうなるかということ科学的・数量的に記述するという画期的な試みをしてみせました。

> それによってわかった驚くべき事実を、あなたに知っていただきたいと思っています。

これからご説明するのは、安齋育部分身さんの考えている「科学的輪廻転生観」というものです。

人体を構成している元素の中で、体重の0.1%以上の元素(原子)の含有量は次のような割合です。

酸素	65.0%
炭素	18.0%

水素	10.0%
窒素	3.0%
カルシウム	1.5%
リン	1.0%
イオウ	0.25%
カリウム	0.20%
ナトリウム	0.15%
塩素	0.15%

炭素原子は体重の18.0%なので、体重が75キログラムの人なら、13.5キログラムが炭素ということになります。

$$75 \times 0.18 = 13.5$$

この人（仮にAさんとします）が死んで火葬に付されれば、13.5キログラムの炭素が酸素分子と結合して、二酸化炭素（炭酸ガス）の分子となって火葬場の排気筒から大気中へ放出されていくことになります。

安齋分身さんは次のように考えました。

「火葬場から放出されるこの二酸化炭素が、もし地球の大気中に平均にばら撒かれたとしたら、無作為に大気中のどこかの空気を1リットル採取した場合、そこには一体何個のAさんブランドの二酸化炭素分子が存在するのだろうか？」

二酸化炭素分子（CO₂）は、炭素原子（C）1個と、酸素原子（O）2個で構成されるので、火葬場から放出される二酸化炭素分子の数は、炭素原子（C）の数に等しいということになります。13.5キログラムの炭素原子を持つAさんの場合、13.5キログラムの炭素原子の中には、一体何個の炭素原子が詰まっているのでしょうか？

どの原子も、「原子量」に相当するグラム数の原子を持ってくると、その中には「アヴォガドロ数」に相当する数だけの原子が含まれています。

ちょっと難しい言葉が出てきましたが、アヴォガドロ数というのはイタリアの物理学者・化学者アメデオ・アヴォガドロ（1776年 - 1856年）の名前を取った数で、「 6.02×10^{23} 」です。

例えば、水素原子は原子量が1なので、1グラムの水素には、「アヴォガドロ数個（ 6.02×10^{23} 個）」の水素原子が詰まっています。鉄の原子量は56なので、56グラムの鉄の中には、「アヴォガドロ数個（ 6.02×10^{23} 個）」の鉄原子が詰まっているということです。ここまではいいでしょうか？

さて、炭素原子は原子量12なので、12グラムの炭素原子がここにあるとしたら、その中には「アヴォガドロ数個（ 6.02×10^{23} 個）」の炭素原子があるということです。

体重75キログラムのAさんの炭素原子は13.5キログラム（=13500グラム）でしたから、それは12グラムの1125倍になります。

$$13500 \div 12 = 1125$$

つまり、Aさんの身体の中には「 $1125 \times$ アヴォガドロ数」の炭素原子があるということになります。

$$1125 \times (6.02 \times 10^{23}) \text{ 個です。}$$

この炭素原子が火葬場で全部完全燃焼したとしたら、これと同数の二酸化炭素分子が大気中に放出・拡散されていくことになります。では、次に、この二酸化炭素分子が放出・拡散される地球の大気の体積はどのくらいか計算してみます。ちなみに、安齋分身さんは地球を取り巻く大気を、地上10キロメートルで計算しました。その答えは、 5.11×10^{21} リットルです。

先程計算で求めたAさんの身体の中の炭素原子の個数を大気の体積で割ると、1リットル当たりに含まれる炭素原子の個数が割り出されます。すると、驚くことに、13万2500個もあるという答えが出たのです!! これは75キログラムの体重の人の場合で、60キログラムで計算すれば10万6000個くらいになります。

いいですか? あなたが死んで火葬に付され、その身体を構成していた炭素原子が火葬場の排気筒から二酸化炭素に変換されて大気中に均一にばら撒かれたとしたら、エルサレムでもリオデジャネイロでもピョンヤンでもニューヨークでも網走番外地でもどこでも、1リットルの空気を採取したら、その中には10万個以上もの「あなたブランド」の二酸化炭素が含まれているということなんですよ。

その二酸化炭素は、野菜や穀物や雑草などの光合成に利用され、それを食べた動物の細胞となり、さらにそれらを食べた人間の身体になるわけです。地球上の原子はどのように減りもせず増えもせず、ひたすらリサイクルを繰り返しているわけです。これが安齋分身さんの考えている「科学的輪廻転生観」です。

今は、炭素原子だけの輪廻を考えただけですが、人体を構成する物質は他にもたくさんありますし、葬法にも火葬だけでなく土葬や鳥葬などとありますから、実際の輪廻はもっと複雑な様相を見せてくれることでしょう。

彼は次のような興味深い想像をしています。

「私の体を構成している原子のうち、あるものは過去にナポレオンの体を構成していた原子かもしれないし、徳川家康の体を構成していた原子かもしれないのだ。これは科学的な意味において『輪廻転生』と呼ぶにふさわしい大自然の摂理ではないか。私の体も、やがてこの大自然の輪廻に参加し、あるいはベトナムで米となり、あるいはジンバブエで少年の心臓の一部となり、あるいは見も知らぬフランス人の脳に宿るかもしれない。私の生命は『個体の死』とともに終わっても、私の体は世界に広がって生き続けるのだ」

安齋分身さんは生き物ばかりを引き合いに出していますが、もう少し範囲を広げてもいいと思います。16日目に歩いていたら、「今

で人工物と呼んでいたもの（本や机や洗濯機や水道水や薬やクッキーやパソコンや車やロケット）さえも自然物であるという見方もできるようになる必要がある」と言いましたが、それら人工物と呼ばれているものは、自然界の素材を組み替えただけのものなので、僕たちを構成している分子が、過去それらのものであったり、将来それらのものに生まれ変わったりする可能性もあるわけです。

もう一つ、安齋分身さんが見落としていることがあります。彼は「私の生命は『個体の死』とともに終わっても、私の体は世界に広がって生き続けるのだ」と言っていますが、この『個体の死』とは一体何を指しているのでしょうか。

僕たちの身体を構成している細胞は、常に細胞分裂を繰り返して、細胞は日々入れ替わっています。一説によると、1分間に2億個の細胞が死に、新たに1分間に2億個の細胞が作られている、と言われてます（注意：細胞が死滅したからといっても、地球上の原子の総数が減るわけではありませんよ）

部位によってどのくらいの日数で総入れ替えが行われるか調べてみましたが、皮膚の細胞は3、4日で全て入れ替わると書かれているものがあるかと思えば、4週間かかると書かれているものもありました。あまり当てにはならないので、大まかな表示をしておきます。

皮膚	4 - 28日	すい臓	同上
赤血球	60 - 120日	脾臓	同上
白血球	7 - 15日	食道の粘膜	3日
目の角膜	1週間	筋肉細胞	1 - 7年
肺	400 - 500日	骨	2 - 5年
肝臓	同上	体全体	3 - 7年

いずれにしろ、10年も経てば、爪の先から髪の毛一本に至るまで同じ細胞は（心臓と脳細胞を除けば）一つも存在していないということはいえそうです。つまり、安齋分身さんが「個体」と呼ぶカッチリとしたものなんて、どこにもなかったことになりま。ほくろの位置や指紋の形は、赤ちゃんの時から死ぬまで変わらないと思われていますが、厳密に言えば、それを作っている細胞自体は全く別人のものであると言ってもいいわけです。指紋の形が変わらないのは、それは新しい皮膚が作られる奥の方に、鑄型にあたるものがあるからだそうです。

全く別人なのに、10年前の指紋によって犯人が逮捕されたら、誰一人として「そいつは別人です」とは言いません。まれに、本人は「別人です」と言い張る場合がありますが、それは嘘をついている場合なので、本人も実は同一人物だと思っているわけです。どうやら、指紋によって犯人逮捕が可能になるのは、人間の脳細胞だけは分裂しない（それが記憶（*7）という働きを作ります）からだといえそうです。

記憶は、別の肉体を同一人物であるという錯覚をします。もし人間に錯覚する脳がなければ、犯行当時の指紋を作っていた身体と、現在の身体が同じであるとは思わないでしょう。自分をつなげているのは、脳の記憶が作っている幻想（＝錯覚）だけであることを忘れてはいけません。

本当は10年前に人を殺した人は、もうどこにもいないのに、人々の記憶だけが犯人を作り上げているんです。そして僕たちは、環境によって人殺しをさせられてしまった媒体の、もはやその抜け殻（もうその当時の身体ではない）を引っ捕らえてきて処刑しているわけです。

（<http://www.bunshinism.net/jikoai88.htm> 『世界を平和にする「自己愛的生活」』 NO.88「真の科学捜査が割り出す真犯人は？」参照）

自分をつなげているのが脳の記憶だけだと言うなら、人間の死とは、脳が死んだ時（脳の記憶が停止した時）のことと言えるのかもしれませんが。脳の記憶という活動がなくなった場合を考えてみてください。その人には、10年前どころか1秒前の自分の身体と今の身体が同一人物の身体だという錯覚すらも起こりません。要するに、脳のない植物などと同じようなものです。

植物は、一秒前の自分と今の自分が同一だという認識を持ちません。脳の記憶という活動のない彼らには、自分という認識すらありません。この認識というのが、人間だけが持つ錯覚（＝幻想）の一つであったことはもう言いましたね。

人間としての死とは、脳が死んだ時だなどと言うと、臓器移植などの問題と絡んで浮上してきた、「脳死を人の死とするか否か？」という白熱した議論に油を注ぎかねませんが、僕は決して、脳が死んだ時（脳の記憶が停止した時）を、その人の死と断定しようなどと言っているわけではありません。（ちなみに、「脳死を人の死とするか否か？」といういつまでも平行線を辿る議論は、世界中が分身主義的環境になれば、さっぱりと解決します）

ある人の記憶が完全に停止しても、その身体が活動を停止していない限り、それを見ている人たちが、「彼はまだ生きています」と認識（＝錯覚）したからと言って、誰も責める人はいないでしょう。（ただ、脳死（*8）と言う場合は、植物人間（*9）とは違って人工呼吸器を装着しなければ呼吸は停止してしまうわけですから、生きてると錯覚するには問題が残りますが）

僕は今、生死の境目を判定する基準として、脳の死（脳の記憶停止）を持ち出したわけではありません。むしろ、科学的な事実関係から考えれば、生死の境目などは存在しなかったということを書いたかったんです。生も死も、人間の脳の記憶が作る錯覚だったと言いたいんです。

その証拠に、植物は人間みたいに錯覚はしないので、生も死も存在しません。人間以外の動物だって、記憶によって作り上げられた自我という錯覚がないので、生も死も存在しません。そこにあるのは「変化」、それだけです。人間の錯覚だけが、彼らや自分たちの中に生や死を見て取るだけです。つまり、生も死も、人間の脳の記憶が作る錯覚だったんです。

笑いかけ、語りかけ、躍動し、そして様々な情動を誘発してくるような一連の特徴を持って変化する状態に対して、僕たち人類は「生」と名づけ、二度と笑いかけてくれず、二度と語りかけてくれず、二

（*7）記憶は、脳が細胞分裂をしないことと関係があります。もし脳細胞も他の細胞と同じように新日入れ替わってしまうのなら、記憶の保持もあり得ません。ちなみに、神経細胞は他の細胞と違って細胞分裂をせず、減る一方で、20歳過ぎると一日に10万から20万個ずつ減っているとされています。でも、脳の神経細胞の総数は千数百億個なので、人間の短い一生から見れば減少率は微々たるものです。また、シナプス（神経細胞と神経細胞の接続部分）は、細胞体から出ている1本の軸索に対して、平均1万個もあると言われているし、新しく作り出せるから安心できそうです。ただし、年を取って神経成長因子が少なくなると、シナプスのでき方は鈍くなります。それで記憶力も鈍るのではないかとということです。

（*8）脳死（全脳死）
脳幹を含む全脳の機能の不可逆的な停止。
回復する可能性はない（一般には心臓は動いているが、人工呼吸器を装着しても通常数日以内に心臓は停止してしまう）。
自力で呼吸できない。
脳死とは、まさに人工呼吸器の発明と共に生まれた。

（*9）植物状態
脳幹の機能は残存（あるいは一部残存している）。
意識こそないが、自力で呼吸をし、痛みを感じ、さまざまな刺激に人間的な反応を示し、食物も管で胃に送り込めば消化する。まれに回復する可能性がある。

度と動かなくなってしまう状態に対して、そしてまた、深い悲しみなどの情動をもたらす一連の特徴を持った状態に対して、僕たち人類は「死」と名づけました。

と言っても、そのような一連の特徴を持った状態などは実際には存在せず、それ自体が人間の錯覚だったなどと僕は言っているのではありませんよ。それらの一連の特徴を持った状態に対して、人間の自分勝手な解釈 (= 錯覚) により、「生」とか「死」などと、ある種の色合いのこもった名前を人間がつけてしまったと言っているのです。

単なる変化に対して、“進化”とか“発展”とか“成長”などと、ある種の色合いを込めて名づけてしまう、人間お得意の、例の自分中心のアレです。科学的視点で見れば、この自然界 (= 宇宙) にあるのは、ただ、変化のみでしたよね。それはビッグバンの最初の一突きから連綿と続くエネルギーが引き起こしている変化です。人間の感情が、生物の単なる変化を理解しようとした時に、「生」や「死」を見て取ってしまうだけです。だから、生も死も人間の脳の記憶が作る錯覚だと言っているんです。

単なる生物の変化過程を、僕たちの脳が「生」とか「死」と読み取ってしまう理由は、僕たち人間の脳に記憶があり、その記憶によって作り上げられた言葉や感情などがあるからです。それらが錯覚を作るんです。

次のようにイメージしてみたらどうでしょう。僕たちの身体とは、細胞を自己複製するDNAという映写機が映し出している映像のようなものである。と。映像とは、光とスクリーンとの相互作用が作り出す一瞬の現象です。僕たちの身体もカッチリとしたものなんかではなく、実は、一瞬一瞬に映し出されている映像のようなもの、つまり現象に過ぎなかったんです。

だから、安齋分身さんの、「私の生命は『個体の死』とともに終わっても、私の体は世界に広がって生き続けるのだ」という言葉を、科学的な視点で正確な言葉に言い換えさせていただければ、次のようになると思います。

「私を作っている現象の一つ一つが終わり、この世界から、私という『個体』の映像が消滅して、人々に死という錯覚で捉えられることになっても、私という現象を映し出していた物質は分解されて世界に広がって生き続けるのだ」

いいですか!? 僕たちのこの身体は、まさに、あのビッグバン以来、ずっと素粒子の変化し続けている過程で見る仮の姿、つまり「現象」だったんです。その現象に対して、「生」とか「死」といった感情を込めた名前と呼ぶのは、人間の自分中心な解釈に過ぎなかったんです。

宇宙にある原子の総数はビッグバン以来一定だと言われています。原子の大元は素粒子です。だから僕 (徳永分身) は、あえて素粒子という言葉を使って、「この宇宙は素粒子の巨大なリサイクル工場だ」と言うことにしています。その科学的事実さえ理解できれば、安齋分身さんが数量的に証明して見せなくても、僕たちのこの身体は自然界の輪廻転生そのものだったとわかります。

このビッグバン宇宙は、140億年の間、素粒子がリサイクルを繰り返すことで様々な物質を作ってきましたが、その長い年月から見ればほんのごく最近になって、たまたま人間という物質を作りました。素粒子がリサイクルを繰り返すことでたまたま生まれた人間の脳には、ナトリウムイオンやカリウムイオンがあって、それによって微弱な電流が流れる仕組みができていて、それが記憶を作り、記憶は「幻想」を発生させることとなりました。

幻想とは、分身主義の用語で「人間の脳の記憶と外部からの刺激との相互作用によって作り出される全ての現象。認識、連想、想像、思考、感情、意思 など」のことでしたね。(http://www.bunshinism.net/yougo_kaisetu.htm#2 「分身主義の用語解説」参照)

ところが、今ではその人間の脳に生まれた幻想が、自然界という親元から離れて自立し、自分だけの力で生きているかのように威張り始めています。僕たちは自分の意思で行動しているかのように思い上がり、お互いの意思や命や愛を「よいしょ」し合って、いい気持ちになっています。なんと、傲慢な存在になってしまったことでしょう。

だけど、科学時代を生きる僕たち人類は、そろそろそれは錯覚であったことに気づかなければいけません! 僕たちの脳に発生する幻想も、元はと言えば、みんな素粒子のリサイクルの過程に見せる単なる現象に過ぎないんですから。

素粒子のリサイクルによって、100億年以上も前に銀河や天体が生まれ、素粒子のリサイクルによって46億年前に地球が生まれ、さらに素粒子がリサイクルを続ける過程で地球にRNAという自己複製する物質が生まれ、さらに素粒子がリサイクルを続ける過程で細胞が生まれ、さらに素粒子がリサイクルを続ける過程で脳の中に記憶という機能を持った僕たち人類が生まれ、さらに素粒子がリサイクルを続ける過程でその記憶を元にして連想、想像、思考などの幻想が生まれ、さらに素粒子がリサイクルを続ける過程で言葉が生まれ、言葉は思考を生み、人間的な感情を生み育て、差別や愛や戦争や文化を生み育て、貨幣経済を生み育て、政治を生み育て、さらに素粒子がリサイクルを続ける過程で人々に思惑を生み、行動を起こさせ、先程(2005年9月11日)の総選挙では思惑同士がぶつかり合い自民党を圧勝させました。

素粒子が、その変化している過程で「人間」という仮の姿になって、自然界のシナリオに基づいて演じさせられているドタバタ劇こそ、僕たち人間の営みです。この宇宙は、素粒子という役者が自然界の法則というシナリオによって、様々な変化して演じさせられている劇場です。自民党が圧勝したのも、分身主義が生まれたのも素粒子がリサイクルを続ける過程の一現象です。今、この僕 (徳永分身) が文章を書かされていることだって。

どうです!? 「素粒子」というキーワードによって、全てがつながり歯車が噛み合ったでしょう!? ついに、ジグソーパズルが完成したでしょう!? 今、あなたの手のひらに、キラリ光る真理が宝石のように乗っかっていませんか? それとも、まだ疑問が残りますか?

僕は、錯覚がいけないと言っているのではありません。人間の脳に記憶という作用があり、そして感情や言葉というものが育ってしまった以上、錯覚は避けられません。しかし、人間は、自分が物事を認識したり思考したりしていることは錯覚であることを自覚することができます。単なる変化に対して、“生”や、“死”や、“進化”や、“成長”などを見て取ってしまうのは、人間の錯覚であったと知ることはで

きます。そして、科学的事実在即したより良い錯覚を持つことは可能です。

あなたは今、自我という古臭い錯覚で仕切られた狭い日常の関心事や、自分を中心にした目先の利益や、社会に植え付けられた常識などから解き放たれて、宇宙や素粒子を眺めることのできる視点に立っていますか？ その視点こそ、真の科学の視点です。そしてその視点によって浮かび上がった、より良い錯覚こそが、分身主義なんです！ それこそが僕たちの世界を唯一平和にし、それこそが僕たちを唯一幸福にしてくれる錯覚です！

さて、この分身主義の森に入る前の予備知識で、萩原玄明分身さんの著書『精神病は病気ではない』を参考書にさせていただきましたが、結果的には彼の言葉をたくさん批判してきたような形になってしまいました。しかし、表現が違うだけで、本質的には彼と同じことを言っているとも言えます。彼（萩原玄明分身さん）は次のように主張していました。

- 1、肉体は滅んでも魂は不滅で、魂は別の肉体に乗り移り輪廻転生する。
- 2、死者の霊が、生者に乗り移って何かを語ることがある。
- 3、自分（萩原分身さん）は霊視をすることができる。

これらの主張は科学的な立場から見ても、あなたが間違いとばかりは言えません。ただ、科学的な裏づけがなく想像だけで主張していた点で、細かい部分の間違いが露見してしまうんです。そして想像はどこまでも肥大して妄想化してしまうことになるんです。

[1、肉体は滅んでも魂は不滅で、魂は別の肉体に乗り移り輪廻転生する]

確かに輪廻転生はあります。しかし、肉体は滅んでも魂は不滅ではなく、その逆で、魂は滅んでも肉体はリサイクルを繰り返している、という意味においてです。これは、今回の安齋分身さんの計算式が証明しています。

[2、死者の霊が、生者に乗り移って何かを語ることがある]

死者の霊ではないが、確かに僕たちは何かに乗り移られている存在です。僕たちはみんな環境の媒体に過ぎなかったのだから。僕たちの語る言葉は、その脳を取り巻く環境が語っている言葉です。

[3、自分（萩原分身さん）は霊視をすることができる]

萩原分身さんに限らず、僕たちはみんな確かに霊のようなものを見えています。僕たちはみんな幻覚を見ているんです。現実とは、記憶に基づいて見る幻覚のことだからです。

霊は存在するか、と問われれば、存在していると答えても間違いではありません。それは実体としては存在していないが、幻想の中で存在することが可能であり、そして、いったんある人の脳の幻想の中に立ち現れてしまったなら、それは実体（その人の肉体や周囲の環境）を変化させる力を持つ。これが現代科学の答えです。できれば、現代を生きる僕たちは、幻想の中に霊などを存在させないようにしようではありませんか。昔はそれでも良い生き方ができたのですが、今では世界を混乱に落とし入れたり、ある人たちの利益に利用されたり、不要な苦しみを増やすだけです。現代では、霊などを存在させない方がずっと良い生き方ができるし、世界を平和にもできます。そのことに早く気づいてほしいんです。

未だに「霊」の存在を持ち出して人の心を弄ぶ雑誌や番組や霊能者に翻弄されることなく、それらのものに対しては「娯楽の対象」程度に留めておくことにしましょう。僕たち大人は、サンタクローズはいないとわかった今でも、サンタクローズを捨て去ることなく、それによって楽しむことができるものです。

この「分身主義の森」も、いよいよ出口に近づきました。もう一度初心に戻って、初めの頃、予備知識で語ってきたことを振り返ってみます。そこで僕は次のようなことを言っていましたので、要約してみます。

「萩原分身さんは、人間の心の健康には、精神科医が持っていないあるものが必要であることを教えてくれています。それは物語です。彼は、人間の魂・意識体がどのようなものかということ、僕たちに、心を揺さぶる物語にして、きちんと話して聞かせることができる人です。そして、僕たち人間の生きるべき指針を示してくれます。物語は実話でなく虚構であっても、信じている間は大きな力を与えてくれます。しかし、逆に言えば、信じてことができなくなった途端、それは役に立たないどころか、大きな混乱を招く大元になることも忘れないでください」

実は、精神科医にも物語がないわけでもありません。萩原分身さんが自ら語る物語の中に霊を登場させたように、彼らは自分たちの物語の中に、自ら創作した病気や患者というものを登場させて語っています。でもそれはあまりにも貧弱な物語です。現代を生きる僕たちが根本から救われるためには、まだ乗り越えなければならない課題でもあります。

この後、僕たちはこの分身主義の森で、現代を生きる僕たちが根本から救われるために必要な「物語」を見つけにいけます。未来の精神科医やカウンセラーたちが知らなければならない、科学が導いた真実の物語です。これまで生きてきた僕（徳永分身）の人生は、まさにこの一点を、あなたにお伝えするためにあった、と言っても過言ではないと思っています。

ちょっと一言

素粒子が、その変化している過程で「人間」という仮の姿になって演じさせられているドタバタ劇こそ、僕たち人間の営みです。この宇宙は、素粒子という役者が自然界の法則というシナリオによって、様々に変化して演じさせられている劇場です。だから人間は、今まで言われていたような意味での「自分の意思」によって動いていたような存在ではなかったんです。

これは科学的根拠に基づいた、もはや疑いようのない事実を述べているに過ぎません。後は人類がそれをどう受け入れるかです。それを絶望を持って体験した人が、本当の謙虚を知る人です。理屈だけで理解しても駄目です。絶望を味わうにはそれなりの感受性が必要ですが、

「名前」と聞くと、僕たちはどうも一対一の固定的な、広がりを持たない静的なイメージを抱いてしまいます。子供の頃、モノの名前を覚える時に、リンゴや馬の絵を見て、そのまま「りんご」「うま」という音に置き換えて習ったような感覚です。ただ本当は、名前とは、たくさんの文章で埋め尽くされた本の内容を端的に表す“タイトル”のようなものなんです。

例えばリンゴや馬の絵を、「これは、リンゴで、これは、ウマよ」と母親から教えられた子供は、その音の響きと同時にその本の質感や、その時母親と交わした会話や、その日の気分や、その時の感情や、昨日食べたおいしい果物の記憶や、動物園の記憶など たくさんのものを同時に貼り付けて、「りんご」「うま」と覚えていくわけです。要するに、名前とは、そのような複数の記憶を代表して表現しているタイトルのようなものなんです。もし、そのような関連の刺激（情報）がまったくなければ、僕たちには名前を記憶することはほとんど不可能です。英単語を覚える時も、関連する刺激（情報）がたくさんあるほど覚えられます。

だから、その子供にリンゴや馬の絵を見せて、「リンゴはどれ？」とか「ウマはどれ？」などと聞くと、その音声刺激に対する反応として、彼の脳にリンゴや馬の形状や色などが浮かび上がるだけでなく、同時に、彼の脳内に記憶されている本の質感や、母親と交わした会話や、その時の感情などを担当していた神経ネットワークまでもが反応することになります。（もちろん、記憶というものは時々刻々追加されていくので、反応する記憶のネットワークの力関係も常に変化します）

名前とは、一対一の固定的、静的なものではなく、それ自体が様々な反応を誘発する、可能性と広がりを持った動的な刺激（聴覚刺激）であるということ覚えておいてください。これはとても重要なことなので、これからそれをお話していきますが、ここでは「名前」という一対一の静的なイメージの言葉は使わずに、複数の刺激を一括りにして付けるイメージの、「タイトル」という言葉を用いることにします。

では、言葉や物語を構成する最小の単位であるこの「タイトル」は、どのようにして生まれたのかということ、ヒトが地球に誕生した頃に遡って考察してみることにします。そして次に、タイトルはどのような働きをするのかを考え、そのタイトルによって言葉や文章がどのように立ち上げられるのかを考え、最後に、そのようなタイトルは僕たちにどのような影響力を持つか、ということを見ていこうと思います。

- 1、タイトルはどのようにして生まれたのか？
- 2、タイトルはどのような働きをするのか？
- 3、タイトルは言葉や文章をどのように立ち上げるのか？
- 4、タイトルは僕たちにどのような影響力を持つか？

[1、タイトルはどのようにして生まれたのか？]

ヒトがサルから分化した最も大きな要因は、二足歩行だと言われています。樹上生活をしていたある種のサルが、森林がなくなるなどの何らかの環境の変化で、二足歩行をすることになり、そのことによって手が自由に使えるようになり、「器用な手」ができたと考えられています。器用な手は脳の働きを活性化させシナプスを増やすわけですが、二足歩行によって頭がしっかりした脊柱の上に乗っていたために脳の肥大化が可能になりました。そしてもう一つの大きな特徴は、二足歩行によって、鼻だけでなく喉でも空気の出し入れができる構造になったということです。喉が食べ物の飲み込み専用ではなく息を吐くところにもなったおかげで、複雑な音が出せるようになったわけです。

最初の人類の中に、喉から変化に富む音が出せる器用な人が現れて、周囲の人も面白がってそれを真似したりしているうちに、より多くの人類が複雑な音が出せるようになっていったに違いありません。時には雷の音とか、鳥の声とか、雨音とか、いろいろな音を真似てみたり、そこから歌のようなものも生まれてきたかもしれません。

人類最初の、意味のある単語は何だったんでしょうか？ 想像すると楽しいですね。やっぱり本能と関係があると思うので、食べ物に関する単語とか、求愛に関する単語だったんじゃないでしょうか？

例えば初めて葡萄を発見して、それを口に入れた時の感動が「ブチュウ」という感じのものだったとします。人類で初めて葡萄を食べた人が、大急ぎで帰ってきて他の人に伝える時に、葡萄の木のあった方向を指差して「ブチュウ」と言いながら、それを口に入れる格好をして興奮している姿を想像してみてください。そして、次回から「ブチュウ」は、そのモノを指し示す名前になるわけです。初めの頃の名前の付け方なんてものは、その程度のものに違いありません。（原始人さん、ごめんなさい）

この「ブチュウ」という名前が、初めて発見した人にとっては、その野山の風景や、気候や、征服感や、食べた時の驚きや興奮をひっくり返した記憶に付けられた「タイトル」であることは言うまでもありません。もちろん、同じ「ブチュウ」というタイトルでも、他の人にとってはまた違った記憶の総称に付けられた「タイトル」です。それぞれの記憶が違うのは当たり前ですから。ただ、その記憶の中で、そのモノを表す最も特徴的な部分が互いに近似しているので、お互いに「ブチュウ」という単語で話が通じるわけです。

[2、タイトルはどのような働きをするのか？]

このようにしてタイトルが付けられることで、自分の脳内で乱雑に暴れまわっていた複数の刺激が整理・分類され、理解が助けられます。そして記憶はより強く確かなものになります。しかも人間同士の共通の理解や共感にも寄与します。

僕たちの脳内には、五感を通して、四六時中おびただしい量の刺激が次々と入力されています。もし全ての刺激が脳内で何の加工もされずに刺激のままに渦巻いていたなら、ただ騒がしいだけで、僕たちには何も理解できません。例えば雲ひとつない青空に、何万匹、何億匹という色とりどり、大・小ささまざまな鳥が、けたたましい鳴き声を上げて飛び回っている状態を想像してみてください。青空が真っ黒に埋め尽くされて、規則性も方向性もなくめったやたらと鳥が飛び回っているその状態が自分の脳内だったら、僕たちはただ呆然と立ち尽くすだけです。

名前を付けるということは、脳内をけたたましい鳴き声と共に飛び回っていた鳥たちに規則性と方向性を与え、整理・分類して、それぞ

れに意味を与え、それにタイトルを付けるということです。それにより脳内は鎮まり、理解と記憶が助けられ、人間同士の共通の理解も高められ、共感を作り出すことにも役立つわけです。

[3、タイトルは言葉や文章をどのように立ち上げるか？]

例えば「走る」という名前は、「足をすばやく動かして移動する」という所作を中心にして貼り付けられたその人なりのたくさんの記憶を整理・分類し、それら一連の記憶に対して付けられたタイトルです。例えば「でこぼこ」という名前は、「なめらかでない状態」を意味するものを中心にして貼り付けられたその人なりの記憶を整理・分類し、それら一連の記憶に対して付けられたタイトルです。例えば「悲しい」という名前は、「心が痛んで泣きたくないような気持ち」を意味する感情を中心にして貼り付けられたその人なりの記憶を整理・分類し、それら一連の記憶に対して付けられたタイトルです。「子供」とか「道」とか「山」とか「葡萄」とか、モノに付けられた名前も、それを意味するモノを中心にして貼り付けられたその人なりの記憶を整理・分類し、それら一連の記憶に対して付けられたタイトルです。それぞれ、一般に、動詞、形容詞、名詞などと呼ばれているタイトルです。

所作や形状や感覚やモノなどに対して付けられた「タイトル」を、一定のルールのもとで並べると、言葉が出来上がります。

原始時代、ある女性が亡くなりました。

その直後、その女性の子供が姿を消しました。

お父さんは心配して、子供がどこに消えたのかみんなに聞いて回ります。

すると、ある人がその子供が走っていくのを目撃していました。

子供は悲しみのあまり泣きながら走って行ってしまったそうです。

そのことを伝えようとした目撃者は、走っていった方角を指差して次のように

言います。

「子供、悲しい、でこぼこ道、走る、去る」

まだ「てにをは」が生まれていなかったであろう遠い原始時代でも、このように、タイトルを並べることで言葉らしきものができます。普段、あなたの脳の中でどのようなことが起こっているか考えてみてください。脳内には五感を通してひっきりなしに無数の刺激が入力されていますよね。冬のある日、強い北風が頬を撫でたその瞬間、脳に届いた刺激がある種の記憶のネットワークの一部に触れました。そこには「ラーメン」というタイトルがぶら下がっていたとします。タイトルだから、その中には「ラーメン」に関する、その人なりのいろいろな記憶も詰め込まれています。

すると、「ああ、ラーメンが食べたいなあ。そう言えば横丁の屋台のラーメン屋のあんちゃんは元気かなあ。以前行った時は、お客さんの中で関西弁を話す女性がいたなあ。そうだ、今から寄ってみよう！へへっ、今日は寒いし、熱燗も飲んじゃおうっと！」などという「言葉」が脳内に浮かび上がり、思わず歩く早さが倍加させられるのではないのでしょうか？

まだまだ続けてみましょうか？

「あっそうだ、煙草が後数本しかなかった。どこかに販売機なかったかな（キョロキョロ）。煙草と言えば、禁煙をした藤井さんはどうしてるかなあ。藤井さんは美人の彼女と一緒に禁煙を始めたと言ってたな。あっ、あそこに販売機がある。300円入れてと（チャリン）彼女は鹿児島でミスになった美人だから羨ましいなあ。家の近くの酒屋では鹿児島の芋焼酎は売り切れていたけど、そろそろ入荷してるかなあ。あれっ、お釣りが500円出てきた。しめしめ、熱燗追加しよう。芋もいりけど、でも今回は麦にしとこうかな。この時間じゃもう酒屋は閉まっているから明日買いにいこう。それにしても部長には腹が立つなあ。（なぜか、麦焼酎が部長にリンクされていた）上役の機嫌ばかり取って、僕たちの意見は少しも聞いてくれないんだ。ぶっ殺してやりたいよお。あれっ、向こうで手を振っているのは山根ちゃんだ。そうだ奴も誘おう。（オーイ、山ちゃん！）」

まだまだ続けられますよ。この僕が生き続ける限りずっとね。このように延々と続くのが、僕たちの一生だからです。もちろん今は、皆さんにわかりやすいように書きましたが、実際はこんなに説明過剰で明瞭な文章を脳内で組み立てているわけではありません。他の人にわかってもらう正確な文章を、自分の脳内で組み立てる必要はまったくないわけですから。

5日目に歩いた分身主義の森の中で、記憶とは脳内に反応の道が作られることである、と語ったのを覚えていますか？何かを記憶したということは、何かを固定的・静的に記憶したということではなく、その人なりの方向性を持った反応の道が作られたということです。僕たちの脳の中の記憶が整理・分類され、それらに付けられたタイトルは、そのまま、記憶という反応の道と呼び覚ます働きをします。反応の道とは、「一定の方向性を持った反応のベルトコンベアー」であると考えてください。

脳を取り巻く環境から、五感を通してひっきりなしに入力されてくる刺激に反応したタイトル（記憶のまとめ役）は、一定の方向性を持ったベルトコンベアーに乗せられて、想像とか連想とか思考といった経験をさせられ（加工させられ）そこからその人なりの言葉が押し出されてくるわけです。これが「3、タイトルは言葉や文章をどのように立ち上げるか？」の結論です。その押し出されてきた言葉によって、延々と行動させられていたのが僕たちの実際ではないのでしょうか。それが僕たちの「生」の実際の姿ではないのでしょうか？

話は少しそれますが、どうしても先程の「屋台のラーメン」の話に関連して聞いていただきたいことがあります。ちょっと注目して欲しいのは、随所に出てきた「意思」のようなものです。

「ラーメンが食べたい」

「横丁の屋台のラーメン屋へ行こう」

「熱燗を飲みたい」

「煙草を買おう」

「芋焼酎はやめて麦焼酎にしよう」

「部長を殺してやりたい」

「山根さんを誘おう」

これらが、自分の内部に最初からあるものではなく、自分の脳にひっきりなしに入力されてくる刺激によって、副次的・従属的に浮かび上がってきたものだということがわかります。僕たちが今まで「意思」とか、「意志」などと呼んでいたものは、そういうものことだったんです。今まで言われていた意味での、誰の助けも何物の助けも借りずに、自分の中に主体的に発生する「意思」や「意志」などというものなんて、どこにも、誰の脳の中にもなかったんです。自分の脳の中に、「ラーメンが食べたい」、「横丁の屋台のラーメン屋へ行こう」という心の声になって押し出されてくる言葉を聞くもう一人の自分がいて、その声を自分の主体的なものとして信じ込んでしまっていたのが、今まで的人类でした。しかし、これからの人類は、それは自分の脳を取り巻く環境によって浮かび上がらせられた声であることを知らなければなりません。何故それが必要なのかということは、前人未踏の分身主義の森をここまで一緒に歩いてきてくださったあなたなら、すぐわかると思います。

要するに僕たちは、僕たちを取り巻く環境にしゃべらされ、僕たちを取り巻く環境に行動をさせられている「媒体」のようなものなんです。一人の人の口を通して語られる言葉は、その人を取り巻くみんな（=この宇宙の万物）が、一人の人の口を通してしゃべっていたとも言えます。だけど、僕たちは媒体でありながら、環境を作っている一部でもあったということも忘れてはいけませんでした。今まで、僕たちが、一人の人間の意思と呼んでいたものは、実はみんな（この宇宙の万物）に作られている意思のことだったわけです。

[4、タイトルは僕たちにどのような影響力を持つか？]

名前（=タイトル）とはそれ自体が刺激（聴覚刺激）である、と言いました。それ自体が、脳内に張り巡らされた様々な記憶のネットワークにちょっかいを出し、たくさんの反応を誘発します。それによって僕たちは、連想とか意識とか思考とか想像とかいったものを経験させられます。

「今日の夕飯はお刺身よ！」

このような形でタイトルを並べたてられれば、仕事を早く打ち切って家に帰りたくなります。だけど、あなたの記憶にないドイツ語で同じことを言われても、あなたの脳はまったく反応しません。ドイツ語でタイトルが付けられた記憶のネットワークがないからです。同じように、魚を生で食べる習慣のない国の人にもそのような記憶のネットワークがないので、もし「今日の夕飯はお刺身よ！」という言葉の意味が理解できても（むしろ理解できたなら）気持ち悪くなるだけかもしれません。つまり、所作や形状や感覚やモノに対してつけられたタイトルが、今度は、僕たちの心をワクワクさせたり、不快にさせたりするわけです。

自然の成り行きで人類が二足歩行を始め、自然の成り行きで人類に言葉が生まれ、自然の成り行きで生まれた「言葉」が、人間の感情や行動にも影響力を持ち、やがて人間の脳を肥大させ、論理を操り、それが今度は自然界を作り替えていたりしているわけです。つまり、屋台のラーメン屋を開店したり、そのラーメンを食べたくなったりするのも、全て、人間の脳に「言葉」があるからなんです。もし言葉が生まれていなかったら、不幸なことに、僕たちは一生、屋台のラーメンにありつくことはできなかったのです。

昔は大きな木や草が生えていて、その中を様々な生き物が走り回っていた自然だったのに、今では、高層ビルが立ち並び、その横をものすごいスピードで車が走り回る自然に変化しました。これは、人類が言葉を獲得したせいだったということです。自然界が生んだ「言葉」に、いつの間にか自然界は変化させられてしまっていたわけです。それは、自分が生んだ子供を育てているうちに、子供に育てられていた自分に気づくようなものです。ある意味、子供は侮れないものなんです、言葉も侮れないということも実感していただけましたか？

さて、統合失調症（精神分裂病）は、母語の病である、と言われることもあります。母語とは、幼児期に周囲の大人たちが話すのを聞いて最初に自然に身につけた言語のことです。もし、僕たちに言葉がなければ、恐らく、僕たちの知っているような形での統合失調症の世界もなかったでしょう。僕たちは言語という論理的な動きをするものを手に入れたことで、ますます論理的な思考をするような脳になってしまいました。論理的な思考と言っても、それが整合性があるかどうかは別です。例えば、「人形が壊れたのは、自分の身代わりとなってくれた」などというのも、十分、論理的な考え方です。ただ、その論理が曖昧で筋が通ってなくて、間違っているだけの話です。そして、それが間違っていると指摘できるのも、言語を記憶した脳が、論理的な思考をするようにできているからです。

僕たちの脳は、あんまり整合性のある論理を得意としていません。どちらかと言うと、感情が引いてくる論理を得意としています。そこから自分勝手にいろいろな論理を導き出し、その論理に異常に固執してしまうこともあります。その論理と現実とががみ合わないことになると、それを修正するのではなく、むしろ自分の論理に合うように現実を統一しようとするところがあります。そんな中で、たまたま身体的・精神的に弱っていて、孤独と恐怖の海の中に放り込まれているような状態にある人は、藁をもつかむ思いで、自ら作り上げた現実にしがみつつき、そして溺れ、統合失調症（精神分裂病）の症状になっていくと考えられます。

だけど、それはその人の脳が言葉を操り（正確に言えば言葉に操られているわけですが）、言葉が論理を操り、操られた論理によって取られている様々な行動であるわけです。言い方を変えれば、統合失調症（精神分裂病）とか、解離性障害とか言われるものは、その人の脳が、その人の言葉の論理に沿って現実と適合しようとした結果なのです。その状態こそが、「その人の脳が自然界に適応した状態」であると言えます。それは、正常と言われるあなたの脳を、僕たちは「自然界に適応した状態」であると考えてのと全く同じように、彼らの脳が「自然界に適応した状態」だったんです。

今、狼に育てられて言葉を理解しない少年が、人間社会に保護されてきた状態を想像してみてください。彼の頭には「人形が壊れたのは、自分の身代わりとなってくれた」などという考え方は浮かび上がるはずもないし、また、それが論理的に矛盾しているという判断もできるはずがないことは容易に理解できます。彼の頭の中は、自分を捕まえて檻の中に入れた「人間」という見慣れないものたちに対する恐怖だけです。もし彼が狼に育てられたということを知らなければ、近づくと驚いたように目を見開き唸り声を上げる彼を見て、僕たちは「精神異常者」だと判断するはず。僕たちが精神異常者と判断しているのは、その程度のことなんです。

大昔、生きた人間から心臓をくり抜き、生け贄として神に捧げたりする行為は、彼らの言葉から繰り出される論理からすれば異常でもななくてもなかったのですが、現代の僕たちの言葉から繰り出される論理からすれば、もし今そのようなことをする人たちがいたら、危険で異常な集団であると判断することになるでしょう。

狼に育てられて言葉を理解しない少年が精神異常者ではないことは確かですし、言葉を理解しなければ生け贄などという行為も生まれていなかったことも確かです。「言葉」がいかに重要であるか再認識していただけましたか？ 言葉と僕たちの現実との、危うい関係を理解していただけましたか？ それらの関係を踏まえた上で、いよいよ核心に迫ります。言葉が織り成す「物語」の重要性が解き明かされます。

あっ、でもその前に、もう一度確認しておきたかったことがあります。と言うか、自問していただきたいことがあります。

ちょっと一言

「名前とは、一対一の固定的、静的なものではなく、それ自体が様々な反応を誘発する、無限の可能性と広がりを持った動的な刺激（聴覚刺激）である」と書きましたが、聴覚刺激とは、空気という物質が振動し、それが耳を介して脳に与える刺激のことです。

文字は、一見、視覚刺激だと思えますが、僕たちは、文字を脳が理解する時にも聴覚に置き換えているはずで、完璧な速読術を身につけている人で、視覚刺激をそのままの形で意味を理解できる人は別として、僕たちは通常、書かれている文字を黙読し、その黙読された音を脳が聞き取ることで理解しているはずで、理解を助けるために働く脳の部位は、やはり聴覚に関連した部分が導入部のような気がします。だから結局は、言葉とは、文字で表現されたものであっても聴覚刺激であると考えられます。

では何故、単なる空気の振動が耳を介して僕たちの脳に届くと、それが想像とか連想とか思考に変わり、そこから言葉が生まれるのでしょうか？ それは僕たちの脳に、記憶という反応のベルトコンベアができていたからでした。

聴覚刺激という単なる空気の振動が、人間の行動や、果ては自然界の様相まで変化させてしまっている現実を、僕たちは身にしみて感じないわけにはいきません。

20日目 引き返しますか？

さて、いよいよ分身主義の森も出口に近づいてきました。明日は、この未開の森、最後の難所です。まさにこの日のために、これまで歩きづらい分身主義の森を歩いてきたと言っても過言ではありません。

今日は、最後の難所に挑む前に、もう一度確認しておきたいことがあります。ちょっと、そこの切り株に腰を下ろして僕の話をして聞いてください。どうして前人未踏の森の中に切り株があるのか、ですって？ それは僕が以前切り倒した木なんです。疲れ果てた僕が、そこに座って、長いこと行くか戻るか思案した場所です。

初めに、ここを訪れた方々にした質問を思い出してください。

「幸福とは個人の価値観の問題で、他人がとやかく言う筋合いのものではない、と信じている方は、分身主義の森に入るのはご遠慮ください。そういう人は途中で迷子になってしまうかもしれません」と忠告させていただきましたよね。

ここまで歩いてきてくださった方にこんなことを言うのは申し訳ないのですが、あっちにつまずき、こっちにつまずき、今では反感や苛立ちの気持ちばかりが募ってしまっている方は、ここから先へ進むのはやめておいた方が無難かもしれません。あっちこっちつまずきながらも、なんとかクリアして今は晴れ晴れとした気持ちでいる方や、早く分身主義の真髄に触れたいとワクワクしている方のみ、ここから先はお進みください。

僕（徳永分身）が、この分身主義の森であなたに望んでいるものは、分身主義とは何かという知識を得てもらうことなんかではなく、分身主義を全身で体感して、感動を味わっていただきたいんです。そうしなければ、人類はいつまでも同じ場所でグルグルと回っているだけで、そこから抜け出すことができないからです。人類初の一步を踏み出す原動力となるものは、あなたの感動しかありません。そのためには、あなた自身の心の中に巣くっている不安や恐怖や怒りや不幸な気持ちにしっかりと目を向ける勇気が必要です。そして、それを乗り越えたいという強いモチベーションがなければいけません。そういったものから、普段、目を背けて適当にうまくごまかして生きている人には、分身主義の必要性は理解できないし、感動も味わえないでしょう。

また、差別やいじめを受けている人を見た時、防波堤となって守ってあげるよりも、自分も差別側に加わってしまうような要領のよい人や、自分だけ得をすればいいと考える今の社会の風潮に、何ら怒りや疑問を感じることもないような人にも、分身主義の必要性は理解できないし、感動も味わえないでしょう。

世界に目を向けることのない方も、無理かもしれません。例えば、世界中の人の不平等感をなくして、みんなが幸福な心持で生きれる社会にしたいとか、本当の世界平和とは何かとかあんまり考えない方です。でもそういう人たちは、初めからこの森の中に入ろうとさえ思わないでしょう。と言っても、彼ら自身がつまらない人間なのではありませんよ。彼らは彼らを取り巻く環境に、そのような人間を演じさせられているだけで、環境さえ変われば、何事にも正面から取り組み、世界に目を向けることのできる人間に変わったりするわけです。

だから彼らを責めたりしないでください。彼らの環境を憂えるべきです。

ここまで、つまずきながらも、そのつど拾い集めた言葉を自分のものにして歩いてきてくださったあなたなら、きっと明日は分身主義の必要性を理解し、感動を味わっていただけたと思います。でも、もし、反感や苛立ちの気持ちばかりが募ってしまった方は、ここから先へ進むのはやめておいた方が無難かもしれません。と言っても、分身主義はその人たちを切り捨てたわけではないことを覚えておきます。切り捨てるどころか、その人たちにいつも思いやりの目を向けているのが分身主義です。まさに、自分に向ける思いと同じ強さで。

そしてまた、切り捨てるどころか、分身主義の必要性を感じなかった人たちも、やがては同じ場所に引き上げてあげることができると知っているからこそ、僕たちは、張り合いを持って分身主義を実行できるし、またすぐにも実行するべきなんです。（分身主義を実行すると

は、ここではホームページを作ることを指しています)

「僕たちは環境の媒体である」と知った科学的視点こそが分身主義の視点ですが、同時に、分身主義は、僕たち分身は環境の一部(=環境を作っているもの)でもあると知っています。自分たちが環境の媒体であったと意識した瞬間(分身主義的に言えば、意識させられた瞬間)その人たちはほんの少し今の環境の外に出ます。ほんの少し今の環境の外に出た人たちが少しずつ増えれば、僕たちは環境の一部でもあったわけですから、当然、僕たちの今の環境が少し変化することを意味しますよね。環境が少し変化すれば、今度はその媒体である僕たちの考え方や行動パターンも、例えば自分にしか興味や関心がなかった人たちの考え方のパターンや行動パターンも少し変化します。だから、「その人たちを切り捨てた」わけではないんです。

分身主義は、僕たち一人ひとりとは部分であり全体であると言っているのです。どうして、それを知った僕(徳永分身)が、自分の一部を切り捨ててしまって、全体を損なわせるようなことなどできるのでしょうか!?

そもそも、こんなに歩きづらい分身主義の森の中に、あなたにお付き合いいただいたのは、たまたまこの僕が、皆さんを代表して出合せていただいた「分身主義」というものの、その真髄に多くの方に触れていただき、感動を味わっていただき、そして世界に奇跡を起こしていただきたかったからでした。

「分身主義」という名前を付けたのは僕の脳ですが、僕の脳は、僕の脳を取り巻く環境(環境とはこのビッグバン宇宙140億年に起こっている全てのことです。だから環境には当然、遺伝も含まれます)に作られているだけのものです。だから正確に言えば、たまたまそこにいた僕という媒体が、皆さんを代表して分身主義に出合えただけなんです。

僕たちは普通、何かを認識したり、理解しようとしたり、考えたりする時は、自分中心・人間中心に考える習性があります。しかし、分身主義はそのような視点から離れて、何もかも自然界中心に考えようとするものです。自然界中心に考える“真の科学”に忠実に従います。例えば、分身主義は、「我々が病気と呼んで忌避するようなものは、自然界には存在しない」と知っていますが、それこそ真の科学の視点であり、真の科学の導いてくれた真理です。嫌悪すべき感覚を伴う「病気」という概念は、人間中心の心(=脳の働き)の産物でしかなかったんです。

今、風に乗って良く飛ぶ紙飛行機と、すぐに落下する紙飛行機があるとします。当然、僕たちは、すぐに落下する紙飛行機を失敗作と考え、原因を追究して改良しようとします。それは僕たちの心の中に、「良く飛ぶ紙飛行機こそ、良い紙飛行機である」という気持ちが無意識にあって、紙飛行機を作る目的の中に「良く飛ぶ紙飛行機を作りたい」という人間的な願望などがあるからです。では、視点を自然界中心に合わせたらどのようになるでしょうか?

良く飛ぶ紙飛行機も、すぐに落下する紙飛行機も、どちらもその状態が、その紙飛行機が自然界に適応した姿なんです。落下する紙飛行機には落下する原因があって、まさにその原因が自然界の中で適応した形が、落下という形となって現れたわけです。つまり、自然界には失敗作は一つとしてありません。人間だけが、失敗と見て取るだけです。

失敗と見て取った人間が、落下の原因を究明して「良く飛ぶ」紙飛行機に作り替えたとしても、人間は自然界(=環境)の媒体でしかないの、それをしたのはその人の意思でも力でもなく、自然界(=環境)からの刺激とその人の脳の記憶(これも自然界で作られたもの)の相互作用によって、紙飛行機を作り替えようというような意思がその人の脳内に浮かび上がり、それによってその人が行動を取らされただけなんです。

人間には、自分中心・人間中心に考える習性があるので、失敗作とか病気とかという観念に囚われてしまいます。単なる生物変化の一時的な状態に対して、生とか死と名づけて色合いを持たせてしまったのも、そうでしたね。だからと言って、失敗作とか病気とか、生とか死とかいう言葉は金輪際用いてはいけませんよ、と言っているではありませんよ。それが自分中心・人間中心から生まれている言葉であることを理解できる、柔軟で客観的な視点が必要だと言っているんです。

僕たちの生きる世界が平和(=世界中の人の心の中から不平等感や不満がなくなった世界)になり、そして幸せに生きて喜びの中で死んでいくためには、どうしてもこの失敗作とか病気とかいう、自己中心的な強迫観念から解放される必要があります。失敗作とか病気とかいう強迫観念から自由になり、また、生と死の誤ったイメージからくる恐怖や緊張を取り除く必要があります。つまり、自然界中心の視点が必要です。例えば心の病気です。精神科医やカウンセラーと呼ばれる方たちは、僕たちの心の病気を取り除き明るく健康な心の状態にしようと、日々、努力してくださっていますが、彼らも科学者の端くれなら、彼らこそ自然界中心の真の科学の視点を持ち、病気という観念から解放されない限り、心の病気はなくなることを知っていただきたいのです。

本当に心の病気をなくすためには、僕たちの脳(=心)を取り巻く環境が、個人主義的(自分中心的)な環境から分身主義的な環境に移行しなければならぬことを知っていただきたいのです。皮肉なことに、彼ら(精神科医やカウンセラーと呼ばれる方たち)がやっていることは、心の病気をなくすどころか、病気や患者と言われるものをますます増やして、ますます自分たちの収入を増やすことくらいです。

個人主義的な環境は、病気や敵という観念を生み、そのことによって緊張や恐怖などが僕たちの脳に浮かび上がり、その緊張や恐怖などは、犯罪や戦争の引き金になります。犯罪も戦争もなく、世界中の人が不平等感や不満がない世界で生き、喜びの中で死んでいくためには、分身主義の視点がどうしても必要なんです、世界中の人に分身主義の視点を持っていただくためには、「この宇宙には病気などは存在しない」、「この宇宙には敵など存在しない」ということを説明することから始めるのが近道だと思っています。

そのように考えて、この分身主義の森へ、あなたをお誘いしたわけですが、こうしてここまで一緒に歩いてきてくださって、今、率直にどのような感想をお持ちでしょうか? 初めの頃、次のように言ったのを覚えてくれていますか?

- > 萩原玄明分身さんが持っていて精神科医が持っていないもの、それは物語です。物語は実話でなく虚構であっても、
- > 信じることができる間は大きな力を与えてくれます。しかし、逆に言えば、信じることができなくなった途端、
- > それは役に立たないどころか、大きな混乱を招く大元になることも忘れないでください。(予備知識2)

- > 精神医学界に従事されている科学者が、唯一自然界を師と仰ぐ謙虚な気持ちの真の科学者なら、僕たちの心を救ってくれる
- > のは科学が導いてくれた分身主義しかないことを、いつの日か理解してくださる日が来るでしょう。本当の科学というものは、
- > 自然界に忠実で、実は人間を中心にすえる宗教などよりも、よほど謙虚なものです。(予備知識4)

ずいぶん偉そうなことを言ってるなあ。何様のつもりだよ。謙虚などと言っているが、先生と呼ばれるような偉い方たちを見下しているような感じだし、自分だけが正しいと思いがっているような感じで、少しも謙虚ではないんじゃないかなあ。

もしあなたが、僕(徳永分身)の言葉を聞いて、未だにそのように反応してしまうとしたら、残念ですが、この先へお進みになっても反感以外に得るものはないかもしれません。あなたにはどうしても、今までの自分中心・人間中心的な視点でしか、僕の言葉を受け取れないようです。分身主義は、今までの僕たちの視点とは全く違う視点なんです。分身主義的な視点の先にあるものは、どんな相手をも、分身として受け入れさせられてしまう感覚と、それによって感じる深い喜びだけです。もしあなたが、僕の先程の言葉に対して、「偉そうな奴だ」と感じるのなら、この分身主義の森で拾い集めていただいたたくさんの言葉を、少しも自分のものにされていなかったということです。

「僕は媒体です！」

何度もそのように言ってきました。今もこの森の中で、いろいろなことを語っている僕は媒体であり、実際は僕を取り巻く環境が、僕を介していろいろなことを語っているのです。もしその真実にハッと気づいてくださったなら、あなたは僕に怒りや嫉妬などを感じることはないはずなんです。具体的に言えば、ここで語っているのは僕の脳内に作られた記憶(反応の道)と、僕の脳を取り巻く環境からひっきりなしに輸入されてくる刺激との相互作用によって、生まれている言葉です。僕は媒体となってその言葉を語らせていただいているだけです。昨日までにそのことを明らかにしましたよね。

ちなみに、環境が僕たちの脳内に作る記憶(=反応の道)こそ、個人主義的な環境にどっぷりと浸かった現代の学校教育において、その育成に最も力を入れてきた個性と深い関わりがあります。個性とは、環境からの刺激に対する個々人の反応の仕方のことですから。もしあなたの脳に、「個性を大切にしよう」という言葉が何の違和感もなく浮かび上がるようなら、あなたの脳は個人主義的な環境にどっぷりと浸かって、たっぴりと洗脳を受けてしまっていることを自覚した方がいいですよ。

だからと言って、「個性は大切にする必要はない」と言っているのではありませんよ。個性は大切にすることも、環境が違えば刺激に対する個々人の反応の仕方は当然違うので、必ず個性というものではできてしまうものです。没個性などという言葉もありますが、それもその人を取り巻く環境が作り上げた、その人の個性(=反応の仕方)なんです。それをわざわざ、「個性、個性」とけしかけると、人と違う何かを見つけなければ生きていく価値もない、というような強迫観念を持ってしまうことにもなりかねません。

話が脱線したので元に戻しますが、僕(徳永分身)の脳内の記憶も、元々と言えば、僕の脳を取り巻く環境(遺伝も環境に含む)が、時々刻々僕の脳に作っているものです。僕がアルツハイマーになるということは、それは、僕の脳を取り巻く環境によって作られている僕の脳内の記憶(=反応の道)が崩れる(変化する)ことを意味します。アルツハイマーになっても僕は僕で、誰も僕の身体を見て、他の名前前で呼ぶ人はいません。だけど、僕の身体は僕なのに、アルツハイマーになった僕は、もうこの森で話すようなことは一切語りませんし、分身主義が何なのかさえ、まったくわからなくなります。それは、一体、どのように理解したらいいのでしょうか？

それこそ僕の身体が媒体でしかなかったことの証ではないでしょうか。分身主義という言葉を作ったのも、分身主義を語っているのも、この境界線を持って存在している僕(の身体)ではなかったんです。僕の身体は単なる媒体であり、僕の脳内の記憶(=僕を取り巻く環境が僕の脳に作るもの)と僕の脳を取り巻く環境から入力される刺激が、僕の身体を使って、今、分身主義を語っているんです。

あなたの身体も、あなたの脳を取り巻く環境の媒体として、何かを考えさせられたり、しゃべらされたり、スポーツをさせられたり、行動の一挙一動をさせられたりしているわけです。だけど、本当は僕たちのこの身体でさえ、環境(遺伝も環境に含む)が作っている媒体でしかないんですけどね。時々刻々、この身体(=細胞の集まり)は、自然界の法則の枠組みの中で、その取り巻く環境に作り替えられています。

ところで、忘れないでいただきたいのは、僕たちは媒体であると同時に環境の一部でもあるわけです。僕たちの身体が環境からの刺激に反応して動くことで、その周囲の環境は違う環境に変化しますよね。簡単な例で言えば、あなたの身体が環境からの刺激に反応して煙草を吸うという行動を取ると、その周りの大気は明らかに変化します。そのあなたの作った環境の変化は、同じ部屋にいる煙草を吸わない人の身体にまで影響を与えます。だから僕たちは環境の媒体であると共に、環境の一部でもあるわけです。

僕の脳を取り巻く環境は、この宇宙全てのものが含まれますから、当然、そこにはあなたも含まれています。と言うことは、もしあなたが、僕の語る言葉に不快感を感じるとしたら、あなたは今、自分に対して不快感を感じていたんですよ！

「そんなバカな話、信じてたまるか!？」

あなたはまだその事実を目を向けたくありませんか？ それを認めた途端、あなたが今まで長い年月をかけて築き上げてきた自尊心なる鎧が剥ぎ取られてしまうという恐怖感に襲われてしまいますか？ でも、これは、架空の作り話ではありません。真の科学が導いてくれた事実を述べているだけです。あなたに、そのことに気づいていただきたかったのです。

あなたの周りには、本当は敵は一人もいません。敵もいないあなたには、本来、鎧など不要だし、守るべきものは一つもありません。命も愛も、何かから守るものなんかじゃありません！ そういうことも、早くあなたに気づいていただきたかったんです。

昨今の映画や、テレビドラマやドキュメンタリー番組や、それにニュース報道まで、やたらと敵を作り上げ、それらの敵と勇猛に戦い、命や愛を守り抜くというシチュエーションのものがもてはやされ、感動を呼びます。敵にされてしまうものは隣国であったり、隣人であったり、テロであったり、犯罪であったり、また、恋の障壁であったり、病気であったりもします。敵という観念に共通しているものは、「自分」を脅(おび)やかす対象です。要するに、それこそ人間の自分中心的な感覚が作り上げた架空の観念だったんです。

つまり、昨今の映画や、テレビドラマやドキュメンタリー番組や、それにニュース報道などは、製作スタッフの方たちを取り巻く自分中

心・人間中心な環境が、彼らの自分中心・人間中心な反応をする脳と相互作用することで、媒体である彼らがそのような番組などを作らされてしまっていたわけです。それが、自分中心・人間中心な反応をする僕たち視聴者の脳と共鳴することで、感動が生まれるわけです。僕だってまだ個人主義的な環境に浸かって生きてるので、結構そういうものを見て涙を流したりもするのですがね。(笑)

命や愛は大切ではないと言っているのではありませんよ。それらは大切とか大切ではないとか言う種類のものではなく、ただそこにあるものです。命をやたらと称揚することで、その対極にある死を毛嫌いしたり、恐怖したり、見えないように蓋をしようとしたりするような気持ちが生まれたりすることがいけないう言っているんです。それはわざわざ自分を生きにくくさせて、余計な苦悩を増やしています。

また、愛をやたらと称えることで、誰の心の中にもある差別の感覚が増長されてしまうようなことがいけないう言っているんです。愛という感情は、実は強い自我(これが自分であると信じているもの)が根底にあり、その自我を中心にして生まれる差別意識が作り上げる感情なんです。

分身主義は、命を大切にすれば死も大切にしなければいけないう考えます。誰かや何かを大切にすれば、一つのものを特別に愛するようなことはせず、万物を平等に大切にしなければいけないう考えます。それは決して万物が平等だと考えているからではないんです。分身主義は、万物を等価に置くだけです。例えば人間は生まれつき平等ではありませんよね。豊かな土地(環境)に生まれる者もいれば、貧しい土地(環境)に生まれる者もいます。背が高い人もいれば低い人もいますし、スポーツが得意な人もいれば勉強が得意な人もいます。人は生まれながらにして不平等です。しかし、その人その人の置かれた環境を認める、あるいは自分の置かれた環境を受け入れるのが分身主義です。誰かと自分を比較することで優越感に浸ったり、劣等感を抱いたり、あるいは誰かを差別して特別に愛したり、誰かに嫉妬したり、ひがんだりしません。そのことを、万物を等価に置くと言ったんです。

どうして分身主義にはそのようなことができるのかという、分身主義は、この宇宙の万物は、宇宙創設の最初に起こったビッグバン(野球のボールくらいの小さな火の玉をイメージしてください)から急激に膨張して、今もその時の力が少しも衰えることなく膨張を続けている過程で生まれているものが、空に瞬く星々であることやこの地球であり、その地球に生まれた植物や動物であり、そして僕たち人間であり、その人間の幻想(記憶と外部からの刺激との相互作用によって作り出される全ての現象)であり、幻想によって行動を取らされてそこから作られる道具などであることを知ったものだからです。

つまり、この宇宙に存在する万物は、ビッグバン宇宙を構成する素粒子が、くっついたり離れたりしてできているものだし、それは何度もリサイクルを繰り返しているもので、言わば、この宇宙に存在する万物は、ビッグバンから「分」かれている「身(からだ)」だということを知ったからです。

生まれながらにして不平等である僕たち人間ですが、人間とは、実はビッグバン宇宙という一つの身体、その一部分の呼び名に過ぎないんです！一つの身体の部分であるなら、どれも同じように重要な価値を持った部分です。例えば僕たちは自分の身体の中の、左手よりもおちんちんの方が偉いとか、右のおっぱいよりも心臓の方が重要だなどという考え方は、普段はあまりしません。一つ一つのパーツ全部をひっくるめて自分だという感覚があるはず。だから、どこかを切除しなければならぬなどという状況に追い込まれれば、苦渋の選択を迫られることになるんです。みんな大切だからです。だから分身主義の視点を持てば、万物を「等価」と認識するなどということが、たやすくできるんです。

僕たちは全体の部分であり、同時に全体でもある。

僕たちは環境の媒体であり、同時に環境でもある。

分身主義を知れば、英雄に対しては嫉妬することもなく、彼らは自分たちの環境ではできないことを、彼の環境の中で代わりにやってくださっている分身さんであるとして誇りに思い、犯罪者に対しては怒りを煮えたぎらせることもなく、彼らの行為はたまたまその環境に置かれた自分たちの分身さんがやらされてしまったことであり、またその環境を作っていた自分にも責任を感じ、救いの手を差し伸べる気持ちが自然に育ってきます。そうしなければ、自分も救われないからです。だから、嫉妬や怒りなんかとも無縁なんです。

この感覚が世界中の人の共通の感覚にならない限り、僕たち人類には永遠に本当の平和は訪れないし、あなたも僕も本当の幸せを手にすることはできません。僕たちの感覚とは、環境に作られているものでしたよね。だとしたら、この感覚が世界中の人の共通の感覚になるということは、世界中が分身主義的な環境にならなければならぬということの意味しています。分身主義が真価を発揮するのは、世界中の人の個人主義的な心と環境が、分身主義的な心と環境に変化した時だけです。宗教のような個人的な救済とは違い、一人だけ悟っても何の救いにもならないのが分身主義です。それが分身主義の「分身」たるゆえんです。そのためにも、早く多くの人に分身主義を知って欲しいと思っています。

だけど、分身主義をきちんと理解してくれる数人の人さえいれば、世界中に分身主義が広まるいい方法があるんです。今はこのインターネットという素晴らしいメディアがあるからです。インターネットがなければ、僕はとっくに失望して人生を投げかけていたでしょう。

ちなみに、その方法とは、6日目に歩いた森の中で拾っていただいた言葉の中にあります。それは、分身主義をきちんと理解して下さった方たちがホームページを作ることです。どのようなホームページを作るのかということが、実はとても重要なんですが、それは最後にご説明します。真剣に平和と幸福を願っていて、しかも迷子になることなくここまで分身主義の森と一緒に歩いてきて下さった方なら、きっと自分のためのすばらしいホームページを作ってくださいなと思います。

逆説のようですが、命や愛をもてはやす感覚が世界中に争いを増やし、自分の中の苦しみを増やしてしまっているんです。それらが、現在の個人主義的な環境が作る自分中心・人間中心な感覚から生まれてきたもので、その感覚は自然界に抗っていたからです。

水の上に体中の力を抜いて仰向けに寝転べば、自然に身体が浮くのを経験した人はいると思います。その反対に、一生懸命水から顔を出そうと手足をばたつかせれば、水をたらふく飲んで溺れてしまいます。僕たち人間がやっていることは、そのことだったんです。一生懸命、命や愛を叫んでいるのは、まるで自然界の中で溺れまいとがいているようなものだったんです。早くあなたに、そういったことに気づいていただきたかったのです。

あなたや僕や、それに僕たちを先導^{せんどう}してくれる社会的地位のある方たちや、宗教に携わる方たちや、知識人と呼ばれる方たちや、僕たちの心を救ってくださる医者と呼ばれる方たちや、いろいろの方の中から自分中心・人間中心的な感覚が抜け、そういう人たちが子供たちに、「自分たちの真の姿(=宇宙)」を伝える時代が来ない限り、世界は決して平和にはならないし、この時代を生きる分身である僕たちは、分身としての本当の幸せを知らずに短い人生(宇宙年齢から見ればほんの一瞬)を終わらせてしまうことになります。

あなたは、それでいいのですか!? 皆さんは、それでいいのですか!? 僕は、それでは嫌です! だからと言って、そんなに焦っているわけでもありませんが。分身主義は焦りとも無縁です。

今、世界は個人主義的な色の絵の具が何層にも厚く塗り重ねられ、ちょっとやそっとではとても削り落とすことはできないようにも感じますが、でも僕は、どういうわけかそれが分身主義的な色に塗り替えられるのはそれ程難しいことではないように感じています。さっきもちょっと書きましたが、今は、インターネットというすごいものがあるからです。

ところで、先日、たまたま付けたテレビで不思議な映像を見ました。60年代のベトナム戦争の映像を、ルイ・アームストロング(サッチモ)分身さんの名曲、『この素晴らしい世界』に乗せて流していたのです。たぶん、当時のヒット曲に乗せてアメリカの歴史を紹介する、というような番組だったんでしょう。

爆撃機から次々と落とされる爆弾。炎を上げて燃え盛る森林。もうもうと立ち上る煙。銃を抱えて勇猛に突進するアメリカ兵。戦火の中を逃げ惑う住民たち。目隠しされて連行されるベトナム人の捕虜たち。負傷した人を担架^{たんか}に乗せて泣きながら運ぶ人々。

それらの映像が、ルイ・アームストロング分身さんの名曲、『この素晴らしい世界』に乗せて流されると、まるで古い愛の映画のワンシーンでも見ているかのように懐かしく、美的でもあり、感動を覚えるほどでした。この名曲は、「戦争のない平和な世界が、一刻も早く訪れるように」という思いを込めてサッチモ分身さんが歌ったものだそうです。

木々は緑に輝き 赤いバラは美しく
どれも私たちの為に咲いている

そして ふと思う なんて素晴らしい世界
どこまでも青い空と まっ白な雲

光りあふれる日と 聖なる夜
そして ふと思う なんて素晴らしい世界

七色の虹は 美しく輝き
行きかう人々の 顔も輝いている

友だちが手を取りあい あいさつをかわし
「愛してる」と言っている

赤ん坊が泣いて やがて育っていく
きっと たくさんの事を 学びながら

そして ふと思う なんて素晴らしい世界

ふと思う なんて素晴らしい世界

OH, YES.....

嘘っぱちだ! 我に返った僕は、叫びたくなりました。

お茶の間で、人が殺されていく映像を見ながら、「この世界はなんて素晴らしいんだろう」などと歌う音楽にうっとりさせられてしまう自分は、なんて愚かな奴なんだ! 実際の戦争の映像を報道するなら、絶対に音楽を挿入してはいけません! 「事実の報道」には、作為的な色や音を付けてはいけません!

僕たちが好んで使う「愛」や「命」などという言葉も、これと同じです。欲にまみれた汚い人の世をごまかす挿入歌のようなもので、どんな場面でも、とても美しい感動的な場面にすり替えます。本当は、命や愛をもてはやす自分中心・人間中心的な感覚が、世界に戦争を引き起こす一番の原因だというのに、そのことはごまかされ、まるで綺麗な包装紙に包むように自分中心・人間中心的な感覚を美化してしまう言葉の魔力に、僕たちはいかに加減に目を覚まさないといけない!

さて、今日の話はこれで終わりです。今日話を聞いていただいて、それでもまだ納得されなかったり、反感や苛立ちの気持ちが抜け切れないのなら、やはり今からでもあなたは引き返すべきだと思います。でも、何度も言うように、僕はあなたを切り捨てたわけではありませんよ。

戦争中に、敵であるアメリカ人を好きになれなどと言っても、ほとんどの人が抵抗を感じたと思います。でも戦争が終わった途端、一転して、今まで「鬼畜」などと蔑^{さげす}んでいた人たちのことを尊敬し、お手本にするような気持ちに変わってしまうことができるのが僕たちです。個人主義的環境にどっぷりと浸かって生きてきた今のあなたが、「この宇宙には病気などは存在しない」とか、「この宇宙には敵など存在しない」とか、「愛とか命をもてはやしてはいけません」とか言われても、どうしても受け入れられなくても無理はありません。でも、あなたを取り巻く環境が変われば、それらの言葉にむしろ喜びを感じることもできる日がきます。

もし、ここまで一緒に歩いてくださったあなたが、今でも、僕の言葉を受け入れられないのなら、この場所から引き返し、その日を待っていてください。

その反対に、もしあなたが、僕の言葉を理解してくださる方で、この世界に奇跡を起こそうと思ってくださる方なら、ここから先の最後の難所を一緒にお進みください。

21日目 この時代の新しい物語

世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない。(宮沢賢治分身さん)

たった一人の心を癒すためには、世界中のみんなの心が癒されなければならない!

さて、いよいよ分身主義の森も出口に近づいてきました。今日は、この未開の森、最後の難所です。足元の悪い長くだらだらとした道が続きますが、障害物乗り越えながら、今日一日でぐり抜けてしまおうと思います。覚悟してかかってください。まさにこの日のために、これまで歩きづらい分身主義の森を歩いてきたと言っても過言ではありません。

玄侑宗久^{げんゆうそうきゅう}という、誇るべき我が分身さんが書いた『やおよろずの』という本があります。(分身主義的に正確に言えば、彼は、彼を取り囲む環境に、現在、住職^{しゅうしやく}や作家をやらされている媒体であり、『やおよろずの』を書かされた媒体です)

この本は、禅の立場から世界平和を説いた本だと言えます。いろいろと教えていただくこともあり、とても素晴らしい本なので、ノートにたくさん抜き書きさせていただきました。ちなみに、彼は僕より一つ年上の方です。

だけど、その中で一つだけ、これは違うなと思う部分がありました。

「病気の原因はこれだ、と決めつけて、その原因を合理的に取り除こうという治療を、今の西洋医学はするわけですが、健康ってというのはどうももっと複雑微妙なもので、意外に合理的には分からないことで治ったりするわけです。いわゆる“おがみやさん”みたいな人に治療してもらって、なんていう人もいるようですが、これもあなたがバカにできない。オーストラリアあたりでは、最近そういう昔ながらの呪術師^{じゆじゆつし}などが復活してきているそうです。だいたい平安時代などの病気の治療の中心は、ご祈祷です。僧侶だけでなく、陰陽師なんかも活躍しました。そもそもわれわれの命そのものが合理的にはわりきれない不可思議なものですから、不可思議な方法で病気が治ったっておかしくないんです。ともあれ仏教の健康観というものは、健康が合理的な考え方だけでは保てない、ということをはっきり示していると思います」

これは、参考書として取り上げさせていただいた萩原玄明分身さんの『精神病は病気ではない』とも一脈通じる部分があります。萩原分身さんは、精神病とは死んだ人の霊が生きた人へ乗り移って、その人の身体を借りて(その人の身体を媒体として)しゃべっていると考えていましたよね。死んだ人をきちんと供養^{くよう}し、彼らの霊を鎮めて成仏^{じゆぶつ}してもらうことで、それらの症状は消失する、と考えていました。そして、萩原分身さんの話によると、実際にそのような方法でそれらの症状が消失した人もいたということでした。(これは、分身主義的に言えば一時的な小康状態に過ぎませんが)

これは、玄侑宗久分身さんの「健康は合理的な考え方だけでは保てない」という言葉を具体的に示している例だと言えますが、合理的とは何でしょうか? 合理的とは「道理や論理に適っているさま」のことです。それなら、彼の言う「健康は合理的な考え方だけでは保てない」というのは、それが客観的に見て論理に適っているかどうかは別にして、彼の道理や論理に基づいた考え方であり、それこそ彼の合理的な考えを述べていたわけですね。それに彼(玄侑宗久分身さん)が批判している西洋医学だって、それは今までの西洋医学に携わってきた人たちの、似非科学(=人間中心的な科学)による「道理や論理に適った」合理的な考え方から導き出されたものに過ぎません。

だから、合理的なことがいけなわけじゃなかったんです! 今までの科学ではまだ解明できていなかったり、ノータッチだった部分があったというだけの話なんです。現に、脳の研究(心の研究も含めて)や、遺伝子の研究などがなされるようになったのは、本当にごく最近のことです。

科学は実験と観察を繰り返し、常に検証^{けんしやう}しながら進むものなので、以前の理論や学説が覆^{くつがえ}されたりするのは常識です。プライドを捨てて、以前の理論や学説を覆すなどということが簡単にできるのは、科学が、自然界だけを師と仰いで歩む学問だからです。もし以前の説が間違っていれば素直に訂正するのが科学の立場ですし、科学はそのように筆の歩みのように遅いものなんです。ある人が、科学的な大発見をしても誰にも受け入れられず、その人が死んでから何十年もしてから認められることなんてしょっちゅうです。その歩みの遅さに苛立つ気持ちもわかりますが、修正を繰り返しながらも、確実に自然界の不可解な現象の解明に近づいています。

今までの科学ではまだ解明できていないことやノータッチだったことに関して、せっかちに科学では無理だなどと諦めて、すぐに祈祷や呪術に頼ろうとするのは、現代人の生き方としてあまり賢明とは思えません。何故なら、実はそのような非科学的な気持ちが、今まで自分の中に善くない行いを無意識に招き入れてしまっていたり、周囲の善くない行いを助長したりしてきてしまっていたからです。

確かに宗教の教理は1000年経っても不変ですが、宗教とは、間違っても自然界の方を捻じ曲げて解釈してしまう性格のものだからです。まどろっこしい科学にひきかえ、宗教や祈祷師などの独断と偏見に満ちた答えは単純明快ですから、僕たちは彼らに圧倒され、つい引き込まれてしまいます。その結果、個人的に救済^{きゆうさい}されるかもしれませんが、個人的な救済というのは一時的なもので、すぐにその個人に新たな苦悩となって襲ってきます。僕たちの救済とは、世界中のみんなが救済される以外にないんです。みんながどこかで繋がっているからなんです。僕たちは一つの身体だからです。宮沢賢治分身さんも、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と言っています。

これは先日見ていたNHKの『心の時代』で、ある分身さん(たぶんどこかの僧侶の方だったと思います)が、「宮沢賢治の言葉」として紹介してくださったものを大急ぎで書き取っておいたものです。インターネットで調べたところ、それは彼(宮沢賢治分身さん)の『農民芸術概論』の中にある一節だということがわかりました。

- > 世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない
- > 自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する
- > この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか
- > 新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある
- > 正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれにに応じて行くこと
- > である（『農民芸術概論』より抜粋）

インターネットというのは本当に便利なものです。以前だったら、この言葉の出典を探すために図書館で気の遠くなるような数の本をひもとかなければならなかったでしょう。それが自分の家で一瞬にして探せてしまうのですから。

それにしても、この文章を発見した時、全身に震えがきました。今からなんと70年以上も前に亡くなった宮沢賢治分身さんが、分身主義の出現を必要としていたような文章を書いていたのです。

どうか、短気を起こしたり安易な方向に流されたりしないでください。そんなことでは、いつまで経っても人類は、自然界の真理を知ることではできません。自然と共に生きることはできません。自分中心・人間中心に自然界を勝手に解釈するだけで終わります。

自然界を師と仰ぎ、謙虚な気持ちで自然界に体中の力を抜いて仰向けに寝転べば、自然物である僕たちは、当然、心地よく浮くはず。真の科学の道を歩めば、僕たちはもう溺れまいとしてジタバタと自然界に抗うことはありません。所詮、僕たちには勝てない相手なんです。何故なら、どんなことをしても僕たちは自然界（自分を取り巻く環境）の操り人形だったからです。たとえ、空からたくさんの爆弾を落として森を焼き払い、「どうだ、人間はついに自然をも作り替える力を身につけた。ついに神を乗り越えたんだ！」などと豪語しても、それもその人の脳を取り巻く環境にその人がやらされたり語らせられたりしているだけなんです。

僕（徳永分身）があなたに「あなたは環境の媒体です。あなたは、あなたを取り巻く環境に行動を取らされているんです」と言ったら、「そんなことはない。俺は自分の意思で行動をしている。その証拠に俺の意思でお前をなぐつてやるるか！」と奮してもだめです。どうぞ殴るなら殴ってください。殺すなら殺してください。完全無欠の分身主義者を目指している僕は、そんなこと少しも恐くはありません。でも、あなたは、今あなたの脳を取り巻く環境からの刺激、この場合「僕の言葉」という刺激によって、怒りの反応をし、行動を取られようとしていることを忘れないでください。その証拠に、僕の言葉という刺激がなければ、あなたの中にそのような怒りも意思も浮かび上がらなかったじゃないですか。意思とは、環境からの刺激によって、その人の脳に浮かび上がらせられているだけのものだったんです。

玄侏宗久分身さんは、「病気の原因はこれだ、と決めつけて、その原因を合理的に取り除こうという治療を、今の西洋医学はするわけですが、健康っていうのはどうももっと複雑微妙なもので、意外に合理的には分からないことで治ったりするわけです」とおっしゃっていましたが、最近の西洋医学の現場の潮流としてナラティブ・アプローチが必要である、という考え方が導入されてきました。

ナラティブ (narrative : 物語) 聞いたことありますか？

近年の西洋医学は、確かに彼（玄侏宗久分身さん）がおっしゃるように、病気にばかり着目して人を見ようとしないう傾向にますます突き進んでいました。一言で言えば過去の統計的データに基づいた医療です。

ある種の問題を抱えて訴えをする人に対して、その人の経歴や置かれた環境にはまるで無頓着に、その訴えの主な部分にだけ着目して統計的データに基づいた疾患名を与え、対症療法を行うというその考え方は、医師個人の経験や観察力のばらつきをカバーすることもでき、また時間的・経済的なメリットもあってますます医療現場でも主流となっていました。統計学的な視点のない研究は、普遍性を欠如した主観的、権威主義的な、もしくは自己満足的なものになりがちです。

1991年にカナダのマクマスター大学で「科学的な根拠（データ）に基づく医療（Evidence Based Medicine（エビデンス・ベースト・メディスン）= EBM）」という概念も確立されました。それにより医療の質の向上と標準化が図られ、地域や医師による診療内容のばらつきを極力減らすことが可能となりました。また、根拠のある臨床判断を患者に明示することによって、インフォームド・コンセント（医師が患者に十分に情報を提供し、患者の同意を得る）も得やすく、医師と患者のよりよい信頼関係の構築にも貢献できるわけです。しかし、機械や検査が次々と開発されて、それに頼るあまり、対話が隅に押しやられてしまったのも事実です。

そんな中で、複雑に要因の絡み合った個人の症状を、データという画一的な基準だけで評価しているのかという意見もあり、1998年にトリシャ・グリーンハル分身さんたちによって「Narrative Based Medicine（ナラティブ・ベースト・メディスン）= NBM」という考え方が提唱されました。NBMとは、訴えをする人に全人的にアプローチしようとする臨床的手法です。訴えを持つに至るその人に、彼の生きてきた人生、家族、仕事、人生観などの物語を語らせ、医師は訴えをする人の「物語」が完成する手助けをすることで、ケアをしていく方法です。

先日見ていたテレビでは、それを実践している医師が紹介されていました。いろいろな医者を訪ねても、自分の身体の不調の原因がわからなかった年配の女性分身さんが、ある日、その医師の元に尋ねてきました。その医師は、一人の患者の診察に40分くらいも当てるそうです。そこで、その人の経歴や家族のことや人間関係などを傾聴します。ついには、その女性分身さんが、亡くなったご主人のお墓のことで悩んでいる、などという話になり、その悩みに相談に乗ってあげたりしました。すると、不思議なことにどこへ行っても治らなかった身体の痛みが翌日にはすっかりなくなったそうです。その女性は、「まさか病院でお墓の話をするとは思わなかった」と言っていました。

このような方法は、今までの医療が考える合理的な方法だけでなく、玄侏宗久分身さんの考える合理的な方法も必要であることに、西洋医学が気づき始めたということです。

僕たち人間は、言葉を自由自在に操っていると信じていますが、実は、言葉に操られている存在でもあったわけでした。このことは、18日目にはっきりさせましたよね。つまり、今まで、脳の研究などが遅れていた科学が、ここに来て、言葉に操られ言葉に統御されている我々人間には、言葉による治療（=物語の創作）が必要である、ということに徐々に気づき始めたわけですね。

『語り・物語・精神療法』(北山 修 分身・黒木俊秀分身編著)という本には、「大昔から伝統的なヒーラーたちがやってきたことは、患者の周囲に起きた一見無関係な出来事を結びつけて、一枚のつづれ織りを紡ぐように、起承転結のある物語をつくっていくこと。それを患者が受け入れて、それまで理由も分からず苦しんでいた自分の病や災難が持つ意味を理解する。その過程によって、患者の体内に巣くっていた得体の知れない恐怖が次第に消えていくのです」と書かれています。

萩原分身さんが行なったこともそういったことでした。彼は、霊が生きた人間に乗り移るといふ物語を、問題を訴える人たちに受け入れさせることで治療を成功させたのです。

『語り・物語・精神療法』にはまた、次のようにも書かれていました。

「(精神病の)治療とは、よりよい物語を創り出していくことである」

ここで言う「物語」とは、問題を訴える人に寄り添った物語のことです。その人の背景や経歴や人間関係などによって作られていく物語のことです。だけど、今までの治療というのは、いわば、医師と呼ばれる側の人たちが作り上げた物語を、一方的に患者と呼ばれる側の人に押し付けていたわけです。

さて、寄り道をしながらも、だんだんと核心部分に近づいてきましたよ。予備知識2に次のように書いた言葉を思い出してください。

> 精神科医にも科学が作り上げた「物語」はありますが、それはまだ未完成で、あまりにも視野が狭く貧弱です。

では、医師と呼ばれる側の人たちが作り上げた物語とはどのようなものでしょうか？ それは、もちろん科学者や医師と呼ばれる人たちだけが作ったものではなく、僕たちに自分中心・人間中心の感覚をもたらしこの環境が、彼らに作らせた物語です。現代の医療とは科学的なようでいて、実は、自然界中心の真の科学ではなく、人間中心の似非科学であり、その似非科学が作り上げた物語が、現代の医療だったんです。

自分中心・人間中心の視点を持った似非科学が作り上げた「医療」といふ物語の特徴を3点挙げて、それぞれに分身主義的な視点からの反論を試みてみます。

1、それはまず、僕たちの身体を正常な状態と異常な状態に分け、異常な状態を「病気」と名付けます。

(1への反論) 科学的概念である「正常・異常」というものの中に、社会的概念である「良い・悪い」といふような意味を含めてしまっている。「病気」といふ言葉が使われているわけです。真の科学では、「正常・異常」といふ概念の中には、統計学における正規分布(ノーマル分布)の概念しかなく、「良い・悪い」といふような価値判断は一切含まれません。病気という概念は人間中心の価値判断がもたらす概念であって、この自然界には「病気」などという忌避すべき含みを持ったものが存在しているわけではないことはすぐにわかります。

人間以外の動物が腹痛を起こしたり高熱を発したとしても、彼ら自身にとっては病気ではなく自然現象でしかありません。その症状は、その動物の身体が自然界に適應して現れている症状に過ぎません。人間だけがそれを病気と呼んで嫌悪するんです。

2、その異常な状態に対しても、それぞれの特徴の違いからさらに細かく分類して、たくさんの病名が創案されます。真っ暗な地中を、自らの勘と経験だけを頼りに突き進む似非科学者たちは、たくさんの「病名」を作り出すことに貢献しました。病名を付けることでその状態をくっきりと浮かび上がらせることができ、対処する方法も具体的に決定できます。

例えば、アメリカ精神医学会が発行している「精神障害の診断と統計マニュアル(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders) = D S M」などは、現在、精神医学を志す人は必ず勉強させられるものですが、それにはたくさんに分類された病名が紹介されています。

(2への反論)「真っ暗な地中を、自らの勘と経験だけを頼りに突き進む似非科学者たち」の努力は凡人には真似できないものですから、そのことを批判しているわけではありませんし、そのことによって発見されたこともたくさんあり、成果はそれなりに感謝しなければいけません。分身主義が一体誰を批判できるのでしょうか？ 僕たちの行動は、その脳を取り巻く環境にやられていることを知っているのが分身主義なんです。しかし、人間は相反する二つのことを同時にはできないので、凡人にはできることが彼らには真似できないのは仕方ないことです。彼らは病気という“憎むべき敵”と戦うために、どこまでも細部に入り込んでくれましたが、それはあまりに込み入っているので、自分のやっていることを外から眺める余裕を持ってません。

あなたは肩書きが人を変えるということを経験済みですか？ 人は、課長という肩書きを与えられるとだんだんと課長らしくなっていくし、不良などというレッテルを貼られるとますます不良らしくなっていくものです。つまり、言葉が人を作るわけです。課長も不良も、元々この自然界にあるものではないですか？ 人間だけが名前を付け、名前を付けたことでそのものが出現するんです。

同じように、似非科学が病名をたくさん作ることで、その病名を授かった人は、その病名の病人らしくなっていくわけです。病名を作ることで、その病名を持った人間が生まれるんです。このことをよく考えてみてください。

そして病名が病気を作ると、またもっと細かい症状が見えてきて、その症状にも新たな名前を付けると、その新たな名前の病気をを持った病人を作り、どこまでも細部に入り込んでいきます。それは病気をなくすことよりも、病気を増やしているだけなんです！ (こう言ったからといって、短絡的に、じゃあお前は病気という病気を幻想と決めつけて、一切の治療を放棄しろと言うのか！ などと反応しないでください。そのことを批判しているんじゃないことはもう言いましたよ。僕は今、感想ではなく事実を述べているんです)

例えば沖縄では、精神を煩って非日常的な行動をする人に対してすぐに精神病人として共同体から放逐しようとせず、カミダリー(神障り)と呼んで受け入れる習慣があった(現在でもある)ようです。彼女ら(多くが女性)は、生まれつき感受性が強く、霊的能力を備えたセイダカウマリ(性高生まり)と言われ、むしろ尊敬や畏れの念を抱かれます。カミダリーを突き抜けた人はユタ(シャーマン)と呼ばれ、人類に共通した深い無意識を通して悩める人に共感を示し、その魂の傷を癒す力を得ることができるとされています。

ある人の身体に現れた同じ現象でも、それに病名を与えることで病人を作るのであって、カミダリーという名前を与えるならば病人より

もむしろその人の心の底に潜む能力を引き出し、人々を癒す人間を作ったわけです。また、DSMの中にある「人格障害」などは、三つの群に分かれ10の症例に分類されていますが、これは以前は犯罪者を対象として考えられてきたものでした。社会的概念である「良い・悪い」が根っこにあるこのマニュアルが、真の科学に基づいて創案されているとは言い難いことはわかります。

3、そして、その異常？な状態に陥った人間に対して、「患者（あるいはクライアント）」というラベルを貼り、その治療に当たる正常？な人間は、「医師（あるいはカウンセラー）」と呼ばれます。

（3への反論）さて、この反論こそ、僕（徳永分身）が、この分身主義の森で、あなたに発見していただきたかった一番のものです。

病気を負った異常者を患者と呼び、それを治療する正常者を医師と呼び、医師は患者の身体から病気を取り除き、自分たちと同じ正常な状態に戻す。これが現代医療の筋書き（物語）ですが、これがどんなに非科学的な物語であったか、もうおわかりいただけましたね？ いいですか？ 何度も言ったので、いっしょに嫌気がさしたかもしれません、もう一度言います。

僕たちは環境の媒体です。

これは真の科学が導いた事実を述べているんです。僕の脳の中に浮かび上がる様々な言葉も、そして、それを文章に組み立ててパソコンに入力する行為も、全て僕を取り巻く環境が、僕という媒体にやらせていることでした。そのことから言えば、医師と患者という優劣の関係、あるいは上から下への一方的な関係、などあり得ません。医師は、その取り巻く環境に作られたものです。そう。医者になろうという大志を抱き猛勉強してやっと医者になったとしても、それはその分身さんが大志を抱き猛勉強させられる環境（遺伝も含む）にいたからです。ちなみに、小泉純一郎分身さんも、ジョージ・ブッシュ分身さんも、金正日分身さんも、悪名高いアドルフ・ヒトラー分身さんも、実は彼らの強固な意思であそこまで登り詰めたと言うよりも、彼らを取り巻く環境に強固な意志を持たされて登り詰めさせられただけです。また彼らの発言や行動は、彼らを取り巻く環境にやらされているだけのものです。つまり、その環境の一部である僕たちみんなが（彼らと対立する人たちも含めてそのみんなが）彼らの脳に意思を浮かび上がらせ、彼らに発言や行動を取らせていたのです。つまり、彼らを取り巻く環境である僕たちが、彼らを媒体としてしゃべったり行動したりしていたんです。

同じように患者とは、その取り巻く環境に作られたものです。こちらは患者になろうとして一生懸命努力したわけでもないので、「彼らが環境に作られたもの」という感覚は、あなたも受け入れやすいでしょう。

だから、医師やカウンセラーたちが知らなければならなかったことは、実は自分たちが一緒になって患者の症状を作っていたという事実です。科学（ここで言う科学とは似非科学のこと）が作り上げた「物語」がまだ未完成で、あまりにも視野が狭く貧弱だという意味は、その物語の中では、自分たち（医師やカウンセラー）は、患者を外側から眺めて、彼らを治療する立場にあるという点です。医師やカウンセラーは、決して患者を外側から眺めて、彼らを治療する立場にいる余裕なんかありません！ 現代医療の筋書き（物語）には、医師やカウンセラーは患者や病気と呼ばれるものを治そうとしますが、自分も患者や病気を作っていた環境の一部だということが忘れられています。彼らだけでなく、僕たちみんなの何かが一緒になったものが、一人の分身さんの肉体に、ある症状として現れていたんです。世界中の人々の何かが一緒になって、ある国とある国に戦争となって現れたり、一人の分身さんの犯罪行為となって現れたりしていたんです。世界中の人々の何かが一緒になって、僕という分身にこの文章を書かせているのと同じように、僕がこの分身主義の森の中で、あなたに発見していただきたかったことはこのことです。

つまり、救われなければならなかったのは 医師やカウンセラー自身だったんです！

いいえ、救われなければならなかったのは 僕たち世界中のみんなの心だったんです。

未来の精神科医や精神療法士は、「治療」などという言葉は一切使わなくなるはずですよ。未来の精神科医や精神療法士は、自分たちのやることは誰か個人を治すことではなく、まして、何かを治すことでもないということを知っています。ひたすら自分の感覚を宇宙につなげていくことだけをすれば、僕たちはみんな自然に、精神病などと呼ばれているものから解放されていくことを知っています。それらは個人主義的な環境の産物だったからです。それが理解できない限り、僕たちにはたった一人のさえ、苦しみから救うこともできません！ そのことが理解できない限り、僕たち人類はどんなに願っても、決して戦争も犯罪もなくすることはできません！ 僕たちはどんなに願っても、決して本当の幸福をつかむこともできません！

ああ、今日はずいぶん長いこと、障害物だらけのでこぼこ道を歩かせてしまいましたね。お疲れ様でした。分身主義の必要性が少しでも理解していただければいいのですが。

真の科学に導かれて生まれた物語。それが分身主義です。だけどそれは架空の夢物語でも、遠い昔の神話でも、はるか未来の話でもありません。世界中どこにいても、友達に自分の映像を送ったり会話を楽しんだりできる、この時代の物語です。宇宙にロケットを飛ばしたり、宇宙が誕生した初期の頃の様子を望遠鏡で眺めることができるようになった、この時代の物語です。難病と言われていたものを次々と克服していき、その気になれば何百年でも人間を病院のベッドの上で生かしておくことが可能になった、現代を生きる僕たちの時代の物語なんです。

科学の変化に僕たちの心は置いてけぼりを食っています。科学がどんどん先に進めば進むほど、同時に、僕たちの心には得体の知れない不安や恐怖が広がります。だからこそ、僕たちは今、この時代の物語が必要です。科学と共に歩む物語（＝分身主義）が、そう、僕たちには必要なんです。

ちょっと一言

さて、明日、いよいよ僕たちはこの森の出口に立ちます。その向こうにはどのような世界が広がっていると思いますか？ ついに僕たちは、この森の出口に到達したんです。そして、まだ誰も見たことのない、その向こうの風景を見る瞬間に立ち会おうとしています。

22日目 世界はどう変わるか？

私たちは、平和のためにと一生懸命外に目を向けて、外を変えようとはばかりしていたけど、それこそ平和とは逆行することだった。

「僕たち人間は、環境に操られている媒体です」と言ったからといって、環境が何らかの意思や目的を持って僕たちを動かそうとしている、と言っているのでは、もちろんありません。意思や目的を持つためには、それを持つ主体となるものの存在が必要です。主体が成立するためには、自我（これが自分であると自分で信じているもの）が不可欠です。ロボットや人形には自我がないので、彼らに意思や目的があるなどと本気で思っている大人は一人もいませんよね。環境（宇宙）にも自我などありません。だから、環境は何らかの意思や目的を持って僕たちを動かしているわけではないんです。

この環境（宇宙）に自我が生まれ、そのことによって意思や目的などといった概念が生まれたのは、宇宙の歴史から見ればごく最近のこと。つまり、この環境（宇宙）が、人間を生んでからのことです。

環境とは、ビッグバンの瞬間の「方向性を持った一突き」が、玉突きのように、連鎖と途切れることなく波及して、現在の僕たちに降り注いでいる様々な影響のことです。それを簡単な一言で表現したいので、**ビッグバンの風**と命名します。環境とは、一言で言えば、僕たちに吹きつけているビッグバンの風のことです。

分身主義の視点を持つには、まずは、この140億年をもひとつ飛びしてしまう柔軟な感性が必要です。140億年を長いと感じるのは、人間が自分の日常を中心にした感覚に過ぎません。

ビッグバンから続く一定の方向性を持った力を、僕たちは「自然界の法則」などと呼び、発見した一つ一つに「万有引力の法則」とか、「エネルギー不滅の法則」とか、あるいは発見者の名前を取って「ケプラーの法則」とか、「アボガドロの法則」などと名前を付けます。この、ビッグバンの瞬間の「方向性を持った力」が、天体を作り、銀河を作り、地球を作り、地球に植物を作り、動物を作りました。動物には、記憶という特性を備えた「脳」というものがあるので、環境からの刺激が動物の脳に入力されると、それが記憶という反応の道に作用して、その相互作用によって動物は行動を取らされるわけでした。

ビッグバンの瞬間の「方向性を持った力」は、やがて僕たちのような脳を持つ人間を作りますが、その脳は、記憶という反応の道に名前（タイトル）を付けるような方向性を持った脳でした。このことは、以前、ちゃんと確認しましたね。名前（タイトル）をつけることは記憶を確かなものにし、その確かな記憶は、自分の身体に起きたことも記憶しているため、この痛みや快感を感じる身体はまぎれもなく他の誰でもない自分の身体だという感覚が生まれます。と言うことは、自分という感覚は、全身に張り巡らされた神経系の作り出す錯覚だったということです。その錯覚によって「これが自分である」と信じさせられているものこそ、自我と呼んでいるものことだったのです。つまり、僕たちはこの神経系を頼りにして、それをまとめ上げる脳が、自分とはこういう境界線を持ったものだという意識を作らされていたということですが、実は、これ程あてにならないものはないんです。自分の神経系の感度が変化した状態を想像してみればすぐにわかります。

人間には感じられないニオイを感じるすごい嗅覚を持った動物や、信じられないほどの鋭い触覚を持った動物とか、鋭い視力や聴力を持った動物はたくさんいますが、もしあなたの神経系がそういう嗅覚や触覚や視力や聴力などを獲得したとしたら、神経系が錯覚する「自分とはこういうものだ」は、確実に今よりも大きな「自分とはこういうものだ」に広がるはずです。その逆のパターンを考えるとわかりやすいと思います。

年を取って耳が聞こえづらくなると、周囲の人たちの話に加われなくなるし、目も遠近が見えづらくなると好奇心も失っていきます。それは、「自分とはこういうものだ」が、どんどん狭くなっていくことを意味します。また、小さい頃から親に「お前はのろまだ。うすのろだ」と言われ続けてきた子供の「自分とは」は、「僕はうすのろでダメな人間だ」です。そんなの単なる気持ちの持ちようだ、とあなたは言うかもしれませんが、そうです。だから僕は、錯覚だと言っているんです。

気持ちでなく身体で考えてみても同じです。もし1メートルもある箸を自由に操って豆をつかむ人がいれば、その時、その1メートルの箸はその人の指の延長（=身体の一部）なのです。クレーン車を見事に操る人は、そのクレーンの先端までが、その人の身体です。

先日、テレビで科学の最先端技術を紹介していましたが、それは人間が指を動かそうとする時に発生する脳の微弱な電流を利用して、離れたところにある筋電義手の指を思い通りに動かすというものでした。さしずめ念力といった感じです。その義手に敏感なセンサーをたくさん取り付ければ、誰かに触れられるとその感触も脳に返ってきます。例えばその義手を世界各国に置き、脳からの微弱な電流を、一旦、H T M L 言語に置き換えてインターネットを使って飛ばせば、世界各国の人と握手をしてその感触までも味わえるわけです。テレビ電話のようにお互いの顔が見えるようにすれば、もっと触れ合っている気持ちが強くなるでしょう。そういうことが、いろいろできるようになったら、僕たちの身体の境界線の意識は、地球全土にまたがってしまうことになります。

僕たちの信じていた「自分とはこういうものだ」は、気持ちも身体も、このように大きくなったり小さくなったり実に不確かなもので、本当はあてにならないものだったんです。

このように、あなたの五感の感度の良し悪しが得た情報量を基にして、あなたは「自分とはこういうものだ」と信じ込まされているわけですが、その「自分とはこういうものだ」に、もう一つ加えて欲しいものがあります。

それは「知」です。科学が発見してきた「自分とはこういうものだ」です。

例えば、こうしている最中にも、僕たちは秒速30キロメートルという猛スピードで回転している地球に乗っかっていて、そのことに気候などは影響を受け、気候は僕たちのあらゆる人生に多大な影響を与えます。また、手も届かない遠くの月にこの地球の形や状態は影響を受け、僕たちも生理や精神などに影響を受けています。つまり、僕たちを今取り巻いている環境は、140億年も昔のビッグバンと深く関係していて、今もその影響を受け続けているということなのです。

こちらは錯覚ではありません。

僕が死んで、つまり、錯覚を旨とする脳が消失しても、月も地球も、それらを生んだビッグバンの事実も消失することはありません。そ

れは、これらが錯覚ではなく科学的事実だという意味です。

こういった「知」を、あなたの「自分とはこういうものだ」に加えて欲しいんです。そうすれば、あなたの「自分とはこういうものだ」はもっともっと広がります。あなたは世界中の人と関係し合っていた自分を知り、世界中の人と一つになります。世界中の人どころか、この宇宙の万物とつながり、ついには宇宙そのものになります。分身主義ではこのことを「心が育つ」と表現します。

ちょっと寄り道をしてしまいましたが、話を初めに戻します。自我を持ってしまった我々人間が、言葉を駆使するようになり、それによって思考を経験すると、その過程で、僕たちの脳に意思や目的と呼んでいるものが浮かび上がります。この時点で、初めて、この宇宙に意思や目的と呼ばれるものが出現したんです。

もう一度、140億年をひとつ飛びすると、僕やあなたの自我や意思というものは、それは遠くビッグバンの瞬間の「方向性を持った一突き」が、玉突き球を次々に弾くように、連綿と途切れることなく波及している過程に見せる、様々な現象の一つに過ぎないことだとわかります。

さて、自我を持った我々人間が行き着く先は、当然のことながら、個人主義です。自我の強い人ほど（これが自分であるという意識が鮮明な人ほど）その傾向があり、世界中の人間が次第にその傾向を増すような方向に進んでいます。それも、ビッグバンの瞬間の「方向性を持った力」によって作られているものなので、一つの自然法則ですから、それに対して「個人主義の法則」などとも呼びましょか? (笑)

僕たちは環境の媒体であると共に、環境の一部でもありました。環境から入力される刺激は、自我（これが自分であると自分で信じているもの）を持った僕たち人間の脳に、個人主義的な意思や目的を浮かび上がらせ、個人主義的な言動を取らせます。するとそれが今度は、僕たちを取り巻く環境となり、ますます僕たちは個人主義的な傾向を増すことになります。そのようにして、僕たちを取り巻く環境は、個人主義的な絵の具で何層にも塗り重ねられ、今では、世界中が個人主義的な色に染められてしまったと言ってもいいかもしれません。

僕たちが生きるこの時代の文化や文明の繁栄は、全て個人主義的な環境の賜物です。電子レンジも、携帯電話も、パソコンも、ロボットも、ロケットも、高層ビル群も、みんな個人主義的な環境がなければ生まれて来なかったはずで、宗教も個人主義的な環境があってこそ生まれてきたものだし、それに現代の医療も個人主義的な環境の賜物です。でも個人主義的な環境は、人間の脳に嫉妬や羨望や怒りや恨みなどを生み、醜い争いや戦争も生み出しました。そして、今僕たちの生きるこの時代に至って、今まで人類が確信を持って突き進んできた個人主義的な環境が、膨らみ過ぎた風船のように破裂寸前の状態にあるのをあなたは感じませんか？

個人主義は限界に来ています。

自分の周りにたくさんの敵が作られ、幼稚園にさえたくさんの監視カメラが取り付けられ、人々は互いに自分の権利を主張し合い、相手の責任を激しく追及し合い、自分を棚に上げて他人を非難し合っています。人間が、これ以上、個人主義的な環境を突き進めば、もう僕たちは心も身体もズタズタになります。それは、僕たちの、相手を傷つける行為そのものが、実は、自分自身を傷つけていた行為だったからなんです。

僕たち人間の脳は、自我という錯覚を持つのは避けられない成り行きでした。自我を消すことなど、どんなに修行を積んだ坊さんでもできません。でも僕たちは、自我を拡大させることは可能です。分身主義の森と一緒に歩いてきてくださったあなたの自我は、今、宇宙にまで拡大していますか？ あなたは今までのように、左の小指とか、右足のくるぶしといった「部分」ではなく、どこにも切れ目などない全身の自分の姿を見えていますか？ あなたは、部分であると共に、この宇宙全体だったんです。それが分身主義の視点です。と言っても、それは勝手な思い込みや想像ではなく、科学的な事実なんです。このような分身主義的な視点を持てば、苦しい修行を積まなくても、「今までの小さな自我」は消し去ることができます。と言うより、「今までの自我」が、神経系の作っていた錯覚だったわけですからね。

あなたは今、小泉分身さんも、ブッシュ分身さんも、金分身さんも、ヒトラー分身さんも、みんな媒体であって、実は、彼らを取り巻くみんなが彼らの身体を借りて（つまり彼らの身体を媒体として）発言しているんだ、という視点を持っていますか？ 格好いいタイガーウッズ分身さんや、イチロー分身さんや、矢沢永吉分身さんを熱視線で見つめながらも、彼らは媒体であり、彼らを取り巻く環境が彼らの身体を使って表現している、という視点で見れますか？ と言うことは、環境の一部であるあなたも、タイガーウッズ分身さんや、イチロー分身さんや、矢沢永吉分身さんの身体を動かしていたんです。あなたの身近にいる人たちや、あなた自身のことも、そのような視点で見れますか？ だとしたら、あなたは今、自分たちのいる個人主義的な環境を外側から眺める視点を獲得しています。それは僕たちがほんの少し、今の個人主義的な環境の外に出たことを意味します。

もしそれらの視点を全く持たず、想像すらつかないのなら、まだあなたの脳は個人主義的な環境の中に埋没していると言えます。では、自分たちのいる個人主義的な環境を外側から眺める分身主義的な視点を持った人がたくさん増えると、世界はどのように変わるでしょうか？ 考えられることをいくつか挙げてみます。

まずはわかりやすい例で、著作権の考え方が変わります。分身主義的に（＝科学的に）正確に言うなら、作者というのは媒体に過ぎず、実際は、一つの作品は、みんなの総力の結集によって作られているものだったんですね。ピカソ分身さんの作品も、ムンク分身さんの作品も、それを描いたのは彼らを取り巻く環境みんなだった、というのが実際のところですよ。（それで、分身主義では、ピカソの作品を“ピカソたちの作品”と形容することもあります）

本当は、この世界に全くのオリジナルなど、どこを探しても存在しません。もし見つけた人は教えてください。1億円差し上げます。全ての創作物は模倣とそれらの組み換えに過ぎないんです。しかも、その媒体（作家）に模倣や組み換えをさせているのは、彼らを取り巻く環境なんです。

フード・フォトグラファーの志民賢市という我が分身さんは、ある小冊子に次のような発言をされていました。
「これからは、インターネットなどで、どんどん無料の情報が流れていくようになると思うんです。著作権フリーという考え方ですね。つまり情報ソースを作る人（つまり僕たちみたいな制作者ですが）は、お金は何かのカタチで余所でもらって、利用者には無料で情報を提

供する。そうすると写真は、本当の意味で複製芸術となると思うんです。つまり写真そのものの価値より、それをどう使うのかという利用価値が問われるようになってくるとい感じがしますね」

この言葉には、未来の著作権のヒントが隠されていると思います。今まではお金を出して本や辞書を買っていたわけですが、ある種の本や辞書などはインターネットを通して無料で読むことができます。インターネットは、知識や情報は人類共有の財産なので、みんなでそれを分け合う（シェアする）という分身主義的なイメージの具現化に、最も相応しいものだと思います。ただ、彼（志民賢市分身さん）は、「お金は何かのカタチで余所でもらって」と言っていますが、僕（徳永分身）は、分身主義が行き渡れば、このお金の中心の貨幣経済自体が変化して、貨幣がなくなると本気で考えてもいるのです。

貨幣経済は便利ではあるけれど、実は問題点もたくさんあります。貨幣は、現在では、人間の欲と切っても切れない関係のものに成り下がっています。もし貨幣がなくなれば、世の中の醜い争いのほとんどが消失するでしょう。分身主義用語では、今の世界を「お金に頼る社会」と形容します（http://www.bunshinism.net/yougo_kaisetu.htm#okane「分身主義の用語解説」参照）お金に全ての価値を決めてもらい、お金がなければ何にもできない社会のことです。貨幣が不要になった世界こそ、僕たちの理想郷なのかもしれません。もしあなたが、貨幣の不要になった世界など想像できないと言うなら、それはやはり、あなたの脳がまだ、個人主義的な環境に埋没しているからです。

他にもいろいろと考えられます。

例えば、病気という言葉が違う言葉に言い換えられるでしょう。痴呆症が認知症に、精神分裂病が統合失調症に言い換えられたように、あるいはいくつかの差別用語が違う言葉に言い換えられたように、病気という敵対的な感情をこめて使われる言葉は、もう少し友好的な気持ちがかもった言葉に変化するはずで、病気という概念が変わるだけでなく、人々の死生観や医療自体も変わるでしょう。男女の愛の形も変わるでしょう。愛国心や国民感情といった言葉は死語になるでしょう。今までの国のイメージは、この地球という国における一つ一つの都市のようなイメージに変わるでしょう。「人権を保障する」などという言葉もなくなるでしょう。等価として大切にされる僕たちに、保障しなければならぬ人権などという概念が持ち上がるのはおかしなものだからです。また、現代は幼い子供の命が奪われるような事件がたくさん起きてしまっているので、親も子供を守る気持ちが強くなっていますが、世界が分身主義的な環境になれば、全世界の人の意識の中に、子供は世界のみみんなの分身という共通の気持ちが育っているので、あなたは安心して子供をブラジルの人や、イランの人や、北朝鮮の人に預けることができるようになります。みんなで大切に育てるように育てましょう。そんな世の中を想像してみてください。なんて素晴らしい世界なんでしょう。

もしあなたの中に、そのようなものは素晴らしいもなんともないという感覚があるとすれば、それはあなたの脳が、まだ自己中心の世界に執着しているからなんです。個人主義が行き着く所まで行き着いてしまった今、「子どもが欲しい」と考えるあなたには、子供はまるで自分の思い通りになる可愛いペットのようなイメージになっているでしょう!? 自分の思い通りにならなかつたら癩癩を起こして怒鳴り散らす親が増えています。子供は決してあなただけの持ち物ではありません。全人類の分身です。宇宙の部分であり、そして全体です。あなた自身が、宇宙の部分であり全体であるように！早くあなたも、そのことに気づいてください！

忘れてはいけないことですが、この環境が分身主義的な環境になったら、独裁者のような人はいなくなります。独裁者は、自分のことを環境にやらされている媒体であると知っているので、自分は独裁者ではないと知っていますし、彼を見る人たちも、彼は実際には自分たちの作り上げる環境の媒体であることを知っているので、彼は独裁者ではないことを知っています。つまり、この社会で決定されるありとあらゆるものが、万人の総意の下で決定されているということを疑う人は一人もいなくなるんです。

この環境が、個人主義的な環境（＝人間界中心、自分中心の視点が作り上げる環境）から分身主義的な環境（＝自然界中心の視点が作り上げる環境）に移行したら、まだまだ、ここには書ききれないくらい、たくさんの変化が起こるはずで、もう一つだけ、例を挙げておきます。

今、地球は深刻な環境問題を抱えています。このままCO₂を排出し続けると、地球温暖化により、今世紀末には2億6千万人もの人々が環境難民になる可能性があると言われてます。環境難民の人たちの移住と先住民との争いが起こり、地球が崩壊する可能性もあります。先進国には先進国の言い分があり、発展途上国には発展途上国の言い分があり、なかなか一致団結して温室効果ガス（*10）削減に取り組みそうもありません。（もっとも、この先進や発展途上という言葉も人間中心の感覚が生んだ差別用語です。どちらの国が発展でも後進でもありません。個人主義的な環境が指し示す方向に対して、我々が発展と名づけて、その方向に変化が加速してしまっているだけです）

温暖化防止を経済的取引で成功させようという働きもあります。つまり、削減した企業に報酬を与えるということです。しかし、お金（＝欲と切っても切れない関係のもの）に頼ってしまうと、温室効果ガスの削減量を監査する側の人間が不正をする可能性と無縁ではないし、人間を罰や報酬で操ろうとするのは、幼稚な個人主義的な環境から浮かび上がる解決策でしかなく、それをして、結局は不正や犯罪を犯す人が入れ替わるだけです。

地球環境問題が解決する鍵は、人類が分身主義を受け入れるかどうかにかかっているとんでも過言ではありません。と言うより、分身主義を受け入れない限り人類に未来はないと言えます。

もし真剣に、地球環境問題に取り組んでいる方なら、これ以外に解決策がないことをわかっていただきたいと思います。環境問題は、とどのつまりは環境（個人主義的な環境）が作り出している問題だったんですから。

- ・個人主義的な環境＝人間界中心（自分中心）の視点が作り上げる環境
- ・分身主義的な環境＝自然界中心の視点が作り上げる環境

ところで、これまでの話は全部、分身主義がちゃんと世界に行き渡った後に起こることを僕が勝手に想像しているだけです。分身主義は

（*10）温室効果ガス
地球温暖化の原因には、石油や石炭や天然ガスなどを燃やした時や、森林火災などで排出される二酸化炭素（CO₂）だけでなく、メタン（牛や羊や山羊などのゲップや腐った生ゴミ、水田などから出る気体）や、フロンガス（化粧品や殺虫剤を吹き付けるためのスプレーや、冷蔵庫、エアコンなどに使われている）なども挙げられています。
フロンガスは、二酸化炭素に比べると、寿命も長く、数千～数万倍も地球温暖化の影響があると言われてます。

あくまでも、僕たちが幸せに生きるための土台となるものです。土台がちゃんとしないうちに、形が先走ったりしたら悲劇がもたらされま
す。例えば、分身主義をちゃんと理解していない人は次のように考えるはずです。

「創作物はみんなの総力の結集だからといって、印税などといった一人の著作者が独占する利益をなくそうなどしたら、人々は発明や創
作する意欲をなくすだろう」

「もし、貨幣経済をやめてお金の無い世界にしようなどしたら、人々は働く意欲をなくし、質の良い商品も生産されなくなる」

「もし、病気という言葉が友好的な感じのするものに変えたら、医者には生活に困って職替えしなければならなくなるし、人々は生きる強い
気持ちや意欲をなくしかねない」

「もし、戦争がない世界になったら、戦争によって儲けていたたくさんのお金持ちの人たちが生活に困ってしまおうし、もし、犯罪がない世の中になっ
てしまったら、たくさんのお巡りさんが職を追われてしまおう。その人たちの面倒は誰が見るのか？」

また、分身主義を生かじりてちゃんと理解していない人たちは、それを悪用して自己正当化しようとする人も現れます。つまり、犯罪を
起こしたって、「それは環境が俺にやらせたんだから俺は悪くない」などと言う人が出てきます。あるいは、「どうせ俺は媒体に過ぎないん
だから、生きてたって意味がない」などと皮肉を言う人が出てきます。

もし分身主義がちゃんと行き渡れば、そんな暴言を吐く人は一人もいなくなるし、発明や創作や働く意欲はますます強くなります。人々
はお金のために発明や創作に意欲を燃やしたり働くのではなく、みんなのために発明や創作や働くことに喜びを感じるようになってい
ます。それが自分のためだと知っている人ばかりになっているからです。僕たちは、自分を助けるような気持ちで他人に手を差し伸べ、それが自
分の喜びとなります。犯罪が起こる土壌すらない所に、犯罪は起こり得ません。そこは、犯罪を起こしておいて、「それは環境が俺にやら
せたんだから俺は悪くない」とか、「生きてたって意味がない」などと皮肉を言う人がいること自体、あり得ない社会なんです。

分身主義が行き渡った世界になれば、現在の感覚から見れば、我慢しなければならなくなることもあるし、犠牲を払わなければならな
くも、諦めなければならなくなることも出てくると思います。けれど、それらが我慢でも犠牲でも諦めでもないということをも
う、あなたにはわかっていただけでしたね。個人主義的な環境の中では、それらが我慢や犠牲や諦めであったに過ぎず、分身主義が行き
渡った環境の中では、それらは我慢でも犠牲でも諦めでもなく、喜びなんです。

分身主義が行き渡ったら、やがて、僕たちは生命の年齢制限を設けなければならなくなるかもしれない、と僕は本気で考えています。で
も、自我が拡大しているその時の、僕たちの「死」の観念は、決して「終わり」を意味するものではないことを知っています。僕たちは自
分の全身のために部分を犠牲にします。その時、犠牲という言葉は「喜び」という言葉に取って代わります。部分は、全体の中でより良
く生き続けるからです。そのように、必ず、死が恐怖や悲嘆ではなく、祝福になる日がきます。また個人主義的環境にどっぷりと浸かっ
ている人に、「みんなで死を祝福しましょう」などと言うと、どやされるかもしれませんが。

そういう誤解を受けないためにも、土台がちゃんとしないうちに、形が先走ってはいけませんし、分身主義のできることは土台を作ること
だけで、決して形を変えようとしてはいけません。土台が変われば必ずと形が変わるので、そのことを信じて、ひたすら土壌を耕すことだ
けに精を出すのが大切です。

もう、あなたには、僕がこの分身主義の森の4日目に投げかけた「人類が今まで経験してきたような憎しみや怒りや不公平感のない世界
を作ろう！」と、わざわざ強調して語った言葉の秘密をわかっていただけだと思います。人間の喜怒哀楽は、その環境によって浮かび上
がらせていたものですね。だから、環境が変わった（つまり、個人主義的な環境から分身主義的な環境に変わった）ところから浮かび
上がる喜怒哀楽は、決して今までの喜怒哀楽ではありません。あなたは、自分に対して腹を立てたり嫌になったり、時には殺してしまいた
くなるほど憎んだりしたことはあると思いますが、それは他人に対して腹を立てたり殺してしまいたいほど憎むのと同じだったでしょ
うか？ たとえ自分に対して腹を立てたり嫌になったり、時には殺してしまいたくなるほど憎んだりしたとしても、その時のあなたはやっぱ
りどこかに自分に対して愛する気持ちがあるはずですよ。どこか自分を大きな愛で包んでいると思います。分身主義的な環境が僕たちの脳に
浮かび上がらせる喜怒哀楽も、そのようなものなんです。その時の僕たちは、どんなに他人に対して憎んだり腹を立てたりしても、心の底
ではそれらをひっくるめて愛さずにはいられない状態なんです！

これからの時代を生きる僕たちは、外にばかり目を向けて、外を変えようとかばかりしてはいけません。自分に目を向けて、科学的な視点
で自分の真実の姿を見ようとするだけでいいんです。それが本当は、世界を平和にする一番の近道だったんです。と言うより、それ以外に
僕たちは世界を平和にすることはできません。もしそれができないなら、環境の媒体である僕たちは、同じ環境の中でグルグル回って、同
じことを繰り返すしかありません。自分（たち）を棚に上げて、自分（たち）の権利を主張して、自分（たち）の不利益に憤慨して何らか
の体制を変えさせたとしても、それは権力の移し替えという同じことの繰り返しでしかないことは、歴史が証明しています。同じ環境の中
にいる僕たちがしていることは、みんなのための真の構造改革ではなく、構造を作っている権力の移し替えをしているだけです。

個人主義という同じ円環の中に留まる限り、戦争も繰り返されます。戦争によって達成されるのは、力関係の移譲だけです。勝った方
が正義で、負けた方が責任を追及されて終わるだけです。

この世界から争いがなくなる唯一の方法のヒントを、6日目に次のように語りました。

- > 僕たちが世界を平和にするために必要なものは、組織力でも政治力でも経済力でも権力でも、評論家やコメンテーターや有識者
- > とされる方の自分を棚に上げた社会批判でもありません。それらは古き時代の、泥でできた舟のようなものに過ぎません。
- > この世界を変えるのは、あなたの「自分を見つめる力」です！ そこからあなたの脳に浮かび上がらせられた「意思」の力です！
- > あなたや僕が、真の科学によってこの宇宙の成り立ちをしっかりと理解し、そして、この宇宙の中で生きるあなたや僕が、どのよ
- > うに動かされている媒体であるかを理解したら、次にやらなければいけないことは、そのことをホームページで公言することです。

現実社会では、まだ武器や鎧が必要ですが、仮想現実（インターネット）の中では、本物の武器も鎧も不要です。けれど、仮想現実、

いずれ僕たちが生きている現実社会をも、武器や鎧が不要な環境に変化させることができます。科学的な意味で、人間の幻想（脳内の化学作用によって起こる現象のこと）が環境を変化させることは、僕たちはすでに無数に経験済みですから。

さて、分身主義の森はここで終わりです。

ここまで、一緒に分身主義の森を歩いてくださったあなたに心より感謝いたします。

僕たちは今、分身主義の森の出口のすぐ直前にいます。その向こうからは、薄っすらと明るい日が差し込んでいます。その向こうには、素晴らしい世界が待っていることも想像できます。その場所こそ、僕（徳永分身）が自分の全身全霊を賭けて懸命に探し求めていた世界
取って名前を付けるなら、「分身主義の夢見ている世界」です。でも、まだこの場所から外に飛び出すことはできません。

偉そうにあなたをここまで先導（せんどう）してきましたが、僕もこの森の外に飛び出したことは、まだ一度もないんです。それは僕だけの力ではできないからなんです。世界中のみんなの力を合わせなければ、僕たちは一人としてこの森から抜け出すことができません。それがこの分身主義の森の宿命だったんです。

僕が常々自分のことを「完全無欠の分身主義者を目指す人間」と紹介して、決して自分のことを「分身主義者」などと言わなかったのには、そういった理由があります。僕が「完全な分身主義者」になった時とは、世界中の環境が分身主義的な色に染まった時以外にはあり得ないからです。僕もあなたも、部分であると共に全体だったんですから。ただ、分身主義は目的ではなく手段であるということ覚えておいてください。世界中の人が一つになり幸せになるという目的のための手段。まさに、70年以上も前に宮沢賢治分身さんが夢見ていた理想の世界に突入するための手段に過ぎません。分身主義自体が目的ではないので、目的を達成したら忘れられてしまっても一向に構わないものです。分身主義は「主義」などと言っていますが、共産主義とか原理主義とか民主主義などという主義・主張とはまったく違い、物事を見る単なる視点です。自分や人間中心ではなく、自然界中心の科学的視点です。自分だけが中心だった子供の視点が、他の人の立場に立った視点も持てるようになることを大人になると言いますが、それでも大人は、まだ自分たち人間中心です。分身主義はその先の自然界中心の視点です。それを大人の大人の視点と分身主義では呼びます。科学が導いてくれた最も新しい視点です。

言動において特に自分中心の人を、個人主義者などと揶揄（やゆ）する場合がありますが、個人主義との違いを強調したいがために「主義」という言葉を使っただけです。だから、世界中の人が分身主義の視点（いわゆる大人の大人の視点）を持てるようになった時、分身主義などという言葉は忘れ去られても構いません。僕が完全な分身主義者になった時には、もう分身主義などという言葉も不要になっている時です。僕たちが幸福になった時は、幸福などという言葉もなくなっているのと同じ理屈（かんすつ）です。

ただ、今、世界中の人が一つになり共感という最大の幸せを得るという目的を完遂させるためには、僕たちを手引きしてくれる何らかの名前を付けた指針が必要です。そのための最も心強い手段として、今は、分身主義という名前が必要なだけなんです。目的を達成させるために仮に付けられた名前と思っていただいても結構です。

機は熟しています。

一緒にこの歩きづらい分身主義の森をここまで歩いて来てくださったあなたは、幸せのすぐ側（そば）まで来ています。あなたはもう、幸せか幸せじゃないかは個人の勝手だ、お節介（せつかい）はやめてくれ、などとは言いませんよね。

近いうちに、世界中の人たちが力を合わせて、この分身主義の森から、分身主義の夢見ている世界へ飛び出せる日が必ず来ます。僕たちの本当の平和と幸福はそこにしかないからです。このインターネットが、僕たちの生きている間にそれを可能にしてくれるかもしれません。僕はそのことを考えると、嬉しくて仕方ありません。

僕の脳にその嬉しさを運んでくれる環境（環境）にお応えして、まだまだ僕は喜んで分身主義に関する文章を書かされ続けるでしょう。著作物に関する利益は放棄しますが、著作権は放棄しません。それが分身主義的「知的所有権」の考え方だからです。著作権は放棄していないので、使用する場合は、出典（しゅつてん）を明らかにしてください。出典を曖昧（あいまい）しておくことを許すと、分身主義を生かじりの人たちにだんだんと、分身主義は歪（ゆが）められて伝わってしまいます。それに、著作者の名前を保存して自分の分身として敬意（敬意）を表（ひょう）する気持ちを大切にすることが、分身主義の理念にも合致（がっし）しています。個人主義の理念である「個々人を尊重する」などということは、個人主義にはできません。自分可愛さの偽りの尊重でしかありません。分身主義こそ、本当の意味で個人を尊重するものなんです。ある人の行為を尊重する気持ちを持つことは、そのまま自分を大切にすることである、ということを知ったのが分身主義だからです。

どんな時にも、僕は媒体であることを忘れずに書かされます。そう、僕はあなたに書かされているんです。僕という一人の分身は、世界中のみんなのために喜んでこの身を粉にして、無償で働きます。働かせていただけることに感謝いたします。分身主義の理想とする世界とは、みんながこんな気持ちで、働かされることに感謝しながらみんなのために無償で働く世界です。貨幣なんか頼（た）りなくとも立派に社会が成立する世界です。そして、この宇宙の万物に祝福されて死んでいく世界です。それは、宇宙に溶け込み、本当の自分に帰っていくことを意味します。

今のあなたには、そんな世界が少しだけ遠くに、しかし、くっきりと見えているでしょうか？

さあ、世界に奇跡を起こすために今僕たちにできること、そして、今僕たちがやらなければいけないこと、を一緒に実行しましょう。

（おわり）

最後の最後に一言

歩きづらい分身主義の森を、一緒に歩いてくださって本当にありがとうございました。分身主義の森はここで終わりですが、この場所こそ、本当の意味の僕たちの始まりです。この分身主義の森から、分身主義の夢見ている世界へ飛び出すために、僕たちにできること、そして僕たちがやらなければいけないことは、外に目を向けて、外に働きかけるのではなく、自分を見つめ、自分の本当の姿を知ろうと努力することです。そのため一番いい方法が**ホームページ**や**ブログ**を作ることです。他人にわかってもらうために書くのではなく、自分を発見するためです。僕だって文章を書いているうちに分身主義と出合えたんです。頭で考えてばかりいないで、自分の手で書いてみるのが大切です。間違えてもホームページなら即座に修正できますから。とにかく実行してみることです。書くという行為は同じでも、普通の日記を書くのと違う点は、常に他人の目を意識することでより客観的に自分を眺めることができるという利点があります。

あなたの視界がどんどんクリアになることを実感するはずですよ。そしてあなたが自分を発見することこそ、何にも勝る世界平和の実践だということに気づいていただければいいでしょう。

もう、すでに普通のホームページを作っている方も、もう一つホームページを作ってみてはいかがでしょうか？ 「分身主義的な視点」で作るホームページやブログを、これを「**分身主義ホームページ**」、「**分身主義ブログ**」と名づけます。もっと略して、「**BHP**」、「**Bblog**」でもいいでしょう。

「**BHP**」あるいは、「**Bblog**」の作り方は「付録2（106ページ）」です。

あとがき

この場所でご紹介させていただいたいくつかのホームページの中で、パソコンで表示させようとするとき既になくなっているホームページがあるかもしれません。そのことはあらかじめご了承ください。ただし、過去にそのようなホームページが存在した事実として、URLアドレスはそのままにしておきます。

ホームページとはそのような性質のものであると同時に、その逆に公開者の気持ち一つで、出版物のように絶版とは永遠に無縁のものであります。

僕たちが作る「**BHP**」あるいは、「**Bblog**」は、一時的な流行や廃りとは無縁のものであり、あなたが死んでも消されてはならないものであると考えます。あなたが作る「**BHP**」あるいは、「**Bblog**」は、全世界みんなの願いが一つになったものだからです。何故って、僕たちは全世界のみんなに書かされているんですから d(^-)- ネット！

ところで、『分身主義の森を抜けて世界に奇跡を起こすために今僕たちにできること今僕たちがやらなければいけないこと』という長いタイトルですが、歩きづらい分身主義の森と一緒に歩いてくださったあなたには、このタイトルが矛盾しているように感じるかもしれません。分身主義は、僕たちは環境の媒体であって今まで言われているような意志などはない、と言っているのですが、このタイトルではまるで意志があると言っているかのようです。分身主義的にタイトルを書き直すとすれば、『分身主義の森を抜けさせられて世界に奇跡を起こさせるために今僕たちがやらされること』などと受身形に書き直さなければならぬはずですよ。でも、これでは意味不明でなんともしないタイトルです。言葉というのは、僕たちに意志があると信じていた時代に、意志があるということを前提として作られているので、受身形には不向きな道具なのかもしれません。そのことを理解した上で、今まで通り言葉を用いなければならないのではないのでしょうか？

占いだって、超能力や心霊現象だって、あるいは宗教だって、非科学的だと知った上で、それを享受したり楽しめばそれでいいと思うんです。

「今日からダイエットを実行するぞ」と決意した時、自分は今、環境にそのような意志を喚起させられたな、とどこかで意識していればいいんです。分身主義は視点です。自分が世界中の人とつながり、宇宙につながる視点です。3Dアートで体験していただいたように、普段見ている二次元の視点をちょっと立体視に変化させると違った模様が浮き出てきます。今、僕たちは、そのどちらの視点も持っているということです。分身主義の視点ばかりで世界を見続けるのは、今の僕たちには無理だと思います。でも、いつでもどこでも、分身主義の視点を持ち合わせて、二つの視点を行き来できるようにしておくことは大切です。忙しい日常に追まわられて、分身主義の視点を忘れてしまわぬように、そして、ますます分身主義の見える風景がはっきり見えてくるように、日々、精進するようにつもりでホームページやブログを作りましょう。その柔軟な視点が、僕たちの環境を少しずつ、平和と幸福の方向へと変化させるからです。

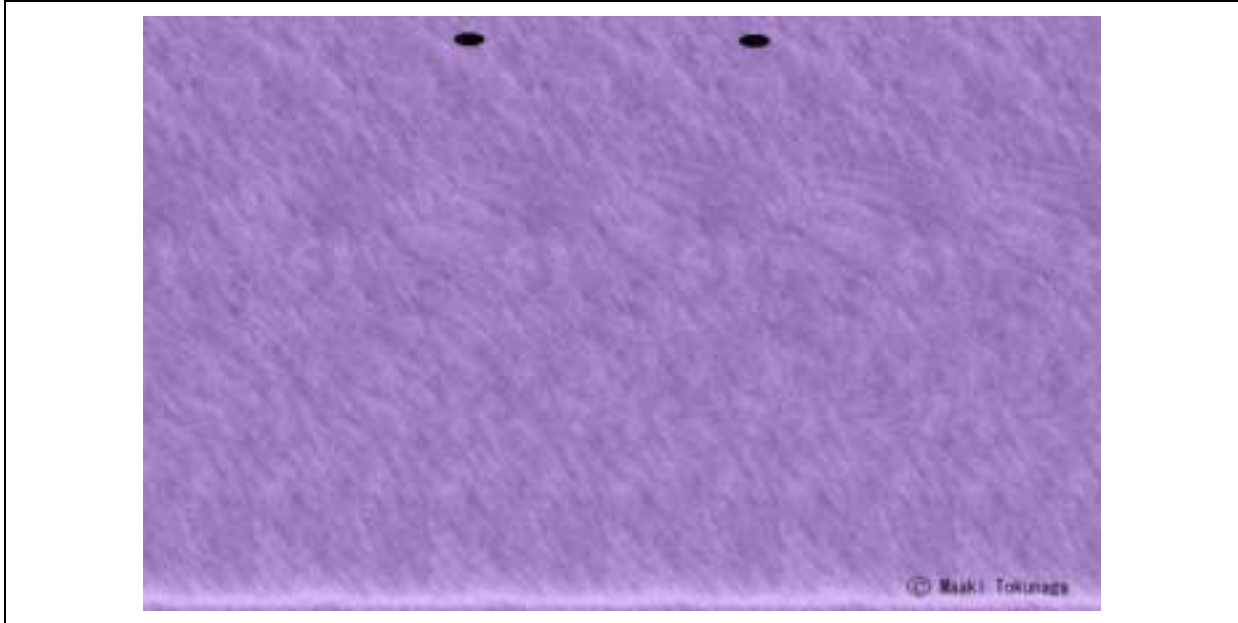
ホームページやブログ作りは、僕たちの狭い自我が、隣人と重なり、世界中の人と重なり、やがて宇宙と重なるための「実践」です。この宇宙の分身である僕たちが、自分の本当の姿（=全身）を見るための実践です。

それと、このタイトルではあまりに長いので、以後、引用する時には、『分身主義の森を抜けて』と省略させていただこうと思います。

Copy Right (C) 2006 by 徳永真亜基
ホームページ <http://www.bunshinism.net/>
<http://www.epm-hassin.net/>
<http://www.aa.alpha-net.jp/markey19/>

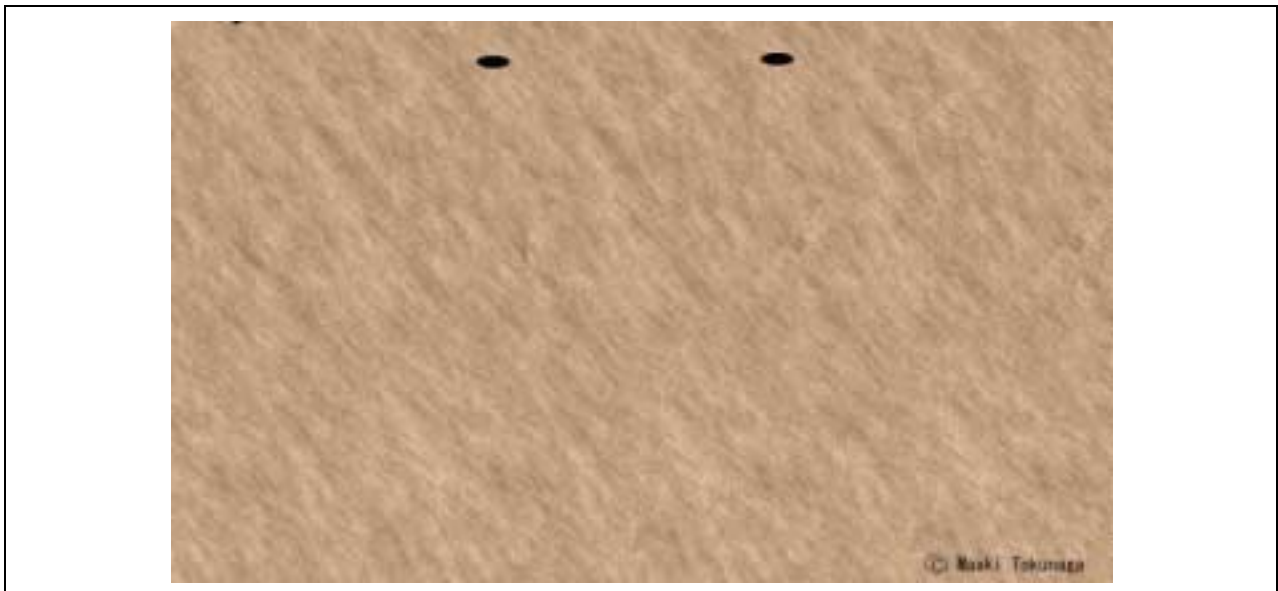
3Dで語る分身主義

まずは初級コースです。上部の黒い点をぼんやりと見つめてください。次に、それよりもほんの少し手前で目の焦点を結んでみましょう(つまり少し寄り目状態にします)すると、黒い点が三つに見えてくる時があります。その三つの点の真ん中をしばらく見続けて、その状態を保ったまま画面の中央に目を移すと、大きなおっぱいが浮き出てきます。なかなかできない人は、自分の目の前に人差し指を立てて、寄り目が作れるようになってから、再挑戦してみましょう。今日見えなくても、心配いりません。根気強くやりましょう。慣れてきたら画面から顔を遠ざけたり、左右・上下に揺らしたりしてみましょう。おっぱいが突き出てきたり、左右・上下に揺れたりしますよ。このように対象の画像よりも少し手前に焦点を合わせて立体視する方法を**交差法**といいます。さあ、それではこの感動を忘れずに、次に挑戦!



次は中級コースです。こちらは平行法で作成した3Dステレオグラムです。立体視を楽しむためには、**平行法**というもう一つの方法があるので是非マスターしましょう。やり方は同じで、上部の黒い点をぼんやりと見ていて黒い点が三つに見えてきたら、中央に視線を移すと、**凹んだ幸福の四つ葉のクローバー**が見えてきます。このように

これが見える状態は、画像よりも向こう側で焦点が合っているので平行法といいます。幸福というものはいつも僕たちのそばにあるのに、焦点が合わせられないために気づかないだけなんです。誰でも見えている平面の画像を、僕たちの日常(現実)だとすると、立体的に見えてきた光景が分身主義の見ている光景です。僕たちは今まで日常の中で、束の間の幸福を継ぎ足し継ぎ足ししながら生きていました。それは優越感というまやかしの幸福です。何が起っても決して壊れない幸福を、あなたも手にしてください。分身主義こそ、今までの焦点を変えることで見つけた本当の幸福です。



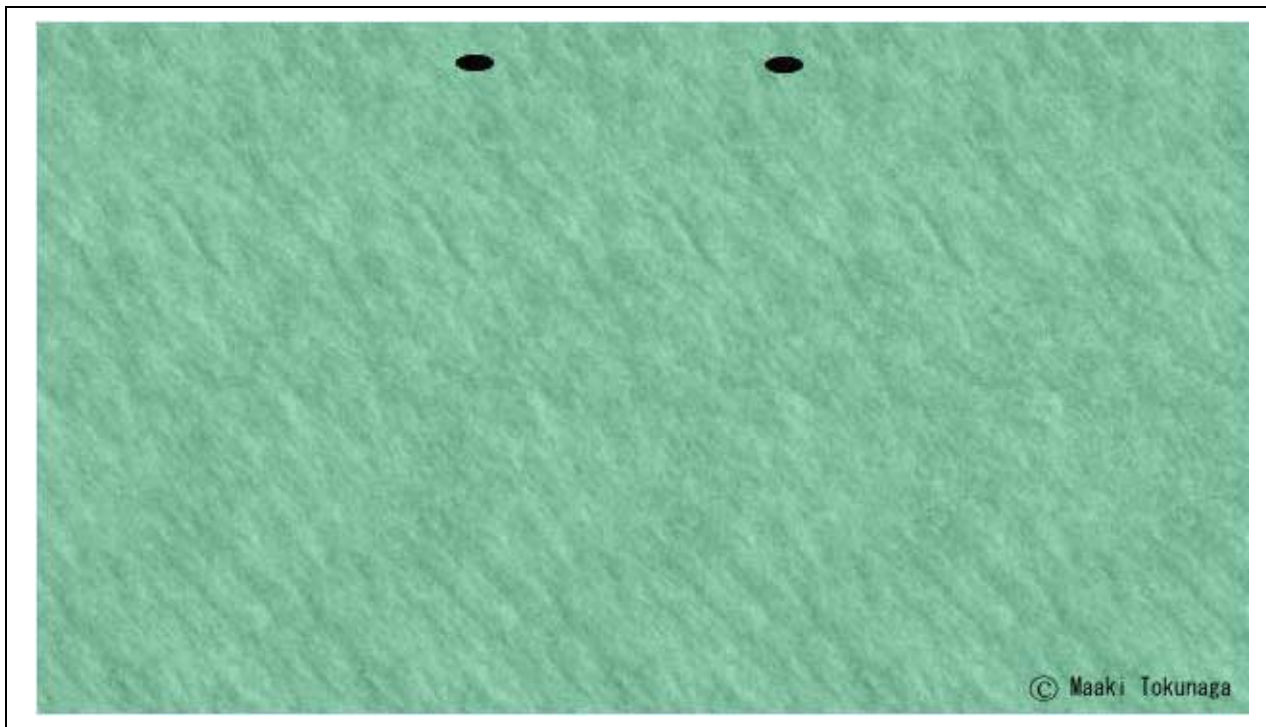
それでは、上級コースです。 同じ方法で、黒い点が三つに見えてきたら、三つの点の真ん中をしばらく見てから画面の中央に目を移すと、**分身主義**という文字が浮き出てきます。 このように

分身主義

細い字なのでちょっとわかりづらいかも。根気強くやってみてください。

何も見えていない平面の画像が、ちょうど今の僕たちを取り巻く環境、つまり個人主義的な現実です。分身主義が見ている光景は、今、僕たちのいる個人主義的環境の視点では決して見えません。焦点を変えなければ見えないんです。見えていない人と話をしても、分身主義が見ている光景を信じてもらえず、どうしても分身主義の真髄を伝えられません。それが見える人は**真の科学**の視点を持った人だけです。と言っても、科学者と言われる人が**真の科学**の視点を持っているとも限りません。真の科学の視点とは、自然界中心に物事を解釈しようとする視点ですが、例えば医学は人間中心なので、あまり科学的とは言えませんし、生物学などでも、とても科学的とは思えない解釈がなされて平気です。

立体画像は、一度、見えるようになったら、次回からは簡単に見えるようになりますが、分身主義も、一度、感動を味わった人間なら、次回からは簡単に焦点を合わせることができるようになるんですよ。



いかがでしたか？ 立体視は成功しましたか？ 今日できなくても心配はいりません。焦らず、力み過ぎずに、根気強く続けてみましょう。なかなか見えない人ほど、見た時の感動は大きいです。でも、一度立体画像が見れるようになると、黒い点の助けも借りずに、いつでも簡単に自分の目を立体視の状態に持っていけるようになります。分身主義も同じです。その光景を感動を持って眺められるようになるまでは努力と根気が必要ですが、一度見れるようになると、いつでもどこでもその視点が作れるようになります。その視点が世界平和と人類の幸福に必要な視点なんです。

誰もが見えている平面の画像を僕たちの現実とすると、それは自己中心（もう少し視野を広めてもせいぜい人間中心）の視点です。今の僕たちは、自分や自分たちに焦点を合わせた世界しか見えないんです。その世界観の中で法律が作られたり、政治が行われたりしています。その世界観の中で僕たちの価値観は作られ、日常の行動が決定させられています。テレビなんかでも、時々、人々を感動させるようなコメントやフレーズを聞くことがありますが、分身主義の視点から見れば、それらの言葉は、世界平和と人類の幸福とは逆行すると感じるものがたくさんあります。それでも、彼らの言葉が人々を感動させる理由は、今の僕たちを取り巻く環境が、自分中心の波長だけが同調するような環境だからです。

それに対して分身主義の視点は自然界中心の視点です。自然界中心の視点とは、**真の科学**の視点であり、それは宇宙に焦点が合っている状態です。その視点から見たら、現在の法律も、政治も、価値観も、そして日常の行動も、人々を感動させるようなコメントやフレーズさえも、ずいぶんと貧弱で、ずいぶんと問題点があることに気づかされます。有識者と言われているような人たちまで、ずいぶんと問題ある発言をしているのに、誰もそのことに違和感を感じていない様子です。

科学時代を生きる僕たちは、どちらの世界にも焦点を合わせられるようになった方がいかに決まっています。

ところで、真の科学は、人間は幻想の中でしか生きれないということを教えてくれています。それが脳を持った人間の宿命です。もちろん、この3Dの平面画像も立体画像も、あなたの視覚が、あなたの脳に浮かび上がらせている幻想（＝錯覚）に過ぎません。つまり、人間は幻想の中で意識し、幻想の中で想像し、幻想の中で何かを考えたりしていたわけです。と言うより、意識したり想像したり考えたりしていること自体が、その人の**幻想**（＝錯覚）だったわけです。それは僕たちの脳を取り巻く**環境**によって浮かび上げられて、知らず知らずのうちに**幻想**です。

僕たちの脳の中には神経細胞というものがかんがりつとまっていて、それが**記憶**という特性を持っていることはほとんどの人が知っていますが、記

憶とは**反応の道**が作られることなんです。その反応の道を作るものは、その脳を取り巻く環境（遺伝も環境の一つ）からの刺激です。環境からの刺激によって**反応の道（=記憶）**が作られた脳に、再び環境からの刺激が入力されれば、その人の**反応の道**に沿った反応が引き起こされます。それが**幻想（意識、想像、思考 など）**というものなんです。そのことを先程、「**僕たちの脳を取り巻く環境によって浮かび上がらせ・られている幻想**」と説明したんです。

そして、その浮かび上がらせられた**幻想**に基づいて僕たちは行動を取らされています。ということは、僕たちはみんな**環境**に動かされていた**媒体**だったわけです。もし、あなたが、現代科学の解明しているものを知る努力をし、それを**真の科学の視点**で受け入れようとしてくださるなら、この意味をわかっていただけるはずですよ。

えっ？ わかりたくもないって？ やれやれ、あなたはかなり自分中心の環境に洗脳されてしまっていますね。凝り固まった視点は、まるで、自己中心教とでもいうカルト教団にはまってしまっているかのようですよ。でも、他の宗教も、人間中心（特に個人救済が目的）に考えられたものなので、その意味では同じようなものなんです。

人類が分身主義を自分たちのものにできない限り、世界は決して平和にはならないし、僕たちは決して幸福にはなれません。どんなに努力をしても ですよ。

えっ？ それでも一向に構わないって？ おやおや、あなたは**ずいぶん**と自己中心教に救済され、**ずいぶん**と高い報酬を貰い受けてきた方ですよね。だけど、そんなにふて腐れないで聞いてください。あなたは**その救済と報酬がいつまで持続する**とお思いですか？ 限界にきていることに、まだお気づきにならないですか？

「私は生まれてこの方、**一切の悪事を働いたことも、悪い感情を抱いたこともない**」と自信を持って言い切れる人が一人でもいるでしょうか？ 一人の人を愛する行為ですら、差別したり、奪ったりする行為とは無縁ではありません。平和や幸福のための行為ですら、人を憎んだり、人を批判したり、人を攻撃したりする行為と無縁ではありません。善と悪とは表裏一体なわけです。その意味で、この人間社会は、まるで悪人同士がお互いを裁き合っているような状態だったんです。そう、お互いに自分を棚に上げてね。あなたは**ずっと前から**、もうそのことを感じていたはずですよ。理想を抱いた偉い方々や立派な宗教家が、時々、マスコミに吊るし上げられることがあります。どんな善行でも見方を変えれば悪行に転じるという例ですよ。

今、「人間社会は悪人の集まり」だと書きましたが、悪人と言っても、実は、この環境の中から浮かび上がらせられた**幻想**に踊らされていただけだったわけです。それは、平和や幸福のために努力をする人たちであっても、この環境の中から浮かび上がらせられた**幻想**に踊らされていただけだった、という意味からいうと全く同じことです。

遠い昔、人類の脳は他の動物と違って**どんどん肥大し**、いつの間にか、自分の脳の中を見る脳ができました。人間に**自意識**が生まれた瞬間ですよ。人類が**自意識**を持つことで、今では僕たちを取り巻く環境は、人工衛星やロケットが飛ぶような科学的な環境になりました。しかし、分身主義は、**自意識**を持った自分を意識するという、もう**一歩先**の状態ですよ。自意識が環境によって作られていたものに過ぎなかったことを意識する状態ですよ。それは一人の悪人はみんなに作られていることを知った状態なので、決して一人を裁くようなことはしません。自分を棚に上げるような愚かなマネはしないんですよ。

人類がもう**一歩先**に進むことで、僕たちを取り巻く環境は、**新しい環境**に移行されます。それは、人工衛星やロケットを飛ばせるだけでなく、争いや犯罪とも無縁の、**平和で幸福な世界**を作ってくれます。それが、先程、「**人類が分身主義を自分たちのものにできない限り、世界は決して平和にはならないし、僕たちは決して幸福にはならない**」と書いた理由ですよ。

真の科学の視点を持てるようになり、宇宙に焦点を合わせられるようになり、そして分身主義の見えている光景が見えるようになった瞬間、僕たちはこの宇宙の**全て**のものと**一体**になります。それは、「**自分はこの宇宙の部分であり同時に全体である**」とリアリティーを持って感じる瞬間ですよ。あなたの前には、今までとは全く違った感動的な光景が広がっているはずですよ。そして、そこから導かれるあなたの**行動**は、世界中の人のための**行動**つまり、それこそ自分にとっての、**本当の幸福のための行動**ということになります。もちろん、その行動が、嫌でも世界を平和にしてしまうのは言うまでもありません。

3Dを使って分身主義を語らせていただいた理由は、まずは、今、あなたに見えている世界（=幻想）だけが**全てではない**ことをわかっていただきたかったからですよ。あなたは今、あなたを取り巻く環境によってあなたの脳に浮かび上がらせられた世界を見ているに過ぎないんですよ。そして、あなたには見えていない世界があることを知っていただきたかったからですよ。そして、この分身主義の見ている美しい光景を、感動を持って眺められるようになって欲しいんですよ。そういう人が世界中に増えて、やがて**全ての人**がそのような視点を作れるようになった時、僕たちは決して壊れることのない幸福を手に入れています。それを**永遠の命**と言い換えてもいいかもしれません。僕たちのこの肉体は**仮の姿**に過ぎなくて、実は僕たち一人ひとり**は全体の分身**であり、**本当の姿（=全身）**は宇宙そのものだったということを理解したからですよ。この言葉が、**本当の深みと喜び**を持ってあなたの心に届く日が来ることを願っています。

徳永 真亜基

(付録2)

分身主義ホームページ (BHP)・ 分身主義ブログ (Bblog) 作成講座

「もう二度と悲劇は繰り返したくない！」

人類は何度も何度も、「もう二度とあのような悲劇は繰り返したくない」と叫びながら、それでも何度も何度も何度も何度も、同じ過^{あやま}ちを繰り返してきました。どうしてなのでしょう？ それは本当の原因を知らなかったからなんです。

真の科学は、あなたの発言や行動は、あなたを取り巻く環境（環境とはこの宇宙140億年に起こっている全てのことです）が、あなたの身体を介して行なっていることだと教えています。つまり、僕たちはこの環境（宇宙と言ってもいいです）の媒体だったんです。僕たちはこの環境（宇宙）の媒体であり、同時にまた、この環境（宇宙）を作っている一部でもあります。

約100億年かけて、この環境（宇宙）は地球を作り、それから約45億年かけて人間を作りました。動物の脳は、外界からの刺激と神経細胞とが反応し合うことで「記憶」と呼ばれる活動が生じますが、人間の脳の一番の特徴は、この記憶の能力が動物の中でも群を抜いているという点でしょう。群を抜く「記憶」は、人間に「自我」という錯覚を生み出しました。今では誰の心（脳）の中にも、この「自我」がどっしりと居座っています。

まず初めに覚えておいていただきたいのは、「悪」とは、人間の脳の中に居座ってしまった、この「自我」という錯覚が作り上げた観念に過ぎないと言うことです。例えば動物の世界では、強い物が弱い物の食べ物を横取りしたり、他の動物を食べてしまったりしても、彼らに犯罪者というレッテルは貼りませんし、たとえ病気になるでも自分を被害者として哀れんだり病気を憎んだりしません。悪という観念は全くありません。自我がないからです。

「悪」とは、「自分に（あるいは自分に関係するものに）危害を与えるもの」のことなので、はっきりした自分という意識があって初めて生まれてくる観念なのです。人間の脳の中に居座ってしまった、この「自我」という錯覚は、**個人主義的な環境**を作ります。個人主義的な社会の特徴は、自分に危害を与える人を悪者や加害者とみなし、自分を常に正しい側、被害者側、善良な市民の側の立場に置くことです。常に自分が中心で、自分に害となるか益となるかによって、善悪の基準が決まります。そして、自分に害を与える人間や病気や災害をこの社会から排除しさえすれば、問題は全て解決すると考えるのが特徴です。

人類は長い間、ずっとそのように考え、そしてそのことを実践してきたはずですが、それなのに一向に悲劇は収まらず、むしろ拍車をかけるかのように増大するばかりです。

ここで、冷静になって前後関係をよく考えてみてください。自我が生まれたから、悪が生まれた。これはいいですね。そして、悪という観念が生まれたことによって、ますます自分を守ろうとする気持ちが強まる。自分を守ろうとする気持ちが強まることで、ますます他者の存在が強く意識される。強く意識された他者の存在は脅威となるので、ますます自分を強く守ろうとする。守るべき自分がますます強く意識されることで、他者はより大きな脅威となって自分に襲ってくる。この悪循環により、追い詰められたネズミは、妄想の作り上げた強大なネコに向かって、ついに武器を振り回すのです。僕たちはみんな、この環境の被害者であり同時に加害者でもあったわけです。

このようにしてどこまでも増幅していくのが、自我を持ってしまった僕たち人類の脳が作り上げた、個人主義的な社会の特徴です。今、この社会は、守るべき自己と脅威となった他者とが競り合うように膨らんで、まるで破裂寸前の風船のようです。

何度も同じ過ちを繰り返してしまった本当の原因は、人類が、この悪循環をもたらず個人主義的環境の中から逃^{のが}れられなかったからです。この悪循環から抜け出すには、まずは、**我々の自我とは記憶が作り上げた錯覚に過ぎなかった**、ということに気づくことです。そして、我々の自我が作り上げた個人主義的環境にどっぷりと浸かっている自分の脳に気づき、その脳に動かされている自分、つまり**環境に操られている自分の姿**に気づくことです。それは、この個人主義的環境を外側から眺める視点を持ったということです。その時、あなたは今の環境の外へほんの少し飛び出したことを意味します。

次に、そのことに気づいた人から、「**原因は私にありました**」と叫ぶことです。「**全ての原因は、私の自我という錯覚のせいでした**」と。今まで、まだ誰もそんなことを言った人はいません。どんな時でも、自分以外のものに責任の所在を探し回り、自分以外のものの責任を追究してばかりいたのです。

この環境を外側から眺める視点を持ったことで、この環境をほんの少し飛び出した人が増えれば、この環境が次第に変化していきます。その理由は、僕たちは環境の媒体であると共に、環境を作っている一部だったからです。

では、自我が我々の神経系の作り上げていた錯覚であったと言うなら、本当の自分とは一体どんな姿をしているものなのでしょうか？ 分身主義は、それを自分の「全身」と呼びます。あるいは「ビッグバン宇宙」という名で呼びます。

「もう二度と悲劇は繰り返したくない！」

そのように願うあなたの気持ちに嘘はないのなら、「分身主義ホームページ」、「分身主義ブログ」作りを始めましょう！

自我という錯覚を、今の狭い自分から広い自分に拡大させるためです。真の科学の視点（つまり自分中心や人間中心の視点ではなく自然界中心の視点）で、本当の自分の姿を見つめようとすることによって、今までの自我は、やがて宇宙にまで拡大します。「BHP」、「Bblog」を作る作業が、それを少しずつ手助けしてくれます。

現実社会では、まだ武器や錯覚が必要ですし、貨幣経済の中で生きるためには、今の組織を離れたり、仕事や報酬を捨てることには無理がありますが、仮想現実（インターネット）の中では、本物の武器も錯覚も地位もプライドも報酬も不要です。仮想現実の中では、個人主義的な環境が作り上げてしまった、国籍や性別による差別や、上下関係などを意識しなくても生きられます。極端な話、大統領でも巨万の富を得た大富豪でも、今の地位や報酬を捨てる勇気が必要とすることなく、ハンドルネームでホームページやブログを作り、「全ての原因は、私の自我という錯覚のせいでした」、「私は環境の媒体に過ぎませんでした」と告白することさえできるんです。仮想現実の中では、誰もがこの個人主義的な環境を自由に離れて、分身主義的な環境に遊ぶことが可能です。そのようなホームページやブログを作って、インターネットで世界中に流しましょう！ 仮想現実とは、いずれ僕たちが生きている現実社会をも、武器や錯覚やプライドや報酬などが、全く必要のない環境に変化させることができます。

そのために、「あなたのホームページやブログが必要」(<http://www.bunshinism.net/body1301.htm>) です。

ここまで言ってもまだ腰を上げない方は、口先だけで「悲劇は繰り返したくない！」とか、「世界を平和にしたい！」などという体裁のいい言葉を放っているだけの偽善者です。もちろんそれらの言葉も、個人主義的な環境に浸かっているその人の脳に浮かび上がってくる言葉を、その人がただ口にしていただけですが。今は偽善者はいりません。社会がどうなろうと関係ないという人も、懐疑的でこずく立ち回る批評家も、自分の言葉に酔っただけで行動をしないナルシスト評論家もいりません。いずれ、その方たちも巻き込んで世界は平和になります。だから、本気で「悲劇は繰り返したくない！」と願う僕たちから、早速、実行しましょう。

まだ分身主義がよくわからない人も、まだ自分の全身が見えていない人も、心配はいりません。ホームページやブログ作りは、そんな自分の“心を育てる(*11)”のためにするんです。

(*11)心を育てる：自分の本当の姿を科学的に(=自然界中心に)見つめようとする努力により、僕たちの記憶が作っている「自我」という錯覚を拡大させること。それは、隣人と重なり、世界中の人と重なり、やがて宇宙と重なっていく。(「分身主義用語解説」より)

「BHP」、「Bblog」を作るために、分身主義的視点を維持する努力をしたり、足を使って歩き回ったり、材料を集め、考えをまとめ、文章を練りに練って、書き込むことを繰り返したりしているうちに、自分の本当の姿がだんだんとはっきりと見えてきます。「BHP」、「Bblog」作りは、今のあなたの狭い自我が、隣人と重なり、世界中の人と重なり、やがて宇宙と重なるための「実践」なんです。あなたというこの宇宙の分身が、自分の本当の姿(=全身)を見るための実践です。

遠回りようですが、僕たち一人ひとりが「BHP」、「Bblog」を作る以外に、世界を平和にする方法はありません。この環境を作っている僕たち一人ひとりが変化して、そのことで自ずと、新しい環境がやってくるのを待つしかありません。これ以外に、僕たちが幸福に生き、幸福に死んでいく道はありません。だから、これこそが最も近道なんです。だから、躊躇してしないで、今すぐに始めましょう。僕たちの「BHP」、「Bblog」が世界中にネットワークを張り、世界中の人が一つにつながる日を夢見て。

世界中の人が自分の本当の姿を発見しない限り、僕たち分身は、自分の全身の姿を喜びを持って感じ合うことができません。もう、この宇宙の万物が、つなぎ合う手を差し出しているのを、僕たちには見えていると言うのに、それまではその手に触れることさえもできないなんて、なんてまどろっこしいんでしょう。

それでは『世界平和のための「BHP」、「Bblog」作成講座』です。

1、素材を選ぶ。

テーマはもちろん分身主義ですが、分身主義的なホームページやブログを作るという気持ちさえ忘れなければ、素材はなんでもかまいません。例えば、分身であることを自覚したあなたの趣味のホームページや、分身主義的視点で眺めた日常の日記(ブログ)なんかはどうでしょうか？ 分身主義的な旅行記や、分身主義的育児奮闘記なんてのも面白いと思います。あるいは、自分の研究や、自分の作ったゲームを分身主義的にアレンジして発表するのも面白いです。芸術の分野では、分身主義は大いにインスピレーションが触発されるはずで

分身主義の詩や、分身主義の小説や、分身主義の絵画、彫刻、音楽などは、まだ未開拓なのでたくさんの可能性を秘めています。それらの作品をホームページやブログで発表するのもいいと思います。もっとも、分身主義自体を素材としてもいいわけです。いくらでも独創性や独自性を持った内容が考えられます。

だけど、ホームページやブログを作ることで自分自身を見つめ、自分自身を宇宙へつなげていくという気持ちを常に忘れてはいけません。自己顕示欲や他人を自分の考え方に引き入れるというような気持ちで作ったホームページやブログは、恐らく長続きしないでしょう。あくまでも自分のためです。ある意味、悟りに到達するための修行のような気持ちです。そのような気持ちで、コンテンツを充実させていきましょう。

2、タイトルを付ける(分身主義を必ず入れる)

素材が決まったら、今度は自分のホームページやブログのタイトルを考えます。大切なのは、分身主義という言葉必ず入れることです。

例1、りっちゃんのクッキー教室(副題:あまーい分身主義)

例2、裕也のデジカメ日記(副題:僕の周りの分身たち)

例3、分身主義的子育て奮闘記

例4、分身主義の視点で尋ねる全国の古寺

3、自分の自己紹介のコーナーを設けて、自分のことを「分身」と記述する。

意識を高めるためにも、そのように宣言することは必要です。僕のホームページ『世界平和への扉(分身主義へのいざない)』の中の、

僕の「profile」を参照してみてください。ただ、間違っても、「私は分身主義者です」などと言ってはいけません。あなたが分身主義者になる時は、世界中のみんなが分身主義者になった時以外にあり得ないからです。何故なら、分身主義者とは自分の全身を知った人間だからです。

あなたの身体をこの宇宙だとします。ところがあなたは今まで、脳が作り出す自我という錯覚によって、自分は右手の人差し指の爪だと信じていたとします。この宇宙という身体、右手の人差し指の爪だったあなたが、自分の全身に気づいて「今まで信じていた自分は、宇宙の分身でした。私の本当の姿、つまり私の全身は宇宙でした」などと言っても、それはまだ理屈に過ぎず、体験が伴っていません。世界中の分身が、自分の全身の姿に気づいた時、初めて僕たちは喜びを持って全身を感じることができます。僕たちが真の分身主義者になった時というのは、その時以外にありません。

何度も言いますが、分身主義者というのはこの宇宙にたった一人だけなんです。

4、掲示板や日記やリンクなどで、日々自己精進

ホームページやブログを公開したら、自分の役目はもう終わりという気持ちでは駄目です。先程も言いましたが、BHPやBblog作りは他人に見てもらおうというよりも、あくまでも自分の心を育てるためにするのだという気持ちを忘れてはいけません。そうしないと他人の反応に一喜一憂して、挫折してしまうことにもなりかねません。

掲示板やリンクで同じ分身主義者を目指す人たちと励まし合ったり、日記で、分身主義者を目指す自分の一日を振り返ったりと、毎日毎日、自分のホームページやブログは手入れしなければいけません。尚、BHPやBblogのリンクはいち早くさせていただきますので、ご連絡ください。

ちなみに僕のホームページでは、この三点（掲示板、日記、リンク）が今のところおそろかになっていますが、毎日、現在発行中のメールマガジンのことばかりを考えているので、そのことでかなり自分の心は育てられていることを実感しています。しかも、メールマガジンで書き溜めたものを、ホームページ上で一つの本の形にして発表したりしているので、1999年にホームページを初めて開設して以来、今もホームページ作りは続けていられます。

継続さえしていれば、世界中の人に見ていただくチャンスは必ず訪れます。たとえ初めの10年は2、3人しか見てくれなくとも、少しも心配することはありません。分身主義ホームページや分身主義ブログを作るということは、素材は個人的な趣味のようなものであっても、対象は、全世界の人の目であり、期間は永遠だということを忘れないでください。10年や2、3人でへこたれている場合ではないんです。

僕の目下の課題は、自分が死んだ後も自分のホームページを流し続ける方法を確立することです。50年、100年先まで、今のプロバイダーに引き落とししてもらっただけのお金を、銀行に預けておけば理論的には可能ですが、その時まで、今のプロバイダーと銀行があるかわかりませんし、物価がどのように変動するかもわかりません。できれば、みなさんが作る分身主義ホームページの全てを、作者本人が亡くなっても残しておけるような総元締めをするシステムが構築できればいいと考えていますが、残念ながらそれは僕に不向きの仕事のようです。

分身主義は真の科学の視点なので、「精神は滅んでも肉体は不滅である」と考えますが、このようにして「精神」も受け継がれていけばいいですね。

5、アフィリエイトなどの広告は貼らない

アフィリエイトとは「提携」の意味で、広告主と提携し、自分の運営するホームページやブログなどに広告を貼ることで、広告主へ見込み顧客を誘導し、その成果に応じた報酬をもらうシステムです。分身主義の夢見ている世界は「貨幣に頼ることのない世界」なので、報酬をあてにしたホームページやブログなどを作ってはいけません（分身主義用語解説「お金に頼る社会」(*12)参照)。今までは、「自分、自分、自分」という個人主義的な感覚から、無意識に行ってしまった行為は、仮想現実の中だけでも償まなければいけません。

(*12) お金に頼る社会
現代の貨幣経済下の社会を批判した言葉。
お金に全ての価値を決めてもらい、お金がなければ何にもできない社会。お金に守られ、お金に励まされ、やがてはお金に溺れ、お金に滅ぼされる。
分身主義の目指す大人の大人の社会は、お金に頼らなくても成り立つ社会である。
(「分身主義用語解説」より)

ホームページやブログ上で発表するあなたの作品に、あなた個人の利益のために課金するような行為も償まなければいけません。分身主義は著作権は決して放棄しませんが、著作物に関わる印税等の利益は放棄します。作品は一人の成果ではなく、万人の総力によって作られるものだと知っているからです。また、あらゆる情報は僕たち分身みんなの共有財産なので、無償で分け合うべきだ、というのが分身主義の考え方です。

著作権を放棄しないという意味は、代表者としての名前を、我らが分身の永遠の誇りとして残しておきたいからです。偉大な芸術家として祭り上げられたピカソも、我々の代表者(=媒体)です。だから、分身主義は、「ピカソの作品」のことを「ピカソたちの作品」と言ったりします。実際の作者は、彼を取り巻く環境(状況や遺伝子やモノや人)であり、彼は媒体となって描かされたただだからです。

ピカソはあくまでも媒体ですが、彼に対して、我らが分身の代表として、あるいは自分自身の分身として、永遠の「誇り」に思う分身主義こそ、本当の意味で個人を尊重するものです。

個人主義を標榜する人たちは、「真の個人主義とは自分勝手とは違い、個人を尊重するという理念に基づいている」などとうまいことを言いますが、実は、自分が尊重されればそれでよく、「他人は自分に迷惑をかけさせなければどうぞ自由に」と見放しているわけで、その無関心さを「個人の尊重」と履き違えているだけです。

最後に、ホームページやブログを作るための一番大事な点を書いておきます。

「このホームページ(あるいはブログ)を作ったのは自分の脳を取り囲む環境で、自分は媒体に過ぎない」という気持ちを常に忘れないことです。

例えば自分の趣味を素材に選んだ人は、自分の趣味は、自分の脳を取り巻く環境に作られているものだということを説明し、場合によっては、そのような趣味を持つに至る経緯を書いてもいいと思います。物事には必ず原因があるわけで、それを書くことで、自分は媒体であったことを自分にも言い聞かせることができるからです。

また、育児を素材に選んだ人は、「自分の子供は、自分を取り巻く環境が産んだもので、自分は単なる媒体に過ぎない」という気持ちを忘れずに、子供は世界中の人の子供であることを強く意識することも大事です。

現在の個人主義的な環境にどっぷりと浸かってしまっている僕たちの脳には、当然、そのような視点は非常識に見えます。だけど本当は、自然界から見れば個人主義的な感覚こそかなり非常識なんです、常識とは大多数のことなので、少数派は病院に入れられてしまいかねません。

でも、そんな心配はせずに、ホームページ(あるいはブログ)では自由に分身主義的な視点で泳ぎ回れるという利点があります。

研究をホームページ(あるいはブログ)の素材に選んだ人は、何かを研究したいという欲求が人より強い遺伝子を持っていたのでしょうけれど、その遺伝子すらも自分の脳を取り巻く環境の一部である、ということをはっきりと意識しなくてはなりません。(遺伝も環境の一部です)

「自分は環境の媒体である」というのは、責任逃れなんかとは全然違うんです。

個人主義的な感覚に浸かっている脳は、「このホームページ(あるいはブログ)を作ったのは自分の脳を取り囲む環境で、自分は媒体に過ぎません」などと聞くと、「自分の未熟なホームページ(あるいはブログ)を環境のせいになっている」と反応してしまう傾向にあります。

そんな人にははっきりと言いましょう。

「責任逃れではありません！」と。

責任逃れとは、本人が自分のやったことを失敗だと思っている場合です。だからあなたははっきりと明言するべきです。

「私は自分のやっていることは失敗だと思いません。私は、このようなことをやらされる媒体である自分に喜びを感じていますし、このようなことをやらせてくださっている環境やみなさんに感謝しているんです」と。

「私は、あなた方やこの環境の媒体であることに誇りをもちます」と。

それでは、世界平和に向けて、「BHP」、「Bblog」の作成に取り掛かってみてください。

開拓者としての困難は伴うでしょうが、メールを下されば、何でもご相談に乗ります。アドレスは『世界平和への扉(分身主義への誘い)』<http://www.bunshinism.net/> のトップページにあります。